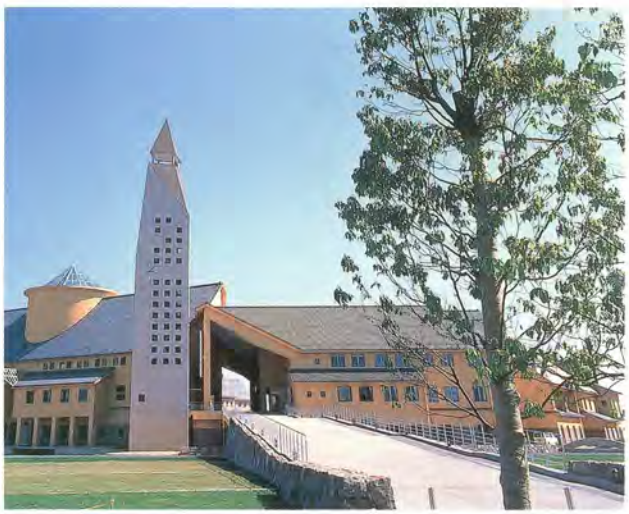
ISSN 1342-6818

滋賀県立大学

国際教育センター研究紀要

第６号

２００１年１２月



Academic Reports
of
The University Center for Intercultural Education,
The University of Shiga Prefecture

Hikone, Japan

December 2001, No.6

序にかえて

紀要第６号をお届けします。私どものこの『滋賀県立大学国際教育センター研究紀要』も二十一世紀の始まる記念すべき本年度を以て、ようやく６冊目となり、学問分野を一見全く異にする三つの教育系列合体の形式も、それなりに世間の認知を得るようになって参ったようであります。各方面よりいろいろな御批評を頂き大変有難く思っております。それにつけても、発刊当初より声がありました、記載論文についての当センター内部における相互批評、相互討論をもっと活発にすべきことを一層強く感じている次第であります。外国語教育系列を除けば構成員がそれぞれ二名づつのみという、組織的限界があるとは言え、第三者評価が叫ばれる現今、ましてや内部相互評価促進の重要性は、言を俟ちますまい。それは又、センター構成員相互の切磋琢磨のためは勿論のこと、親睦と相互理解に資するものともなりましょう。事実、理系教員の口から、文系教員に向かって「文学研究というのは、我々と同じ現象を扱っているのですね。ただ我々はそれを数式を用いて考察し表現しているという違いがあるだけです」との批評を聞くことができる時、私どもは「すべての道はローマに通ずる」学問世界、否、人間世界の普遍性に思いをいたし、その探求にいそしむ者らに与えられる至福の喜びをしばし味わうこともできるのです。

さて、激動の二十一世紀の幕開けは、当国際教育センターにも激震をもたらしました。まず、これは予定されていたこととは言え、栗山稔教授が今年度をもって定年退職されることです。ロマン派を中心とする英文学研究の日本における第一人者として現在も学界現役で御活躍中の栗山教授は、単に当センターの生みの親であるのみならず、滋賀県立大学設置そのものにも関わられた功労者であり、初代センター長を退任されてのちも、後を継いだ代々のセンター長はじめ、センター各員が事あるごとに御相談し、その御忠言に耳を傾けてきた、いわば私どもセンター構成員全員の統領のような存在でありまして、その御退職は大打撃としか表現のしようがありません。しかし、これも定めであれば是非もなく、私ども一同晴れやかな笑顔をもってお見送りし、今後の一層の御清栄と益々の御活躍をお祈り申し上げる次第であります。

さらに衝撃的であったのは、情報教育系列の高橋信行助教授の御転出であります。電波工学、画像処理、確率統計論等の領域において国際的にもめざましい活躍を続ける高橋助教授は、同時に当センターのあらゆる分野、とりわけ他ならぬ当研究紀要編纂には、発刊当初より中心的に関わって下さった、いわば当センターに不可欠な人財であったからであります。しかしながら、転出先においては責任ある教授の要職に就かれるという御栄転であることを思い、また、同助教授の本来の専攻学問研究にとっての利点や、専攻学生指導や後継者養成の有意義性をかんがみる時、これも又是非もなく、私ども一同、気持ちも晴れやかにお送りしたいと考えます。彼地での御健勝と、一層の御発展をお祈り申し上げます。

幸いにも、お二人のあとを埋めるべく、外国語教育系列にも、情報教育系列にもそれぞれ新進気鋭の学徒を来年度よりお迎えできる予定であることは、まことに喜ばしく、若いかたがたの力によって当センターの活力が一層高まることを期待いたしたいと思います。

平成１３年１２月２５日

滋賀県立大学
国際教育センター長
深見　茂

目次 (Table of Contents)

― 研 究 論 文 ―

栗山　稔　(Minoru KURIYAMA)
ウィリアム・ワーズワス評伝（3）
(*A Critical Biography of William Wordsworth (3)*) 1

上村　盛人　(Morito UEMURA)
ウォルター・ペイターの審美主義 ―「審美派の詩」について
(*Walter Pater's Aestheticism: with Special Reference to His "Aesthetic Poetry"*) 21

石田　法雄　(Hoyu ISHIDA)
Shinjin and Satori in the Here and Now
― *Flowers Yet Fall As People Lament* ― 43

クリンガー　ウォルター　(Walter KLINGER)
Learning Grammar by Listening 69

小栗　裕子　(Yuko OGURI)
英語学習の動機づけ ― 大学入学時と 1 年後を比較して ―
(*A Longitudinal Study of Learners' Motivation for English after Entering University*) 89

深見　茂　(Shigeru FUKAMI)
テーオドール・シュトルムの『水に沈む』について ― 父性の敗北と母性の勝利 ―
(*On* Theodor Storm's *Novella "Aquis Submersus"*
―*The Defeat of Paternity and The Triumph of Maternity*) 101

長島　律子　(Ritsuko NAGASHIMA)
Jeanne d'Arc et le Journal d'un curé de campagne *de Georges Bernanos* 117

呉　凌非　（WU Lingfei）
動詞の周期とその周辺
(*The Cycle Aspects of Verbs and Some Related Linguistic Phenomena*) 129

亀田　彰喜・吉田　勝廣　（Akiyoshi KAMEDA ＆ Katsuhiro YOSHIDA）
電子商取引と中小企業の経営
(*Electronic Commerce and Management of Small and Medium-sized Enterprises*) 143

寄本　明　（Akira YORIMOTO）
運動処方としてのウォーキングの実際
(*Actual Situation of Brisk Walking as an Exercise Prescription*).....157

― 国際教育センターの活動の紹介 ―

定年退職を記念して 167
栗山　稔
英語教師の懐旧談 167

国際教育センター主催のセミナー 185

堀切　正則
21 世紀における情報通信社会の動向 189

Patricia WALKER
The Chrysanthemum & the Rose: Thoughts on Japanese Higher Education in Comparative Perspective 199

単　援朝
同時代の中国における芥川龍之介『支那游記』 217

国際教育センターに対する研究費交付一覧 227

在外研修報告 229
上村盛人 229

教員による学界ならびに社会活動 231

研　究　論　文

ウィリアム・ワーズワス評伝（3）

A Critical Biography of William Wordsworth (3)

栗山　稔
Minoru KURIYAMA

自然の教育（承前）

1792年の末、ワーズワスが約一年間のフランス滞在から帰国した時期、フランス革命はすでに流血の様相を深めていたが、ワーズワスは、『叙景小品』や「ランダフ主教への手紙」が示すように、流血の暴力をも含めて革命を肯定していた。1793年のソールズベリー平原やワイ河畔への旅はこの時期に属する。旅のすぐあとに執筆した『ソールズベリーの野』においても、「理性の矛」、たとえ「理性の」という限定付きであるとしても「矛」、すなわち軍事力、革命の暴力を肯定する戦闘的共和主義者であり続けていた。しかし翌1794年8月、ロベスピエールの死を知って喜ぶ頃には革命の暴力を肯定する姿勢は修正されていた。ワーズワスは「フランス人の惨めな状況を深く悲しみ」、「革命を考えるだけでも身がすくむ」(*EY*, 124)と言って、共和主義者であることはやめないが、共和主義政府を樹立する過程のあらゆる暴力には反対しなければならないと考えるようになっていた。1795年のロンドン滞在の時期には、ワーズワスは人間の完全状態への進歩の可能性を信じる「理性主義の現代哲学」、ハズリットの言う、過去の人間とは完全に断絶され、「最大の正確さと効果で公的正義を推進できる論理的機械」(*CW*, XI, 20)としての人間の出現を信じる「理性主義の現代哲学」によって、革命の正当性と共和主義社会実現の可能性を証明しようとした。しかしその年（1795年）の8月、ロンドンからレイスダウンへ移って以降のワーズワスは『ソールズベリーの野の冒険』で、論理的機械ではない現実の人間の善良な資質を強調し、理想とする共和国実現を目指す戦線をこの人間の善性の上に構築しなおそうとした。続く『英蘇国境の人びと』は、論理的機械としての人間が政治的、社会的正義を遂行する過程で道徳的、人間的正義に反する罪を犯すという問題を取り上げて、「理性主義の現代哲学」に対する批判を強めていった。しかし彼は現実の人間の善性に基づく理想の共和国実現の戦いが戦果の見えにくい、長期戦であることに激しい苛立ち、焦燥を感じた。1797年の『廃屋』第一稿は、出征した夫の帰還が希望のとおり速やかに実現しないことに苛立つマーガレットの焦燥に、理想の共和国が希望のとおり速やかに実現しないことに苛立つ共和主義者の焦燥を隠して表現したと考えられる。

『廃屋』第二稿

しかし『廃屋』第一稿から『廃屋』第二稿が書き上げられた1798年3月の初めにいたる期間に、ワーズワスは自然が霊的な体験の瞬間を通して人間を教育するという実感を抱くようになる。それは『廃屋』第二稿と同じ年の7月に書かれた「ティンターン修道院」の言葉を利用して言えば、自然が次のように人間の「内なる精神」を育てるという実感である。

> she [Nature] can so inform
> The mind that is within us, so impress
> With quietness and beauty, and so feed
> With lofty thoughts...
> (*Tintern Abbey*, 125-28)
> 自然はわれわれの
> 内なる精神を教育し、
> 静寂と美の印象を刻みつけ、
> 高尚な思索の糧となる。

自然が「静寂と美の印象を刻みつけ」た瞬間は「生命ある神の訪れ給う崇高な時」(*RC*,398)とも表現されている。このような瞬間にワーズワスは「死滅し得ない生命」、「不滅」、「循環する生命」、「万物の生命」、「生命ある神」などさまざまに表現される超越的存在を肉体の感覚で「実感」し、「約束の文字」、聖書に「書かれたことがら」、「未来の展望」を肉体の目で見た(「肉視」した)ことについては前回すでに簡単にふれたとおりである。

ワーズワスの自然に関するこのような信条が、今、簡単に振り返ってみたように、フランス革命に関する思索の急激な展開の過程で意識にのぼったことに注意すると、この超越的存在にかかわる「実感」および「肉視」の一つの重要な意味が明らかになるだろう。ワーズワスは自然界の「生命」を「実感」しながら、「最も賢明な受動」(*RC*,115)の態度でこの「生命」に身を委ねる時、「約束の文字」すなわち聖書の黙示録的な世界への上昇のヴィジョン、宗教的には神の国であり政治的には圧制からの自由と隷従からの独立を達成した共和国への上昇のヴィジョンがまざまざと肉眼に見えたと言うのである。このように超越的存在を「実感」し、摂理を「肉視」することによってワーズワスは理想の共和国実現の希望に逸る苛立ち、焦燥を超え、希望を抱いて待つという境地に到達できたのである。ワーズワスが『廃屋』第二稿でマーガレットの物語の語り手の行商人に自然の教育の物語を付け加え、彼女を死に至らしめた希望に対する極端な執着に人間的な深い共感を示すと同時に、独自の自然哲学に照らして批判的な態度を示すのは、彼がすでにマーガレットの焦燥が表象していた共和主義者としての焦燥を克服していたからである。この時期は新しい詩人ワーズワスの誕生にとって極めて重要な時期となった。

『隠者』の構想

ワーズワスがこの時期にライフワークの構想を立てたのも当然であったと言える。彼は1798年3月11日に「大いに世のためになるものにしたいと希望している詩を1300行書きました。題名は『隠者　自然、人間、社会についての見解』となるでしょう」（*EY*,214）と言っている。この1300行の中心は自然の教育について述べた『廃屋』第二稿であったと考えてよいだろう。「自然、人間、社会」に関する哲学的な詩はもともとコールリッジが計画したのであるが、彼はこの仕事をワーズワスに託して、強く執筆を希望したのである。コールリッジの希望では『隠者』は次のような作品となる予定であった。

> ワーズワスは、すでに確立した信条を持ち、平静な精神で、権威をもって体系的哲学を説く用意のある人物という立場に立つはずであった。・・・彼は田園やその他の社会の状態を描き、都市と町の高度な文明に近づく時はいくらかユヴェナリス風の精神を発揮して、堕落と悪徳の現状について憂鬱な描写を展開するはずだった。彼はそこから人間社会のすべての状態が神の救済過程の活動に服従し、例証している証拠を推論し、その必然性を明らかにし、このように考えることによってすべての例外と見えることがらが秩序づけられ、未来の栄光と万民救済が約束されることを示すはずであった。（*PW*, V, 364）

コールリッジが描く『隠者』は、自然の教育によって『廃屋』第二稿に述べられた自然との関係や、自然に関する信条を確立したワーズワスにふさわしい仕事となるはずであった。ワーズワスはやがてこのライフワークの一部として『グラースミアの我が家』、『序曲』、『逍遙』を執筆する。そして終生『隠者』の完成を心にかけ続けるけれども、結局、果たせないままとなるのである。

『抒情民謡集』（1798）

ライフワーク構想の時期はまた『抒情民謡集』(1798)の詩編が次々と書き始められた時期でもあった。ワーズワスはこの年の夏にはオールフォックスデンの田舎屋敷を立ち退かなければならなかった。コールリッジは身辺からワーズワスを失うことを恐れて借家探しに奔走したが、スパイ騒動の影響のために成功せず、結局、一緒にドイツへ哲学の勉強に行くことを提案する。そしてふたりは遊学資金を作る目的で合作詩集を計画した。スパイ騒動の最中、彼らが「調査により報酬を得る」という話を盗み聞きされていたことが思い出されるが、これは「詩集によって収入を得る」という意味であった。ドロシーは5月31日に「ウィリアムは今ブリストルで幾編かの詩を印刷中です。・・・彼は詩を有利に売りました」（*EY*,219）と言っているけれども、彼らが遊学資金作りに成功したとは言えない。しかしとにかく『抒情民謡集』(1798)はこのようにして誕生した。

ワーズワスは短い「広告」を書いて、詩集の意図を次のように説明した。この詩集に収めた「詩の大多数」は「主として社会の中流ともっと下の階層の話し言葉がどの程度、詩的な喜びという目的に適するかを確かめようと考えて書かれた。」この意味でこれは「実験的な」詩集である。したがって「多く

の現代作家の飾り立てた空虚な言葉遣いに慣れた読者は」「表現の多くがあまりにありふれていて十分な威厳を持たない」と思うかも知れない。しかしそう思う読者は「この詩集が人間的な情熱、人間的な性格、人間的な出来事を収めていないかどうかを尋ねて欲しい。」そして答えが肯定的であればそのことに満足して欲しい(*Prose*,I,116参照)。すなわちワーズワスは読者にいわゆる詩的な言葉にではなく、中流以下の人びとの日常の話し言葉で表現された「人間的な」内容に「詩」を求めるように望んでいるのである。ここでワーズワスが繰り返している「人間的な」という言葉の意味を考えておく必要がある。

この問題を考えるにあたってワーズワスが「人間的な」ものの対極に何を置いていたかをみるのがよいだろう。われわれはペイン流の革命思想が人間社会に原初の平等を回復するために過去の歴史の全過程を否定するのをみた。そしてフランス革命の現実の進展の中で「理性主義の現代哲学」はこの歴史の否定を発展させて、過去の人間とは完全に断絶された純粋に論理的な存在としての人間の出現を想定するにいたった。このような人間は可能な限り最大の社会的正義の実現に貢献する方法を絶えず理性によって論理的に思索している。そしてこの思索の命令に従うことが論理的人間の至高の義務となり、すべての行為はこの義務に従ってなされる。この論理的人間はこの義務の前に過去の人間の道徳規準の一切を否定する。論理的人間は社会的正義に対する無私の愛によって夫婦の愛、親子の愛、兄弟の愛、友情、同胞愛、愛国心、感謝、約束、習慣等々を超越し、否定する。要するに論理人間は「最大の正確さと効果で公的正義を推進できる論理的機械」(前出)である。「理性主義の現代哲学」はこのような人間性を超越した崇高な論理的人間の出現を当然の前提として、原初的平等の回復について思弁をめぐらせたのである。ワーズワスは「理性主義の現代哲学」が否定し去った人間の美徳、愛情、憐憫、感謝、恐れ、悲しみ、希望等々を、中流以下の人びとと彼らをめぐる出来事を通して、彼らの言葉によって歌い上げていったのである。

したがってワーズワスは『抒情民謡集』(1798)ではまず「理性主義の現代哲学」の書物を捨てよと忠告する。

Up! up! my friend, and clear your looks,
Why all this toil and trouble?
UP! up! my friend, and quit your books,
Or surely you'll grow double...
('The Tables Turned, ' 1-4)

さあ、友よ、立って、立って。晴れ晴れとした顔で。
この骨折り、この苦労はみんな何のため。
さあ、友よ、立って、立って。書物を捨てて。
今にきっとからだが二つ折りに曲がってしまう。

そして自然の印象に学べと諭す。

One moment now may give us more
Than fifty years of reason:
Our minds shall drink at every pore
The spirit of the season.
('Lines, written at a small distance from my House, ' 25-28)
この一瞬が与えるものは
五十年の理性の思索に勝る。
すべての毛穴から、精神は
季節の霊を呑み込む。

このような交渉の中で自然の仲介によって人間に与えられる最高の贈り物が「神が訪れ賜う崇高な時」であろう。当然、程度の差はあるとしても、田園の人びとを訪れる同質の神聖な歓喜が彼らのありふれた日常生活を詩的なものにするのである。『抒情民謡集』と同じ時期に書かれた『ピーター・ベル』も、自然に対して最も無感覚な者にも自然は影響力を行使して回心させるという主題を扱っている。

ワーズワスとドロシーは6月25日にオールフォックスデンを離れた。この出発に先立ってドロシーはバジルとの別れを悲しまなければならなっかた。兄妹は7月10日から13日頃までワイ河畔を旅行した。ワーズワスが『廃屋』第二稿で到達した自然と自己の関係や自然に関する信条を始めて公に表明して、『抒情民謡集』(1798)の巻尾に据えた「ティンターン・アベイ」はこの旅の途中で書かれた。彼らは8月27日にロンドンに出ている。『抒情民謡集』(1798)は彼らがロンドンにいる間にブリストルのコトルによって印刷された。しかしコトルは共和主義的な詩集とみられることを恐れて、直接、出版に踏み切ることができなかった。刷り上がった『抒情民謡集』(1798)はコトルからロンドンのアーチ書店に売り渡され、10月4日、アーチによって発売された。コールリッジの「老水夫行」が巻頭を、そしてワーズワスの「ティンターン・アベイ」が巻尾を飾るこの詩集は二人の友情を記念する合作詩集であり、のちにイギリス・ロマン派の出発を画する詩集という名誉を担うこととなる。『夕べの散策』、『叙景小品』のあとワーズワスにとって出版された三冊目の詩集であるが、政治的な理由もあって著者名はふせられた。ワーズワスはこの詩集で、結局、三十ギニーを得たが、ドイツ滞在費を賄うには足りず、ウェッジウッド兄弟から百十ポンドを借りることになる。

二部『序曲』

ワーズワスとドロシーとコールリッジは9月14日にロンドンを発ち、ヤーマスからクックスハーフェンに渡り、9月19日にハンブルクに着いている。ここで彼らはナイル河口の海戦におけるネルソン提督の勝利を聞いたようである。またドイツ語の習得のために別行動をとることにして、コールリッジはラーツェブルクにとどまり、ワーズワス兄妹はさらに南下を続けて、10月6日にゴスラーに着いた。そして翌年

2月末まで異常に厳しい冬に閉じ込められたようにこの町を動かなかった。

「彼が妹を連れて来たことが間違いの元だった」とコールリッジが言うように、ゴスラーのワーズワスとドロシーは兄妹ではなく正式に結婚していないカップルとみられて、社交の場に受け入れられることもなく、二人きりの間借り生活に閉じこもっていた。ワーズワスは七年以前のフランスでのように生活からドイツ語を身に付ける機会も全く得られなかった。そこで彼は「ドイツ語の勉強より英語の詩を書くことにいっそう多くの時間を使った」(*STCL*,I, 459参照)。コールリッジは12月10日付の手紙で「フクロウの鳴き声をまねる少年」について感想を述べている。したがってワーズワスは12月初めまでに「フクロウの鳴き声をまねる少年」をラーツェブルクのコールリッジに送ったことになる。また12月21日付の手紙にドロシーは「兄の書いた多量の詩」の草稿の中から「スケート遊び」、「ボート盗み」、「木の実採り」を書き写している。これらはワーズワスが『廃屋』第二稿で始めた自然と人間との関係について「考えること、感じること、感じる結果、声や手足を働かせてしまうことにすっかり消耗してしまう」ほど没頭していたことを示している(*EY*,236-242参照)。彼は二部『序曲』の第一部となる草稿を書き続けていたのである。

ワーズワスとドロシーは、年が明けて、ようやく厳しい寒さがゆるみ始めた1799年2月22日、ゴスラーを離れ、「林が島となり、木の生い茂る山並みが海岸となって、平らに広がる牧草地の美しい海」(*Prel*, VIII,329-31)とのちに表現したザクセンの野を放浪する。その後4月20日頃、コールリッジが移り住んでいたゲッティンゲンに寄り、25日にはハンブルクに到着、往路を逆にたどってエルベ川を下り、海峡を渡ってヤーマスに上陸、5月初めまでにソックバーン・オン・ティーズのハチンソンの農場に身を寄せた。

メアリー・ハチンソンと彼女の妹や弟たちの中に落ち着くと、すぐにワーズワスは二部『序曲』第二部に没頭し始め、やがて心身をひどく消耗させてしまった。7月中頃に帰国したコールリッジはワーズワスの健康を心配して、10月26日頃、ソックバーン・オン・ティーズを訪ねている。ワーズワスはコールリッジ到着の翌日から約一ヶ月間、湖水地方にコールリッジを案内した。彼は旅行中に適当な借家を見付け、またコールリッジにも湖水地方に住むように勧めたいと考えていた。彼は出発早々、クリストファー叔父(10月15日没)の弔問に来ていた弟ジョンに出会い、叔父がドロシーに百ポンドを遺贈していることを知らされた。しかし彼は、結局、弔問に出向かなかった。彼はこの叔父にはついに気持ちを和らげることがなかったのである。ワーズワスは11月2日にホークスヘッドを訪れ、十年ぶりに見る村の変貌に驚いている。また11月20日頃、ロンドンへ帰るコールリッジと別れた。二部『序曲』第二部はこのホークスヘッド再訪を冒頭に組み込み、コールリッジとの別れを結びとして完成された。この年、1799年の末には清書原稿があったと考えられる。

ワーズワスはゴスラーとソックバーン・オン・ティーズで書いた二部から成る作品を、一応、完結した作品と考え、のちの十三巻『序曲』のような大作に成長するとは思っていなかった。「過去の歳月の回想から聞こえる叱責の声が、今や成熟した壮年の私を、名誉ある困難な仕事に駆り立ててくれる」(I, 450-53)という言葉が示すように、彼には「名誉ある困難な仕事」、すなわちコールリッジから強く求められている『隠者』の執筆が重い義務としてのしかかっていた。この義務を果たすためには、彼は精神

の成長を振り返り、このライフワークに着手する資格があるかどうかを検討する必要があると感じたのである。彼は検討の結果をコールリッジに語り、いわば資格の認定書として『隠者』の末尾に添えたいと考えた。したがってこの「コールリッジ宛の詩」はのちの十三巻『序曲』とは異なり、「詩心の成長」を主題として叙事詩的な長編詩を歌う抱負を語る導入部を欠いており、またのちに他の巻に移された幾つかの箇所を二部の中に包み込んでいる。

ワーズワスが精神の成長を辿ろうとして記憶を遡っていく時、最も遠い記憶の限界に五歳の頃、ダーウェント川で水浴びをした光景が見えるのだった。しかし彼は記憶の限界を越えて、赤子の彼とダーウェント川の関係についての直観を語る。

Was it for this
That one, the fairest of all rivers, loved
To blend his murmurs with my Nurse's song,
And from his alder shades, and rocky falls,
And from his fords and shallows, sent a voice
That flowed along my dreams? For this didst thou
O Derwent, travelling over the green plains
Near my "sweet birth-place," didst thou beauteous Stream
Make ceaseless music through the night and day,
Which with its steady cadence tempering
Our human waywardness, composed my thoughts
To more than infant softness, giving me,
Among the fretful dwellings of mankind,
A knowledge, a dim earnest of the calm
Which Nature breathes among the fields and groves?
(*Two-Part Prel*, I, 1-15)

こんなことのためだったのか。
川の中でもっとも麗しい君が、喜んで
その囁きを乳母の子守歌に混ぜ、
ハンの木陰や岩場の瀧から、
浅瀬や州から、夢の中を流れる
歌声を届けてくれたのは。
こんなことのためなのか。おお、ダーウェント川よ。
美しい流れの君が、緑の野を旅して、
「懐かしい誕生の地」の近くを通り、

昼も夜も絶え間なく、音楽を奏で、
変わらぬリズムで、人間の気儘を静め、
私の思いを赤子の柔和さよりもやわらげ、
いらいらした人間の住み家の中で、
山や森の中で自然が呼吸している静穏を
理解させ、おぼろげに予感させてくれたのは。

この箇所は自然と赤子の精神との完全な融合に見事な詩的表現を与えている。ダーウェント川で代表される自然は「最も麗しい」という言葉で擬人化され、「その囁きを乳母の子守歌に混ぜることを愛する」者となる。すなわち人格化された自然は赤子に愛の力を及ぼす。自然が赤子を愛するのは赤子によって「愛されている」、愛の働きかけを受けているからである（行末に配置された'loved'の「愛する」、「愛される」という能動、受動の二重の作用についてはRicks,112-13参照）。自然と赤子の間には愛の相互作用が通い合っている。この相互の愛の結果、自然の「囁き、子守歌」は赤子の「夢をたどって流れる(flowed along my dreams)」。「・・・をたどって流れる(flowed along)」という表現は空間的な長さ、広さを感じさせ、赤子の夢に川の流れと同じ長さや、川の流れる野と同じ広さを与えて、川が旅する「緑の野」と赤子の夢を重ね合わせる。すなわち自然と赤子の愛の相互作用は、赤子の夢見る精神が自然の広大さを獲得し、自然と完全に融合することを可能にしたのである。自然はこの融合を通して、赤子の精神を自然の音楽に「調律し(temper)」、また赤子の精神を自然の音楽に「一構成要素として組み込む(compose)」。こうして自然は赤子の精神に「人間的な気儘さ、苛立ち、焦燥」とは異なる自然の「静穏」を教えたのである。自然との関係が二部『序曲』では、『廃屋』第二稿のように超越的存在を「実感」し、摂理を「肉視」するという関係ではなく、「融合」という関係として表現されているのである。しかしこの「融合」にも「実感、肉視」と同じように「苛立ち、焦燥」を鎮める作用が与えられている。

しかし少年時代のワーズワスは幼年時代に自然から教えられた「静穏」を守る少年ではなかった。ヤマシギの捕獲に夢中になって、夜を徹して仕掛けた罠から罠へ駆け回り、またワタリガラスの巣を狙って危険な岩山をよじ登り、あるいは夜の湖に羊飼いのボートを無断で漕ぎ出す少年ワーズワスは「静穏」を拒否し、激しい英雄的な行動に憧れる少年として描かれている。ワーズワスは少年時代を自然に対する叛逆の時代として構想していると言える。したがって少年には絶えず自然と対立し、自然と対峙する者の自覚、あるいは壮大な罪の意識がある。一方、自然は少年をどこまでも追って、捉え、自然の中へ「融合」、同化させようとする。

例えば少年ワーズワスが「山上の略奪者」として自然に敵対した結果は次のように描かれている。

Oh, when I have hung
Above the raven's nest, by knots of grass,
Or half-inch fissures in the slipp'ry rock,

But ill sustained, and almost, as it seemed,
Suspended by the blast which blew amain,
Shouldering the naked crag, oh at that time,
While on the perilous ridge I hung alone,
With what strange utterance did the loud dry wind
Blow through my ears! the sky seemed not a sky
Of earth, and with what motion moved the clouds!
(*Two-Part Prel*, I, 57-66)

おお、ワタリガラスの巣の上に、
絡み合った草、滑る岩の半インチの亀裂で、
危うく支えられて、宙づりになり、
激しく吹いて、裸の岩山を肩で突き飛ばす
突風にあおられた時、おおあの時、
危険な山の背にただひとりぶら下がっていた時、
何と不思議な叫び声で、轟く乾いた風は
私の耳を吹き抜けたことか。空は
地球の空とは思えず、雲の動きも、
何という動きであったことか。

自然に敵対する英雄として登場した少年は転落の危険に曝される。彼はいたずら小僧にもどって恐怖を募らせる。しかし彼は不思議な安堵をも感じている。岩山を「肩で突き飛ばす(Shouldering)」よう吹いて、岩山と一緒に岩肌にへばり付いている少年をも吹き飛ばす勢いの突風は、同時に、岩山とともに少年をも「肩で担ぎ上げ(Shouldering)」てくれていると感じられるのである。自然は、今、「肩で突き飛ばす、肩で担ぎ上げる」という二重の意味を持った'Shoulder'によって擬人化された風となって少年に働きかけている。少年は人格化された自然の働きかけを受け、敵対的英雄であることをやめて、自然に完全に身を委ねる。そこから少年には深い安堵が生まれている。「肩で担ぎ上げる」が境界となって、その前の詩行では「ぶら下がる(hung)」や「滑る岩(the slipp'ry rock)」が詩行の末端に配置されて、行末の余白によって少年が落下するかも知れない断崖の恐ろしい虚空を印象付けていた。しかしあとの詩行では「裸の岩山(the naked crag)」も「危険な山の背(the perilous ridge)」も「ぶら下がる(hung)」も、すべて詩行の中に包み込まれて、転落の危険な印象を与えることはない(詩行の変わり目の余白の効果についてはRicks, 105-06参照)。こうして少年が自然に身を委ねきった時、自然は今まで見せなかった姿を現す。なるほどそれは自然の「静穏」な姿ではない。しかしそれは少年に自然の働きかけをくり返し意識させ、人間とは異なる様態で存在するものについて教え、赤子の時代に教えた「静穏」に再び少年を近づけるための自然の手段であったのである。

自然に対する少年の「叛逆」は時にはさらに厳しく罰せられることもあった。例えばワーズワス十三歳のクリスマスの記憶である。彼は楽しい休暇の帰宅を待ち焦がれて、「熱に浮かされたようになり、待ちくたびれ、じっとしていられなくなり、われわれ兄弟を乗せて帰る二頭の馬の姿を待ちきれず」、下宿を抜け出して、近くの岩山に登り、石を積み重ねた塀に風雨を避けながら、迎えの者が通るはずの街道を見下ろした。そして帰宅直後の父の死を「懲罰」(II, 355)と受け取ったことを思い出す。彼は自然が熱病患者のような焦燥を、自然の教える「静穏」に対する叛逆として、父親の死という不釣り合いとも思える大事によって罰したと考えたのである。そしてあの岩山の光景は、以後、激しい焦燥にとらわれた心を鎮める力を付与されることとなったと言う。

And afterwards the wind, and sleety rain,
And all the business of the elements,
The single sheep, and the one blasted tree,
And the bleak music of that old stone wall,
The noise of wood and water, and the mist
Which on the line of each of those two roads
Advanced in such indisputable shapes,
All these were spectacles and sounds to which
I often would repair, and thence would drink
As at a fountain...
(*Two-Part Prel*, I, 361-70)

その後、風とみぞれ混じりの雨、
さまざまな自然力の活動、
ただ一頭の羊、一本の枯れた木、
古い石垣の寒々とした音楽、
森や川のざわめき、二本の街道、
そのそれぞれの道筋の上を、
はっきりとした形で進んで来た霧、
これらすべては泉にも似て、
私がしばしば赴いて、
渇きを癒す光景と物音となった。

こうして少年はやがて自然と対峙することをやめて、自然の働きかけを求めるようになり、自然の働きかけと協同して、赤子の時代の「融合」を回復することを願うようになる。

ere the fall
Of night, when in our pinnace we returned
Over the dusky lake, and to the beach
Of some small island steered our course with one,
The minstrel of our troop, and left him there
And rowed off gently while he blew his flute
Alone upon the rock — oh then the calm
And dead still water lay upon my mind
Even with a weight of pleasure, and the sky,
Never before so beautiful, sank down
Into my heart and held me like a dream.
(*Two-Part Prel*, II, 204-14)

夜のとばりの下りる前、
黄昏時の湖水を小舟で渡る帰り道、
小島の岸へ船を漕ぎ寄せた。そして
岩の上でただひとりフルートを吹き続ける
ひとりの仲間、吟遊詩人を残して、
静かに漕いで島を離れた。おお、そんな時、
穏やかに、静まりかえった水が、
まさしく喜びの重みで私の心を圧し、
かつてなかったほど美しい空が
私の心に沈み込み、夢のように私を捉えた。

ここにはフルートの音色（そしておそらく周囲の山々の返す木霊）、異常なまでに美しい空、空を映す黄昏の静かな湖水が描かれている。しかし空を映しているものは少年の精神であると言ってよいほど、湖水と少年の精神とは完全に「融合」している。またフルートを聴くものは湖水であると言うこともできるだろう。少年は肉体の耳で聞き、肉体の目で見ているのではない。すべてが夢、すなわち自然と同じ広がりを持った精神の内部の出来事となっている。そしてフルートの音はこのように自然と「融合」した精神の喜びの声として響いている。ここではダーウェント川のせせらぎとの「融合」が教えた自然の「静穏」が回復されていると言えるだろう。

このようにワーズワスは幼少年時代の印象的な体験をひとつひとつ回想し、追体験することによって、自然が「融合」、「叛逆」、そして「融合への回帰」という過程を通して彼を教育してきたと言う。そしてワーズワスはケンブリッジ大学入学の十七歳の頃にはこの教育が完成しており、『廃屋』第二稿や「ティンターン修道院」で表明された自然との関係、自然に関する信条にこの頃すでに到達していたと言う。

したがってワーズワスは「融合→叛逆→融合への回帰」というパターンに従って自然との関係を回想し終えた時、幼少年時代ばかりでなく、1799年末の二部『序曲』にいたるまでの精神の軌跡を語り尽くしたと考えたと思われる。彼はフランス革命の理想実現のために英雄的な（暴力的な）行動を肯定した時期、次に理想実現が希望のとおり速やかでないことに苛立ち、焦燥した時期を、自然の教えに「叛逆」した少年期と重ね、肉体の目にまざまざと見えている未来の理想実現を希望をもって待つという心境への到達を、自然の教えへの回帰と重ねて表現したからである。ワーズワスがフランス革命に託した「希望が転覆してしまった憂鬱な廃墟の時代において」（*Two-Part Prel*,II, 478ff参照）も、彼が絶望しないのは自然のお陰であるという感謝の言葉で二部『序曲』を結んだのはこのためである。

ダヴ・コテッジ

さてワーズワスはコールリッジと湖水地方を旅した時、グラースミアのタウンエンドに手頃な田舎屋を見つけて、年八ポンドで借りることにしていた。そして彼は12月17日、ドロシーと共にソックバーン・オン・ティーズを発って、12月20日頃、このダヴ・コテッジに入った。ドロシーはクリストファー叔父から遺贈された百ポンドで家具を整えた。グラースミアへの旅は、1795年のブリストルからレイスダウンへの旅と融合して、その後、十三巻に成長する『序曲』の第一巻導入部に反映されることとなる。ダヴ・コテッジは彼が約八年間、最も創造的な歳月を送った場所である。

グラースミアに我が家をかまえたワーズワスとドロシーの最初の喜びは、1月末に弟ジョンを迎え、9月末まで一緒に暮らしたことであった。ジョンは東インドからアバガベニー伯爵号が帰るのを待って、船長に就任することになっていた。また4月初めから5月初めまでコールリッジが来訪した。彼はドイツから帰国して以来のワーズワスの願いをいれて、ようやく湖水地方に住む決意を固め、6月29日に妻セアラと長男ハートレーを伴ってやって来た。一家はグラースミアに約一ヶ月滞在したあと、ケジックのグレタ・ホールへ移った。こうしてグラースミア・ケジック間二十キロの往復が、オールフォックスデン・スタウイー間五キロの往き来には及ばなかったけれど、かなり頻繁に繰り返されることとなった。こうして『抒情民謡集』(1800年)の準備が進められた。『抒情民謡集』(1798)は1800年6月までに売り切れて、第二版がロングマン社によって計画された。そこでこの第二版を第一巻として、ドイツ滞在以降の詩から選んだ一巻を加え、全二巻の詩集が今度は匿名ではなくワーズワスの名を付けて出版されることになった。またワーズワスはコールリッジに勧められて「序文」を書くことにした。この「序文」で彼は彼自身の創作過程について綿密な心理的観察を語っている。

> 詩は自ずと溢れ出た力強い感情である。詩は穏やかな状態で思い出された情緒に起源を持つ。この情緒を観照するうちに、一連の反応によって、穏やかな状態は徐々に消え、それまで観照の対象であった情緒と同質の情緒が徐々に作り出され、それが実際に精神に存在するにいたる。こういう気分で成功した創作は、普通、始められ、これに似た気分で続けられる。しかし情緒はどんな種類、またどんな度合いのものも、さまざまな原因からさまざまな喜びの特色を持つ。したがってどんな激情を描く際にも、そ

れが自発的に描かれる時には、精神は全体として楽しみの状態に置かれるだろう。(*Prose*,I,149)

これは過去の体験を想起して追体験し、表現することによって体験の意味を発見するワーズワスの詩作の過程をよく説明している。またワーズワスは詩の題材としては「概して下層の田園生活が選ばれ」、また詩の言語としては「下層の田園の人びとの言葉が採用されている」と言って、初版の「広告」よりもいっそう鮮明に題材と用語を「下層の田園生活」に限定している。「下層の田園生活では人間の本質的な感情がいっそう成熟し、いっそう自由に現れ、いっそう素朴で純粋な言葉で話されている」からとその理由を述べている(*Prose*,I,124)。ワーズワスは対ナポレオン戦争や産業革命が刻々と田園生活を変動させ、「人間の本質的感情」を衰退させていると考えていた。彼は『抒情民謡集』の出版によってささやかながらこの変動の流れに抗する努力をしようと試みたのである。『抒情民謡集』(1800年)は1801年1月25日頃、ロンドンのロングマン社から出版された。

喪失の意識

1802年2月24日付の手紙でコールリッジは妻セアラに、自分がロンドンから「ケジックに帰るとすぐ、ワーズワスはメアリー・ハチンソンと結婚するだろう」(*STCL*,II,788)と知らせている。これより前、1801年11月6日頃、メアリー・ハチンソンはワーズワス兄妹をダヴ・コテッジに訪ねて12月28日まで滞在し、また1802年1月22日に湖国を離れるまでしばしばワーズワス兄妹と行動を共にした。この期間に二人は結婚を約束したと考えられる。結婚式は10月で、コールリッジが湖国へ帰った3月19日のすぐあとではなかった。この間にワーズワスはアネット・ヴァロンと娘カロリーヌとの関係を解決しなければならなかった。

アネットと再会するワーズワスをみる前に、この期間が詩の実りの多い時期であったことにふれなければならない。例えば3月14日の朝、ワーズワスはドロシーが子供の頃「いつも蝶をちょっと追いかけてみたものの、羽の粉をこすり落としはしないか心配だった」(*PW*,I,358)と話すのを聞いて、蝶を見るといつも感じる喜びを思い出した。そして朝食に手をふれることも忘れて、蝶を「私の幼年時代の歴史家」(*PW*,I,226)と呼び、「死滅した時間がおまえの中で蘇る」(*ibid*)と歌う「蝶に寄せる」を作った。またほぼ10日後［3月23日から26日のあいだ］には子供時代という「夢幻の時の物語」(*PW*,II,207)を語りかけ、「あの黄金の時代を再び生み出してくれる」(*ibid*,208)「カッコウに寄せる」詩が作られる。さらに3月26日には子供時代という「黄金の時代」に「自然に寄せた深い宗教的敬虔」(*PW*,I,226)が生涯を貫くように祈る「私の心は虹に踊る」が作られた。このように1802年3月は、二部『序曲』執筆の時期と同じように、ワーズワスがしばしば子供時代の記憶が蘇るのを意識した時期であり、また子供時代を「黄金の時代」として意識し始めた時期である。しかしこの3月には子供時代がすでに「死滅した時間」であることをも同時に意識した。そして3月27日の「霊魂不滅の告知」第一連から第四連がこの喪失の意識の明瞭な表明となった。この詩でワーズワスは子供時代に地上の万物がまとっていた「天上の光、夢幻の輝きと鮮明さ」(*PW*,IV,279)が今はどこかへ消え失せてしまったと嘆いている。また5月3日から7日のあいだに、

ほぼ一年半前（1800年10月3日）に出会った老人を思いだして作られた「蛭採り老人」は、この喪失の意識に由来する意気消沈を反映すると同時に、喪失の意識を克服する努力ともなっている。「黄金の時代」の体験は、たとえ失われるとしても、この世を生きる力の源となるという確信が表明されているのである。

独立と自由

フランス滞在中（1791年11月-1792年11月）のワーズワスとアネット・ヴァロンとの関係、娘カロリーヌ（1792年12月生）の存在は周辺の人びとには公然の秘密であった。メアリー・ハチンソンも早くからこの事実を知っていたと考えるのが自然である。ワーズワスの死後、遺族から最初の伝記の執筆を託された甥のクリストファー・ワーズワスは、事実はいずれ現れるだろうし、またロンドンで話題にのぼるのを耳にしたこともあるので、この事実にふれる予定であった。しかし、結局、遺族の意向によってこの件はふせられた(Moorman,I,182n)。そして細大漏らさず保存されていたワーズワス家の文書からアネットの手紙のすべてが消えて、若いワーズワスの恋と彼のフランスの娘はエミール・ルグイによって再発見されるまで一世紀以上のあいだ埋もれることとなった。したがってワーズワスがアネットにメアリーとの結婚の意思をどのように伝え、またアネットがどのように反応したかは不明である。1801年12月末にアネットから手紙が来たこと、1802年1月26日にワーズワスが返事を出したことが分かっており、この返事に要した一ヶ月間に結婚話の最終的な進行と別れ話を切り出す必要の難しい調整があったと想像される。その後、2月22日にアネットから来信、24日にワーズワスから返信、3月22日にアネットから来信、26日に折からのアミアン条約によるフランスとの講和を利用してアネットに会いに行く決心をしたワーズワスからの返信と続く。ワーズワスはこの決心に従って7月9日、ドロシーと共にダヴ・コテッジを出発する。途中、ヨークシャーのギャロウ・ヒルの農場にメアリー・ハチンソンを訪ねて十日間滞在したあと、ロンドン、ドーヴァーを経由して8月1日の朝カレーに上陸、ただちにブロアから来たアネットと娘のカロリーヌに会っている。そして8月29日にいたる四週間もの日々が、日没や遠いドーヴァーの白亜の海岸を眺めたり、蛍光に光る海を見ながら散策したり、また海水浴をしたりして、平静に過ぎていった。

十年の歳月を隔てて再会したアネットに平静に対したワーズワスは、十年ぶりに見るフランスに対しては平静ではいられなかった。十年前、この国は「誕生したばかりの自由」(*PW*,III,110)に歓喜していたが、今は「誕生したばかりの皇帝」(*ibid*,109)に隷従していた。「まったく違った光景を青春時代にはこの地で目の当たりに見た」(*ibid*,111)と言う思いが胸を掻き乱した。そして遙かに望むドーヴァーの夕空に輝く宵の明星が自由の砦としてのイギリスの表象と見えた。8月30日、ドーヴァーに上陸した日にも「ヨーロッパはなお隷従状態にある。しかし汝、わが祖国は自由だ」(*ibid*,114)という思いがいっそう深まっている。そしてこの自由を守るもは結局のところ狭い英仏海峡ではなく国民の精神であると言う(*ibid*,114-15)。しかし8月31日、ロンドンに帰ったワーズワスはそこに自由の護持にふさわしい精神を見出せない。これがイギリス人に「礼節、徳、自由、力」(*ibid*,116)を与えるためにミルトンの再来を求め

るソネット「ロンドン1802」を生む機縁となった。

ワーズワスとドロシーは約三週間ロンドンに滞在している。この間、チャールズ・ラムの案内でバーソロミューの市を見物した（この市はやがて十三巻『序曲』第五巻に素材を提供する）。またロンドン在住の兄リチャード、折りよく中国航路から帰投した弟ジョン、ケンブリッジから上京した弟クリストファーが揃って、一族再会を果たしたりした。9月22日にロンドンを発った兄妹は、24日、ギャロウ・ヒルに着き、10月4日、ブロンプトン教会でワーズワスはメアリー・ハチンソンと結婚した。そしてメアリーを加えた三人は、10月6日にダヴ・コテッジに帰り、散策と読書とケジックのコールリッジと相互の訪問を繰り返す生活を再開する。こうして翌1803年6月18日に長男ジョンが生まれている。

1803年の夏、ワーズワスは産後のメアリーをメアリーの妹ジョアンナ・ハチンソンの介助に委ねて、ドロシー、コールリッジとスコットランドへ旅している。彼らは8月15日、「年はとっているが頑丈で威勢のいい馬」に、「両側から張り出した座席に三人ずつ座れ、御者席は別にあり、中央の低い床には荷物や二、三人の子供を乗せられる無蓋の二輪馬車」(*STCL*,II,975)を牽かせて出発した。これは四十日にわたる大旅行となるが、次に宿泊地を挙げて旅程の概略を示してみる。

8月15日ヘスケット・ニューマーケット→16日ロングタウン→17日ダンフリーズ→18日ダンフリーズの北十マイルのブラウンヒル・イン→19日レッドヒルズ→20日ラナック→21日ハミルトン→22日グラスゴー→23日ダンバートン→24日ローモンド湖畔→25日ターベット→26日カトリン湖畔→27日カトリン湖畔→28日ターベット→29日ケアンドウ→30日インベラリー→31日ダルマリー→9月1日テイニュイルト→2日レヴン湖畔バラフーリッシュ→3日グレン・コウ→4日ドッハート湖畔→5日ケンモア→6日ブレア→7日ファスカリー→8日ダンケルド→9日クリーフ→10日カランダー→11日カトリン湖畔→12日カトリン湖畔→13日ストラスエジャー→14日ファルカーク→15日エディンバラ→16日ロズリン→17日ピーブルズ→18日クロヴンフォード→19日メルローズ→20日ジェッドバラ→21日ジェッドバラ→22日ハウィック→23日ランガム→24日カーライルの南六マイルの村→25日ダヴ・コッテッジ

ドロシーは『スコットランド旅行の思い出』を書いて、この旅行の旅程や出来事を詳しく記録した。ワーズワスはのちに旅行の記憶を想起して「1803年スコットランド旅行記念詩」という項目に纏められる多くの詩を作った。その中には「バーンズの墓に詣でて」、「ヤロウ河畔を訪れず去る」、「西へ歩む」や「ひとり麦を刈る娘」等の名作が含まれている。

またこの旅で注意をひく出来事の一つは親密であったワーズワスとコールリッジの間に感情の齟齬がみられ、8月29日からコールリッジが徒歩のひとり旅に切り換えたことである。「自分がワーズワス兄妹の重荷になっているとすぐに気付いた。それにワーズワス自身も、憂鬱症の苦しい感覚にふさぎ込んでいたから、私にとって最適の道連れではなかった」(*STCL*,II,1010)とコールリッジは言っている。一方、ワーズワスは「その頃のコールリッジは不機嫌で、あまりにも失意に溺れ過ぎている」(*PW*, III, 439)と感じて、別行動を示唆したようである。またもう一つの重要な出来事はワーズワス兄妹がラスウェイド

の自宅にサー・ウォルター・スコットを訪ねたことである。当時、スコットはセルカーク地方裁判所の判事であったが、巡回裁判の合間に案内役をかって出た。ワーズワスはスコットの釣りや鴨撃ちや乗馬の腕、崩れ落ちた古城に寄せる関心、英蘇境界地方の農民が彼に示す敬意と歓迎などに強い印象を受けた。

スコットランド旅行の時期は5月、のアミアン条約破棄後、ナポレオンのイギリス侵攻の恐れが、日々、高まった時期であった。すでにみたように、青年時代のワーズワスにとって自由の象徴であったフランスは今や圧制者となり、圧制者であったイギリスが「自由のただ一つの灯火」(*PW*,III,118)となっていた。10月3日、ワーズワスはグラースミアの人びとととともに政府の呼びかけに応じて民兵に加わり、おそらく週に二度、アンブルサイドへ軍事訓練を受けに出かけた（この経験は『逍遙』第七巻に反映されることになる）。このような愛国的情熱は「1803年スコットランド旅行記念詩」の幾編かに浸透しているが、同時に、この時期に平行して書かれた「国民の独立と自由に捧げる詩」の項目に収められることとなる詩の原動力となった。ワーズワスの愛国的情熱はフランスが自由の象徴から堕落してしまったという悲しみと、現在のイギリスが、ミルトンのイギリスのように、「自由のただ一つの灯火」にふさわしい国ではないという悲しみに染められてる。彼の愛国的情熱を刺激したナポレオン侵攻の危険は、ナポレオン軍がオーストリアに向かうとともに薄らいだ。

十三巻『序曲』

1804年4月9日、コールリッジは健康の回復を願って気候温暖なマルタ島へ向けてイギリスを離れる。かなり長期間の逗留を計画していたと考えられる（彼は1806年8月11日に帰国する）。したがって1803年12月20日から翌年の１月14日まで彼がダヴ・コテッジに滞在した時、ワーズワスは長い離別を思って、これまでとは異なった感慨を抱いて友を見守ったと考えられる。そして1月4日にワーズワスは「コールリッジ宛の詩」、すなわち二部『序曲』の第二部をコールリッジに朗読する。これまでにワーズワスはこの作品の続きを書く試みを三度くり返したと推定できるけれど、正確なことは分からない。しかし１月４日の朗読によって強い興味を取り戻したかのように、彼は急速に書き続け、2月13日までに第一部に271行の導入部を付け加えて第一巻とし、またケンブリッジ大学第一年次の学寮生活を語る第三巻の大部分を書き上げた(『序曲』の執筆過程については栗山, 118-43参照)。この頃、彼はこの作品を五巻で纏める予定であった。そして3月5、6日までにケンブリッジの最初の夏休みを主題とした第四巻を書き終え、想像力を主題とする最終の第五巻に取りかかろうとしていた。しかしこの直後、彼は五巻で完成する計画を変更して、3月12日頃までに子供時代の教育問題を主題とした第五巻を完成した。3月29日頃には1790年のアルプス徒歩旅行を扱う第六巻の執筆を開始し、4月29日にはこの巻を終えて、さらに新しい巻に取りかかっていた。彼はこのような急速な執筆を6月14日頃まで続け、新しい巻の約1500行を書いたと言っている。すなわち1799年の二部『序曲』は第一巻導入部と第三、四、五、六巻と新しい巻となる1500行を加えた作品へ急速に成長したのである。第六巻はアルプス旅行を主題とすると同時に、革命によって再生したフランスを歌っているから、続けて書かれた約1500行は1791年から1792年にいたるフランス

滞在を語る部分であったと考えられる。このような旺盛な創作活動はここで10月15日頃まで中断する。ドロシーの言葉を借りれば、「夏の交際やメアリーのお産」、すなわち8月16日の長女ドロシー（愛称ドーラ）の誕生などの出来事によって執筆が「中断された」のである(*EY*,511)。

10月15日頃に執筆を再開したワーズワスは12月25日までに約2000行を書き、あと1000行ほど加えれば十三巻『序曲』の完成というところに到達していた。そして翌1805年2月10日頃にはこの作品は完成一歩手前の状態となっており、ワーズワスは第六巻以降の最終的な推敲に従事していたと考えられる。しかし推敲の仕事は2月11日に届いた弟ジョンの海難事故死の知らせによって中断される。ジョンが船長となって乗り組んでいた東インド会社のアバガヴェニー伯爵号はベンガル経由で中国へ向けて出航、2月5日、水先案内人に導かれてポートランド島沖の泊地に入ろうとする途中、座礁した。しかし離脱に成功して、ウエイマス港に辿り着こうと試みたけれども、二マイル沖で沈没、乗客乗組員387人中232人が水死し、船と運命をともにしたジョンの水死体は3月20日になって収容されたのである。ジョンはかつてワーズワスを大学へ行かせるために自分の教育費をまわすように後見人に頼んで、船乗りになった。そして「自分が兄さんや姉さんのために働くから、兄さんは何か世のためになる作品を書きなさい」(*EY*,547)と口癖のように言っていた。この弟を失った苦痛は大きかった。ワーズワスは悲しみの余り仕事ができなくなったけれども、やがて悲しみを逃れるように仕事にもどり、5月20日頃には十三巻『序曲』を完成したのである。

十三巻『序曲』の第三巻、第四巻、第五巻の一部が書かれた1804年1月中旬から3月上旬は、1802年3月に最初の五連が書かれた「霊魂不滅の告知」があとの七連を付け加えられて完成した時期と重なる。「告知」の第四連は子供時代に地上の万物を包んでいた「天上の光」が見えなくなったと告白し、「いずこへ消え失せたのか」と問うて終わっていた。すなわち「天上の光」との関係が「融合」、あるいは「肉視」の関係ではなくなったのである。今、付け加えられた七連は子供時代を天上に神とともにいた世界に直結する天上的な至福の時代と捉え、成長をこの天上の世界から遠ざかり、「天上の光」の記憶を喪失する過程と説明して、第五連の問に答えている。そして今もなお、時折、自然の崇高な美が「天上の光」の記憶を呼び起こし、魂に天上の出自を教えることに感謝を捧げる。すなわち書き加えられた七連はおとなへの成長を自然との関係が「融合」、あるいは「肉視」という関係から変化する過程と説明し、自然が今もなお、時折、崇高な美を通して「融合」、「肉視」の記憶を蘇らせることに感謝を捧げる。けだし魂の出自の自覚は地上の生を生きる力の源となるからである。

「霊魂不滅の告知」の根底にはこのような思考が流れていると言ってよいだろう。同じ思考が重なる時期に書き進められた十三巻『序曲』の基本的な構造を決定していると言ってよい。この時期、ワーズワスは二部『序曲』で扱った「子供時代」と「学校時代」の自然との関係、すなわち「融合→叛逆→融合への回帰」の核心にある「融合」という自然との関係を、天上的な存在として故郷の自然の中で天上的な生を繰り返し追体験しながら生きた時期として意識しなおした。すなわち子供時代を天上的な存在として天上的な世界としての故郷の自然の中で生きた時代として捉えなおした。したがって第三巻「ケンブリッジの学寮生活」は天上的な存在が地上的な生（学寮生活）の中で感じた違和感を描き出してい

る。第四巻「暑中休暇」はこの違和感に追われるように帰省したワーズワスが、故郷の自然の中へ帰ったにもかかわらず、完全には天上的な生を取りもどし得ないと悟る悲しみ、喪失感を描いている。しかしなお天上的な荘厳な美を示す故郷の自然はワーズワスに魂の出自（天上的な存在であること）を自覚させ、自然に「献身する霊(A dedicated Spirit)」(*Prel*,IV,344)として生きる契約を付与する。十三巻『序曲』第四巻の根底にはこのような「喪失感→献身する霊たる自覚」という基本構造がある。第五巻「書物」は当時流行の幼児教育に対する批判を展開する。すなわち幼児を理想的と考える人為的環境に閉じ込め、個人教師の監視下で教訓的、科学的な読み物を与えて養育するという人工的な教育の理論と実践を批判する。そして自然の中に放置されていたからこそ、魂の天上的な出自の自覚へと導かれたと主張して、自分の受けた自然の教育を礼讃し、教訓的、科学的な児童図書ではなくて、子供時代に読みふけったチャップブックを弁護している。

第六巻「ケンブリッジとアルプス」は大学二年次、三年次の学生生活を素描し、主として学生生活最後の三年次の夏休み（1790年）に敢行したアルプスへの徒歩旅行を描いている。しかし第六巻の主題はアルプスの自然ではなく、アルプスへの往き帰りに目の当たりに見た革命の成功に歓喜するフランス人であり、そのフランス人から予感した人類再生の希望である。すなわちフランス革命が聖書の黙示録の「約束の文字」と結びつけられ、地上に神の統治する国（理想社会）を、子供時代に体験した天上的な生を実現する運動と予感される。また人類の未来に関するこの昂揚した想いがアルプスの自然をノアの洪水によって破壊される以前の楽園の名残をとどめた場所として捉えさせている。第七巻「ロンドン滞在」は大学卒業後の1791年1月末から同年5月末までのロンドン滞在を語るかたちをとっているが、ここにはもっとあとのロンドンの記憶も重ねられている。そしてフランス人の再生と対比して、堕落世界としてのロンドンの現実の人間生活が主題となっている。第八巻「回顧、自然愛から人間愛へ」は子供時代に故郷の自然の中で見た人びと、特に羊飼いを回想している。そして羊飼いたちがロンドンの堕落世界の人間と変わらない悪と不幸に満ちていたことを認めつつ、自然の荘厳な美によって一種の尊厳を付与されて、人間愛を育ててくれたことを回顧している。

第九巻「フランス滞在」、第十巻「フランス滞在とフランス革命」の二巻は1791年11月から1792年11月にいたるフランス滞在と、直接、目撃したフランス革命に対する反応を語る。彼は「献身する霊」である故にいっそう強く人類の再生を待望し、フランス革命を黙示録の「約束の文字」の実現と信じて、革命に完全な共感を寄せる結果になったと告白する。第十一巻、第十二巻「想像力、損なわれ、そして修復された次第」は帰国の頃、すでに流血の様相を帯びていた革命はやがて恐怖政治となり、革命と黙示録の神の御心の実現とを結びつけた昂揚した見方を否定して、人間の完全状態への進歩の可能性を信じる「理性主義の現代哲学」に救いを求めざるを得なかった次第を語る。「理性主義の現代哲学」は理性的、論理的機械のように社会的正義を実現する非現実的な人間の出現を前提としていたが、自然に関しても現に存在するあるがままの自然を、人間の理性が理想的と考えるあるべき自然によって批判することを求めた。ワーズワスは自然に「献身する霊」たることに叛逆することを余儀なくされたのである。この結果、彼は子供時代以来の自然との関係を完全に損なってしまい、たとえ荘厳で美しい自然の中に

立ったとしても、かつて自然が天上的、楽園的世界と化し、彼が天上的存在としてその世界に生きていたという昂揚した喜びを思い起こすことができない。彼は詩人としての独自な本性を完全に混乱させてしまったのである。しかしやがて自然は彼に働きかけて子供時代の昂揚した喜びの幾分かを思い出させ、魂の出自に関する確信を回復させる。こうして自然に「献身する霊」へ回帰したワーズワスは、「約束の文字」の実現は神の御心に委ねるべきことがらであるのに、革命によってその実現を促進できると考えた、「献身する霊」にあるまじき傲慢な叛逆が、フランス革命を御心の実現と錯覚させ、革命の成り行きに焦燥し、絶望し、「理性主義の現代哲学」への傾倒にいたる過ちの根元となったと悟る。

第十三巻「結び」はスノードン山上で観たヴィジョンを語る。ワーズワスは幾つかの山の峰を島のように浮かべ、月明かりに輝く雲の大海を見る。彼はこの雲海に「無限」、「神」を意識しながら活動する偉大な人間精神のヴィジョンを観たと言う。おそらく、雲の大海の岸辺に立ったワーズワスは、混沌の海の岸辺に立って天地創造の事業に取りかかろうとする創造者の目でこの光景を見て、人間には創造者と同じ偉大な創造的行為に従事し得る神的な精神が宿るという確信に到達したと言えるだろう。そしてこの人間精神の偉大さを説くことを自己の詩人の使命とする自覚を語る。

以上のように自伝的長編詩十三巻『序曲』は天上的な世界に生きた子供時代の記述に始まり、その世界は喪失するけれども、魂の天上の出自を自覚して神に「献身する霊」となる契約を付与された青年時代へと進み、「献身する霊」である故にこそ神意を促進しようとして犯した傲慢の罪を経て、「献身する霊」への回帰を果たした壮年時代の始まりにいたる自己の精神の展開を、「楽園喪失」から「楽園回復」にいたる精神の軌跡というミルトン的な構造によって物語っている。このように十三巻『序曲』完成の頃のワーズワスは、本稿冒頭で述べたオールフォックスデン在住の時期を「献身する霊」への回帰の時期として表現している。これはオールフォックスデンのワーズワスがこの時期を自然の中に神を「実感」し、摂理による人類の前進を文字どおり肉体の眼で「肉視」することができたと表現したこととはいくらか異なっている。しかし両者は摂理による人類の前進を信じてフランス革命への失望から立ち直ったことを表現している点では同じであると言えるだろう。

十三巻『序曲』完成の春、ワーズワスは地上の戦乱を悲しみながらも、やがて必ずや神の摂理は実現されるであろうという感慨を強めていたと思われる。

> ああ、悲しいことに、このように美しい世界に住むことを許され、本来、神の賜物である魂を現に与えられながら、実際にはこのような破壊と荒廃をもたらす任務に駈け回り、百人のうち九十九人までが平和と平穏の旅路に心安らぐことがない。しかしまたいたる所に何という美徳、善、英雄的勇気、無私の愛の勝利が見られることか。人類とは結局のところ、一体、何なのか。たとえ消滅すべき遊星の上とはいえ、こんなことが永久に続かぬことは確かだ。(*EY*,543)

注

伝記的な情報については主として次の著書によって確認した。

Mary Moorman, *William Wordsworth, a Biography, The Early Years,1770-1803* (Oxford, 1957); *The Later Years, 1803-1850* (Oxford, 1965)

Mark L. Reed, *Wordsworth, The Chronology of the Early Years, 1770-1799* (Cambridge, Mass., 1967); *The Chronology of the Middle Years, 1800-1815* (Cambridge, Mass., 1975)

引用文やその他必要な記述には(　　)内に出典を付記した。出典の略号は次のとおり。

CW	*The* Complete *Works of William Hazlitt*, ed. P. P. Howe (21 vols., London, 1932)
EY	*Letters of* William *and Dorothy Wordsworth, The Early Years, 1787-1805*, ed. E. de Selincourt and revised Chester L. Shaver (Oxford, 1967)
栗山	栗山　稔『ワーズワス「序曲」の研究』(東京、1981)
Prel	*Thirteen-Book Prelude*
Prose	*The Prose Works of William Wordsworth*, ed. W. J. B. Owen and J. W. Smyser (3 vols., Oxford, 1974)
PW	*The Poetical Works of William Wordsworth*, ed. E. de Selincourt and Helen Darbishire (5 vols., Oxford, 1940-49)
RC	*The Ruined Cottage and The Pedlar by William Wordsworth*, ed. James Butler (Ithaca, New York, 1979)
Ricks	Christopher Ricks, *The Force of Poetry* (Oxford, 1984)
STCL	*Collected Letters of Samuel Taylor Coleridge*, ed. E. L. Griggs (6 vols., Oxford, 1956-71)
Two-Part Prel	*The Prelude, 1798-1799 by William Wordsworth*, ed. Stephen Parrish (Ithaca, New York, 1977)

ウォルター・ペイターの審美主義 —「審美派の詩」について

Walter Pater's Aestheticism: with Special Reference to His "Aesthetic Poetry"

上村 盛人

Morito UEMURA

1　序

ペイターは、1889年に出版された『鑑賞集』(*Appreciations*) に「審美派の詩」("Aesthetic Poetry") と題するエッセイを含めたが、『鑑賞集』の第二版(1890年)で、このエッセイは削除された。従って、ペイターの死後に出たその後の版でも、当然のことながら、このエッセイは含まれていない。このエッセイは元来、1868年発行の『ウェストミンスター・レヴュー誌』(*Westminster Review*) に匿名で発表した書評 (ウィリアム・モリスの『地上楽園』[*The Earthly Paradise*] を扱ったもの) のテクストの前半部分を用いたものであり、書評テクストの後半部分は、『ルネサンス』(*The Renaissance*、1873年) の「結び」("Conclusion") として再利用されたことについては、すでに触れた。(上村 39-40)　「審美派の詩」は、14のパラグラフから成り立っているが、各パラグラフをセンテンス・レベルまで掘り下げてペイターの審美主義の本質を探ろうとするのが、本稿の目的である。

先ず、14のパラグラフで構成されているこのエッセイの拙訳による本文は、以下の通りである。(1) 尚、マルの中に入れられた数字 (例えば、①や②) は、各パラグラフの中のセンテンスに便宜上、付けたものである。

2　「審美派の詩」の本文

<u>第1パラグラフ</u>

①「審美派の詩」は、古代ギリシアや中世の詩をそのまま再現したものでもなく、現代人の生や感情を単に理想化したものでもない。②その詩が効果を発揮しうる雰囲気は、単に詩の形や、現実の生の形にあるのではない。③ギリシア、中世、あるいは現代の詩は、それぞれの時代の現実を超えたところに、ある一つの世界を作り出し、そこでは、事物の形が変容されているのである。④その変容された世界こそ、この新しい詩が支配するものであり、それを超えたところに、それは、より一層幽かな幻のような純化された世界、つまり、文字どおり、人工的な、あるいは、「地上の楽園」を創出しよ

うとするのである。⑤それは絶妙な理想的世界である。つまり、現実世界に対して既に理想的になっている世界から抽出されるゆえに、まことに絶妙なのである。⑥時期遅れにもう一度開花した奇妙な植物のように、精妙な詩の世界に、過ぎ去った時代の詩の世界を蘇らせたものであるが、それが昔の詩そのものであると混同してはならない。⑦このような詩の世界を楽しむ秘訣は、ある種の人々には周知のことであるが、郷愁の思いを反転させること、つまり、今いるところから逃れたいというあの癒しがたい渇望なのである、そしてそのような渇望を、現実の生のいかなる形態も満足させることはできないし、ただ単純で、自然であるというだけであれば、いかなる詩でも、やはり満たすことはできないのである。

第2パラグラフ

①審美派の詩が範と仰いだ「ロマン派」の作品は、異教時代から中世の理想へというよりも、文学における低次の情熱から高次の情熱への移行を記している。②不安の時代の大きな奔流に押し流された 18 世紀末は、精神の興奮を経験した。そしてその興奮の一つの調べは、自然から遊離したというよりも、古代芸術の純粋な動機から遊離してしまった、疲弊した古典主義に対する反撥であった、そして本当のヘレニズムへの回帰は、唐突な中世的なものへのこだわりと同様に、この反撥の一部分をなすものであった。③中世を志向する態度は、ゲーテの『ゲッツ・フォン・ベルリヒンゲン』に見られるし、ヘレニズムへの志向は、『イフィゲーニエ』において見られる。④この中世主義は、初期においては、底の浅いものであり、表面的な現象に過ぎなかった。⑤冒険物語、極めてはっきりと分るロマンス、グロテスクな個人主義、これも確かに中世の詩の一つの要素であるが、スコットとゲーテだけが、このような要素を作品の中で扱った。⑥これらを超えたところに存在していたのが、中世精神の他の二つの要素であった、つまり、ダンテ、および聖ルイにおいて絶頂期に達した、中世の神秘的宗教がその一つであり、もう一つは、神秘的情熱であって、この中世の神秘的情熱は、ここかしこへと受け継がれ、ランスロットやアベラールの反逆的肉体の偉大でロマンティックな愛へと発展したのである。⑦中世の精神を再現し、外面的形態や表現が内部から自然に生じてくるという、より厳しい、想像的な中世主義は、後になって、フランスではヴィクトル・ユゴー、そしてドイツではハイネと共に実現したのであった。

第3パラグラフ

①ウィリアム・モリス氏によって何年も前に出版された『ギネヴィアの弁明、及び他の詩』は審美派の詩の最初の典型的な代表といえるものであるが、この作品の中に、上述した後代の、より深遠な中世主義をさらに洗練させたものの見事な例を見ることができる。②この書物のタイトルになっている詩作品は、不義密通という非難から身を護ろうとしているギネヴィア自身の肉体と同じように、情熱にさいなまれ、苦しんでいるものであるが、風変わりで見慣れないところに力点が置かれているために、大きな叫び声が響きわたるような効果をもっている。③これらのアーサー王伝説はキリスト教以前にその起源を溯るのであるが、実際には、この伝説の甘美な要素はすべて、キリスト教の雰囲気の中でこそ、その効果を発揮するのである。④これらのアーサー王伝説の中で特徴的なのは、キリストとその敵対者である愛する人と、どちらへの愛を採るか、慎重に選ぶようにと、奇妙にも仕向けていることである。⑤宗教、少なくとも、修道院における禁欲的な宗教には、感覚的な面があり、その危険なほどに感覚的な面は、これまでにも、しばしば注目されてきた。つまり、キリスト教神秘主義

者たちやルソーが経験したものがそれである。⑥感覚的な生（五感の生活）の中に没入していたある特定の人々の間に、中世のキリスト教は浸透していったのであるが、この人達は、キリスト教の審美的な美しさに多少とも惹かれ、それは、ラテン語の讃美歌作者達によって特に、強く感じられていたもので、彼らは、一つの道徳的、あるいは宗教的感情を表わすのに、百もの感覚的なイメージをもつことができたのである。⑦それで、このような想像的な愛の諸相において、つまり、そのような愛が最も高度に表現されているプロヴァンス風の詩において、我々が目にするのは、新しいライバルとしての「クルトス」（'cultus'，教養・文化）を備えたライバル的宗教なのである。⑧キリスト教的心情に色濃く染められながらも、そこに展開されているのは、キリスト教に反逆する態度である。⑨これまでの信仰を捨てて新しい信仰を求める態度が、常に、見え隠れしているのである。⑩これらの言葉やイメージや洗練された感情の表現が元来捧げられていた、その最初に愛されていた人の嫉妬が、この新しい宗教における、借り物の、あるいは、わざとらしい紅潮した熱気の秘密の出所なのである。⑪新しい方向に向かい、かくして、予想だにしていなかった生の後半部を手に入れた僧院の雰囲気は正にそのようなものであった。

第4パラグラフ

①先に僧院でそうであったように、その後すぐに、城主の館(chateau)でも同様の事態になり、愛の夢想に耽ることが定着した。②僧院での愛の献身は、その雰囲気を完全に知っていたので、その愛の調べを、全音階を駆使して、高らかに響かせていた。③このような献身的な愛の対象となるものは、その場に居ない不在の者であったり、すっぽりとをヴェールに蔽われて、よく見えない者であって、つまり、オリンピアのゼウスや、アクロポリスのアテナのようなただ一つしかない至高の彫像に限られるものではなく、熱に浮かされた時に見る夢のように、様々なものが夥しい数の象徴や映像となって、次から次へと浮かんでくるのである。④しかし、そのような事態になっても、教会は、新しいシビル（Sybil、古代ギリシア・ローマの巫女）となって、その不在の者を身近なものにすることができる夥しい数の秘訣をもっていたのである。⑤夢想のこの王国に、そして、それをもっと洗練されたものにしようとする思いに溢れた楽園に、地上の愛が入り込み、熱に浮かされた夢遊病の状態がずっと続くのである。⑥その地上の愛は、目に見えない対象に向けて、本来は目に見える対象物に与えられるものである心情を差し向ける技法を、宗教から学ぶのである。⑦かくして、愛されるものの不在ということによって成り立つ愛、それは、敢えて望みなきものであり、すべての低次元の愛の慣用に抗議するものであり、不毛で、途方もないものであり、道徳律廃止主義的なものである。⑧それは結婚とは相容れない愛であり、つまり、決して来ることのない騎士に対する愛であり、城の姫君に対する下僕人の愛であり、ナイティンゲールに対する薔薇の愛であり、トリポリの姫に対するリュデルの愛なのである。⑨この途方もない愛のもう一つの要素は、封建時代的精神で、つまり、プロヴァンス風の恋愛は、封建時代の主従に見られる、正に隷属関係の形態に満ち満ちているのである。⑩愛の僕になって、相手を怒らせ、そのために受ける罰とその後の和解という、えもいわれぬ快楽を味わうこと——これは、キリスト教の精神も知っていることであり、ちょうどルソーの場合のように、正にそこで、その精神は、地上の愛の繊細な快楽に出会うのである。⑪ここで、つまり、さまざまな状況の異様な混合体の中で、ちょうど薬品のにおいが染みついている病室の空気の中に咲いているような異国風の感情の花が、とつ国の見慣れない美しさをもつ人々、夢遊病者のようで、ひ弱で、性の区別が定

かでない両性具有者のような人々の間に、ほとんど輝くばかりに眩しい光を放つのである。⑫確かに、そのような愛は極めてもろく、また大胆でもあるので、ひとときしか続かないのである。

第5パラグラフ

①中世のあの僧院における宗教は、実際、多くの点において、美の病い、あるいは、感覚の錯乱と言ってもよいようなものであり、そして、感覚の錯乱状態にある宗教は、常に、幻惑の支配を受けることになる。②夢想、幻惑、錯乱。これらは、中世の宗教と恋愛のいずれの世界においても、致命的に墜ちて行くことになる三つの段階である。③この錯乱の印象については、ヴィクトル・ユゴーの『パリのノートルダム』ほど、うまく描写しているものは他にはない。④眠りが創り出したこれらの最も奇妙な創造物たちは、ここでは、おぞましい放縦さによって、夜が明けても消えることなく、跋扈しているようである。⑤このイギリス詩人も、その秘訣を学んでいたのである。⑥『アーサー王の墓』の全篇、至る所で、彼は、気も狂わせんばかりに白くきらめく太陽を、そして、暴虐的な月を、遥か彼方にある優しい月ではなく、ぐっと間近に迫ってくる、つまり、妖術を使う月を、大きく、熱に浮かされたような状態で、登場させているのである。⑦色彩の描写も、入り組んでいると同時に錯乱的で、例えば、「真っ赤な百合」(“scarlet lilies”) というように、描写される。⑧夏の影響は、まるで、血管に毒針を刺したかのように、突如としてあたふたとやってきて、生やすべてのことに対して、気分を悪くさせるのである。⑨『ガラハッド：あるクリスマスの聖史劇』では、礼拝堂の石に生じたクリスマスの夜の霜が、強力な麻薬のような役割を果たす。つまり、寒さで感覚のなくなっている状態を、突如として高らかな鐘の響きが刺し貫き、そして、聖杯が大きな森を通り抜けて去ってしまった、と告げる声が聞こえるのである。⑩このような錯乱が、絶好調に達するのは『ブルーのクロゼット』においてであるが、その風変わりな美しさは、おそらく、ごく限られた者にだけ楽しまれるものである。

第6パラグラフ

①はけ口を閉ざされた情熱は、神経の緊張を生み出し、感覚の世界が一段と輝きと鮮明さを増して迫ってくる。つまり、赤い色はすべて血となり、水はすべて涙になるのである。②かくして、激しい、痙攣性の感覚が中世の詩において見られるのであるが、そこでは、自然界の事物が、奇妙な錯乱的な役割を演じ始めている。③自然界の事物について、中世の人々の知性は深い感覚を持って理解していた。しかし、その感覚的理解は、客観的なものではなく、つまり、我々の外の世界へ赴くというような、真の意味での脱出ではなかった。④自然界の様々な姿や動きは、人々の頭の中にあった気分を一段と盛り上げ、脳と協力して錯乱へと駆り立てた。⑤ある奇妙な感覚が世界に侵入してきて、あらゆるものが、魂から生じた動機に注入されてしまった。⑥プロヴァンスの愛の詩は、ムクドリやツバメをその使者として用いることによって、この電撃的な大気の中における高揚した大自然の様子をよく示している。つまり、まるで、奇跡か魔術が行われたかのように、自然が一体となって、人間の情熱のために奉仕しようと努めるのである。

第7パラグラフ

①プロヴァンス風恋愛詩の最もよく知られている優雅な形態は、「ノクターン」(nocturn) であった。これは、思いを寄せる恋人の戸口や窓の下で、愛する人によって夜に歌われるのである。②これらの歌には、歌われることになる時間帯によって、さまざまな種類があった。③その中のあるものは、深

夜に歌われ、思いの女性を眠りへと誘う歌 、つまり、「セレナ」(serena)、あるいは、「セレナーデ」(serenade) と呼ばれるものであり、また、あるものは、夜明けに歌われ、愛する女性を起こす歌、「オーブ」(aube)、あるいは、「オーバード」(aubade) と呼ばれるものである。* (*フォーリエル：『プロヴァンス風の詩の歴史』、第2巻、18章 (Fauriel's *Histoire de la Poésie Provençale*, tome ii. c h. x viii.)、参照。ペイター自身による原注。) ④この目覚ましの歌は、時には、恋する男の友人によって歌われることがあり、恋する男自身は、夜通し恋人のために見張りの番を務め、夜が明けると、そのことを恋人に知らせる。また時には、恋する本人自身がこの歌を歌い、恋人達が別れねばならぬことを伝えるのである。⑤その変形といえるものが『ロメオとジュリエット』の中にあり、またそれは、我々のよく知っているものである。この作品の中で、恋人達は、いま聞こえた歌がナイティンゲールのものか、それともヒバリのものであるのかと議論をする。当時流行していた愛の詩を代表する他の二つの形式、つまり、ソネット(14行詩)およびエピサレイミアム (祝婚歌) と並んで、オーバードが、ここではより一層洗練された高尚なものとなって、劇の構成の一部分として組み込まれているのである。⑥ルソーが「夜の恐怖」(*les frayeurs nocturnes*) と呼ぶものを体質的に備えているこれらの人々は、夜のそれらの恐怖が朝の事物にいかなる壮大さを与えるかということ、さらに、明け方の空が最初に白ばんでくると、肉体的苦痛から解放されて、いかにほっとした安堵感が生じてくるのかということを、知っているのである。⑦中世はあらゆる形態の夜の恐怖を知っていた。それゆえに、これらの朝の歌は、奇妙な優しさと効果をもたらすのである。⑧このイギリス詩人の書物の極致は、夜明けを称える次のような歌である。

⑨「あなたの閉じた唇の間から、私のためにただ一つだけ祈りを捧げて下さい。
　空の星の中に、ただ一度だけ私のことを考えて下さい。
夏の夜は終わろうとし、朝の光が忍び寄ってくる、
　雲間からポプラの葉群を通って微かに、ほの白く。
それらの雲はずっと我慢強く夜明けを待ちながら、
　じっと目立たずにしているが、黄金色の天は
太陽とともに雲間から流れ出る時を待っている。
牧草地の遥か向こうには、青い麦畑を見下ろすようにして、
　大きな楡の木が立ち並び、そして、絶えず、冷たく、
風が落ち着きもなく吹いている。バラの花は仄暗い。
長く続く薄明の中で、それらは夜が明けるのを、
麦畑の中に建つ一軒家のまわりで、祈っている。
　私にただひとことだけ、麦畑の向こうから
話しかけてください、やさしく、頭を垂れている麦の穂の向こうから。」

⑩花婿のまさに魂が、花嫁のもとへと向かっているのである。そして、物言わぬ事物も、彼と心を一つにして、憧れている。中世の想像力に溢れた恋愛の世界の甘美さにこの時代独特の感触の精神性が加味されたものが、ここにはあるのだ！

第８パラグラフ

①『ギネヴィアの弁明』は 1858 年に出版され、その後『ジェイソンの生と死』が 1867 年に出版され、そして、『地上楽園』がそれに続いた。これらの作品の発表の間になされた手法の変化は、全面的なもので、ほとんど反逆的といってもよいようなもので、審美派の詩の特徴をよく示している。②肉体や五感が眠っていたり、あるいは想像的な愛に刺激されて、痙攣を起こしたような激しさの中に肉体や五感が起きているのに、魂だけが錯乱や幻想や様々な経験をするというようなものは、ここにはなく、むしろ、異教的なヴェロネーゼ（Veronese）の作品に見られるように、白昼の光の中で展開されている偉大なる原初的な情熱がある。③このような単純化された手法は我々の興味を引くのであるが、それは、一人の詩人のためだけではなく――と言っても、彼は充分に魅力を備えているのだが――主として、その彼を通して、その単純化が、多様な形態の下における人間精神の生の一つの法則である変遷を説明しているからなのである。そして、我々がルネサンスと呼んでいるものは、その卓越した例の一つにすぎないのである。④正にそのように、僧院の修道士は、精神に対してだけ開かれている「開かれた幻想（ヴィジョン）」（“open vision”）を通して、よりよき（夜明けの）日の光を予知し、そしてそれを憧れ、ついには感知したのであるが、その日の光は、地上的なもので、五感に対してだけ開かれているものである。⑤知性がそれ自体の楽しみのために繰り出す複雑で、微妙な興味が、しばらくの間、芸術や詩や我々自身の精神を支配するかもしれないが、やがて、それらは、激しい揺れ戻しが生じるように、遅かれ早かれ、素朴で原初的な情熱――つまり、怒り、欲望、後悔、憐れみ、恐れへと、そして、感覚的な世界でそれらに相当するもの――つまり、むき出しの純粋な炎、水、空気、涙、眠り、沈黙、そしてド・クウィンシーが「運動の栄光」（“glory of motion”）と呼んだものへと戻ってくるのである。

第９パラグラフ

①（夜の眠りの）夢の光から（夜明けの）日の光へのこの反応は、いつも起こることであるが、朝や朝の事物に関して奇妙な力をもたらすのである。②中世のこのヘレニストも、夢、眠り、そして眠りの欲望の名手（マスター）である。――つまり、その眠りとは、夢遊病者のように歩くのではなく、子供時代を人に取り戻させる眠りであり、――その夢とは、ガラハッドやギネヴィアの見る夢ではなく、もっと以前の世界におけるような、幸せで子供っぽい驚異に満ち溢れた夢なのである。③それは、ケンタウロスや黄金の毛をもつ雄羊が登場する世界なのである。④そこで歌われる歌は常に世界で最初に歌われたものであると主張する。⑤鳥、獣、人間に共通の言葉を話しているかのような感じが与えられる。⑥黄金時代から目覚めた人々が初めて、火や雪やワインや、泳いだときの水の感触、海水の塩辛さに接して驚愕するような、驚異の印象がいたるところにある。⑦そして、直接的にじかに感じられるこの素朴さは、ワーズワスの探求された上での素朴さとは妙に対照的である。⑧ここに見られる欲求は、自然の本体そのもののために自然を求めるものであって、自然の本体を通して、魂が探求されるからなのではない。

第１０パラグラフ

①それでも、古代のテーマを取り扱いながらも、古物研究家のようになるのではなく、テーマを常に自分の手近なところに保つことによって、テーマを活気づけている詩人の実に魅力的な時代錯誤の一つこそ、我々に時々、まるで英国の場面を見ているような気にさせるのであるが、それはあたかも、

ワーズワスの影響下でよく訓練された目で見たようなものであったり、あるいは、「夏の夜に半ば開けられている窓」から見ているかのように、柳の茂みの中で歌う褐色の鳥の歌や次のような音が聞こえてくるのである。つまり、

②「市（いち）の日の夜、月明かりの小道で
　灰色をなす牛の群れから響いてくるかのような鈴の音。」

③英国のような「鳥たちの楽園」は他のどの国でも見られないものである。つまり、ヨーロッパヨタカ（fern-owl）、バン（water-hen）、百種類にも及ぶすばらしい変種をもつツグミ（thrush）、シロハヤブサ（gerfalcon）、チョウゲンボウ（kestrel）、ムクドリ（starling）、クジャク（peafowl）、その他、夜明けに、野原からの鳴き声が町の人々によって聞かれるさまざまな鳥たちがいるし、さらに、ピンクの脚、灰色の羽をもち、寺院の香の煙を避けながら境内を飛び回り、雪の中で足を取られたりしているハト（dove）は、いたるところで見かけられるものだ。④海に接しているという感じが、同様に国中に、鋭く、はっきりと行き渡っていて、川と海、海水と淡水が衝突している場所では、その効果がもっとも確かに感じられるのである。

第１１パラグラフ

①ギリシア伝説のテーマを扱う際に、その伝説の世界がそのまま現実に復活したかのようにやろうとすると、いかなることも不可能になるに決まっている。②そのような空しい好古趣味は詩人の力の浪費である。③すべての時代を構成する経験が我々一人一人の一部分となっている。その経験からいかなる部分をも取り除いたり、除去したりすること、つまり、まるで中世やルネサンスや 18 世紀が存在しなかったかのように、過去のある時代の人々と直接的に相まみえることは、もう一度、小さな子供になろうとしたり、母の胎内に戻って生まれ出てこようとするのと同じように、不可能なのである。④しかし、人間のその特性のある一つの局面を抑圧することは、確かにできないけれども、と言うのも、人間のその特性の中に生を得て、我々は生きて動いて存在しているゆえに、その特性そのものが正に我々の存在を有らしめていることになるからであるが、そのようなある一つの局面を分離して、特にそれをくっきりと目立たせ、それを熱心に求める我々自身と対比させることは可能である。それは、我々一人一人の人生においても、ある特定の気に入った空間（space）に立ち戻ることが可能であるのと同様である。⑤我々は時代そのものを本当に思い描くことはできない。我々にできるのは、その時代が我々の文化（culture）に貢献してきた特定の要素を思い描くことである。そして時代の個々の主題を取り扱うことによって、その時代をよく見えるように浮かび上がらせることができるのである。⑥ギリシアに対してそのような態度、つまり、古代ギリシアの人々が生を思い描くやり方に到達することは、実際には決してできないが、それを憧れることが、芸術にとって可能なのである。

第１２パラグラフ

①このような方法で古典的な物語を扱う現代の詩人や芸術家は、ホメロスのヘレニズムとまでは行かなくとも、チョーサーのヘレニズム、中世のヘレニズム、あるいは、その中に含まれているルネサンスのあの絶妙な第一期のヘレニズムの世界に極めて近いところにやって来るであろう。②その後、ルネサンスがその側面を取り上げて、おそらく誇張されたり、あるいは、安易なものとなるのである。

③しかし、人間精神のえり抜きの生は、常に、混ざり合った光の中、そして混ざり合った状況の中でこそ得られるものであり、そのような中にあって、自らのことにあまり確信はもてないが、それでも、期待をもちつつ、約束されたものに向かって飛び込んで行こうと身構えているのである。④中世の疲弊した精神的世界から、より以前の、より古い五感の生への回帰の最も初期の段階においては、正にそのような状況があった。そして、古典的な物語が最も我々を惹きつけるのは、中世の僧が，修道院の陰鬱な雰囲気から自然の光の中へ逃れた時、その物語をどのように着想したかということなのである。⑤つまり、自らが理解しているものより、より深く推測を重ね、キリスト教の歴史にある光景や人物の中に、より古い神々の微かな記憶を吹き込み、あるいは、クピドとプシケの物語の中に、キリスト教によって世界の人々が知っている情熱的な激しい精神を注ぎ込むといった、このような雰囲気が生み出した成果が、15 世紀の芸術に対する興味を掻き立てる奇妙な気質を作り上げているのである。

第１３パラグラフ

①それで、『ジェイソン』及び『地上楽園』についての話を終える前に、これらの作品がもつ中世時代精神や精巧な矛盾について、一言触れておかねばならない。つまり、それらは、ギリシアをテーマにした詩の中にやってくると、この白い夜明けに対して、錯乱的な夜がやっと終わったのだという思いをもたらし、ああよかったという感じをひとしお深くさせるのである。②『ジェイソン』第４巻の冒頭部で、[黄金の羊毛を探しに行く]アルゴー号の乗組員の船出の様子が描かれている。まるで夢を見ているように、場面が変わり、中世のどこかフランスかイタリアの町の移動舞台(ページェント)のように、読者はイオルコス（Iolchos）から海の世界へと進んで行く。③尖塔の上の黄金色の風見鶏、鳴り渡る塔の鐘、窓辺を飾るバラの格子垣、林檎の樹が植えられている囲い地、柱がひしめき合っている奇怪な地下室、このようなものがちょっと描かれるだけで、物語のギリシアの町の様子を変えてしまい、読者はグラストンベリーのアーサー王の墓のほとりにやってくる。④ハイラスを誘惑する毛皮を着た水の精は、はっきりと、ドイツ民族が語るロマンスの精神で描かれているし、彼女が歌う歌は、閉ざされた花園に関するものであり、それは、昔の教会のステンドグラス作者が歌の女王である神秘的な花嫁の周りにちりばめている歌のようなものである。⑤メディア(Medea)自身は、シュトレッケルベルク（Streckelberg）やブロックスベルク（Blocksberg）の魔女といったように、百人もの女魔術師の技をもっていて、彼女の神秘的な変身はクリスタベル（Christabel）のものと同じである。⑥正にこのような効果、中世の悲しみを背景にしてくっきりと浮かび上がるギリシア精神(ヘレニズム)の優美さこそが、『地上楽園』の中心テーマを形成しているのである。つまり、[中世の悲しみとギリシア精神という] 二つの感情の糸が、ここでは精妙な巧みさをもって、見事に織り合わされ、かつ対比されているのである。⑦冒険者達の一群が、北国の中でも最北の国であるノルウェイから船出するのであるが、この地では、疫病が猛威をふるっており、――病に斃れた人に終油がもたらされる時，教会の鐘がずっと鳴り響く。⑧モリス氏の最も初期の詩作品の中においてさえ、甘美なフランス語の数節が、常にギリシア的な快活さと優美さの雰囲気を湛えて用いられていた。⑨さて今、我々が、とっておきのギリシアのエピソードのところにたどり着くのは、陽気に色取られた中世の帆船のあいだを行くエドワード三世の艦隊を通して着いた、正にフランスの海岸の下の方なのだが、そのギリシアのエピソードは、なにかある神聖な幸運によって、西洋の海においても中世まで残っているのである。⑩まさにそこで、『地上楽園』の物語が語られ、ギリシアの話と中世ロマンスの話とが交互に展開す

る。そして、より以前の［ギリシアの］世界の罪を、［キリスト教の］十字架の印と共に乗り越えようとし、ギリシアでライン・ワインを飲む「バラの花輪号」(*Rose Garland*) の乗組員達にとって、これら二つの世界の感情がまともに向かい合うことになるのである。

第１４パラグラフ

①異教精神の一つの特徴を審美派の詩はもっているのであるが、それは、表面に表れているものであり、――瞑想的であったり、情熱的であったりするが、絶えず、生の短さを暗示している。②これは、世界の華やかさと対比されており、それに新しい誘惑を与えている――つまり，死の感覚と美への欲望、死の感覚によって速められた美への欲望なのである。③しかし、感情のそのような局面は、次に私が取り上げるもう一人の「審美派の」詩人、ダンテ・ゲイブリエル・ロセッティにおいて、最高潮に達している。

3　前半部についての考察

1-①［第１パラグラフの第１センテンスを示す。以下同様］から１-③のエッセイ冒頭部において、ペイターは、古代ギリシア、中世、現代という三つの時代の現実を超えた変容された世界に審美派の詩が存在すると述べている。この三つの時代区分はペイターの歴史観を示すものであるが、古代ギリシアは異教の時代、中世はキリスト教の時代、そしてペイターのいう現代は、ダーウィンの進化論をまつまでもなく、キリスト教信仰が揺らぎ出した当時のヴィクトリア時代であると定義することができよう。古い信仰が揺らいで新しいものに取って代わられる移行期や、二つの信仰が溶け合った融合状態にペイター自身も関心を寄せており、例えば、『エピクロス主義者マリウス』(*Marius the Epicurean*) では、異教の信仰がキリスト教に取って代わられようとしている紀元２世紀のローマが描かれているし、『ルネサンス』は、中世キリスト教に対する反動として、古代ギリシアの異教精神の復興が計られる状況を様々な角度から捉えようとしたものであるし、未完の小説、『ガストン・ド・ラトゥール』(*Gaston de Latour*) も、ロンサールやモンテーニュが登場する 16 世紀のルネサンス期を舞台にしている作品である。

1-④～⑤では、個々の時代の現実を超えた「変容された世界」の彼方にある「地上の楽園」について述べられている。この「地上の楽園」('the earthly paradise') という言い回しは、もちろん、後出の 8-①、13-①で述べられるモリスの『地上楽園』(*The Earthly Paradise*) を意識して用いられている。しかし、ここで注目すべきことは、モリスの作品の書評の体裁をとりながら、ペイターが、自らの審美主義の概念を披瀝していることである。さらに彼は、上述の『マリウス』や『ガストン』等の作品を通しても、自らの審美主義を実践していて、創作や批評も含めたすべての作品が、審美主義に対するペイターの実践そのものとなっている。(Prettejohn 36)　この「変容された世界」という言葉をタイトルに用いた書物の中で、ウィリアムズはペイターの「審美的歴史主義」('aesthetic historicism') を中心にして考察を進めているが、ペイターの「審美的歴史主義が生産的計画をもつものであることを認識することは極めて重要である」('it is very important to recognize that his [i.e., Pater's] aesthetic historicism is a productive program') と述べている。(Williams 65) つまり、過去の時代の審美主義的特質を描くことによって、ペイターは彼自身の時代にも同じ特質を再来させようとしているのであり、

ペイターは自分のすべての作品においてこのような姿勢を貫いているのである。

1-⑥の「時期遅れにもう一度開花した奇妙な植物」(“some strange second flowering after date”) という風変わりな言い回しは、「再び生まれること」(“re-birth”)、つまり、“renaissance”と言うことを植物の比喩を用いて述べたものであり、彼の代表作『ルネサンス』において、ペイターは審美主義の本質を具体的に、かつ本質的に開陳した。1-⑦で、「郷愁の思いを反転させること」(“inversion of homesickness”) による審美主義の世界を「楽しむ秘訣」(“secret of the enjoyment”) は「ある種の人々には周知のことである」(“known to some”) とペイターは述べているが、生きている時代や場所や制度に縛られている人間が、そこから過去の時代や芸術作品に対する思いを自由に巡らせ、対自存在的に「今いるところから逃れたいというあの癒しがたい渇望」(“that incurable thirst for the sense of escape”) が「ある種の人々には周知のことである」ということで、同じような考え方をペイターは他の作品の中でも繰り返し述べている。その「癒しがたい渇望」は、後出の文章 (5-⑩) にもあるように、「ごく限られた者にだけ楽しまれるもの」(“enjoyment of the few”) であり、ここで取り上げられているモリスを始めとするラファエル前派の芸術家たちもそのような「限られた者」に属していることは言うまでもない。ペイターは、実在の人物や想像的な創作上の人物をそのような「限られた者」の代表として著作に登場させ、「あの癒しがたい渇望」に関わる審美主義の世界を展開させるのである。また、「郷愁」(“homesickness”) は、「コウルリッジ」、「家の中の子供」、『マリウス』などの作品においても、重要なキーワードとしてペイターは用いている。

第2パラグラフで、審美派の詩がロマン派の流れを汲むものであり、「疾風怒濤」(“Sturm und Drang”) のドイツ・ロマン派を代表するゲーテの『ゲッツ・フォン・ベルリヒンゲン』と『イフィゲーニエ』において、それぞれ中世へのこだわりと真のヘレニズムへの回帰が見られると、ペイターは指摘する。「疲弊した古典主義に対する反撥」(2-②)、「ランスロットやアベラールの反逆的肉体」(2-⑥) という言い回しに見られるように、ペイターは、「反撥」(“reaction”) や「反逆的」(“rebellious”) という姿勢が審美主義の重要な要素であると述べるのであるが、同じようなことが，第4パラグラフでは「道徳律廃止主義的」(“antinomian”) (4-⑦) という言葉で表現されている。ペイターの考えるロマン主義は、汎ヨーロッパ的なもので、ドイツ (ゲーテ、ハイネ)、イギリス (スコット)、イタリア (ダンテ)、フランス (聖ルイ、アベラール、ユゴー) 等において見られるような、広く普遍的に共通する人間精神なのであった。

第3パラグラフにおいてペイターは、モリスの『ギネヴィアの弁明、及び他の詩』(1858年出版) を審美派の詩の嚆矢としている (3-①)。モリスの名前を具体的に挙げることによって、審美派の詩というのはラファエル前派の詩であることが、ここで初めて明確に示されたわけである。そして、「ギネヴィア自身の肉体」(3-②) という表現は、既に見た「ランスロットやアベラールの反逆的肉体」(2-⑥) を連想させるものである。このあとペイターは、キリスト教とアーサー王伝説との関わりについて筆を進め、アーサー王伝説の物語が、キリストとその敵対者のいずれを優先するのか、つまり、禁欲的宗教と感覚的情熱のうちのどちらを採るのかという、危険な状況をはらんでいたと指摘し、また、修道院の禁欲的な宗教には感覚的な面があったと述べる (3-③～⑤)。そして、中世の宗教では、感覚的なイメージを用いて宗教的感情がラテン語で表現されてきたと指摘し (3-⑥)、次いで、想像的な愛が最も高度に表現されるプロヴァンス風の詩においては、キリスト教に対抗する新しい「クルト

ス」を備えたライバル的な宮廷風恋愛の世界が見られ、そこで展開されているのは「キリスト教に反逆する態度」(3-⑧) であるとペイターは述べているが、またしてもここで、「反逆」(“rebels”) という要素が確認され、強調されている。[2] 3-⑧〜⑩では、反逆的な宗教としての情熱恋愛の世界を手に入れた僧院の危機的雰囲気がやや判りにくい比喩を用いて述べられている。3-⑪の「新しい方向に向かい、かくして、予想だにしていなかった生の後半部を手に入れた僧院の雰囲気」とは、キリストへの愛の他に、エロイーズへの情熱恋愛に目覚めたアベラールのような事態を指しているのであろう。

僧院で始まった新しい「愛の献身」(4-②) は、やがて、世俗的な城主の館へと飛び火する。そしてその愛の対象は、現世では実現し得ない不在の者となると指摘した後 (4-③)、それを「もっと洗練されたものにしようとする思いに溢れた楽園 [下線は筆者による。以下も同様]」(a paradise of ambitious refinements) に、「地上の愛」(the earthly love) が入り込むとペイターが書く時 (4-⑤)、ペイターはモリスの「地上楽園」(“The Earthly Paradise”) について、第8パラグラフ、第13パラグラフで詳述するための伏線をここでも用意しているのである。キリスト教の神という至高の存在への愛を捧げていた僧院に、例えばエロイーズへの愛を知ったアベラールの場合のように、地上の愛が入り込んできて、僧院が熱病に冒された夢遊病者の状態になったとペイターは述べる (4-⑤)。目には見えない至高の存在 (つまり、キリスト教の神) に注がれてきた、僧院における愛の技法を用いて、地上の愛が展開され (4-⑥)、愛されるものの不在によって成立する愛、つまり、不毛で、道徳律廃止主義的で、結婚とは相容れない愛 (4-⑦〜⑧) に至るとペイターは言う。さらにそれは、「決して来ることのない騎士に対する愛であり、城の姫君に対する下僕人の愛であり、ナイティンゲールに対する薔薇の愛であり、トリポリの姫に対するリュデルの愛」(4-⑧) であると、ペイターは具体的な例を引いている。この「トリポリの姫に対するリュデルの愛」について、インマンは、ペイター自身が第7パラグラフで参考書として引いているフォーリエル：『プロヴァンス風の詩の歴史』、第2巻、における言及を指摘しているが(Inman 177)、ラファエル前派の詩人スウィンバーンも『詩とバラード、第一集』(1866年) に収められた「時の勝利」(“The Triumph of Time”, 11.321-336) において、このエピソードを描いているし、また、「姫君に対する下僕人の愛」(4-⑧) といえば、やはり、スウィンバーンが、同じ詩集の中の「溺死者たち」(“Les Noyades”) において、「私はこの女性を生涯愛してきた」(‘I have loved this woman my whole life long’) と「姫君」(‘a lady noble’) に愛を寄せる「下僕人」(‘one rough with labour and red with fight’) がフランス革命のさなかに一緒に溺死させられる「共和国的結婚」(‘Mariage Républicain’) について書いている[3]。スウィンバーンへの直接的な言及をペイターは一度もしていないが、このエッセイの至るところにスウィンバーンのエコーが感知できるように思われる。「不毛で、途方もないものであり、道徳律廃止主義的な」(4-⑦) 愛が、「性の区別が定かでない両性具有者のような人々の間に、ほとんど輝くばかりに眩しい光を放つ」(4-⑪) というペイターの言葉も、パリのルーヴルにある彫像について書いたスウィンバーンの「両性具有」(“Hermaphroditus”) と題する作品を連想させる。四つのソネットから成るこの詩の中で、「いかなる不思議な目的のために、不思議な神が、実りなき二つの花をもつこの二重の華を美しいものにしたのか？」(‘To what strange end hath some strange god made fair / The double blossom of two fruitless flowers?’) とスウィンバーンは書いているが(*Poems*, I, 80)、これらの詩行は、「ここで、つまり、さまざまな状況の異様な混合体の中

で、ちょうど薬品のにおいが染みついている病室の空気の中に咲いているような異国風の感情の花が、とつ国の見慣れない美しさをもつ人々、夢遊病者のようで、ひ弱で、性の区別が定かでない両性具有者のような人々の間に、ほとんど輝くばかりに眩しい光を放つのである。確かに、そのような愛は極めてもろく、また大胆でもあるので、ひとときしか続かないのである」(4-⑪～⑫) と述べるペイターの文章の中に変奏されているといえる。このように、ペイターの隠微的な文章には、スウィンバーンの作品、特に、『詩とバラード、第一集』の中の特にラファエル前派的な特徴を備えた詩を、間接的に連想させる部分がある。

第 3 パラグラフで述べられていた「危険なほどに感覚的な面」(3-⑤) である「キリスト教の審美的な美しさ」(3-⑥) をペイターは、第 5 パラグラフでは、「美の病い、あるいは、感覚の錯乱」(5-①) という奇抜な言い回しに変え、この病いに取りつかれると、夢想が幻惑になり、さらに錯乱へとエスカレートする (5-②) と述べる。そして、この錯乱状態は、ユゴーの『パリのノートルダム』において最もうまく描写されていると指摘する (5-③)。ここでペイターが想定しているのは、美しいジプシーの踊り子エスメラルダに対する邪恋に心を奪われて、神の真理を求める道から足を踏み外してしまったノートルダム大聖堂の司教補佐クロード・フロロ (Claude Frollo) の錯乱ぶりを描いた次のような一節であろう。

— Écoute. Je t'ai suivie dans la chambre de douleur. Je t'ai vu déshabiller et manier demi-nue par les mains infâmes du tourmenteur. J'ai vu ton pied, ce pied où j'eusse voulu pour un empire déposer un seul baiser et mourir, ce pied sous lequel je sentirais avec tant de délices s'écraser ma tête, je l'ai vu enserrer dans l'horrible brodequin qui fait des membres d'un être vivant une boue sanglante. Oh! misérable! pendant que je voyais cela, j'avais sous mon suaire un poignard dont je me labourais la poitrine. Au cri que tu as poussé, je l'ai enfoncé dans ma chair; à un second cri, il m'entrait dans le coeur! Regarde. Je crois que cela saigne encore.

Il ouvrit sa soutane. Sa poitrine en effet était déchirée comme par une griffe de tigre, et il avait au flanc une plaie assez large et mal fermée.[4]

ウィリアム・モリスもユゴーからそのような錯乱描写の秘訣を学んで、『アーサー王の墓』や『ガラハッド：あるクリスマスの聖史劇』で用いていることを具体的な例を引いて示したあと (5-⑤～⑨)、『ブルーのクロゼット』において錯乱は絶好調に達すると述べ、ペイターは、この美の病いの「風変わりな美しさは、おそらく、ごく限られた者にだけ楽しまれる」('a singular beauty, reserved perhaps for the enjoyment of the few', 5-⑩) と指摘する。審美派の詩が、ラファエル前派の芸術家など少数者にだけ理解されるものであることをペイターは読者に再確認させている。(1-⑦参照。) 審美主義 ("aestheticism") が、「五感によって感じ、理解する」という語源に由来していることは既に述べたが (上村 33-34)、ペイターも「感覚的理解」('its sense of them', 6-③) を審美主義の本質として捉えていた。第 6 パラグラフで、ペイターは、中世の詩においても、「感覚の世界が一段と輝きと鮮明さを増し」('the sensible world comes to one with a reinforced brilliancy and relief', 6-①) た、審美主義的な要素がすでに存在していたと述べ、プロヴァンスの愛の詩にそれがよく示されていると指摘する。

第 7 パラグラフで、ペイターはプロヴァンス風恋愛詩の解説へと筆を進め、「ノクターン」、「セレ

ナ」(あるいは「セレナーデ」)、「オーブ」(あるいは「オーバード」) がプロヴァンス風恋愛詩の三つの優雅な形態であることを、フォーリエルの書物から得た知識として紹介する (7-①〜③)。朝がきて、愛し合う二人が別れる時であることを告げる後朝 (きぬぎぬ) の歌である「オーバード」の変形が、シェイクスピアの『ロメオとジュリエット』の有名な一節の中にあるとペイターは述べる。7-⑤でペイター自身が解説している部分は、第3幕、第5場の冒頭にある次のような対話である。

Juliet. Wilt thou be gone? It is not yet near day.
It was the nightingale and not the lark
That pierc'd the fearful hollow of thine ear.
Nightly she sings on yond pomegranate tree.
Believe me, love, it was the nightingale.
Romeo. It was the lark, the herald of the morn,
No nightingale. Look, love, what envious streaks
Do lace the severing clouds in yonder east.
Night's candles are burnt out, and jocund day
Stands tiptoe on the misty mountain tops.
I must be gone and live, or stay and die. (5)

ここに登場するナイティンゲールやヒバリといった鳥が、プロヴァンス風恋愛詩におけるムクドリやツバメと同じような使者として用いられ、「電撃的な大気の中における高揚した大自然の様子」(6-⑥) をよく示しているとして、ペイターは紹介している。さらにこの劇のもう少し後に、次のような14行の対話がある。

Romeo. I have more care to stay than will to go.
Come death, and welcome. Juliet wills it so.
How is't, my soul? Let's talk. It is not day.
Juliet. It is, it is. Hie hence, begone, away.
It is the lark that sings so out of tune,
Straining harsh discords and unpleasing sharps.
Some say the lark makes sweet division.
This doth not so, for she divideth us.
Some say the lark and loathed toad change eyes.
O, now I would they had chang'd voices too,
Since arm from arm that voice doth us affray,
Hunting thee hence with hunt's-up to the day.
O now be gone, more light and light it grows.
Romeo. More light and light: more dark and dark our woes. (6)

このよく知られている 14 行は、ペイターに従えば、正しくオーバードであると同時に、ソネットでもあり、エピサレイミアムでもあるという、三位一体的なものとなっている。この第 7 パラグラフは、第 6 パラグラフで紹介された理論の具体的な例証として展開しているのである。

「夜の恐怖」（7-⑥）から解放されて、「夜明けを称える」（7-⑧）朝の歌（つまり、オーバード）が、モリスの書物にもあるとして、ペイターはモリスの作品中の「極致」（7-⑧）として、『ギネヴィアの弁明、及び他の詩』に含まれている「夏の夜明け」（“Summer Dawn”）という 14 行詩を引用する。(Bloom 198)「我慢強く夜明けを待」つ雲、「太陽とともに雲間から流れ出る時を待っている」黄金色の天、夜明けを祈っている大きな楡の木の並木や青い麦畑や、バラの花や、落ち着きもなく吹いている風。これらの自然の事物は花婿の魂と一体となって花嫁のもとへと向かっている。前のパラグラフでペイターが述べているように、「まるで、奇跡か魔術が行われたかのように、自然が一体となって、人間の情熱のために奉仕しようと努め」（6-⑥）ているのである。「感覚の世界が一段と輝きと鮮明さを増して迫ってくる」（6-①）プロヴァンス風恋愛詩の感覚的な世界の極致がモリスの 14 行詩の中にあることを具体的にペイターは例示している。第 7 パラグラフは、このエッセイの中でも最も長いパラグラフのひとつであり、このエッセイの中心を成すものと言えよう。

4 後半部についての考察

第 8 パラグラフでペイターは、『ギネヴィアの弁明』→『ジェイソンの生と死』→『地上楽園』へと発展、変化したモリスの手法について、それは「ほとんど反逆的」なもので、「審美派の詩の特徴をよく示している」（8-①）と述べる。このように述べることによって、「反逆的」な審美派の詩についてのエッセイを書いているペイター自身も「反逆的」であることを自ずから暗示していると言えよう。ペイターはさらに筆を進めて、肉体（感覚）と魂（霊）が別々に活動するのではなく、肉体と魂が一体となった「原初的な情熱」が描かれている異教的なヴェロネーゼの作品に審美派の詩の本質があると示唆する（8-②)。ここで、ヴェロネーゼのどのような作品に言及しているのか、ペイターは具体的には述べていないが、ヴェロネーゼの作品が、「白昼の光の中で展開されている」（8-②）ことは確かであり、例えば、ルーヴルにあるヴェロネーゼの「カナにおける結婚式」（“The Marriage at Cana”）について、現代のある美術史家は、彼の「色彩の白昼の明晰性」（‘daylit clarity of color’）が具現化されている傑作であると述べている。(Gowing 262)霊と肉が一致して「原初的な情熱」が描かれる手法は、ヴェロネーゼやモリスという優れた個々の芸術家の特質を通して変遷する「多様な形態の下における人間精神の生の一つの法則」（8-③）であるとペイターは述べる。つまり、この法則はルネサンスそのものの法則であり、僧院の修道士によって感知されたように、「開かれた幻想」を通して、「五感に対してだけ開かれている」地上的な夜明けの光がもたらす霊と肉が一体となった「原初的な情熱」（8-④～⑤）なのであり、それは、およそ人間が存在する限り普遍的なものである。ルネサンスについては、ペイターの代表作となった著作があるが、そのルネサンスの本質が「五感に対してだけ開かれている」（8-④）ものをしっかりと捉える審美派の詩の世界に通底するものであることが、ここで明らかにされている。

第9パラグラフの冒頭で言及されている「夢の光」(dreamlight) は、第7パラグラフでペイターが解説した「ノクターン」を始めとする夜の歌を踏まえたイメージで語られており、また、「日の光」(daylight) は、第8パラグラフで述べられた「日の光」(8-④) を踏まえており、このエッセイの段落や文章の構成は、すでに前に述べたものを変奏させながら利用するという、極めて緻密に計算された文学的構築物のようなものとなっている。9-②で言及されている「中世のこのヘレニスト」とはモリスのことであり、彼は、古代ギリシアの精神と共に中世の物語を展開できる現代の詩人なのである。このようにして、ここでも、エッセイ冒頭の三つのカテゴリー (つまり、古代ギリシア、中世、現代) の概念が応用されている。ペイターによれば、モリスの卓越した夢の技法は、ガラハッドやギネヴィアといった中世のアーサー王物語の登場人物が見る夢ではなく、ケンタウロスや黄金の毛をもつ雄羊を求めに出かけたアルゴー号の乗組員たちの古代ギリシアの世界を現出させるところにある (9-②〜③)。また、「子供時代を人に取り戻させる眠り」(9-②) という表現は、すでに、第1パラグラフで述べられていた「郷愁の思いを反転させること」という考えを変奏させたものであると言える (1-⑤〜⑦)。

ペイターは、「初めて、火や雪やワインや、泳いだときの水の感触、海水の塩辛さに接して驚愕するような、驚異の印象」(9-⑥) に注目するが、火や雪に初めて接した人は、火の赤い色や熱さ、雪の白さや冷たさ、つまり、視覚や触覚に刺激を受けるだろうし、ワインに初めて接した時には、その香りや味、つまり、嗅覚と味覚が刺激されるだろうし、初めて泳いだ時の水の感触、海水の塩辛さを感じた人は、広大な海の景色やその香り、潮騒の響きと共に、視覚、聴覚、味覚、触覚、嗅覚といった五感すべてに刺激を受けるだろう。さらに、「泳いだときの水の感触」という表現は、海の響き、景色、香りに常に憧れ、海で泳ぐ体験に基づいて多くの詩を書いたラファエル前派のもう一人の詩人スウィンバーンを連想させることをここでも指摘しておきたい。人間に備わっている五感のすべてを掻き立てるところに審美主義の本質があることを、ペイターは具体的なイメージや比喩を用いて説明しているが、五感を総動員して得られる審美主義のこのような「風変わりな美しさは…ごく限られた者にだけ楽しまれる」(5-⑩) という立場は、既に何度も触れたように、このエッセイを含めたペイターの作品において繰り返し主張されているものである。そして、この審美主義は、どちらかと言うと観念が先行し、肉体に備わる五感よりも魂を重視するワーズワスの自然観とは異なっているとペイターは宣言する (9-⑦〜⑧)。

次の第10パラグラフで、そのワーズワスの英国における教育上の影響が絶大であったことをペイターは認めており (10-①)、ロマン派の代表的詩人ワーズワスが描いたような英国的な場面や自然といういわば、ローカルカラーを、たとえ題材が古代や別の時代であったとしても、英国の詩人として描出できるのが、審美派の詩人であるとして、ペイターは具体的な詩句を引用する (10-②)。いかなる時代のテーマを扱おうとも、その「テーマを活気づけている詩人の実に魅力的な時代錯誤」(10-①) とペイターが言う時、その詩人が生きている時代の「時代精神」(Zeitgeist) とローカルカラー (つまり、英国の詩人の場合は英国という場所) を、五感を鋭く働かせて描写することの重要性をペイターは述べているのである。「時代精神」については、ペイターは「あとがき」("Postscript"、最初に付けられたタイトルは「ロマン主義」("Romanticism") であった) でも繰り返し強調している。(Bloom 217)

プロヴァンスの愛の詩ではムクドリやツバメが「高揚した大自然」の「使者」として登場する (6-

⑥）と述べたペイターは、この第 10 パラグラフの後半では、ヨーロッパヨタカ、バン、百種類にも及ぶすばらしい変種をもつツグミ、シロハヤブサ、チョウゲンボウ、ムクドリ、クジャクといった、多種多様の鳥に恵まれた「鳥たちの楽園」（'paradise of birds', 10-③）である英国のローカルカラーを紹介する。「楽園」（'paradise'）という言葉づかいには、もちろん、『地上楽園』（*The Earthly Paradise*）（１-④、８-①、１３-①）への連想が働いていることは言うまでもない。このような鳥たちの鳴き声は、当然、聴覚に訴えかけてくるものであるが、「ピンクの脚、灰色の羽をもち、寺院の香の煙を避けながら境内を飛び回り、雪の中で足を取られたりしているハト」（10-③）は、視覚（ピンクの脚、灰色の羽、白い雪）と嗅覚（香の煙）にも訴えるものである。さらに、海に囲まれていて、「海に接しているという感じ」（'sea-touches'）がいたるところにある（10-④）と述べるのであるが、'touches' はもちろん、触覚を連想させることばである。このように、具体的な例をいくつも引きながら英国のローカルカラーを確認してこのパラグラフは結ばれているが、この第 10 パラグラフ全体が英国の自然に対して、ワーズワスとは異なる観点から述べられたペイターの自然観となっていると言えよう。

第 11 パラグラフでペイターは、古代ギリシアの伝説の世界をそのまま現実のものとして復活させることはできないと言う（11-①）。古代ギリシア→中世→ルネサンス→18 世紀を経験したあとの 19 世紀にモリスのようなラファエル前派の詩人たちが現れ、そしてその彼らの詩についてこの文章を書いているペイターがいる。そのあたりの事情をペイターは、「すべての時代を構成する経験が我々一人一人の一部分となっている」（11-③）と、やや難解な言い回しで表現しているが、これは、ダーウィンの進化論的な考え方や、あるいは、「個体発生は系統発生を繰り返す」という生物学的な理論の応用と言えるものであり、"The presence that rose thus so strangely beside the waters, is expressive of what in the ways of a thousand years men had come to desire."で始まるダヴィンチのモナリザに関するペイターの有名な一節（Hill 98-99）を連想させるものでもある。ペイターは各時代の文化の継承性を重視する（11-④～⑤）。過去の時代をそのまま再現させることは不可能であるが、過去の時代の文化を継承して 19 世紀後半に生きている人間として、過去のある時代が「我々の文化に貢献してきた特定の要素を思い描くこと」（11-⑤）は可能なのである。「時代の個々の主題を取り扱うこと」（11-⑤）、つまり、その時代の「時代精神」（Zeitgeist）を把握することによって、「その時代をよく見えるように浮き上がらせることができる」（11-⑤）と述べて、「文化」（culture）に対するペイターの考え方がはっきりと述べられている。古代ギリシア人になって生を思い描くことはできないが、「それを憧れることが、芸術にとって可能なのである」（11-⑥）とペイターは書いているが、この「憧れる」（'aspiring to'）という表現は、彼の有名な、「すべての芸術は音楽の状態に憧れる」（'*All art constantly aspires towards the condition of music.*'）（Hill 106）を強く連想させるものである。ペイターにとって常に何かに「憧れること」、つまり、「郷愁の思いを反転させること」（１-⑦）が、すべての芸術の本質なのであった。

このような考察は第 12 パラグラフへと持ち越され、古典的な物語を憧れをもって扱う 19 世紀の審美派の詩人は、ホメロスに代表される古代ギリシアそのもののヘレニズムとまでは行かなくとも、中世にすでに含まれていた、「ルネサンスのあの絶妙な第一期のヘレニズムの世界に極めて近いところにやって来る」（12-①）とペイターは述べる。12-③は、ペイターに時に見られる曖昧で自己韜晦的な表現であるが、混沌とした中にあっても、憧れをもって、五感を総動員することの重要性を述べている。「混ざり合った光の中」にあって、確信はなくとも、期待をもって身構える、「人間精神のえり

抜きの生」の意義が説かれている。そして、この「混ざり合った光の中」('mixed lights') という表現は、これとは対照的な意味合いにおいて、ペイターが他のところで用いている「乾いた光」('dry light') (Bloom 217) を連想させるものである。「中世の疲弊した精神的世界から、(ヘレニズムという) より以前の、より古い五感の生への回帰の最も初期の段階」(12-④) として、ルネサンスが開花したとペイターは述べるのであるが、今また新しいヘレニズムを開花させようとして審美派の詩人が登場する 19 世紀後半も「疲弊した精神的世界」であることをペイターは暗に伝えているわけで、テニスンの「二つの声」(1842 年)、『モード』(1856 年)、ダーウィンの『種の起源』(1859 年)、アーノルドの「ドーヴァーの岸辺」(1867 年)、『教養と無秩序』(1869 年) などに代表されるような、疲弊した宗教や社会に対する懐疑や不安に包まれていた当時の閉塞的な精神の状況に反逆して、「五感の生」(12-④) を重視する審美主義の立場を擁護するのである。そして、閉塞的な精神だけの世界から「五感の生」が活動する「自然の光の中」(12-④) に浸って考えれば、キリスト教の世界とそれより古い神々のヘレニズムの世界に相通じるものがあると、ペイターは述べる (12-⑤)。ここに至って、ペイターは明確にキリスト教の絶対性を否定し、キリスト教とヘレニズムの神々の世界を等しく相対的に見る態度を打ち出しているが、初期の「コウルリッジ論」以来、ペイターは一貫して、相対主義の立場をとっている。そして、キリスト教に見られる「情熱的な激しい精神」(12-⑤) が注ぎ込まれているというクピドとプシケの物語は、『マリウス』の中でペイター自身が訳したものを紹介しており、この点において、ペイター自身も審美派の詩人につながる芸術家と見なされねばならないのである。

14 のパラグラフから成るこのエッセイをソネットに例えれば、ソネット終結部のカップレットの前半といえる第 13 パラグラフにおいて、今まで述べてきたことの具体的要約として、ペイターは、『ジェイソン』及び、『地上楽園』という古代ギリシアをテーマにしたモリスの作品の中に、中世的時代精神が見られることの矛盾について説明する (13-①)。ギリシア神話のアルゴー号の船出の様子が、「中世のどこかフランスかイタリアの町の移動舞台 (ページェント)」(13-②) のように描かれていると述べた後、ペイターは、具体的な例として、「尖塔の上の黄金色の風見鶏、鳴り渡る塔の鐘、窓辺を飾るバラの格子垣、林檎の樹が植えられている囲い地」(13-③) という風に、視覚、聴覚、そして多分、嗅覚などの五感に鮮やかに訴える箇所をとりあげることによって、審美主義的特徴を明確に指摘する。そして、ギリシア伝説の物語であるのに、あたかもアーサー王の中世の世界であるかのように描かれ (13-③)、さらにドイツ民族のロマンスの精神 (13-④) で描かれるギリシア神話の水の精の歌は、中世の古い教会のステンドグラスに描かれている歌のようなものとなっていたり (13-④)、ギリシア神話の魔女メディアが、シュトレッケルベルクをはじめとする中世ドイツの魔女や、コウルリッジの詩で有名な魔女と同様に神秘的に描かれている (13-⑤) と述べて、「中世の悲しみを背景にしてくっきりと浮かび上がるギリシア精神(ヘレニズム)の優美さ」(13-⑥) が『地上楽園』の中心テーマを形成していることを、ペイターは具体的な例を挙げて、明確に指摘する。

(ギリシアの精神と中世の悲しみという)「二つの感情の糸が、ここ [モリスの『地上楽園』] では精妙な巧みさをもって見事に織り合わされ、かつ対比されている」(13-⑥) とペイターは述べる。このように、審美派の詩人が重視した「五感の生」は、古代ギリシアの時代にも、中世の時代にも、そして 19 世紀にも、およそ人が芸術活動を続ける限り、常に存在していたのであるが、このことは、

モリスをはじめとするラファエル前派の詩人たち、そしてもちろんペイター自身を含めたごく限られた「ある種の人々には周知のこと」(1-⑦) なのであった。描かれている中世の世界が、ノルウェイ、フランス、イギリス、ドイツを含めた汎ヨーロッパ的なものであることをいくつかの具体的な例を引いて述べた後で、以前のギリシアの「世界の罪を、十字架の印と共に乗り越えようとし」、古代ギリシアの異教的世界と中世のキリスト教的世界という「これら二つの世界の感情がまともに向かい合うことになる」(13-⑩) ことをもう一度確認して、ペイターは最終パラグラフへと読者を導いていく。

第 14 パラグラフの冒頭で、審美派の詩には異教精神の一つの特徴があって、それは、「生の短さを暗示している」(14-①) ことであるとペイターは述べる。そして、生が短いからこそ、世界を美しいものにしたい、「つまり、死の感覚と美への欲望、死の感覚によって速められた美への欲望」(14-②) が生まれるという、ペイターが他の作品でも繰り返し強調する審美主義の中心概念(7) が結論として提示されたあと、そのような審美派の詩の中心概念は、「ダンテ・ゲイブリエル・ロセッティにおいて最高潮に達する」(14-③) と述べて、次に続く「ダンテ・ゲイブリエル・ロセッティ論」とのつながりを示すことによってこのエッセイを結んでいる。

このように見てくると、各パラグラフが、まるでソネット (14 行詩) の各詩行のように、密接な繋がりをもって展開されていることが判る。つまり、第 1 パラグラフで、ギリシア、中世、現代という三つの時代区分を超越した「変容された世界」に審美派の詩 (つまり、モリスの『地上楽園』) があるという考え方が提示される。三つの時代区分の三という数字もこのエッセイに流れている鍵概念の一つである。次に、中世主義の重要性が述べられ、中世の禁欲的な宗教に対する、五感による感覚的 (つまり審美的) な生が紹介され、これは反逆的であり、プロヴァンス風恋愛詩の要素をもつことも紹介される (第 2 パラグラフ～第 3 パラグラフ)。そのあと、プロヴァンス風恋愛詩について論じられているが (第 4 パラグラフ～第 7 パラグラフ)、特に、第 5 パラグラフでは、夢想、幻惑、錯乱という三つの鍵概念を用いた審美主義の特質が説明される。そして、この風変わりな美しさは、「ごく限られた者にだけ楽しまれる」と述べる時、モリスを含めた「ラファエル前派兄弟団」(Pre-Raphaelite Brotherhood) も当然その「ごく限られた者」に属することになるのであるが、その「兄弟団」(Brotherhood) には、例えば、僧院やフリーメーソンといったような、自分達だけの共通理解の世界をもつ秘密組織といったニュアンスがある。ペイター自身はラファエル前派に属していたわけではないが、上述のような言い方をすることによって、彼自身もそのような「ごく限られた者」の一人であることを間接的に伝えていることになる。そしてペイターにとって、「その風変わりな美しさ」を理解できる「ごく限られた者」たちは、ギリシア、中世、現代を通じて、人間の生がある限り、存在するのであり、ペイター自身、他の様々な作品において、その普遍的な人間精神の多様なありようを探求していると言える。

14 のパラグラフのほぼ中心にあたる第 7 パラグラフで、プロヴァンス風恋愛詩の解説は最高潮に達する。つまり、ノクターン、セレナ (セレナーデ)、オーブ (オーバード) という三つの型が紹介されたあと、その中のオーバードについて、この形式は、ソネット、エピサレイミアムと並んで用いられる代表的な恋愛詩の三つの型のうちの一つであると解説される。そのあと、モリスの作品の中から 14 行詩が引用され、それがオーバード、ソネット、エピサレイミウムという三つの要素を含むものであることが例示される。第 1 パラグラフで「地上の楽園」('earthly paradise') として使われたことばが、

第8パラグラフでは『地上楽園』(*The Earthly Paradise*) というモリスの作品名として用いられ、第8パラグラフ以降、第 12 パラグラフまで『地上楽園』を中心とするモリスの作品の審美主義的特質について論じられている。第 12 パラグラフでは、ホメロスのヘレニズムに憧れて中世 (ルネサンス) のヘレニズムに近づこうとする現代の詩人のヘレニズムという三つのヘレニズムについて論じられており、疲弊した精神的世界から、五感の生へと向かったルネサンスのヘレニズムを志向することの重要性が指摘されているが、これは第1パラグラフの三つの時代の特質を発展的に述べたものである。第 13 パラグラフでは、中世の疲弊した宗教の悲しみを背景にして、感覚的なギリシア精神 (ヘレニズム) が『地上楽園』の中心テーマをなしていると述べ、審美派の詩の中に、中世のキリスト教世界と古代ギリシアの異教世界が並存していると結ぶ。そして、最終パラグラフでもそれを受けて、異教精神が審美派の詩に含まれていることが再び強調される。これは、第2〜第4パラグラフで触れられていた「反逆」、「道徳律廃止主義」から発展してきたものであった。

5 結び

14 のパラグラフから成立しているこのエッセイは、第7パラグラフに引用されている 14 行詩がそれぞれに脚韻を響かせながら展開されている 14 の詩行から成り立っているように、それぞれのパラグラフが互いに、例えば、三つの時代区分や、ギリシアのヘレニズムへの憧れとしての郷愁 (homesickness) というような概念を通して、密接な関連をもつことによって、エッセイをまるでひとつのソネットのようなものにしていると言えよう。

文学に関するテクストを「文学的構築物」('literary architecture') と見なすペイターは、豊かで表現力溢れる作品を書くには、全体的統一性を考えた上で、書き始めの段階ですでに結びをしっかりと見極めると同時に、よく設計されたデザインに従ってテクストを展開させることの必要性を別のところで説いているが("Style" included in Bloom 113) 、この「審美派の詩」というエッセイは、まさにこのペイターのことば通りに、極めて優れた「文学的構築物」となっている。すでに他のところで指摘したように (上村 42)、このエッセイには、ゲーテ:『ゲッツ・フォン・ベルリヒンゲン』;『イフィゲーニエ』、スコット、ダンテ、聖ルイ、ヴィクトル・ユゴー:『パリのノートルダム』、ハイネ、モリス:『ギネヴィアの弁明、及び他の詩』;『ジェイソンの生と死』;『地上楽園』、アーサー王伝説、ルソー、キリスト教神秘主義者たち、ラテン語による讃美歌の作者たち、プロヴァンス風の詩、フォーリエル:『プロヴァンス風の詩の歴史』、シェイクスピア:『ロメオとジュリエット』、ド・クウィンシー、ワーズワス、ホメロス、チョーサー、聖書、「クピドとプシュケーの物語」、ドイツ民族によるロマンス、コウルリッジ:「クリスタベル」、ダンテ・ゲイブリエル・ロセッティ、等、多くの先行の作家や著作が言及されているが、いま上に挙げられたそれぞれの作家や著作物の中に言及されているさらに別の作家や著作物というふうに次々に辿っていけば、世界にあるすべてのテクストが結び付いて、網の目のような繋がり (ネットワーク) を形成することになる。モリスの作品を主な手がかりとして、そのようなテクストから成る広大なネットワークの世界の中に存在する「五感の生」の重要性を、よくデザインされた構築物のような構成を用いて指摘したのが、「審美派の詩」と題するエッセイなのであった。

注

(1) "Aesthetic Poetry" included in Harold Bloom ed., *Selected Writings of Walter Pater* (New York: Columbia University Press, 1974), pp. 190-198 を底本にした。 尚、ペイターの他の作品のうち、"Postscript" ("Romanticism")、"The Child in the House"、および、"Style"からの引用は、上記、ブルームの編集した選集に拠るが、*The Renaissance* については、Donald L. Hill の編集した書物に拠る。

(2) プロヴァンス風の詩における宮廷風恋愛の特質については、ドニ・ド・ルージュモン著、鈴木健郎・川村克巳訳、『愛について――エロスとアガペ――』(東京：岩波書店、１９５９年)、９８-１１１ページ参照。

(3) *The Poems of Algernon Charles Swinburne* (6 vols., 1904; rpt. New York, 1972), vol. Ⅰ, pp. 44-45, 48-51. 以下、本書からの引用は、Swinburne, *Poems*, Ⅰ, 44-45 と略記する。さらに 「共和国的結婚」('Mariage Républicain') については、Thomas Carlyle, *The French Revolution* (1837; London: Everyman's Library, 1980), Pt. Ⅲ, Bk. Ⅴ, Ch. Ⅲ, p. 308 を参照。

(4) Victor Hugo, *Notre-Dame de Paris 1482* (1831; 1967, Garnier-Flammarion, Paris), p. 346. (「…――まあ聞け。わたしは、おまえについて、拷問の部屋まで行ったのだ。おまえが服を脱いで半裸体となり、あの拷問係のいまわしい手で触れられるのを、わたしは見たのだ。おまえの足を見た。一国を犠牲にしても、せめてただ一度口づけをして死んでいきたいと思っていたその足を、その下で歓喜に酔いしれて、わたしの頭が打ち砕かれるのを感じたいとさえ思ったその足を。その足が、生きた人間の足を血みどろにしてしまう恐ろしい足枷(あしかせ)の中にはさまれるのを見たのだ。ああ！なんというみじめなことだ！それを見ている間に、自分の屍衣(しい)の下にかくし持っていた短剣で、われとわが胸をえぐったのだ。おまえがもたらした叫びを聞いて、わたしは自分の肉に短剣を突き刺したのだ。二度めにおまえが叫んだときには、短剣は心臓にはいった！見てくれ、まだ血が滲(にじ)んでいると思うが」 彼は聖職者の服を開いた。胸は実際、トラの爪(つめ)でかきむしられたようにさけていた。そして、横腹のところには、かなり大きな傷口がまだよくふさがらないでいた。――辻／松下訳 『ノートル＝ダム・ド・パリ』(潮出版社、2000), p. 331.) さらに、インマンが指摘しているように (Inman 178)、第 9 巻第 1 章 (Hugo 371-380, 辻／松下訳 355-364) も該当箇所として挙げることができよう。

(5) *Romeo and Juliet* [Ⅲ.v.1-11] ("The Arden Edition of the Works of William Shakespeare", London and New York: Methuen, 1980), pp. 184-185. (ジュリエット もういらっしゃるの？朝はまだまだこなくてよ。／あれはナイチンゲール、ヒバリではなくてよ、／あなたのおびえていらっしゃる耳に聞こえたのは。／毎晩鳴くの、むこうのあのザクロの樹にきては。／ほんとうよ、ほんとうにナイチンゲールだったのよ。／ロメオ あれはヒバリ、朝の到来を告げるさきぶれだった、／ナイチンゲールではない。ごらん、あの東の空、／意地悪な光の縞が雲の裂け目を縁どっている。／夜空のまたたく燈火(ともしび)は燃えつき、楽しげな朝が／霧に浮かぶ山々のいただきに爪先立ちしている。／もう行かねば、生きるべく。とどまれば死ぬのだ。――小田島雄志訳 『ロメオとジュリエット』(白水社、1983), p. 138.)

(6) *Ibid.*, [Ⅲ.v.23-36]185-186. （ロメオ　ぼくだって行きたくない、どんなにとどまりたいか。／死よ、来るなら喜んで迎えるぞ、ジュリエットの望みだから。／どうした、ぼくのいのち、話をしよう、まだ朝ではない。／ジュリエット　朝よ、朝なのよ、行って、早く、いらっしゃって。／あれはヒバリよ、調子はずれの歌をうたう／耳ざわりな、不愉快な、金切り声を出しているのは。／ヒバリは美しい旋律をうたうという人もある、／でもあのヒバリはちがう、私たちを引き裂く歌ですもの。／ヒバリはヒキガエルと目をとりかえたという人もある、／ああ、それなら声もとりかえてくれたらよかったのに。／あの声は私たちの腕を引き離し、朝を呼び、／あなたをここから追いたてる意地悪な歌ですもの。／さ、いらっしゃって。だんだん明るくなるわ。／ロメオ　明るくなればなるほど、二人の心は暗くなる。——小田島訳，140-141.）

(7) ペイターは"The Child in the House"においても、'For with this desire of physical beauty mingled itself early the fear of death——the fear of death intensified by the desire of beauty.'と述べている。(Bloom 11)

参考文献

Carlyle, Thomas. *The French Revolution.* 1837; London: Everyman's Library, 1980.

Gowing, Lawrence. *Paintings in the Louvre.* New York: Stewart, Tabori & Chang, 1987.

Hugo, Victor. *Notre-Dame de Paris 1482.* 1831; 1967, Garnier-Flammarion, Paris.

ユゴー，ヴィクトル．辻／松下訳．『ノートル＝ダム・ド・パリ』．潮出版社，2000.

Inman, Billie Andrew. *Walter Pater's Reading: A Bibliography of His Library Borrowings and Literary References, 1858-1873.* New York: Garland, 1981.

Pater, Walter. *Selected Writings of Walter Pater.* Ed. Harold Bloom. New York: Columbia University Press, 1974.

_____ *The Renaissance: Studies in Art and Poetry.* Ed. Donald L.Hill. Berkeley: University of California Press, 1980.

Prettejohn, Elizabeth. "Walter Pater and aesthetic painting" in her edited *After the Pre-Raphaelites: Art and Aestheticism in Victorian England.* New Brunswick, New Jersey: Rutgers University Press, 1999.

ルージュモン，ドニ・ド．鈴木健郎・川村克巳訳．『愛について——エロスとアガペ——』．岩波書店，1959.

Shakespeare, William. *Romeo and Juliet* ("The Arden Edition of the Works of William Shakespeare"). London and New York: Methuen, 1980.

シェイクスピア，ウィリアム．小田島雄志訳．『ロメオとジュリエット』．白水社，1983.

Swinburne, Algernon Charles. *The Poems of Algernon Charles Swinburne.* 6 vols. 1904; rpt. New York, 1972.

上村盛人．「ウォルター・ペイターの審美主義」『滋賀県立大学国際教育センター研究紀要』，第5号．2000.

Williams, Carolyn. *Transfigured World: Walter Pater's Aesthetic Historicism.* Ithaca and London: Cornell University Press, 1989.

Abstract

"Aesthetic Poetry" appeared as one of the collected essays in Walter Pater's *Appreciations* published in 1889, but it was later suppressed in the second edition published in 1890. This essay on aesthetic poetry was originally part of the 1868 review of William Morris's *The Earthly Paradise*. The other half of the original review of the poem by Morris was recycled and revised as the "Conclusion" to *The Renaissance*, one of the most influential works in the aesthetic movement in England. As the brief explanation of the interrelated textual shift of "Aesthetic Poetry" implicitly indicates, Pater often reshuffled and revised his own earlier texts. The reshuffling and revision of the earlier texts of himself and other writers before him is enacted as well as discussed by Pater himself in his argument on aesthetic poetry in the essay. This characteristic feature is essentially his own in his critical writing as an aesthetic writer.

"Aesthetic Poetry" consists of 14 paragraphs, which makes the essay look like a sonnet with its 14 rhymed lines of the sonnet. In the starting paragraph, Pater stresses a finer idealized quality of the "aesthetic" poetry, which is literally an artificial or "earthly paradise" coming from a "transfigured world," transcending Greek, medieval or modern poetry. Then in paragraph 3, as the first typical specimen of aesthetic poetry, Pater introduces Morris's *Defence of Guenevere* with its profound medievalism which has its sensuous and rebellious sides. In the paragraphs that follow, some characteristic features of Provençal poetry with its three stages of reverie, illusion, and delirium are explained, as they are pertinent to aesthetic poetry which is antinomian. In paragraph 7, Morris's 14-line poem is introduced as a typical example of aubade, sonnet, and epithalamium. From the 8th through 12th paragraphs, Pater discusses aesthetic elements of Morris's *The Earthly Paradise* with its pagan passions by his full utilization of all the senses. In the concluding two paragraphs, the grace of Hellenism relieved against the sorrow of the Middle Ages is noted as part of aesthetic poetry with its characteristic pagan spirit featuring "the desire of beauty quickened by the sense of death."

Shinjin and Satori in the Here and Now
—Flowers Yet Fall As People Lament—

Hoyu ISHIDA

INTRODUCTION

Shinran (1173-1262) and Dogen (1200-1253) are two of the leading figures of the "reformed Buddhism" of the Kamakura Period (1185-1333), along with Honen (1133-1212), Nichiren (1222-1282) and others. Buddhism, originally from India and introduced through China and Korea, eventually became the practice and resort for the mass of people in medieval Japan. The great schools of Kamakura Buddhism promulgated by such figures have exerted a definitive influence on life in Japan, as well as, to a certain extent, life in the West. The Kamakura period for Japanese Buddhism was an age of religious reformation and for the selection of a "single practice or teaching" by respective thinkers and/or practicers.[1] Buddha-Dharma was thus singled out or reduced to a particular path by those respective reformers. In this regard, Shinran and Dogen differ from each other in doctrine, having understood the historical process and man's nature differently and thus selected their own practices and ways. Yet it should be said that their teachings are not of a different nature, when viewed from a larger and universal perspective, an observation of their teachings as applied to the needs of people in particular and in general.

Shinran's shinjin and Dogen's satori mean in essence one's becoming awakened or enlightened and should include two phases or qualities simultaneously—benefiting oneself (*jiri* in Japanese) and benefiting others (*rita*), just as a bodhisattva establishes vows to attain enlightenment and to save suffering beings, setting out on a course of practice. One cannot

---

[1] Honen, the founder of the Jodo sect of Pure Land Buddhism, spearheaded the reformation of Kamakura Buddhism, by selecting the nembutsu as the only path for attaining enlightenment in the age of *mappo* ("last Dharma"). The nembutsu is what leads one to *ojo* ("birth in the Pure Land") in the end. Shinran, the founder of the Jodo Shin sect (or Shin Buddhism), succeeded his teacher Honen, and advocated *ojo* through shinjin ("entrusting or awakened heart/mind") alone. Dogen, the founder of the Soto sect of Zen Buddhism, selected zazen ("seated-meditation") as both the means and the fruit of enlightenment. Nichiren, the founder of the Nichiren sect, reevaluated the Lotus Sutra of the Tendai sect and took it as the ultimate teaching of Sakyamuni the Buddha.

attain awakening or enlightenment all by oneself; shinjin and satori are not worth seeking after all, unless they are for the sake of others, religiously and secularly, in this world of *samsara*, where we are living the whole universe according to our own capacity in sorrow and joy. It is not exaggerating to say that the teachings of Shinran and Dogen therefore have just two messages when simplified and crystallized: one needs to become awakened or enlightened first of all, and the attributes of one's awakening or enlightenment have to be shared with others at the same time.

Shinran and Dogen lived in the Kamakura period in Japan some 800 years ago. We are now living in the twenty-first century of highly advanced scientific technology. The kinds of problems in the Kamakura era and of today may differ from each other because of the progress of science and technology and the historical differences in civilization and culture. Yet, *duhkha* or sufferings of people have not changed over the years. Shinran and Dogen walked the path seeking light and realized it, respectively. Their followers have been inspired and guided by the light, seeking the meaning of life and fulfilling their needs, religious and secular, in life. This paper expounds their messages, first, by discussing Shinran's understanding of *raiko* ("Amida's welcoming descent") and *mappo* in order to identify Shinran's position in Pure Land Buddhism; second, by examining shinjin or satori as applied to a theory of the time-space interformation in the here and now; third, by reading and elaborating the opening message of Dogen's "Genjokoan" in the *Shobogenzo*; and lastly, by reviewing the role of shinjin or satori in terms of its function as a bodhisattva practice in this world of *samsara*, the world of sorrow and joy.

SHINRAN'S UNDERSTANDING OF *RAIKO* AND *MAPPO*

The practice of *raiko* ("welcoming descent" of Amida Buddha on one's deathbed), commonly known as *raigo* in conventional Japanese usage, has played an important role in the Pure Land tradition of Buddhism. Shinran claims, however, that one has to become awakened in this life, as a *raiko* practice or belief implies one's un-awakened state of mind in the here and now: his interpretation of *raiko* disagrees with the position of the traditional teaching in Pure Land Buddhism. *Raiko* appears several times in the Three Pure Land Sutras of Pure Land Buddhism: twice in the Larger *Sukhavativyuha-sutra*, once in the Smaller *Sukhavativyuha-sutra* and nine times in the *Amitayur-dhyana-sutra* (the Contemplation Sutra). The most

famous passage of the *raiko* account is that of the 19th Vow of Dharmakara, [2] found in the Larger Sutra. It reads,

> If, when I attain Buddhahood, sentient beings in the lands of the ten directions, who awaken aspiration for Enlightenment, do various meritorious deeds and sincerely desire to be born in my land, should not, at their death, see me appear before them surrounded by a multitude of sages, may I not attain perfect Enlightenment.[3]

As aspired in the Amida Buddha's Vow above, the devotees or followers expect in hope and trust that Amida and the attendants (such bodhisattvas as Avalokitesvara and Mahasthamaprapta) will welcome them on their deathbed and escort them to the Pure Land, Amida's land of bliss.

The origin of *raiko* can be traced back to India. *Raiko* is common not only in the Pure Land Sutras but also in other Mahayana sutras and texts. In Pure Land Buddhism, *raiko* is always associated with Amida Buddha, but in other texts Amida is not necessarily the deity who welcomes a dying person. Since the non-Pure Land Buddhist sources on *raiko* are not older that those of the Pure Land school, however, *raiko* of Amida Buddha is the earliest and original one in Mahayana Buddhism; in the scriptures of early Buddhism or of pre-Mahayana Buddhism, we do not find any concrete account of *raiko* on one's deathbed like that of Amida. Therefore, *raiko* was started in the Pure Land teaching of Amida Buddha and spread in other Mahayana scriptures accordingly.[4]

We are able to trace some archetype of *raiko* on the deathbed to early Buddhism and analogical accounts in Brahmanism, though we cannot claim that these two accounts are the direct source of *raiko* of Amida Buddha in Pure Land Buddhism.[5] Amida Buddha's

---

[2] In the Chinese translations of the Larger Sutra by Sanghavarman and Bodhiruki, there are 48 Vows, while there are only 46 Vows in the original Sanskrit text. The 18th Vow and the 21st Vow in the Chinese translations are missing in the Sanskrit text, and the latter part of the 19th Vow in the Sanskrit version is the latter part of the lost 18th Vow, according to the translations. The 18th Vow in the Chinese translations, however, is very important especially to Honen and Shinran. See "Part II" in *Buddhist Mahayana Texts* (New York: Dover, 1969), ed. E. B. Cowel and others, pp. 15 and 73-5.

[3] *Shinshu shogyo zensho* (hereafter abbreviated *SSZ*) 1, complied, Shinshu shogyo zensho hensansho (Kyoto: Oyagi Kobundo, 1941), pp. 9-10.

The English translation cited here is from Hisao Inagaki, *The Three Pure Land Sutras: A Study and Translation* (Kyoto: Nagata Bunshodo, 1994), p. 243-4.

[4] There are *raiko* accounts of other deities who welcome to other lands, for example, in the *Saddharmapundaika-sutra*, the *Avatamsaka-sutra*, the *Bhaisajyaguru-sutra*, the *Karandavyuha* and others. See Kotetsu Fujita, *Genshi jodoshiso no kenkyu* ["A Study on Thoughts of Early Pure Land Buddhism"] (Tokyo: Iwanami Shoten, 1970, pp. 566-7.

[5] Fujita introduces several accounts of the Pali canon as well as of the *Uanisad* and the *Bhagavadgita* that seem to suggest some source of *raiko*, though he does not approve that these accounts

welcoming descent is a natural flow in the Pure Land doctrine, as the goal of its teaching is to be born in the Pure Land of Amida; therefore, the time of one's death becomes very important, for it is the crucial moment of transition from this world to the other world of Amida Buddha to the devotees or followers. Whether or not the person is welcomed and escorted by Amida Buddha to the Pure Land plays a significant role.

In Japan, *raiko* of Amida Buddha (or Amida accompanied by Kannon or Avalokitesvara and Daiseishi or Mahasthamaprapta) had been already known from the Nara period (710-794). It was, however, especially the *Ojoyoshu* (*Essentials of Birth in the Pure Land*) by Genshin (942-1017), who is regarded as the first Patriarch of Japanese Pure Land Buddhism, being a Teidai priest, which made the account of *raiko* very popular among a variety of people at the time. In the *Ojoyoshu*, Genshin, on the one hand, described the unbearable suffering of the hells; on the other hand, he presented the beauty and perfection of the Pure Land, by which he caught the attention of people. The *raiko* theory and message then attracted and put them into practice widely. Genshin praised the Pure Land. It is said that Genshin himself built a monastery called the Ojo-in ("the Hall of Birth in the Pure Land") on Mt. Hiei, where an image of Amida Buddha was enshrined. In this Hall, Genshin placed a sick or dying person right behind the image and placed a rope braided from strands of five colors in his hands and the other end was attached to the hand of the Amida image.[6] The ritual of Amida's welcoming descent called *mukae-ko* is said to have started at the time of Genshin. In this ritual, the participants

> Who wear masks representing the twenty-five bodhisattvas, engage in a procession imitating the Descent of Amida and his host. The Mukae-ko caught popular fancy in the late Heian period.[7]

There are still places today where this ritual is observed in Japan: Taima-dera and Kume-dera in Nara, Joshin-ji in Tokyo, Junen-ji in Nagano etc.[8]

Honen, the founder of the Jodo sect, also exercised the *raiko* practice, though he did not demonstrate as explicitly as Genshin. While Shinran later did not approve the *raiko* practice, Honen left some room for allowing it. This difference between Honen and Shinran

---

are the origin of Amida's welcoming descent. *Ibid.*, pp. 574-85.

[6] Eryu Mikogami, *Shinshu gaku no konpon mondai* ["Fundamental Problems of Shin Buddhist Studies"] (Kyoto: Nagata Bunshodo, 1970), p. 331.

[7] Joji Okazaki, *Pure Land Buddhist Paintings* (Tokyo: Kodansha, 1977), tr. Elizabeth ten Grotenhuis, p. 102.

[8] Mikogami, p. 332.

can be seen from the following reasons. Shinran took only the 18th Vow of Dharmakara solely as essential to enlightenment, but Honen placed almost the same priority on the 19th Vow cited before, as he did on the 18th Vow. And while Shinran selected the Larger Sutra as the single most important text, Honen regarded, besides the Larger Sutra, the Contemplation Sutra important as well, which describes nine kinds of *raiko* in detail. The *Honen shonin eden* ("Pictorial Biography of the Saint Honen"), preserved at the Kosho-ji, Hiroshima, shows that Honen on his deathbed holds on with his hand to a rope that attached to an Amida image. He is also pointing up in the sky with the forefinger of his left hand, where Amida with Kannon and Daiseishi is welcoming Honen in the purple clouds to escort him to the Pure Land.[9] In the Jodo sect today, there is a ceremony of hanging a scroll which has a drawing of Amida's welcoming descent (*shuju raiko no zu*) by the bedside when the service is conducted by one's deathbed.

The *raiko* theory and pracitce, which had previously played an important role in Pure Land Buddhism, came to be interpreted negatively by Shinran, who insisted that one's expectation or reliance on *raiko* implied one's un-awakened state of mind. What was more essentially important to the followers, according to Shinran, was to become awakened or enlightened in this life—attainment of shinjin (*shinjin gyakutoku*). He referred to *raiko* several times in his works, and the *Matto-sho* (*Lamp for the Latter Ages*), which he wrote at the age of seventy-nine, demonstrated most systematically his view of *raiko*:

> The idea of Amida's coming at the moment of death is for those who seek to gain birth in the Pure Land by doing various practices, for they are practicers of self-power. The moment of death is of central concern to such people, for they have not yet attained true shinjin. We may also speak of Amida's coming at the moment of death in the case of those who, though they have committed the ten transgressions and the five grave offenses throughout their lives, encounter a teacher in the hour of death and are led at the very end to utter the nembutsu.
>
> The practicer of true shinjin, however, abides in the stage of the truly settled, for he or she has already been grasped, never to be abandoned. There is no need to wait in anticipation for the moment of death, no need to rely on Amida's coming. At the time shinjin becomes settled, birth too becomes settled; there is no need for the

[9] Okazaki, p. 22.

deathbed rites that prepare one for Amida's coming.[10]

His claim was that one should not rely on *raiko* on one's deathbed, since *ojo* or birth in the Pure Land becomes settled when shinjin becomes settled, and that the expectation of *raiko* would prevent one from becoming realized in one's current lifetime. In order to clarify some other position or stance, which makes Shinran differ from other Pure Land scholars or masters, we would like to examine the message of *mappo* ("last Dharma"), which gave a great impact especially on Pure Land followers at the time.

During the political, social, moral and religious revolution toward the end of the Heian period (794-1192), the message of *mappo* became important, especially in the popular dissemination of the Pure Land form of devotion. Though the concept of *mappo* had existed in Japan already during the Nara period, its message became an immediate reality, as the civil wars toward the end of the Heian period, as well as devastated natural calamities and disasters, seemed to show the signs of *mappo* to the mass of people. Genshin's *Ojoyoshu* then popularized the arrival of *mappo*, and significantly caught the public imagination and caused the attention of many to reflect on the message of the Pure Land.

Under the influence of *mappo*, Honen also completed his principal work, the *Senchaku hongan nembutsushu* (*Treatise on the Selection of the Nembutsu of the Primal Vow*). He carefully selected the nembutsu as the only way of attaining enlightenment at that time because of the arrival of *mappo*.[11] Honen says that people no longer possessed the capacity of attaining enlightenment by their own religious practices. Then he explains the reasons: that the Holy Path of saints was impossible to fulfill at the time of *mappo*, since the age was so far removed from Sakyamuni and the practice of the Holy Path was too difficult to fulfill. He quoted the *Daijugatsuzokyo*, which states that no matter how many people try to practice, there would be no one who would attain enlightenment in the age of *mappo*.

Unlike Dogen,[12] Shinran, as a devoted disciple of Honen, was also fully aware of

---

[10] *SSZ* 2, p. 656.

The English translation cited here is from *The Collected Works of Shinran* (hereafter abbreviated *CWS*) 1, Shin Buddhism Translation series (Kyoto: Jodo Shinshu Hongwanji-ha, 1997), p. 523.

[11] At the beginning of his work, Honen says, "Although in the *mappo* age billions of sentient beings practice and train themselves, there will be none who will attain enlightenment. Now, we are in the *mappo* age, living in the evil world of the five defilements. The Pure Land path is the only gate that is available to us." *SZZ* 1, p. 929.

[12] Dogen did not accord with the doctrine of *mappo*. Dogen in the *Bendowa* (*Discourse on Practicing the Way*) says, in response to the question of whether one can attain enlightenment through the

mappo, and stressed the appropriateness of the Pure Land in the *mappo* age in the sixth volume (revealing "the Transformed Buddha-Bodies and Lands That Are Provisional Means of the Pure Land Way") of his major work, the *Kyogyoshinsho* (*The True Teaching, Practice, and Realization of the Pure Land Way*). Shinran interpreted *mappo* very individually and existentially, not so much in a historical sense, deeply seeing *mappo* in himself and seeing a person's nature through seeing his own.[13] Shinran took the message of *mappo* subjectively and existentially into himself: he saw that *mappo* was none other than Shinran himself, who was religiously degenerated and far from enlightenment.[14] At the age of eighty-eight, Shinran continued to reflect himself, as seen in the *Shozomatu wasan* (*Pure Land Hymns of the Right, Semblance, and Last Dharma-Ages*),

Although I take refuge in the true Pure Land way,
It is hard to have a true and sincere mind.

---

zazen practice in this defiled world of last Dharma, "Although edifiers make names and forms a question, in the real teaching of Mahayana Buddhism there is no distinction between the right, semblance and last Dharma-ages. Everyone is said to be able to attain the way when one practices." *Dogen-zenji zenshu* (hereafter abbreviated *DZZ*) 1, ed. Doshu Okubo (Tokyo: Chikuma Shobo, 1989), p. 742.

Hee-Jin Kim says that Dogen rejected the doctrine of *mappo* because of "a faulty interpretation of man's nature and the historical process. Dogen found the criterion of truth and authenticity in a special quality of experience, or more accurately, of activity, which is epitomized in the samadhi of self-fulfilling activity. This idea of the samadhi of self-fulfilling activity is inseparable from Dogen's other fundamental thoughts," such as *shusho itto* ("practice and authentication are one"), *shinjin datsuraku* (casting-off of body-mind"), *hishiryo* ("non-thought") and so on. Hee-Jin Kim, *Dogen Kigen—Mystical Realist* (Tucson: The University of Arizona Press, 1980), p. 68.

Carl Bielefeldt says, "Dogen did not resort to the doctrine of the last age: as we have seen, he had little use even for the mild historical relativism implicit in the creation of new forms of Ch'an in the Sung. For him, there was no compromise with history. There was only the one dharma—true for Sakyamuni and true for all time and all men. Hence, while Dogen certainly shared the concern for the historical experience of the contemporary practitioner, the issue for him was not which form of Buddhism constitutes the right vehicle for the present age but whether the one, true vehicle is actually accessible to this age. The answer, of course, was yes." Carl Bielefeldt, *Dogen's Manuals of Zen Meditation* (Berkeley: University of California Press, 1988), p. 167.

[13] Shinran stated in the third volume (revealing "the True Shinjin of the Pure Land Way") of the *Kyogyoshinsho*: "Since the beginningless past, the multitudes of beings have been transmigrating in the ocean of ignorance, sinking aimlessly in the cycle of all forms of existence and bound to the cycle of all forms of pain; accordingly, they lack the entrusting that is pure. In the manner of their existence, they have no entrusting that is true and real. Hence, it is difficult for them to encounter the unexcelled virtues, difficult to realize the supreme, pure shinjin. In all small and foolish beings, at all times, thoughts of greed and desire incessantly defile any goodness of heart; thoughts of anger and hatred constantly consume the dharma-treasure." *CWS* 1, p. 98. *SSZ* 2, p. 62.

[14] A well-known verse of Shinran's self-reflection and repentance again in the third volume of the *Kyogyoshinsho* reads, "I know truly how grievous it is that I, Gutoku Shinran, am sinking in an immense ocean of desires and attachments and am lost in vast mountains of fame and advantage, so that I rejoice not at all at entering the stage of the truly settled, and feel no happiness at coming nearer the realization of true enlightenment. How ugly it is! How wretched!" *CWS* 1, p. 125. *SSZ* 2, p. 80.

This self is false and insincere;
I completely lack a pure mind.

Each of us, in outward bearing,
Makes a show of being wise, good, and dedicated;
But so great are our greed, anger, perversity, and deceit,
That we are filled with all forms of malice and cunning.

Extremely difficult is it to put an end to our evil nature;
The mind is like a venomous snake or scorpion.
Our performance of good acts is also poisoned;
Hence, it is called false and empty practice.[15]

It can be said that these verses show Shinran's introspection into his own nature, as he saw the doctrine of *mappo* within himself and realizes that such a nature was not necessarily caused by the arrival of the *mappo* age. He was convinced that a person or a sentient being, by nature, was bound by one's self-centered mode of existence (ignorance), causing all kinds of *duhkha* or sufferings in *samsara*. Shinran thus saw, "Since the beginningless past, the multitudes of beings have been transmigrating in the ocean of ignorance, sinking aimlessly in the cycle of all forms of existence and bound to the cycle of all forms of pain; accordingly, they lack the entrusting that is pure. In the manner of their existence, they have no entrusting that is true and real."[16] Shinran was driven to despair when he became fully aware of such a state of a person's nature including his own. Through this thorough awareness of his hopeless nature, however, Shinran came to realize the Vow of Amida Buddha. In the *Shozomatu wasan*, he continued,

Although I am without shame and self-reproach
And lack a mind of truth and sincerity,
Because the Name is directed by Amida,
Its virtues fill the ten quarters.[17]

Shinran's self-reflection and introspection in a religiously ultimate sense, which made him become aware of the Vow, was made to come about through having encountered Amida's

---

[15] *CWS* 1, p. 421. *SSZ* 2, p. 527.
[16] *CWS* 1, p. 98. *SSZ* 2, p. 62.
[17] *CWS* 1, p. 421. *SSZ* 2, p. 527.

"directed" merit-transference (*eko*) through the Name (*myogo*). All the more because we are incapable of becoming awakened through our own self-endeavors mixed with falsity as we lack the true and real mind, has Amida made Vows. This existential self-negation of Shinran to the utmost limit simultaneously coincides with his becoming aware of the virtues (*kudoku*) partaken in him as well as in the whole universe through the Name.

This realization or religious experience[18] is made up of two respective qualities taking place at the same time, known as *nishu jinshin* ("two kinds of profound realizations").[19] We would now continue our discourse to the pursuit of "becoming awakened in the here and now," as we examine the role and its importance of realization in relation to the interformation of time and space.

THE TIME-SPACE INTERFORMATION

The notion of time, when divided into three segments such as the past, the present and the future, is vague and illusory. The past, the present and the future are simply concepts that we have invented or created for the sake of our own convenience. They are not able to exist respectively and individually, nor can they stand independently. For things to exist or stand, space is also of vital necessity, being mutually interfused with time. The time we experience is called "now," in which the continuous transformation of the present including- and limited by-both the past and the future reveals itself in "here." The past, the present and the future are all interdependently interfused into "now," and we live in the place called "here," realizing and activating space, thereby distinctively living this "here and now" of each occasion. Time and space thus cannot be separated from each other, and we always live in the here and now, the

---

[18] According to an analysis by William James, Shinran can be categorized as a person of "the twice-born" or "the sick soul" type, but certainly not of "the once-born" or "the healthy-mindedness" type. William James, *The Varieties of Religious Experience* (New York: Penguin Books USA Inc., 1982).

[19] One is the awareness of sentient beings (*ki no jinshin*) or the "profound realization of oneself as incapable of enlightenment" and the other is the awareness of Dharma (*ho no jinshin*) or the "profound realization of Amida's working partaken in one." The profound realization of oneself as incapable of enlightenment is to "believe deeply and decidedly that you are a foolish being of karmic evil caught in birth-and-death, ever sinking and ever wandering in transmigration from innumerable kalpas in the past, with never a condition that would lead to emancipation." The profound realization of Amida's working partaken in one is to "believe deeply and decidedly that Amida Buddha's Forty-eight Vows grasp sentient beings, and that allowing yourself to be carried by the power of the Vow without any doubt or apprehension, you will attain birth." CWS 1, p. 85. SSZ 2, p. 52.

The theory of *nishu jinshin* presented by Shinran is originally taken from Shan-tao's *Kangyosho* (*Commentary on the Contemplation Sutra*), *SSZ* 1, p. 534.

very place where religious experience takes place.[20]

Understanding time as "now" in which the whole past and the whole future are interfused in the present is existential. The notion or word of "now" is also a concept; however, seeing time in terms of the now allows us to have a more dynamic understanding of our experience than viewing the past, the present and the future respectively divided and separated. In this way of interpreting time, we see that we are living in the continuous transformation of the present, as we are "limited by the past" (*kako kara no gentei*) and "limited by the future" (*mirai kara no gentei*) simultaneously.[21]

"Limited-by-the past" defines that we are in existence now because of various events and factors, direct and indirect, that we have had and received up to now. Limited here means that our way of thinking, for example, is greatly influenced by the people from whom we have learned and studied and through what process we have come to learn or study. Our way of thinking is, to a great extent, limited or determined by the past—the books we have read, the places where we have learned, people we have met, the conditions under which we have studied, our former emotions and feelings and so on. "Limited-by-the future" defines that we are in existence now because of various events and factors, direct and indirect, that we will have and receive from now on. We are living in the now, as things that haven't actually taken place yet are affecting and limiting us. As our present actions are greatly influenced and determined not only by the past but also by the future at the same time, we are living in the continuous transformation of the present. And things then come into being along with our "realization." Realization makes a big difference as to how we perceive and experience things around us.

Things that took place in the past cannot be changed, for they are accomplished facts; yet the meaning for us of past things can change, or the way we see or accept them can change,

---

[20] Dogen in "Uji" ("Being Time") expounds being (or existence) and time, and the unity and inseparability of both. We are able to find some resemblance between Dogen's notion of being-time and that of time-space to be discussed in this paper. This paper does not directly refers to Dogen's view of being-time; yet we see the same observation of religious experience in terms of taking place in the here and now.

Thomas Cleary says, "this essay on being time is another of Dogen's versatile and lucid expressions of his more encompassing theme: the unity of being, and the misdirection of seeking or thinking of enlightenment outside the here and now." Thomas Cleary, *Shobogenzo: Zen Essays by Dogen* (Honolulu: University of Hawaii Press, 1991), p. 103.

[21] My phrases, "limited-by-the past" and "limited-by-the future," were inspired by Enji Nakayama's *Bukkyo to Nishida-Tanabe tetsugaku* [*Buddhim and Nishida and Tanabe Philosophies*] (Kyoto: Hyakkaen, 1979), pp. 3-87.

even though they were once painful and hateful. This change in the way we accept the bad past happens when the future gets bright or is foreseeing in the now, in which we are revived and strengthened: we are able to overcome ill incidents that occurred in the past or things that we hated about ourselves. It is a matter of realization or awakening by which the way of seeing things in the world greatly changes. The term *buddha* in Sanskrit is the past passive participle of the root verb *√budh*, which means "to awake, or to become aware of." Therefore, *buddha* means "awakened, enlightened or realized," and in noun form, "awakened one, enlightened one or realized one." Shin Buddhism tends to use the translation of "awakening" to describe shinjin, while Zen Buddhism uses "enlightenment" for satori.

When the future is dark or not clear, we actually experience its darkness now. There is no progress if we hold on to a yearning for the old days or blame some past bad incidents claiming that they are causing us misery. We blame others. We cannot afford to recognize, accept or forgive others. There is no space to live in as we cannot breathe. There is no room for our mind to be free. Self-destruction takes place. If we see that the future gets bright, however, we are able to endure the hardship that is taking place now. Thus, "limited-by-the future" plays an important role in the now. Paul Tillich, the German theologian, says in *The Eternal Now*,

> The image of the future produces contrasting feeling in man. The expectation of the future gives one a feeling of joy. It is a great thing to have a future in which one can actualize one's possibilities, in which one can experience the abundance of life, in which one can create something new—be it new work, a new living being, a new way of life, or the regeneration of one's own being.[22]

The future plays a very important role in determining and affecting our existence in the now. It is needless to say that things that happened in the past are greatly influencing us in the now; however, as we have discussed, the future that is affecting us in the present is also of vital, desperate and crucial importance. In Shin Buddhism, the past karma (*shukugo*) has been expounded when we talk about past actions or deeds that have made our existence very possible. In the well-known Preface of the *Kyogyoshinsho*, Shinran says,

> If you should come to realize this practice and shinjin, rejoice at the conditions from the distant past that have brought it about.[23]

---

[22] Paul Tillich, *The Eternal Now* (New York: Charles Scribner's Sons, 1963), pp. 123-4.
[23] *CWS* 1, p. 4. *SSZ* 2, p. 1.

Shinran is saying that it is difficult to realize shinjin, but that once one attains it, one should appreciate the distant past (*toku shukuen*), which has brought about one's realization of shinjin through the working of Amida's Vow. The distant past refers to literally the Vow that has been working upon us regardless of our consciousness or unconsciousness in the past up to now. But the distant past should not be restricted only to the past. It should include and embrace the future to come. In Chapter I of the *Tannisho* (*A Record in Lament of Divergences*), Shinran says,

> "Saved by the inconceivable working of Amida's Vow, I shall realize birth in the Pure Land": the moment you entrust yourself thus to the Vow, so that the mind set upon saying the nembutsu arises within you, you are immediately brought to share in the benefit of being grasped by Amida, never to be abandoned.[24]

"The moment you entrust yourself thus to the Vow, so that...immediately" (*okoru toki sunawachi*) refers to the moment of Shinran's realization of the working of Amida's Vow in the very here and now, in which all the past, the present and the future are incorporated together. The benefit of "being grasped by Amida, never to be abandoned" (*sesshu fusha*) shows that Shinran's experience is taking place in the now as "limited-by-the future," the conviction that he will continue to be grasped and will never be abandoned by Amida in the future, which includes *ojo* or birth in the Pure Land, sustained by the past and the future and revealing in the present. The distant past (*toku shukuen*) in the Preface of the *Kyogyoshinsho* should not be restricted only to the past but include and embrace the future.

It is indeed precious to encounter a good person in life. The good person can be anyone who understands, accepts, empathizes and forgives us. We can be good friends or on goods terms with each other when things are going well between or among us in our life. When things do not go the way we want them to be, however, we come to get conflicted and sometimes separated. We can be good friends, not because our innate nature is good, but because of the conditions (*en* in Japanese) that surround us. We get conflicted and separated not because our nature is bad, but because the conditions urge us to act that way. Whether our nature is good or bad does not necessarily determine our actions. We cannot even tell what is good or bad in terms of defining our nature according to Shinran. He says on this matter in the *Tannisho*,

I know nothing at all of good or evil. For if I could know thoroughly, as Amida

---

[24] *CWS* 1, p. 661. *SSZ* 2, p. 773.

> Tathagata knows, that an act was good, then I would know good. If I could know thoroughly, as the Tathagata knows, that an act was evil, then I would know evil.[25]

Being able to be good or being bad owes much to the conditions or depends on our understanding and evaluation of the matters concerned. As for the role of the function and operation of the conditions, we recall another well-known discourse in the *Tannisho*. In Chapter 13, Shinran asked, "Yuien-bo, do you accept all that I say?" Yuien said without hesitation, "Yes, I do." Shinran repeated the same question, and Yuien humbly and reverently confirmed himself. Shinran then said, "Now, I want you to kill a thousand people. If you do, you will definitely attain birth." Yuien responded, "Though you instruct me thus, I'm afraid it is not in my power to kill even one person." Shinran immediately said to Yuien, "Then why did you say that you would follow whatever I told you?" Shinran went on,

> By this you should realize that if we could always act as we wished, then when I told you to kill a thousand people in order to attain birth, you should have immediately done so. But since you lack the karmic cause inducing you to kill even a single person, you do not kill. It is not that you do not kill because your heart is good. In the same way, a person may wish not to harm anyone and yet end up killing a hundred or a thousand people.[26]

Shinran is talking about the karmic cause that bounds us and limits our actions or deeds in an ultimately common and cosmic sense. Yet he expounds the inconceivable working or merit-transference of Amida's Vow, the virtue of which is beyond description, beyond explanation and beyond conceivability (*fukasho fukasetsu fukashigi* in Japanese). This realization of Shinran may differ from that of Dogen in the sense that Shinran understands his realization is not his but Amida's, as we have read in the *Shozomatsu wasan* that, since he lacks the true and real mind, Amida partakes Amida's true and real mind in Shinran, and its virtues are filled with throughout the ten quarters.[27]

---

[25] *CWS* 1, p. 679. *SSZ* 2, p. 792.

[26] *CWS* 1, p. 671. *SSZ* 2, p. 783.

[27] Dogen's enlightenment does not resort to *Sambhogakaya* or the Fulfilled-body of the Buddha such as Amida Buddha.

Shinran in the *Yuishinsho mon'i* (*Notes on 'Essentials of Faith Alone'*) says, "For this reason there are two kinds of dharma-body with regard to the Buddha. The first is called dharma-body as suchness and the second, dharma-body as compassionate means. Dharma-body as suchness has neither color nor form; thus, the mind cannot grasp it nor words describe it. From this oneness was manifested form, called dharma-body as compassionate means. Taking this form, the Buddha announced the name Bhiksu Dharmakara and established the Forty-eight great Vows that surpass conceptual understanding. Among these Vows are the Primal Vow of immeasurable light and the universal Vow of immeasurable life, and to the form manifesting

THE HERE AND NOW

"Now" is the continuous transformation of the present together with the past and the future, and one continuously casts off each moment of one's having become realized, or, as Dogen puts it, "casting-off of body-mind" (*shinjin datsuraku*). One's experiencing things is transforming moment by moment and dynamically, being both active and passive at the same time: one is not causing one's own enlightenment by oneself, but one has been allowed, being limited, to come into being and become realized by the whole existence of the past, the present and the future. With realization, one then comes to learn that all things in the universe have been concerned with the self and have worked upon the self. Dogen says in "Genjokoan" ("Things as They Are, Manifested in the Present"), now a part of his major work, the *Shobogenzo* (*Eye-Store-house of the Right Dharma*),

> Delusion is one's practicing and authenticating myriad things while carrying one's self to them. Enlightenment is myriad things' naturally practicing and authenticating the self.[28]

In the opening of "Genjokoan," Dogen says,

> On the occasion when all things are present as they are, there are delusion-enlightenment, practice, birth, death, Buddhas, and sentient beings.
>
> On the occasion when myriad things are empty, there is no delusion or enlightenment, no Buddhas or sentient beings, no birth or extinction.[29]

"On the occasion when," which is a translation of *jisetsu*, here does not refer to merely time as to when but, should involve space or the place in which religious experience takes place.

We do experience and realize things in the here and now. Dogen concludes "Genjokoan" with the story of Zen master Pao-ch'e of Ma-ku shan[30] and talks about the

---

these two Vows Bodhisattva Vasubandhu gave the title, "Tathagata of unhindered light filling the ten quarters." This Tathagata has fulfilled the Vows, which are the cause of that Buddhahood, and thus is called "Tathagata of the fulfilled body." This is none other than Amida Tathagata." *CWS* 1, p.461. *SSZ* 2, pp. 630-1.

As for shinjin and satori, however, they are purely religious experience taking place within oneself and are made possible and accessible through the whole universe spontaneously with realization.

[28] *DZZ* 1, p.7.

[29] *DZZ* 1, p.7.

[30] The story goes:

When Zen master Pao-che of Ma-ku shan was fanning himself, a monk approached and asked, "The nature of wind is permanent and reaches everywhere. Why do you still use a fan?" The Zen master answered, "Although you only know the fact that the nature of wind is permanent, you do not understand the fact that

important relationship between practice and enlightenment, as often seen in his teaching of *shusho-itto* ("practice and enlightenment are one"). Practice plays an important and crucial role in one's becoming realized or enlightened, but the moment of authentication of enlightenment does not come sequentially after one's finishing practice. One is enlightened just while the person is practicing, one's body-mind being cast off continuously. One is a seated-Buddha (*zabutsu*) as one is in seated-meditation (*zazen*). Practice simultaneously leads one to enlightenment, and practice is the manifestation of enlightenment in a purely experienced sense. The very moment of practicing is the time and occasion (*jisetsu*) of authenticating the self, and it is taking place in the very here and now. Ultimately speaking, authentication reveals itself, as brought about through realization, in one's daily activities called *gyojuzaga* ("walking, standing, sitting and lying"). Thus, Zen master Pao-che of Ma-ku-shan only fanned himself.

Observing the way things exist, we see the existence contains such two contradictory phases as cosmos and chaos: in other words, all things in nature come into being as they envelop simultaneously two different modes of being—order (cosmos) and disorder (chaos). From an individual's point of view, to be born into the world means to come into existence, and death means extinction of the self. Seeing the way of the whole existence, we come to realize that being or becoming has both life and death. Birth-and-death is the fundamental norm of existence, called *samsara*. If we interpret life and death as totally different modes of existence, then we often see things in terms of chaos or disorder. This is the observation of a phenomenon or an event in terms of a "spot" or "point" of time-space. We usually live in such a world. However, when we see that life is supported by death and death is sustained by life—viewing things in a "line" or a continuum of spots or points—, then we come to realize that the universe is functioning according to a law in terms of cosmos or order consequently. In the world containing two opposite norms such as cosmos, or order, and chaos, or disorder, we are living and dying simultaneously.

---

there is no place where it does not go." The monk said, "What is the fact of 'there is no place where it does not go'?" The master only fanned himself. The monk reverently bowed. *DZZ* 1, p. 10.

The nature of wind refers to original enlightenment (*hongaku*) and fanning is practice (*gyo*). Without using a fan there is no wind, although the nature of wind is permanent and reaches everywhere. Without practice there is no authentication or enlightenment although enlightenment is everywhere and anywhere.

Taking a look at nature itself, we understand that things totally opposite to each other can be seen as having two contrary phases at the same time. Things in nature can be viewed as something beautiful or ugly. Nature nourishes and destroys us at the same time. Nature, being in an order or cosmos, can be a chaos or disorder when it turns out to be inconvenient or dangerous to us. Natural phenomena such as typhoons, snow slides and volcanic eruptions, when they cause us disaster, are chaotic. That is, disorder or chaos simply refers to a situation where things appear to be chaotic to us when they do not go the way we want them to be; but nature is order itself in accord with the law. Without typhoons, snow slides and volcanic eruptions, the ecology of this planet cannot be in existence according to the Order including both order and disorder. Creation and destruction seem to be opposite phenomena, but the Order contains both. If we observe a phenomenon or an event in terms of a "spot" or "point" of time-space, things often seem to be contradictory or inconsistent, but the Order contains polarity.

This way of existence having spontaneously two opposite features can be applied to the whole universe, an individual, a cell or even fractionated or subdivided pieces of an atom. The universe we know of through science originated or formed from a small piece of mass by a "big bang." Macrocosmically speaking, the universe endlessly stretches out outwardly and, microcosmically speaking, the universe can be unlimitedly divided or subdivided into smaller sets or units, an atom being able to be disunited limitlessly. Each set or unit has the same arrangement for existence at any level of its certain phase or stage, as things go and return at the same time not in a straight line but in a spiral, in which all are interdependently interrelated and mutually interfused. It can be said, therefore, that any piece as a unit in the universe includes the whole. In "Genjokoan," Dogen says,

> Man's attaining enlightenment is like the moon's dwelling in water. The moon does not get wet, and the water does not get broken. Although the moon emits a wide and large light, it dwells in a small portion of water.[31]

The way of the piece as a unit throughout the universe which conceives the whole within itself is very similar to that of the time concept expounded as the now, which refers to the continuous transformation of the present with both the past and the future. Things then come into being when our realization or recognition comes about. With realization, we experience things and the universe in the here and now. In the doctrine of the Tendai sect, this is called

[31] *DZZ* 1, p, 8.

ichinen sanzen ("three thousand worlds are in one thought"), which implies that the whole universe with its three thousand modes of existence is contained in a single thought or in each individual thing. *Sanzen* or "three thousands" is short for *sanzen daisen sekai* ("three-thousand-great-thousand worlds"), which refers to the whole universe.

Viewing a phenomenon or an event in terms of a point of time-space separately, we often find a contradiction or inconsistency among our words and deeds, for we interpret and compare them taking place at respectively different times and places. When we come to realize things in a "line" not in spots or points, the line begins to activate itself like cell division, including genes. Things come to make sense as we come to see the meaning of spots or points as a whole. This can be seen in Shinran's awareness of the distant past that brings shinjin about. Through struggles and troubles, religiously in case of Shinran, one comes to see the meaning of the Vow as the whole.

A line splits into two lines and then three lines. From an individual and personal experience, we become free from a closed or blockaded world bound by inconsistent spots and get led to a dynamic opened world. When three lines are crossed on a plane, space (a triangle) emerges. When the lines freely evolve vertically and horizontally, three-dimensional space emerges, where we can breathe and live. According to the relativity theory of modern physics, time is the fourth dimension. When four lines are crossed, a tetragon emerges, and five lines, a pentagon. With an infinite number of lines, a circle emerges where there is no corner. The circle is a line without corner and often symbolizes enlightenment. We yet observe and believe that space exists in the same way to us all in the first place. Without our realization of its profundity space does not reveal itself as space and does not have much value or meaning to us. With realization one comes to know that all things manifest as they are in the now (*genjokoan*). But we often see things according to our selfish wants and evaluate them with a partial view. As far as we observe a world in terms of broken spots or points, we do not see the universe, opened and unbound. Our heart/mind and recognition are closed in, and there is no sorrow and joy in there. With realization, space emerges, light is shed and we feel sorrow and joy, as we see the trees, the sky and the wind.[32]

---

[32] John Lennon, the late leader of the Beatles writes in *Oh My Love*, "Oh my love for the first time in my life, my eyes are wide open. Oh my lover for the first time in my life, my eyes can see. I see the wind, oh I see the trees. Everything is clear in my heart. I see the clouds, oh I see the sky. Everything is clear in our world. Oh my love for the first time in my life, my mind is wide open. Oh my lover for the first time in my life, my mind can feel. I feel sorrow, oh I feel dreams. Everything is clear in my heart. I feel life, oh I feel love. Everything is clear in our world." Lennon says, "I feel sorrow, oh I feel dreams." This song or

In the doctrine or philosophy of Pure Land Buddhism, the light that is shed or shines in the space of our heart/mind is called *Amitabha*. *A* for *a-mita* is a negative prefix and *mita* is the past passive participle conjugated from the root verb √mi, which means to "measure" (*mita* therefore means measured); so *amita* means "un-measured or immeasurable." *Abha* means light, so *Amitabha* means "Immeasurable Light." Immeasurable Light then refers to the light that dispels the darkness of our ignorant heart/mind in which Wisdom (*prajna*) partakes. Shinran says in "Hymns of the Gatha Praising Amida Buddha" of the *Jodo-wasan* (*Hymns of the Pure Land*),

Amida has passed through ten kalpas now
Since realizing Buddhahood;
Dharma-body's wheel of light is without bound,
Shining on the blind and ignorant of the world.

The light of wisdom exceeds all measure,
And every finite living being
Receives this illumination that is like the dawn,
So take refuge in Amida, the true and real light.[33]

Wisdom is what is needed for becoming enlightened, which is the light that shines into the space of our ignorant heart/mind. We are able to see then the bright and foreseeing future. We get encouraged to continue to live as we find the future active and dynamic in the now, which enables us to get out of a closed or isolated world, take action, move on and live the now. This is the transformation of space into time.

Time, as we examined previously, does not refer to the past, the present and the future divided separately or independently. It signifies the now, in which the continuous transformation of the present including the past and the future reveals itself—time as the "continuum of non-continuity" (*hirenzoku no renzoku*). This transformation is taking place in

---

lyrics must have been written after he had overcome difficulties and distressed circumstances and discovered the future in the now.

Lennon, after having being inspirited by Basho Matsuo, it is said, he wrote *Across the Universe*, saying, "...Pools of sorrow, waves of joy are drifting through my opened mind, possessing and caressing me....Sounds of laughter, shades of earth are ringing through my opened views, inciting and inviting me. Limitless, undying love which shines around me like a million suns, and it calls me on and on across the universe...." Lennon's opened world is filled with "pools of sorrow, waves of joy" and "sounds of laughter, shades of earth," and this can be found in many of his other works.

[33] *CWS* 1, p. 325. *SSZ* 2, p. 486.

this very place. This time is called *Amitayus* in Pure Land Buddhism. As in *Amitabha*, *amita* means "un-measured or immeasurable." *Ayus* means life, so *Amitayus* means "Immeasurable Life." Immeasurable Life then refers to the ways of our "living" as we aspire for the Vow through realizing time as the now—we always live in the now.[34] While *Amitabha* is Wisdom, *Amitayus* is Compassion (*karuna* in Sanskrit). *Amitabha* and *Amitayus* are two qualities of Amida Buddha—Mahasthamaprapta represents *Amitabha* while Avalokitesvara represents *Amitayus*. When Wisdom is partaken in us with realization of Amida's Vow, the heart/mind arises with which we then (*soku* in Japanese which has a nuance of immediate or spontaneous) aspire for sharing that Wisdom with others. Compassion means our acts of benefiting others in such a way. Just as time and space are interfused and coincide with each other, Wisdom and Compassion coincide with each other and are two qualities or features of "realization"—shinjin or satori, which should be referred to as an essence of the Bodhisattva ideal.

We generally think that time and space are in existence in the same way to everyone, but this view seems to be mistaken, as examined before. Things are present as they are, but the way we observe them greatly varies depending on the conditions. Time and space unfold according to the degree of our respective recognition or realization; they are sometimes closed, while they are at other times boundlessly open. The ways we experience time and space differ a lot from one another. Without realization, time freezes and space does not activate. The transformation of time into space as well as the transformation of space into time does not take place smoothly.

In order to further elaborate the implication and meaning of enlightenment in the here and now, we would now like to read and contemplate on the opening message of Dogen's "Genjokoan" in the *Shobogenzo*.

---

[34] According to Dogen, time is light. He says in "Uji," "What is means by 'being-time' is that time is already being, and that being is all time. The sixteen foot tall golden body [of the Buddha] is time: since it is time, it has the adornments and light of time." *DZZ*, p, 189.

It is interesting to see that Dogen views time as light in "Uji," while *Amitabha* or Immeasurable Light has been discussed to be referred to as Wisdom in space, in which light is shed through, through into one's ignorant heart/mind. According to the relativity theory of physics, time is the fourth dimension closely linked with three dimensional space in terms of a space-time continuum, which refers to the mode of the universe. Dogen, not resorting to the Buddha as *Sambhoga-kaya* or the Fulfilled-body such as Amida Buddha having two qualities (*Amitabha* and *Amitayus*) as discussed, elaborates the sixteen foot tall golden body of the Buddha who has the adornments and light of time. The notion of Dogen's "being" can be compared to three dimensional space seen in a space-time continuum of the relativity theory, and that of his "time" can be compared to time as the fourth dimension along with three dimensional space of physics.

FLOWERS YET FALL AS PEOPLE LAMENT

It is commonly understood that the original of "Genjokoan" is very difficult to read or understand, though the work is short. This can be said with Dogen's writings in general. Yet students of Zen are greatly attracted to Dogen, drawn into his world of mystique and fascinated by the profundity and artistic form of his work. In the "Genjokoan," he uses a number of metaphors such as moon and water, boat and shore, firewood and ashes, fish and birds, water and sky, and so on. His expression is very poetic and rhetorical. He freely twists the words, yet these twists mean a lot. Some of his sentences are not clear at all in subject or object. Sometimes, Dogen seems to be playing with words as he juggles them. He also creates new words, basically writing in classical Japanese but inventing many new expressions—often combining Chinese and Japanese words. So his use of classical Japanese is his own and not the standard usage. Therefore, of the several English translations of Dogen's work available now, each one is characteristically different. This can be said not only of the translation from the original classical Japanese into English, but also of the translation from the original into modern Japanese.[35] Understanding the difficulty of the translation and comprehension of the text, we would try to elaborate the opening message of "Genjokoan" (the first four key sentences), which, it can be said, contains a core frame of the whole work.

> On the occasion when all things are present as they are, there are delusion-enlightenment, practice, birth, death, Buddhas, and sentient beings.
>
> On the occasion when myriad things are empty, there is no delusion or enlightenment, no Buddhas or sentient beings, no birth or extinction.
>
> Since the Buddha Way originally transcends the idea of many or few, there are birth-extinction, delusion-enlightenment, and sentient beings-Buddhas.
>
> Though this is so, flowers yet fall as people lament, and weeds only grow while people loathe them.[36]

Dogen begins the work by introducing the common mode of existence and suggesting the non-discrimination of existence. If one sees things as they are in a dynamic sense, things appear as one sees; there are both delusion and enlightenment depending on realization, practice, birth, death, Buddhas, sentient beings, etc. In the second sentence, Dogen introduces the static aspect of things—emptiness (*sunyata*), which one realizes through one's attainment of *wareniarazaru*

---

[35] See Hoyu Ishida, "'Genjokoan': Some Literary and Interpretative Problems of Its Translation" in *Scientific Reports of Shiga Prefectural Junior College,* Vol. 34, (Hikone: SPJC, 1988), pp. 77-88.

[36] *DZZ* 1, p, 7.

(literally meaning "without self") or viewing that "things are empty." When one becomes "self-less," one authenticates nothingness or emptiness. Thus, if one sees myriad things from non-self or *sunyata*, then there is no even non-discrimination: "there is no delusion or enlightenment, no Buddhas or sentient beings, no birth or extinction." In this manner, Dogen brings readers from a dynamic aspect of the way things are to a static one in comparison.

In the third sentence, Dogen comes back to the dynamic world halfway by affirming things but in terms of transcendence—being beyond the idea of many or few, or discrimination. There are just "birth-extinction, delusion-enlightenment, and sentient beings-Buddhas." Hence, in the fourth sentence after going through steps, one, two and three, he comes back to this very moment of the human or mundane world in which we live with love, hate, attachment, joy, sorrow, weeds to spring up. Dogen suggests that there is no enlightenment apart from this world of sorrow and joy, and that this very place is where one practices and authenticates oneself in daily activities. When one becomes realized, one comes further to see people's sorrow and grief, as "flower yet fall as people lament." The first four sentences interrelatedly express the core message of "Genjokoan."

The structure of these sentences is reminiscent of a well-known phrase of the *Prajnaparamita-hrdaya-sutra* (the Heart Sutra), which says in Sanskrit *Yadrupamsasunyata-yasunyatatadrupam* ("That which is form is empty. That which is empty is form,") or in Japanese *shiki-soku-ze-ku ku-soku-ze-shiki* ("Form is then emptiness, and emptiness is then form.") The first sentence of "Genjikoan" can be interpreted as representing form or matter (*rupa*) or being; the second, emptiness (*sunyata*); the third, emptiness in terms of transcendence on the way back to the here; and the fourth, form again—the here and now where we share the whole in sorrow and joy.

In Buddhism, "delusion" or "illusion" (*mayoi* in Japanese) generally refers to an un-enlightened state of one's heart/mind or one's being ignorant about the truth. In an existential or religious sense, delusion is the innate mode of oneself: it is the cause of one's ***duhkha*** as well as one's life itself. We are not, therefore, able to get rid of delusion, yet we are able to come to realize such an inborn state of our heart/mind being delusory or illusory. Delusion then means the state of our heart/mind that we are not aware of our being deluded or illusory.[37]

---

[37] *Dogen says in "Genjokoan," "Those who greatly become aware of delusion are Buddhas. Those who are greatly lost in enlightenment are sentient beings. Moreover, there are persons who attain enlightenment upon enlightenment and there are also persons who are deluded in their delusion. When Buddhas are truly Buddhas, they do not need to realize that they themselves are Buddhas. Yet, they are*

Hence, to come to realize that we are deluded is crucially important and is brought about from the experience of coming to encounter something that is not delusory or illusory. If we turn on a flashlight in the light, for instance, we cannot see its light. But if we flash a torch in the darkness, it shines a spot. Likewise, if we cannot see that our very heart/mind is the darkness itself, we cannot realize the light. Not being able to see our own delusion or illusion harms both others and ourselves. But if we are able to recognize the darkness of our own hearts and minds and to face it without evading from that reality, we will see the illumination of the flashlight. This illumination then overtakes us and we become illuminated: we are free from delusion being in delusion simultaneously, as we are shed through light.

We then come to understand ourselves more and see others who are in *duhkha* or suffering with sympathy and sometimes with empathy. Things that we thought unimportant or insignificant before come to make more sense, and all things in the world throughout ten quarters turn into light, as we have read in Shinran's *Jodo wasan*. It can be said that when we come to realize that we are really deluded or illusory we come to become free, in a sense, from delusion or illusion; but our mundane and daily sufferings or problems, on the other hand, increase and can be seen much clearer.[38] We come to see the sufferings and contradictions of not only ourselves but also others, and others' sufferings concern us even more so as if they are our own sufferings. We begin to see the universe as a whole. This is a shift from benefiting-oneself to benefiting-others, which, in an ultimate sense, take place simultaneously, and it is not too much to say that the zest or the real taste of life starts with this.

Dogen says that, though we come to become realized, "flowers yet fall as people lament, and weeds only grow while people loathe them" in the fourth sentence at the beginning of "Genjokoan." We actually do live in this mundane world of *samsara*, in which we are filled with *duhkha* or sufferings. Dogen is saying that we are still attached to flowers because we lament when they fall and to weeds because we do not want them to grow. It seems that we are not yet free from the attachment, which implies our un-enlightened state of mind. However, when we look at the way we are, we are really living in the world of attachment and anger even

---

authenticating Buddhahood." DZZ 1, p. 7.

[38] Shinran says in the *Ichinen tanen mon'i* (*Notes on Once-Calling and Many-Calling*) at the age of 85, "We are full of ignorance and blind passion. Our desires are countless, and anger, wrath, jealousy, and envy are overwhelming, arising without pause; to the very last moment of life they do not cease, or disappear, or exhaust themselves." *CWS* 1, p. 488. *SSZ* 2, p. 618.

after realization. Or it should be said that realization makes one to become aware of more of our attachment and anger. In the morning, we may feel well or happy, but in the evening that good or happy feeling may change into a sad or unhappy one, depending on the conditions. If conditions change, our way of feeling changes. We are still living in the six realms of "hell, hungry ghosts, beasts, fighting spirits, humans and heavenly beings." We become aware that we do really live in the six realms—*samsara*.

Some may insist that becoming enlightened should reveal outside these six realms, enlightenment being out there. But where or what is enlightenment being out there then? Is there something special or unsurpassed beyond this world of sorrow and joy? Is there any other place but this very place where we are living and sharing the whole universe with each other? Our friends die, and then we cry. Flowers fall, and then we lament. We meet our enemies, and then we feel uncomfortable. Weeds only grow, and then we loathe them. What is, in an ultimate sense, wrong with this? And what more can we have and expect? Sorrow and joy are the common grounds of all beings and the proof that we are living and being lived in the here and now. *Duhkha* or sufferings are inevitable in life, and realization of life as *duhkah* leads us to an understanding of the Bodhisattva ideal. Where there is no *duhkha*, there is no compassion. The opening message of "Genjokoan"—"flowers yet fall as people lament, and weeds only grow while people loathe them" —is very powerful and striking that we are deeply moved and driven into the world of "sharing reality" and "helping others" as we reflect upon ourselves. Though Dogen does not explicitly spell it out, he means it to the reader, and encourages us to try to live for the sake of others in the world of sorrow and joy, according to our capacity or capability, as we understand its limited mode of being and realize, though a very little, the Bodhisattva ideal.

Dogen's theory of *shusho itto* ("practice and authentication are one") means that enlightenment does not come sequentially after one's finishing practice. One is enlightened as one is in practice. Practice simultaneously leads to enlightenment and the manifestation of enlightenment itself. And Enlightenment reveals itself in one's daily activities called *gyojuzaga*, as discussed before. In this manner, the *shusho itto* theory points out the way of one's experiencing authentication through becoming enlightened. Enlightenment or satori is surely one's personal, religious experience, but it does not or cannot belong to the individual alone. Buddha-Dharma has been taught and applied to the needs of people over the centuries. One starts with seeking one's own path individually and subjectively; yet when it comes to

attaining shinjin or satori, it does not mean much unless it embraces the benefits of others. One seeks to become awakened or enlightened first of all, and the attributes of one's awakening or enlightenment are to be shared with others at the same time. Without the latter part of enlightenment, shinjin or satori is not in accord with the Bodhisattva ideal, the core of Mahayana Buddhism.

Dogen's *shusho itto* elaborates the relationship of practice with authentication in terms of their spontaneous unity. As far as it refers to only the state of one's being enlightened, however, *shusho itto* just describes a "static" mode of enlightenment. In the *Bendowa*, as he is opposing a wrong view by non-Buddhists regarding the relationship between practice and authentication, Dogen talks about the oneness of practice and authentication (*shusho itto*). And he equates this oneness of practice and authentication with practice upon authentication (*shojo no shu*). Dogen says, "Because [practice] now is practice upon authentication, the beginner's practicing the Way is the whole of original authentication."[39] While *shusho itto* has a static notion in terms of one's activities as related to secular and social values with which one lives, practice upon authentication does have a "dynamic" implication, for practice is emphasized. Enlightenment reveals in practice. It is well granted that this practice in "practice upon authentication" refers to practice in a religious sense—authenticated practice. Yet, practice should not be understood just as a mere theory or thought, or just a state equated with enlightenment, but should be taken as a continuous transformation in terms of a concrete action or deed in life and society involving sorrow and joy. Practice upon enlightenment reminds us of the statement, "Flowers yet fall as people lament, and weeds only grow while people loathe them." The continuous transformation or *shinjin datsuraku* ("casting-off of body/mind") emerges in our lamentation and loathing.

CONCLUSION

One cannot attain awakening or enlightenment all by oneself. As a Bodhisattva is not able to leave suffering beings behind and alone, people who seek shinjin or satori have a goal and an ideal, sharing sorrow and joy with each other and benefiting others. Though one's capacity or capability is limited and small, one strives to live for the ideal. Certainly, it is extremely hard to confront and directly face the complex problems in this world of highly advanced scientific technology, as we often sigh, saying, "There is nothing I can do about

[39] *DZZ* 1, p, 737.

them." Yet, we have to live on, witnessing *duhkha* of all beings. An individual is self-centered and often selfish. The individual is attached to the self, which makes the self separated from others, being fundamentally destined to be self-centered. The world or society consists of groups of those individuals, and it is natural that our world or society should have various problems. An assembly of self-centered individuals is the whole, and the whole consists of the assembly of the individuals. And an individual consists of both a distinctive piece as a personality different from others, yet a part of the continuum sharing the whole of existence. In such a world, trying to get along well with others is extremely difficult. This desire of trying to live well with others is also our selfish conceit, it can be said, but what more can we do or what is left for us?

One comes to know more about the mode of one's being attached and self-centered as one becomes realized; and one lives life, the life worth living endowed with sorrow and joy. Shinjin and satori have two inseparable qualities: one seeks the path first of all for the sake of one's becoming awakened or enlightened, and then one shares that awakening and enlightenment with others, trying to help others, even if in a small and limited way, according to one's capacity and capability, religiously and secularly, in life and society. Shinjin and satori would be then in accord with the Bodhisattva ideal manifesting and revealing in the sorrow and joy of all beings. We lament when flowers fall, and we do not want weeds to grow. But weeds only grow as we loathe them. We are then made to realize that we are "flowers" as well as "weeds." In this view or observation of a Bodhisattva, we aspire to live in accord with the ideal. Zen master Pao-che of Ma-ku shan is practicing in the here and now, as he is fanning himself.[40]

---

[40] This paper was originally presented at Japan Foundation Symposium 2001 held at Green Gulch Zen Center, Marin, California on September 15, 2001.

Learning Grammar by Listening

Walter KLINGER

This paper discusses recent research in child language acquisition and second language learning, to find possible ways to improve listening comprehension, speaking ability, and grammatical understanding for students of English, by noticing the stress, rhythm, and duration of sounds and by noticing the silent intervals between groups of sounds.

A child learns to speak in sentences that are grammatically well formed before the child can read. How does the child discover the syntactic organization of utterances without studying grammar formally? Research in child language acquisition provides increasing evidence that brain processes take advantage of cues produced by *prosody* in a first step to making sense of grammar. The word comes from the Greek *prosoidia*, "a song sung to music, accent" (American Heritage Dictionary 2000). The lyric, epic poem or *ode*, also derives from the Greek word for song, *oidia*. Instead of referring to prosodic elements, some researchers use the term *suprasegmental* for those aspects of sound that do not seem to be basic properties of individual segments, i.e. vowels and consonants (Roach n.d.:75).

The area of speech prosody has grown very rapidly over the last few years, involving research in linguistics, acoustics, speech synthesis and recognition, cognitive psychology, neuroscience, and speech therapy (Special Interest Group on Speech Prosody n.d.). Prosodic elements like stress, rhythm, and duration are often helpful in distinguishing individual words, separating a word from the following word, or separating groups of words into phrases. The world's languages all use some kind of prosody, which can be seen to interact with grammar (Peters & Strömqvist 1996:215).

Grammar, or *syntax*, is the separation of words into categories such as noun, verb, preposition, etc., together with the rules that specify how these categories are arranged to form phrases and sentences. In Gerken's (1996:411) definition, "Syntax can be characterized as a system of rules that apply to a hierarchical arrangement of distributionally defined lexical and phrasal categories." Syntactic *parsing* uses lexical categories "to calculate the

relationships between words, group them into units like phrases and clauses where appropriate, and ultimately describe the structure of a sentence" (Hill 1996:12).

Manaris (1998:4, 23) says that the study of language involves many disciplines, including sentence structure (syntax), speech sounds (phonetics), sound structure (phonology), word structure (morphology), the meaning of individual words and sentences (semantics), language in communication and how sentences can be interpreted in a given context (pragmatics), speech production and comprehension (psychology of language), and language and the brain (neurolinguistics). Language research also involves studying the processes of language acquisition, the evolution of language, styles and dialects, word origins (etymology), and philosophical questions such as "How do words and sentences acquire meaning?" In this essay, we are particularly interested in the role played by the sounds of individual words and sounds of groups of words in structures in learning grammar.

In written material, words are separated by white spaces and punctuation marks like commas, periods, quotation marks, and capitalization, which let the reader identify words, phrases, and sentences. Speakers, however, normally do not separate individual words by silences, so children have at least three problems to solve in learning grammar: they must identify words and phrases in the continuous stream of speech (the *segmentation* problem); they must distinguish among words and phrases of different types such as nouns and noun phrases (the *labeling* problem); and they must discover the hierarchical arrangement of words and phrases (the *structure* problem) (Gerken 1996:411). Second language learners also must solve these problems, though if they are literate learners, grammar textbooks will of course be a great help in defining the categories of words and explaining how sentences are structured. However, textbooks, in their focus on written forms of grammar, have rarely mentioned the possible solutions of how to notice grammar details by segmenting words and phrases in heard speech.

Identifying Words

Identifying words in speech is a matter of knowing where one word ends and another word begins. In a string of words, individual words are often recognized in groups--that is, a word is not recognized until the following word is also recognized. Current models of spoken-word recognition, based on connectionist theory, hold that when any part of a word

is heard, many potential, or *candidate*, words automatically come to mind. In this theory, there is no role played in identifying the boundaries between words by prosodic elements such as silent pauses between words or final syllable lengthening.

> Given an input string, candidates matching any part of the string will be activated, and competition will occur among them. Competition will in general be won by any highly activated sequence of competing candidates that successfully accounts for the entire string without any leftover portions. This process permits no role for boundary detection processes, since words beginning at any point in the input can be activated. Words [may] have other words embedded in them, and these are overwhelmingly at the beginning. For example, *star* cannot be recognized as *star* until subsequent input has ruled out the possibility of *start*, *startle*, *starling*, and so forth. (Cutler 1996:89-90)

More than a third of all words in typical speech contexts can potentially be continued in this fashion. Evidence for this word-identification mechanism comes from word-spotting tasks. In Cutler's (1996) study, the words *mess* and *sack* were embedded in strings of syllables. These words were less easily spotted by the research subjects when they appeared in strings where other syllables were potentially competing for recognition, such as *mess* in [dəmɛs], which is the first part of *domestic*, or *sack* in [sækrəf], which is the onset of *sacrifice*.

Listeners seem to use this concurrent activation of potential words in word play like punning. In their analysis of Japanese puns, Otake & Cutler (2001) say, "Punning draws on basic processes of spoken-word recognition, common across languages." Puns work particularly well when there is just one minimal phonological unit, i.e., a *phoneme*, that differs in two contrasting words. (Pairs of words that differ in just one phoneme are known as *minimal pairs*, for example *pin* and *bin*.) The difference between the expected word and the pun word creates a humorous situation.

These examples of English puns illustrate the principle:

- ✧ What do short-sighted ghosts wear? *Spooktacles!* [the expected word is *spectacles*]
- ✧ Where are whales weighed? *In a whaleweigh station!* [*railway station*]
- ✧ Did you hear about the Buddhist who refused his dentist's Novocain during root canal work? *He wanted to transcend dental medication.* [*transcendental meditation*]
- ✧ A group of chess enthusiasts checked into a hotel and were standing in the lobby discussing their recent tournament victories. The hotel manager came out of the office and asked them to leave. "Why?" they asked. *"Because,"* the manager said, *"I don't like chess nuts boasting in an open foyer!"* [*chestnuts roasting on an open fire*]

Besides competition between potential words, Cutler (1996:88) suggests another way

that words are recognized. When a large number of words are stored in memory, *Serendipitous Segmentation* can come into play. When words become well known, they become unique. Hearing and recognizing the word, the listener can predict where the word will end and, by implication, where the next will begin. This way of hearing emphasizes that it is important to build up a large vocabulary. "In order to comprehend better, one should be familiar with the lexicon of the language" (Housen 2000). Knowing a great number of words surely must be at the heart of speech recognition.

In these two ways of recognizing words, the mental dictionary checks whatever is heard, without using the strategy of noticing prosodic elements. However, prosody can also help find the boundaries between words, through noticing individual word stress, noticing stress patterns of words in series, noticing pauses, and noticing word lengthening.

Individual Words

English is a stress-segmented language where multi-syllabic words carry a stress or accent on one or more of their syllables. Stress can be roughly defined as the combination of factors that make one syllable stand out as prominent, relative to other syllables. A stressed or accented syllable is louder, longer and has a higher pitch (the auditory sensation coming from the vibration of the vocal cords). Stress falls on vowel sounds; when they are stressed, vowels are full; when they are weak, they are often reduced to the schwa [ə]. Other than the schwa, all other vowels in English can occur in stressed syllables (Hutton n.d.). A syllable is a phonological unit, which can be generally defined as a vowel nucleus and its functionally related neighbouring consonants (Staroniewicz 2000).

Learners of English must learn the stress pronunciation of each individual word, and/or learn rules of stress patterns to guide them in how to assign stress correctly (Roach n.d.:89). After the stress patterns have been learned, listeners often seem to take advantage of the patterns to help segment the speech signal into individual words. The typical stress patterns of words also seem useful in learning word categories.

Luscombe (n.d.) explains how to determine where stress lies in two-syllable words:

> It is usually the case with verbs that, if the second syllable of the verb contains a long vowel or diphthong, or if it ends with more than one consonant, then the second syllable is stressed. If the final syllable contains a short vowel and one or no final consonant, then usually, the first syllable will be stressed. Two syllable adjectives are stressed in the same manner. Nouns generally use a different rule. If the second syllable contains a short vowel, then the stress usually comes on the first syllable -

otherwise it will be on the second syllable.

Rules of word stress for three-syllable words are more complicated, but generally, English multisyllabic words tend to be penultimately stressed, i.e., stressed on the second last syllable (Echols 1996:165).

The stress placement of individual words is sometimes helpful to distinguish nouns from verbs and adjectives, e.g., *content* as a noun *(CONtent)* and *content* as an adjective *(conTENT)*, and to distinguish nouns such as *protest (PROtest)* and *record (REcord)* from verbs such as *protest (proTEST)* and *record (reCORD)*. However, rules of stress are not always obeyed by speakers, since people might pronounce verbs like *escort* or *import* with the accent on the first syllable, as they are pronounced when they are nouns, as in *Let me escort (EScort) you home* or *We are going to import (IMport) some German cars*. Nonetheless, learners of English might be able to recognize some words as falling in the grammatical category of noun or verb words by noticing the stress of individual words.

Noticing if a word has stress or not can also help to distinguish the categories of *lexical* and *function* words. The patterns of word stress have resulted with the great majority of English *lexical* or *content* words, like nouns, adjectives, verbs and adverbs, placing stress on the first syllable. A large number of lexical words have only one syllable, but still that one syllable is likely to have stress. In their study of 190,000 words of spontaneous spoken British conversation, Cutler and Carter (1987) found that 90% of the lexical words began with strong syllables. Of the total number of *strong syllables* in the conversation database, 74% were initial syllables of lexical words, 11% were initial syllables of function words, and 15% were non-word-initial syllables. Of the total number of *weak syllables*, 69% were initial syllables of function words, 26% were not word-initial, and 5% were initial syllables of lexical words.

Lexical words are distinguished from *function* words like articles (e.g., *an, the*), prepositions (*to, from*), conjunctions (*and, but*), determiners (*all, those*), complementizers (*if, that*), auxiliary verbs, and personal pronouns. A large number of the monosyllabic function words may appear in either a strong, stressed and unreduced form, or a weak, unstressed and reduced form. When function words are weak, they often show features such as vowel reduction, which results in a weak syllable, often the schwa. Vowel reduction and weak syllables often occur in the spoken forms of these instances:

✧ modal verb + *have* (e.g., *should have, could have, might have*),

- function-like verb + *to* (*going to, ought to, have to, got to, used to, supposed to*),
- auxiliary verb + *you* (*did you, should you, would you, could you*), and
- reduced *to, do, of* (*A lotta apples*) (Selkirk 1996:193).

[In English the object location usually has strong stress, particularly if the object word is a lexical word, but object pronouns, for example as in *will it, give me,* and *see you*, are often weak. Selkirk (1996:205) suggests that, like in Romance languages and Arabic, the English object pronoun form is "constituent with the verb," i.e., the object pronoun is part of the verb and is not really thought of a separate word.]

Gerken (1996:416) says that infants might be able to identify function words as a class, because they share several phonological properties. For example, function words typically have fricative and nasal consonants (e.g., *of* and *was*), and are often produced with the reduced schwa vowel, which only occurs in unstressed syllables. In Gerken's (1996) study, infants paid closer attention to sentences (that is, they found them more unexpected and unusual, and so listened more carefully) when usual function morphemes were replaced with nonsense syllables that had stop consonants and full vowels, like *gu*.

Function words in their weak form are also spoken in a shorter duration, which further helps to distinguish function and lexical words. Cooper & Paccia-Cooper (1980:65) timed the pronunciation of *two*, a lexical word, and *to*, a function word, in the sentences *We heard Janice read two poems at the literary convention* and *We heard Janice read to poets at the literary convention.* The adjective *two* was pronounced for 146.6 msec, more than twice as long as the preposition *to* at 71.2 msec. The duration of nouns is typically longer than that of verbs (Cooper & Paccia-Cooper 1980:54), which also helps to label nouns as a word category.

Noticing that most (90%) English lexical words begin with strong syllables, while most function words have weak syllables, can help to distinguish these grammatical categories. Noticing that most (85%, including lexical and function words) strong syllables are at the beginning of words, or *word-initial*, can also help distinguish the beginning of a new word. Listeners can be quite successful if they use a strategy of assuming that any strong syllable marks the beginning of a word. This prosodical *Metrical Segmentation Strategy* (MSS) seems to be used by both children and adults alike.

Jusczyk's (1996) study with 7.5-month-olds demonstrated that if a strong syllable was consistently followed by a weak syllable, the infants recognized that strong + weak pattern as a word, even if the word was actually a non-word. For example, if infants heard

guitar (*guiTAR*) consistently followed by *is*, they might detect *tariz* as a word. When *surprise* (*surPRISE*) was repeatedly followed by *in*, the infants subsequently recognized the non-word *prizin*. By 9-months of age, infants show listening preferences for words with the typical English stress pattern, that is, for words that begin with strong syllables. Other studies also show that 23-31 month old children are sensitive to the word-initial stress of lexical words, as they often omit to say weak syllables if those weak syllables are word-initial, as in *giraffe (giRAFFE)* (Gerken 1996:415).

Adults as well often seem to use on MSS to separate words. In Cutler and Norris's (1988) study of English speaking adults, listeners spotted the word *mint* faster when *mint* was the first syllable of a word whose second syllable had a weak, reduced vowel, like *mint* in [mintəf]. *Mint* was more difficult to spot when it was followed by a strong syllable, i.e., one with a full vowel, like *mint* in *mintayve*. When the second syllable was strong, Metrical Segmentation Strategy assumed that a new word started at the second syllable, so the listeners heard two words, the non-words *min* and *tayve*. To find the word *mint* in *mintayve* required the listeners to think twice about what they had heard.

These studies demonstrate that both children and adults use MSS to assume that a stressed syllable marks the beginning of a lexical word. However, the tests also show that MSS might find non-existent words. Therefore an analysis based on word stress alone cannot be relied on to find real words. A connectionist analysis of spoken words as discussed earlier probably plays the overriding role.

While prosody seems to have some usefulness, within limits, to distinguish individual words and to distinguish some grammatical categories of words, the child learning the grammar of a language must also be able to spot phrases and notice word order. Prosodic information can also help to accomplish this.

Rhythm of Phrases

Within phrases and sentences, the English language tends to exhibit an alternating pattern of strong and weak syllables. Rhythm in speech is "the hierarchical organization of temporally coordinated prosodic units," where "prominent events (stress beats) are constrained to occur at specific, predictable, phases of an enclosing cycle" (Cummins & Port 1998). As we have noted above, word class often determines stress, i.e., lexical words usually or often do, and function words usually or often do not have stress. Wagner (2000),

in an examination of read speech, found a number of rhythmic constraints that were in most cases obeyed by all speakers:

- ✧ Words are pronounced more or less prominently depending on their word class.
- ✧ Nouns, proper names and numerals are always spoken with stress.
- ✧ Adjectives, adverbs, verbs, and all function words exhibit regular, context-dependent variation compared to their inherent prominence.
- ✧ Rhythmically sensitive content words and specific pronouns (relatively high in prominence) are de-accentuated when occurring immediately before another word of the same class.
- ✧ Function words (low in prominence) are stressed when occurring immediately before another non-prominent function word.
- ✧ All words which are sensitive to rhythmic alternations also tend to increase in prominence at the beginning and the end of a prosodic phrase.

As infants begin to notice how unstressed function words and stressed lexical words are arranged in relation to each other, they might learn how to categorize words as they appear in phrases. Gerken (1996:413) explains:

> One potential solution to the labeling problem is the set of the frequently occurring function morphemes, including articles, auxiliary verbs, and verb inflections. Particular morphemes occur in particular phrase types; for example, articles co-occur with nouns in noun phrases, and auxiliary verbs and verb inflections with verbs in verb phrases. Therefore, if children discovered these co-occurrence patterns, they could use function morphemes to distinguish among syntactic units. For example, a learner might infer that *cat* and *idea* are members of the same class, because both can immediately follow the function morpheme *the*.

Young children are able to distinguish grammatical and ungrammatical sentences with articles present or missing, even if they are not necessarily able to produce articles in their own speech (Gerken 1996:413). Because the child notices stressed syllables more readily, early production often leaves out unstressed syllables (Echols 1996:154), as we have seen in the example of *giraffe* above. Imitating adults who speak in rhythmic peaks and valleys, young children soon start to speak using *filler syllables* (e.g., *m bad*), which coincide with the valleys of adult speech (Peters & Aoyama 2001).

Peters & Aoyama (2001) studied one child acquiring English between 16 and 25 months of age, and found that, at around 21 months, the child's fillers seemed to be developing into precursors of grammatical morphemes. Peters & Strömqvist (1996:216) suggest that

> the important role for prosody in the child's construction of certain aspects of grammar is that some (though not all) children learning a variety of languages initially indicate an early awareness of presence of unstressed syllabic grammatical

> morphemes by approximating them with underspecified vowels or syllables. Moreover, the way these "fillers" fit into the rhythm of their utterances suggests that the rhythm of the phrase may be a salient attribute feat these learners are trying to reproduce.

Noticing that *the* or *a* often appear before *cat* may also help the child become aware of the order of words in phrases. Christophe, Guasti, & Nespor (1997) discuss how babies may set one of the major structural syntactic parameters, the head direction parameter, "by listening to prominence within phonological phrases." The head direction parameter determines where the noun appears in a noun clause or where the verb appears in a verb clause; English is typically considered a head-initial language and Japanese a head-final one. In English, nouns typically occur in phrase-final position at the end of noun phrases; verbs, usually at beginning of verb phrases.

Pauses & Lengthening

Two time-related prosodic features are phrase-final or sentence-final lengthening and pausing. Noticing these features helps the listener to separate the word stream into phrases, so that the listener knows on which group of words to perform syntactic parsing.

> A fairly typical sort of syllable has the structure CVC (where C = any consonant; V = any vowel). The vowel is called the nucleus (Nu.), which is the obligatory element of the syllable. The consonants which precede the nucleus are called the onset (On.), while the consonants which follow the nucleus are called the coda (Co.). The nucleus and coda are combined to form the rhyme (Rh.) of a syllable. (Hutton n.d.)

> The phrase-final lengthening effect is usually defined as the lengthening of a rhyme (nucleus and coda) occurring before the boundary between prosodic constituents, roughly reflecting syntactic boundary strength (Ueyama 1996).

Lengthening and pausing in end positions is "a result of a marked slowdown of the speech processing machinery, a by-product of general relaxation upon completion of the constituent, and/or the need to plan an upcoming constituent" (Cooper & Paccia-Cooper 1980:68). In some cases, lengthening and pausing can be due to word-finding difficulty, general hesitation, or sudden changes in the planning of the content of an utterance. In these cases they can occur at any point in speaking, not necessarily at syntactic borders (Cooper & Paccia-Cooper 1980:6).

In speech that has no hesitation or other performance difficulties, however, lengthening and pausing often will coincide with syntactic boundaries. For example, the verb

leaves will typically be lengthened when it occurs in clause-final position, as in *When John leaves, Kathy will be upset*. When the verb *leaves* is in the middle of a clause, it will be spoken much faster: *When John leaves Kathy, we'll be upset* (Cooper & Paccia-Cooper 1980:7).

Cooper & Paccia-Cooper (1980:187) estimated the probability of pausing after the words in this sentence, adding that the probability of lengthening is very similar to the probability of pausing:

> *Jack* (6%) *and* (3%) *Elizabeth* (38%) *took* (28%) *the* (10%) *children* (38%) *to* (25%) *the* (13%) *fair* (28%) *in* (10%) *Cohasset* (38%) *last* (10%) *weekend* (100%) *and* (0%) *Alison* (10%) *went* (15%) *to* (5%) *Chicago* (23%) *with* (8%) *her* (8%) *husband* (40%) *to* (10%) *look* (25%) *for* (13%) *a* (25%) *new* (30%) *job* (45%) *and* (3%) *to* (8%) *visit* (15%) *her* (10%) *nieces* (5%) *and* (3%) *nephews*.

It is worth noting that the likelihood of a pause occurring after the four instances of *and* in the above sentence is nil or small. Pauses are not typically inserted after a determiner, conjunction, or preposition in English (Cooper & Paccia-Cooper 1980:235). When I asked some of my students to mark where they would pause in this sentence, a few students marked a pause after occurences of "and." It may be beneficial to teach some "rules" or at least potential rules of phrase boundary prosody; however, as Grabe & Low (n.d.:16) point out, "the location of intonation phrase boundaries is debatable, and native speakers of a language can disagree on where a boundary should be placed." Where a speaker pauses can vary according to the length of the phrase, if the next phrase is related in content to the previous phrase, individual speaker breath control, and other factors.

Turk & Shattuck-Hufnagel (2000), in their study of the length of pauses in 11 triads like *tune acquire*, *tuna choir* and *tune a choir*, found that, "In general, duration measurements for *tune a choir* tokens were found to be intermediate between those of *tune acquire* and *tuna choir*, suggesting that boundaries at function words are weaker than boundaries between two content words."

In Christophe, Gout & Morgan's (2001) study, French adults were asked to detect words in spoken sentences which contained an ambiguity, e.g., *chat* in *son chat grincheux*, which contains both syllables of the French word *chagrin.* Control sentences contained no ambiguity, as in *son chat drogué* (no French word starts with *chad.*). The researchers observed significantly slower response times for ambiguous than for non-ambiguous sentences, suggesting that lexical access is slightly delayed when several words compete (in

this case, *chat* and *chagrin*). This result follows from what we have discussed above, in how words are recognized by competition between potential words. In the next experiment, the ambiguity crossed a phonological phrase boundary, as in *son grand chat # grimpait aux arbres* (containing both syllables of *chagrin* on each side of the boundary). In this condition, the researchers found no response time difference between ambiguous and non-ambiguous sentences, which suggests that the competitor word was not activated because of the lengthening and pause between phrases.

In another experiment, the same researchers trained 10-month-old American infants to turn their heads upon hearing a bisyllabic word, such as *paper*. In a second session, the children were presented with whole sentences. Some sentences contained the target word *paper*, and the children turned their heads upon hearing this word about 50% of the time. Other sentences contained both syllables of *paper*, separated by a phonological phrase boundary, as in *The butler with the highest pay # performs the most*.

> For those sentences, babies turned their head only about 10% of the time, a highly significant difference. These results suggest that both (French) adults and (American) 10-month-olds perceive phonological phrase boundaries as natural word boundaries, and that they do not attempt lexical access on pairs of syllables which span such a boundary. (Christophe, Gout & Morgan 2001)

These examples show that phrase-final syllable lengthening and pauses between phrases must be noticeable enough so that the separate phrases can be distinguished. When phrases and words can be separated, thanks to prosodic cues, the listener knows where syntactic analysis should be performed.

The role played by *fundamental frequency* (Fø) is one more important factor that helps the listener to notice phrase and sentence boundaries. Fø is the rate at which the vocal cords vibrate, measured in cycles per second (Hz). "The perceptual response of human listeners to Fø is the perceived pitch" (Lieberman 1996:56). There is usually a gradual downdrift or declination in the value of Fø across a phrase, and utterances always tend towards a fairly constant final Fø value (Taylor 1992:31,35).

The decline in Fø is largely a result of a decrease in lung and/or intra-oral pressure during speech, but it is at least partially controlled by higher-level commands of the speaker. Long utterances are generally accompanied by a higher Fø at the beginning of the utterance than shorter utterances are, which indicates that speakers consider the general length of the utterance before starting to speak. Speakers were asked to read pairs of sentences which

varied in length but which contained the same words at the beginning: *The deer could be seen from the car. The deer by the canyon could be seen from the window of the car.* The results showed that Fø at the beginning of the longer sentences was significantly higher than in short sentences, by an average of 13.5 Hz (Cooper & Paccia-Cooper 1980: 204).

Fø also drops at the end of phrases and clauses and is partially reset for the start of the next phrase. This segmental Fø has an influence on listeners' ability to correctly identify segments (Taylor 1992:37). Limber (1992) recorded the Fø values of two sentences: (a) *The professor the students believed was arrested died.* (b) *The professor the students believed was arrested.* Limber obtained these results:

(a) *The professor* (175Hz) *the students believed was* (175Hz) *ar*(150Hz)*rested died.*

(b) *The professor* (175Hz) *the students believed was* (150Hz) *ar*(175Hz)*rested.*

The Fø remained steady over *believed* and *was* in (a), preventing an immediate and inaccurate parse of *believed* as a main verb. We might also suppose that there was no pause between *believed* and *was* in (a), whereas there was a slight but noticeable pause between *believed* and *was* in (b), and that *believed* was also slightly lengthened.

Machine speech recognition as early as 1973 could correctly locate over 80% of major syntactic boundaries by the fall-rise patterns of Fø (Cooper & Paccia-Cooper 1980:225). Haase et al (2001) report they could predict sentence boundaries with a precision of 93% using Fø.

Listeners can also learn to notice the ends of utterances by *tone.* In languages such as Chinese, known as tone languages, tone is used to change the meaning of a word. In languages like English and German, known as stress-timed languages, when speakers use a mid-level pitch on the final accented syllable of an utterance, this is treated by listeners as a signal that the speaker has not finished his or her turn at speaking (Couper-Kuhlen and Selting 1996:33). In Standard Southern British, the high-rising terminal tone is used primarily with yes-no questions, to check to see if the listener is understanding what is being said, and to hold the floor in discourse situations, but never with declarative utterances, where a falling tone is used (Fletcher, Grabe, & Warren n.d:2). Other accents of English, however, like Ulster English, Tyneside, and West Midlands, have a rising pitch pattern for declaratives (Wells and Peppe 1996:104), so listeners need to become familiar with the local standard.

Limits to Usefulness

Words are not learned by their sound alone but by an understanding of the context of the discourse. Grammar is also largely learned through understanding the given situation. Children do not always correctly interpret every word, phrase or sentence they hear, but, with "some grasp of the social context, including certain primitive concepts of attentional focus and intention on part of the other participant(s) in the situation," and with "reasonably immediate sequential relationships between utterances and the phenomena that they refer to" (Steedman 1996:340), children can make guesses about what is being said with a fairly high probability of success.

Parents might say to a child, *Put that block in the truck. The red block. In the truck. Put the red block in the truck.* and *Give the ball to me. Give it to me.* Hearing such sequences and guessing the meaning might be sufficient to make phrases noticeable to the child and to help the child acquire grammar (Morgan 1986:8,111). Knowing the meaning of *cat*, *chase*, and *mouse*, and knowing what is more likely to be chasing what, on hearing the sentence *The cat chased the mouse*, the child can deduce that in English the subject comes before the verb, the object comes after the verb, and so on (Pinker 1995:164). We see that grammar is found and learned in the social context and the semantics of speech situations, as well as in the prosody of speech (Hirsh-Pasek, Tucker & Golinkoff 1996:460).

Conflicts between grammar and prosody can occur, but these are often due to arbitrary rules. For example, according to rules of punctuation, a single comma must not be used between a subject and a predicate, while in speaking there may well be a pause, especially after a long noun phrase: **The man over there in the corner, is obviously drunk* (Hill 1996:38).

Morgan (1986:112) points out that

> the bracketing supplied by prosody may be misleading. The example typically cited is *This is the cat that chased the rat that stole the cheese*. Here prosodic breaks occur before each instance of "that"; the resulting units, though they could be phrases in other sentences, are not constituents of this sentence.

Dresher (1996:41-42) explains that Chomsky & Halle in their 1968 work on generative phonology, *The Sound Pattern of English,* observed that "the input to the phonological component is not surface syntactic structure, but a reduced and adjusted version." Chomsky & Halle used this sentence as an example to illustrate the mismatch between surface syntactic structure in (a) and the phonological structure in (b): (*NP = noun*

phrase)

(a) *This is* [NP *the cat that caught* [NP *the rat that stole* [Np *the cheese*]]].

(b) (*This is the cat*) (*that caught the rat*) (*that stole the cheese*).

In sentence (b), the prosodic boundaries, shaped by rhythmic constraints, are very different from the syntactic boundaries, defined by academic rules of syntax, in sentence (a). However, rather than saying that noticing the prosodic boundaries will therefore not help a listener learn grammar, we might be inclined to say that, as the prosodic boundaries are the naturally occurring boundaries in speech, the prosodic phrases must be the place where syntax is analyzed by a listener.

The grammatical boundaries of sentence (a), as parsed formally by grammar rules, are not heard in speech, and seem therefore to have little value in learning grammar by listening. The case could be presented that learning parsing rules of sentences before the language is learned by listening will even be detrimental to developing listening ability.

Auer (1996:59) suggests that since prosodic phrases often don't match the syntactic phrases, it would be more accurate to say that prosody segments language into *syntactic gestalts* instead of *syntactic structures*. Even the word *sentence* is terminology referring to formal grammar; for a piece of continuous speech without making implications about its grammatical status, the term *utterance* is widely used (Roach n.d.:84).

We must also distinguish between *linguistic prosody*, which has at least potential to contribute to a listener's ability to process the syntactic structure of a sentence, and *emotional prosody*, which carries affective information about the speaker and message (Plante, Creusere & Sabin 2001). Emotional prosody can express propositional attitudes like certainty, uncertainty, and incredulity (Nakatani 1997:13). In *Peanuts* videos, the words that adults say are unintelligible, strings of gibberish like *blah blah blah*, as are the sounds that Snoopy makes, but prosody delivers the emotional content of the message, of excitement, anger, boredom, sadness, sarcasm, impatience, fear, enthusiasm, etc.

Prosody comprises the musical attributes of speech: melody, dynamics, rhythm, tempo and pause (Couper-Kuhlen & Selting 1996:11). Like other non-verbal information like music and art, there is a hypothesis that prosody processing is functionally lateralized: linguistic aspects of prosody are processed in the left hemisphere while emotional aspects are processed in the right hemisphere (Meyer *et al* 2001).

Emotional and interactional aspects of prosody, while they apparently do not show

any grammatical information, "are often more significant cues to the real message than the words themselves" (Selting and Couper-Kuhlen 1996:1). As prosody directs attention, or sends a non-verbal message, the child or language learner can guess what the speaker's intent is, and in this way can learn vocabulary or become aware of some grammatical information. In face-to-face speech, other cues like body position, gesture and gaze also help direct attention to the message.

We have noted that where to put a pause in a sentence is often debatable; where stress occurs in a sentence is also variable. Stress can be placed on words not only according to their grammatical function but according to their communicative function: to highlight new or important information, for emphasis, for contrast, to distinguish between given and new information, etc. (Nakatani 1997:20). The sentence *The Munchkins called me because a new witch has just dropped a house on the Wicked Witch of the East, and there's the house, and here you are, and that's all that's left of the Wicked Witch of the East* could have stress and pauses at many different places, depending on which words are new information based on the information in the previous sentence, the personal choice of dramatic interpretation of the speaker, etc.

These points show that prosodic information is not always a reliable guide to either word category information or syntax structure. That prosody has so many variables and often has no relation to grammar is one reason that prosodic models have been applied only occasionally in automated speech understanding systems; in contrast, they have been applied extensively in speech synthesis systems (Batliner et al 2001).

The theory that acoustic information can provide children with a linguistically useful bottom-up segmentation of speech, known as the prosodic bootstrapping hypothesis (Fisher & Tokura 1996:344), is still quite controversial. However, as we have seen in this article, there is a growing body of evidence to support the proposition that children are at least sensitive to and aware of various aspects of prosody, and might be using prosody to learn vocabulary and grammar. We have also seen that adults make use of prosodic information to separate words and phrases in the speech stream.

Practical Recommendations

On a final note, we would like to mention some practical ways of using prosodic information for English second- or foreign-language learners. Written words when read

aloud are an especially rich source of noticing grammatical information. The results of Fach's (1999) experiment show that for read speech, 65% of syntactic boundaries are coded in the prosodic boundaries. A careful reading will produce up to 84% of the syntactic and prosodic boundaries matching. van Herwijnen & Terken (2001:45) demonstrate that speakers are fairly capable of predicting what prosodic structure they would assign when reading text aloud.

It is quite easy to read aloud a familiar text in synchrony with another person or with other people. When speakers attempt to do this, they make some changes to their prosody to make it more predictable. Cummins (2000) explains:

> Changes to macroscopic timing and to intonation are particularly noticeable, and are shared by both speakers. Some obvious characteristics are a relatively slow speech rate and an intonation contour stripped of expressive flourishes. Despite the magnitude of the changes observed, the task of speaking in synchrony with others is both familiar (prayer, recitation, etc) and relatively simple.

Thus both listening to read text and reading text aloud with other speakers should be beneficial language learning activities, when prosodic features are noticed which help to separate individual words and phrases from the speech stream.

It is often recommended that learners become aware of word boundaries using pairs like *pea stalks/peace talks* and *great ape/grey tape* (Roach n.d.:42), though trying to distinguish *tune acquire*, *tuna choir* and *tune a choir* may be more futile or at least quite frustrating.

Derwing, Munro, & Wiebe (1998) compared two pronunciation methods, a segment-based method, focusing on individual consonant and vowel sounds and syllables, and a global approach, using larger units incorporating speaking rate, word stress, sentence stress, intonation, and rhythm, in ESL classes of 20 hours/week over 10 weeks with 20 minutes/day of pronunciation instruction. In a task to give a 45-second narrative description of a picture story, the global group showed the greatest significant improvement in accent and fluency.

However, first learning phonological units through practice in producing individual sounds may also be useful. Ueyama (1997) suggests that second language intonation is acquired on two different levels:

> learners first acquire the categorical patterns of the foreign intonation, and only later learn to produce native-like continuous intonational streams. This supports models in which the speech cognitive system is split into two sub-modules: a phonological component (characterized by categorical units) and a phonetic component (implementing the phonological units as a continuous articulatory/acoustic stream).

Thus practice in pronouncing, for example, minimal pairs, or practice with vowel sounds, should be beneficial. Learning vowel sounds may actually be the first stage in making sense of language: Nazzi (1997) suggests that newborns may not use rhythmic units such as the syllable, foot (consisting of one stressed syllable plus any unstressed syllables that follow it), or mora (the rhythmic timing unit of Japanese), on which the rhythm of words is based, but rather they start with a common small unit, possibly the vowel.

The particular problems of, and recommendations for, learning a stress-segmented language like English for learners whose language is timed by morae or syllables like Japanese and French, and vice-versa, for English-speaking learners of those languages, must be left for a future essay.

To improve both listening and speaking ability for second language learners, it is certainly useful to be aware of some of the characteristic prosodic "rules" of English.

American Heritage® Dictionary of the English Language: Fourth Edition. (2000). http://www.bartleby.com/61/81/P0608100.html

Auer, Peter. (1996). On the prosody and syntax of turn-continuations. In Elizabeth Couper-Kuhlen & Margret Selting (Ed.), *Prosody in conversation: interactional studies* (pp. 57-100). Cambridge & New York: Cambridge University Press.

Batliner, A., Möbius, B., Möhler, G., Schweitzer, A., & Nöth, E. (2001). Prosodic models, automatic speech understanding, and speech synthesis: towards the common ground. *Eurospeech 2001 7th European Conference on Speech Communication & Technology*, Aalborg. Retrieved August 15, 2001 from http://eurospeech2001.org/files/Eurospeech2001-Abstracts.pdf p.106.

Christophe, Anne, Gout, Ariel , & Morgan, Jim. (2001). Infants and adults exploit phonological phrase boundaries on-line to drive lexical access. *Prosody in Processing (PiP) Workshop,* Utrecht. Retrieved August 15, 2001 from http://www-uilots.let.uu.nl/conferences/pip/speakerabstracts.html

Christophe, Anne, Guasti, Teresa, & Nespor, Marina. (1997). Reflections on Phonological Bootstrapping: Its Role for Lexical and Syntactic Acquisition. *Language and Cognitive Processes 12* (5), 585-612.

Cooper, William E., & Paccia-Cooper, Jeanne. 1980 *Syntax and speech*. Cambridge: Harvard University Press.

Couper-Kuhlen, Elizabeth , & Selting, Margret. (1996). Towards an interactional perspective on prosody and a prosodic perspective on interaction. In Elizabeth Couper-Kuhlen & Margret Selting (Ed.), *Prosody in conversation: interactional studies* (pp. 11-56). Cambridge & New York: Cambridge University Press.

Cummins, F. (2000). Global Alterations to Prosody in Synchronous Speech. *Prosody 2000: Speech recognition and synthesis workshop.* Krakow, Poland, October. Retrieved August 15, 2001 from http://hum.amu.edu.pl/~fonetyka/abstract.html

Cummins, Fred, & Port, Robert. (1998). Rhythmic constraints on stress timing in English. *Journal of Phonetics 26* (2), 145-171.

Cutler, Anne. (2001). Rhythmic categories and their role in listening. *Prosody in Processing (PiP) Workshop,* Utrecht. Retrieved Aug. 15, 2001 from http://www-uilots.let.uu.nl/conferences/pip/speakerabstracts.html

Cutler, A. (1996). Prosody and the word boundary problem. In J.L. Morgan & K. Demuth (Eds.), *Signal to syntax: Bootstrapping from speech to grammar in early acquisition* (pp. 87-99). Hillsdale, NJ: Erlbaum.

Cutler, A., & Carter, D.M. (1987). The predominance of strong initial syllables in the English vocabulary. *Computer, Speech and Language, 2*, 133-142.

Cutler, A., & Norris, D. (1988). The role of strong syllables in segmentation for lexical access. *Journal of Experimental Psychology: Human Perception and Performance, 14*(1), 113-121.

Derwing, Tracey H., Munro, Murray J., & Wiebe, Grace. (1998). Evidence in Favor of a Broad Framework for Pronunciation Instruction. *Language Learning 48* (3), 393-410.

Dresher, B. Elan. (1996). Introduction to Metrical and Prosodic Phonology. In J.L. Morgan & K. Demuth (Eds.), *Signal to syntax: Bootstrapping from speech to grammar in early acquisition* (pp. 41-54). Hillsdale, NJ: Erlbaum.

Echols, Catherine H. (1996). A Role for Stress in Early Speech Segmentation. In J.L. Morgan & K. Demuth (Eds.), *Signal to syntax: Bootstrapping from speech to grammar in early acquisition* (pp. 151-170). Hillsdale, NJ: Erlbaum.

Fach, Marcus L. (1999). A Comparison Between Syntactic and Prosodic Phrasing. Retrieved August 15, 2001 from http://www.ims.uni-stuttgart.de/~fach/eurosp99/eurosp99.pdf

Fisher, Cynthia, & Tokura, Hisayo. (1996). Prosody in Speech to Infants: Direct and Indirect Acoustic Cues to Syntactic Structure In J.L. Morgan, & K. Demuth (Eds.), *Signal to syntax: Bootstrapping from speech to grammar in early acquisition* (pp. 343-363). Hillsdale, NJ: Erlbaum.

Fletcher, J., Grabe, E., and Warren, P. (n.d.) Intonational variation in four dialects of English: the high rising tune. To appear in Sun-Ah Jun (ed) *Prosodic typology and transcription - a unified approach*. To be published by OUP. Retrieved Aug. 15, 2001 from http://www.phon.ox.ac.uk/~esther/ivyweb/Fletcher_etal.doc

Gerken, LouAnn. (1996). Phonological and Distributional Information in Syntax Acquisition. In J.L. Morgan & K. Demuth (Eds.), *Signal to syntax: Bootstrapping from speech to grammar in early acquisition* (pp. 411-425). Hillsdale, NJ: Erlbaum.

Grabe, E. and Low, E.L. (n.d.). Durational Variability in Speech and the Rhythm Class Hypothesis. (to appear in *Papers in Laboratory Phonology 7*.) Retrieved Aug. 15, 2001 from http://www.phon.ox.ac.uk/~esther/ivyweb/Grabe_Low.doc

Haase, M., Kriechbaum, W., Mohler, G., Stenzel, G. (2001). Deriving Document Structure from Prosodic Cues. *Eurospeech 2001 7th European Conference on Speech Communication & Technology*, Aalborg. Retrieved August 15, 2001 from http://eurospeech2001.org/files/Eurospeech2001-Abstracts.pdf p.101

Hill, Robin L. (1996). A Comma In Parsing. Retrieved Aug. 15, 2001 from http://citeseer.nj.nec.com/hill96comma.html

Hirsh-Pasek, Kathy, Tucker, Michael, & Michnick Golinkoff, Roberta. (1996). Dynamic Systems Theory: Reinterpreting "Prosodic Bootstrapping" and Its Role in Language Acquisition. In J.L. Morgan & K. Demuth (Eds.), *Signal to syntax: Bootstrapping from speech to grammar in early acquisition* (pp. 449-466). Hillsdale, NJ: Erlbaum.

Housen, Alex. (2000). Verb Semantics And The Acquisition Of Tense-Aspect In L2 English. *Studia Linguistica 54* (2), 249-260.

Hutton, John. (n.d.). Phonology. Retrieved Aug. 15, 2001 from http://www.xvv88.dial.pipex.com/Home/phon/phon01.htm

Jusczyk, Peter W. (1996). Investigations of the Word Segmentation Abilities of Infants. *The 4th International Conference on Spoken Language Processing,* Philadelphia. Retrieved August 15, 2001 from http://www.asel.udel.edu/icslp/

Lieberman, Philip. (1996). Some Biological Constraints on Analysis of Prosody. In J.L. Morgan & K. Demuth (Eds.), *Signal to syntax: Bootstrapping from speech to grammar in early acquisition* (pp. 55-65). Hillsdale, NJ: Erlbaum.

Limber, John. (1992). Subject: RE: subject 3.175 Parsing and prosody. *LINGUIST List 3.181*, Tue 25 Feb. Retrieved August 15, 2001 from http://linguistlist.org/issues/3/3-181.html#2

Luscombe, Stephen. (n.d.). How to determine where stress lies. Retrieved August 15, 2001 from http://www.celt.stir.ac.uk/staff/HIGDOX/STEPHEN/PHONO/STREXP.HTM

Manaris, Bill. (1998). Natural Language Processing: A Human - Computer Interaction Perspective. *Advances in Computers 47*, 1-66. Retrieved Aug.15, 2001 from http://www.cs.cofc.edu/~manaris/publications/advances-in-computers-vol-47.pdf

Meyer, Jörg, Wildgruber, Dirk, Ackermann, Herman, Dogil, Grzegorz, Riecker, Axel, & Grodd, Wolfgang. (2001). Lateralized fMRI activation at the level of the motor cortex during linguistic and affective prosody production tasks. *Prosody in Processing (PiP) Workshop,* Utrecht. Retrieved August 15, 2001 from http://www-uilots.let.uu.nl/conferences/pip/posterabstracts.html

Morgan, James L. (1986). *From simple input to complex grammar.* Cambridge, Mass.: MIT Press.

Nakatani, Christine Hisayo. (1997). The Computational Processing of Intonational Prominence: A Functional Prosody Perspective. Retrieved Aug. 15, 2001 from http://citeseer.nj.nec.com/nakatani97computational.html

Nazzi, Thierry. (1997). Identifying a precursor of rhythmic processing specificities in newborns? *University of Delaware Linguistics Colloquia.* Retrieved August 15, 2001 from http://sun.ling.udel.edu/colloq/nazzi.html

Otake, T., & Cutler, A. (2001). Recognition of (Almost) Spoken Words: Evidence from Word Play in Japanese. *Eurospeech 2001 7th European Conference on Speech Communication & Technology*, Aalborg. Retrieved August 15, 2001 from http://eurospeech2001.org/files/Eurospeech2001-Abstracts.pdf p23.

Peters, Ann M., & Strömqvist, Sven. (1996). The Role of Prosody in the Acquisition of Grammatical Morphemes. In J.L. Morgan & K. Demuth (Eds.), *Signal to syntax: Bootstrapping from speech to grammar in early acquisition* (pp. 215-232). Hillsdale, NJ: Erlbaum.

Pinker, Steven. (1995). Language Acquisition. In L. R. Gleitman, M. Liberman, & D. N. Osherson (Ed.), *An Invitation to Cognitive Science, 2nd Ed. Volume 1: Language* (pp. 135-182). Cambridge, MA: MIT Press.

Plante, Elena, Creusere, Marlena, & Sabin, Cynthia. (2001). Sentential Prosody and Sentence Processing. *The 7th Annual Meeting of the Organization for Human Brain Mapping HBM.* Retrieved August 15, 2001 from http://www.academicpress.com/www/journal/hbm2001/10878.html

Roach, Peter. (n.d.). A Little Encyclopedia of Phonetics. Retrieved August 15, 2001 from http://www.linguistics.reading.ac.uk/staff/Peter.Roach/PAPERS/encyc2.pdf

Selkirk, Elisabeth. (1996). The Prosodic Structure of Function Words. In J.L. Morgan & K. Demuth (Eds.), *Signal to syntax: Bootstrapping from speech to grammar in early acquisition* (pp. 187-213). Hillsdale, NJ: Erlbaum.

Selting, Margret, & Couper-Kuhlen, Elizabeth. (1996). Introduction. In Elizabeth Couper-Kuhlen & Margret Selting (Ed.), *Prosody in conversation: interactional studies* (pp. 1-10). Cambridge & New York: Cambridge University Press.

Special Interest Group on Speech Prosody. Affiliated to the International Speech Communication Association (ISCA) (n.d.) Retrieved August 15, 2001 from http://groups.yahoo.com/group/sprosig/

Staroniewicz, P. (2000). The comparison of basic speech units in automatic speech recognition. *Prosody 2000: Speech recognition and synthesis workshop,* Krakow. Retrieved August 15, 2001 from http://hum.amu.edu.pl/~fonetyka/abstract.html

Taylor, Paul Alexander. (1992). A Phonetic Model of English Intonation. Retrieved August 15, 2001 from http://citeseer.nj.nec.com/taylor92phonetic.html

Turk, Alice E., & Shattuck-Hufnagel, Stefanie. (2000). Word-boundary-related duration patterns in English. *Journal of Phonetics 28* (4), 397-440.

Ueyama, Motoko. (1997). The Phonology and Phonetics of Second Language Intonation: The Case of "Japanese English." *Eurospeech '97: 5th European Conference on Speech Communication and Technology,* Rhodos. Retrieved Aug.15, 2001 from http://www.wcl2.ee.upatras.gr/eurth3b.html

Ueyama, Motoko. (1996). Phrase-Final Lengthening and Stress-Timed Shortening in the Speech of Native Speakers and Japanese Learners of English. *ICSLP 96: The 4th International Conference on Spoken Language Processing,* Philadelphia. Retrieved Aug.15, 2001 from http://www.asel.udel.edu/icslp/cdrom/vol2/791/a791.pdf

van Herwijnen, O. M., & Terken, J. M. B. (2001). Do speakers realize the prosodic structure they say they do? *Eurospeech 2001 7th European Conference on Speech Communication & Technology*, Aalborg. Retrieved August 15, 2001 from http://eurospeech2001.org/files/Eurospeech2001-Abstracts.pdf

Wagner, P. S. (2000). Rhythmic Alternations in German Read Speech. *Prosody 2000: Speech recognition and synthesis workshop,* Krakow. Retrieved Aug. 15, 2001 from http://hum.amu.edu.pl/~fonetyka/abstract.html

Wells, Bill, & Peppe, Sue. (1996). Ending up in Ulster: prosody and turn-taking in English dialects. In Elizabeth Couper-Kuhlen & Margret Selting (Ed.), *Prosody in conversation: interactional studies*. (pp. 101-130). Cambridge & New York: Cambridge University Press.

英語学習の動機づけ
—大学入学時と1年後を比較して—

A Longitudinal Study of Learners' Motivation for English after Entering University

小栗裕子
Yuko OGURI

1. 目的

英語学習の動機づけ研究は、ある時点における学習者の動機づけがどのようなものかを探る横断的研究(例えばEly, 1986 ; Benson, 1991; 宮原ら, 1997)が多く、Berwick & Ross (1989)が指摘するように、学習者を長期的に捉えた研究はあまりなされていない。しかし、学習者を取りまく社会的環境の変化や学力の向上により、学習者の動機づけもおのずと変化していくものと考えられる。そこで本研究では、大学入試という大きな「目的」を終えた後の学習者に焦点を当て、彼らの動機づけが、リスニング力向上に伴い入学時と 1 年後ではどのように変化したのかを調査分析し、考察を加えた。

2. 方法

2. 1 被験者

平成 12 年度の公立大学理系を専攻している 1 年生2クラス 70 名 (うち女性 16 名)。両クラス共、能力別や種目別クラス編成ではなく、学籍番号順に構成されたものである。

2. 2 手順

1) リスニングテストとその結果

新入生のリスニング能力を測るため、第2回目の授業中にプリテストとして「JACET 基礎聴解力標準テスト A」を、そして 12 月初旬にポストテストとして「JACET 基礎聴解力標準テストB」を実施した。能力別に動機づけを比較するため、まず4月に実施した「JACET 基礎聴解力標準テスト A」の結果に基づき、学生を上・中・下位の3群に分類した。次に 12 月に

行った「JACET 基礎聴解力標準テストB」の結果と照らし、この3群をそれぞれに伸びた学習者（5点以上）とそうでない学習者（5点未満）に分けた。ここで使用した「伸びた学習者」の定義は、12 月に実施したポストテストの全体の平均点 52.66 (SD 8.1) から、4月のプリテストの平均点 47.60（SD 7.3）を引いた点、すなわち5点のことを言う。尚、プリテストとポストテストの相関係数は r=0.67（かなりの相関）で、点数は開拓社から送られてきた標準点が使用してある。

表1　4月と12月のJACET基礎聴解力標準テスト得点と標準偏差

群		上位		中位		下位	
		伸びた (N=10)	伸びなかった (N=13)	伸びた (N=13)	伸びなかった (N=10)	伸びた (N=18)	伸びなかった (N=6)
4月	mean	57.80	54.85	46.62	47.00	40.00	40.83
	SD	5.21	3.16	1.98	2.00	2.47	2.61
12月	mean	65.30	54.15	55.08	45.00	50.11	43.50
	SD	6.05	5.38	3.58	5.16	4.61	2.57

さらに、4月の時点では予測できなかった伸びた学生とそうでない学生を学力別に 12 月の結果から割り出し、それを4月に遡って集計し、標準偏差と共に表1にまとめた。分散分析及びＬＳＤによる多重比較の結果、4月の段階では、$F_{(2.69)}=132.79$（$p<0.001$）で3群の間にもおのおのの群に有意差が認められ、これらを異なった集団と認めた。しかしながら、群内（伸びた学生と伸びなかった学生の間）は、$F_{(1.69)}=0.52$ で有意ではなく、等質であると言えた。一方、12 月では、$F_{(2.69)}=37.77$（$p<0.001$）で同様に3群の間にもそれぞれ有意差が見られたばかりでなく、今回は群内にも $F_{(1.69)}=53.93$（$p<0.001$）で有意差が認められ、伸びた学生とそうでない学生との間にも差が生じたことになる。

2）動機づけのアンケート調査

同様に4月最初の授業中に学生の動機づけの強さを探るため、英語学習の目的に関係があると思われる 34 項目の5段階評価による記名式アンケートを行い、1年終了時の授業中にも同じアンケートを実施した（項目の作成及び詳細に関しては小栗、2001 参照）。アンケートに要した時間は 20 分程で、学生に内容についての説明を加えながら、充分な時間をとった。

3．アンケート結果の分析と考察

3．1　各動機づけの平均値

入学時と1年終了時のアンケート結果は、それぞれ小栗 (2001) の同項目の因子分析結果（4因子抽出）を参考に各因子ごとにまとめて集計し、平均を算出、それぞれの動機づけごとに能力別に分類し、平均値とその標準偏差を表2にまとめた。

表2　入学時と1年後における能力別動機づけ強さの平均値と標準偏差

群			上位		中位		下位	
			伸びた (N=10)	伸びなかった (N=13)	伸びた (N=13)	伸びなかった (N=10)	伸びた (N=18)	伸びなかった (N=6)
自発的言語使用	4月	mean	3.31	2.96	2.80	2.86	2.92	2.63
		SD	0.77	0.65	0.55	0.60	0.64	0.80
	2月	mean	3.35	2.91	2.98	2.74	3.07	2.70
		SD	0.85	0.76	0.46	0.55	0.67	0.82
教科動機	4月	mean	4.03	3.72	3.59	3.77	3.35	3.06
		SD	0.88	0.54	0.70	0.82	0.62	0.74
	2月	mean	3.87	3.82	3.46	3.43	3.58	3.36
		SD	0.57	0.74	0.44	0.59	0.65	0.80
自発性の言語使用ない	4月	mean	3.56	3.79	3.73	3.80	3.50	3.48
		SD	0.49	0.57	0.75	0.63	0.38	0.63
	2月	mean	3.76	3.70	3.91	3.76	3.68	3.48
		SD	0.34	0.49	0.63	0.59	0.48	0.65
統合的動機	4月	mean	3.50	3.57	3.58	3.72	3.73	3.33
		SD	0.84	0.81	0.73	0.73	0.50	0.46
	2月	mean	3.70	3.72	3.82	3.46	3.45	3.67
		SD	0.61	0.99	0.62	0.52	0.61	0.62

因子分析で第1因子として抽出された自発的言語使用動機とは、「～したいから学ぶ」や「好きだから学ぶ」のように学習者の積極的な意志が感じられる動機づけのことで、14 項目から構成されており、「異文化を理解したい」、「学ぶのが楽しい」や「英語で色々な国の人と話したい」のような項目が含まれている。第2因子の教科動機とは、英語を物理や数学と同じように捉え、その教科を伸ばしたいという動機づけのことで、6項目から構成されており、「文法力を身につけたい」や「語彙力を身につけたい」のような項目が含まれている。そして、第3因子の自発性のない言語使用動機とは、「～に有利だから」や「～に必要だから」のように社会が要求するから学ぶという消極的な動機づけで、7項目から構成されており、「就職に有利

だから」、「今や英語は国際語だから」や「科学技術の導入に英語は必要だから」のような項目が含まれている。第4因子の統合的動機に関しては、同化志向を表し5項目から構成されており、「英語を話せたらかっこいい」や「英語圏の映画やファッションに興味がある」などの項目を含んでいる。34 項目のうち「必修だから」と「海外旅行をしたい」はどの因子とも相関がなく、この2つは除外した。

表2の6群と4つの動機づけ項目をわかりやすく比較するために、図（1～6）にまとめた。最初に言えることは、4月と比較して 12 月にリスニング力の伸びた学生は、必ずしもすべての動機づけ項目の点数が上昇している訳ではないということである。 特に、上位群と中位群の英語を「教科」として捉えている動機づけは、入学時より1年後の方が下がっている点が注目される。そして、この2群は動機づけの強さにこそ違いがあれ、4項目すべてに非常に似た傾向を示していることが特徴的である。反対に、中位群を除いて、伸びなかった学習者のすべての動機づけが下がった訳ではなく、例えば上位群では、「教科動機」や「統合的動機」は上昇しているし、下位群はすべての項目に対して同じか、上昇していることもわかる。しかしながら、彼らの4月の平均点が全体の動機づけにおいて一番低いのも指摘される点である。次に、リスニング力が上昇した学生は、能力に関係なく「～したいから学ぶ」の自発的言語使用動機と、 「～に有利だから学ぶ」の自発性のない言語使用動機の両方とも上昇していることが挙げられる。それとは対称的に上・中位群の伸びなかった学習者は、この2つの動機づけが下がっている点が特徴的である。

図1　上位群伸びた学生

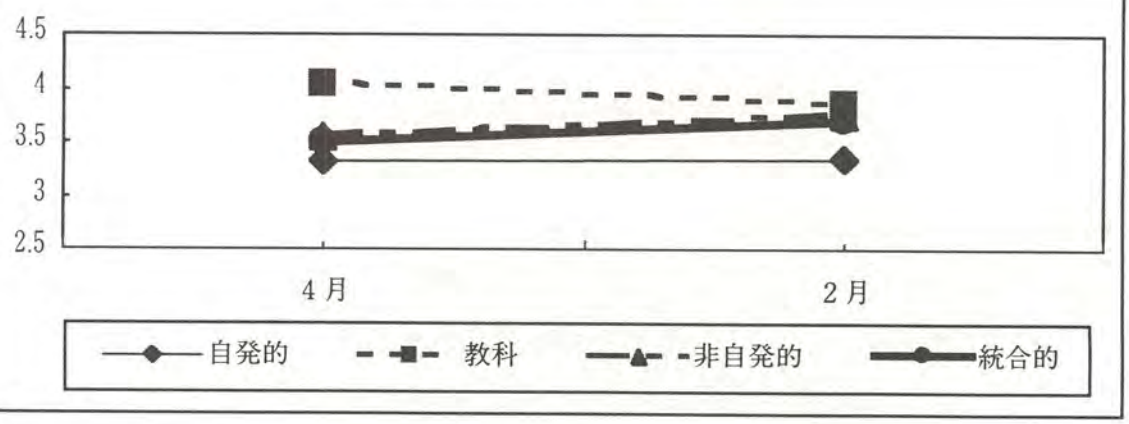


図2　中位群伸びた学生

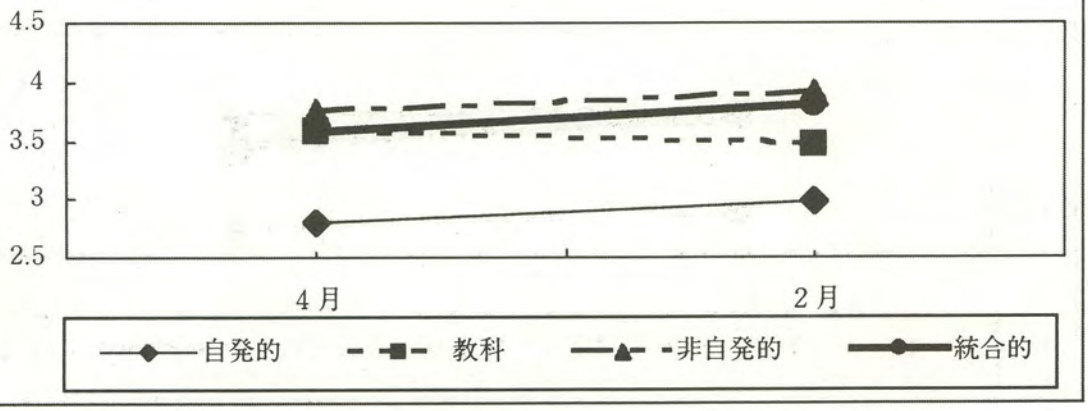


図3　下位群伸びた学生

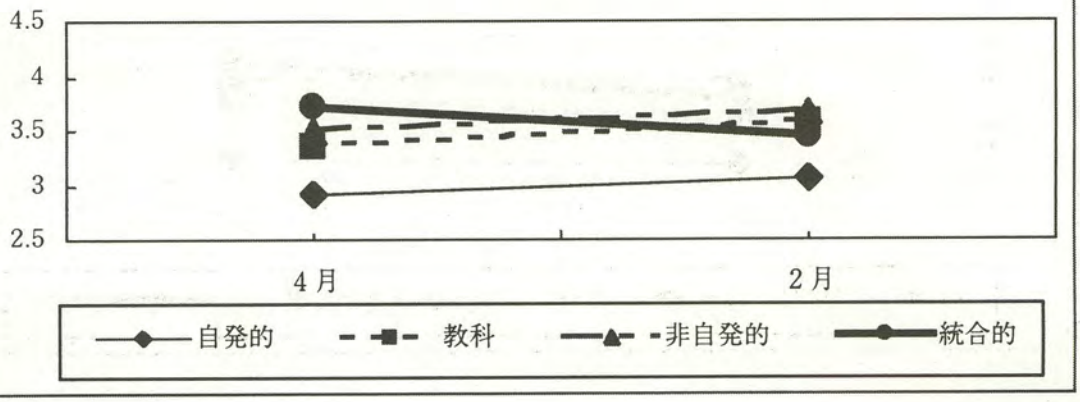


図4　上位群伸びなかった学生

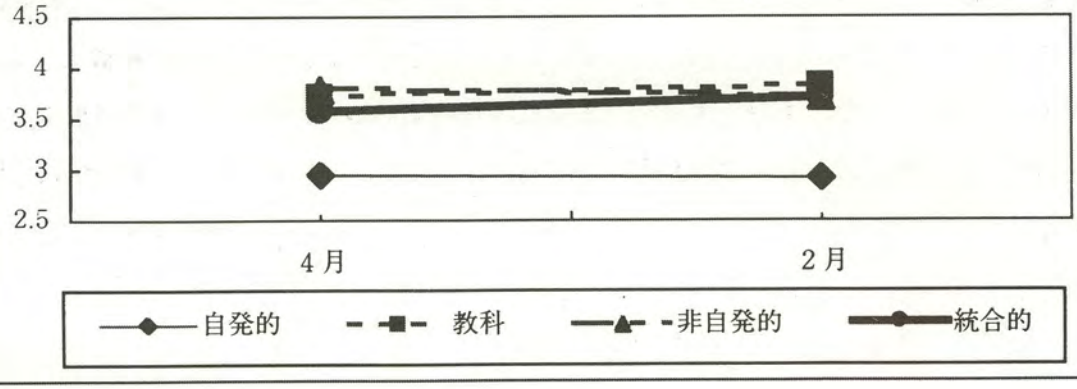


図5　中位群伸びなかった学生

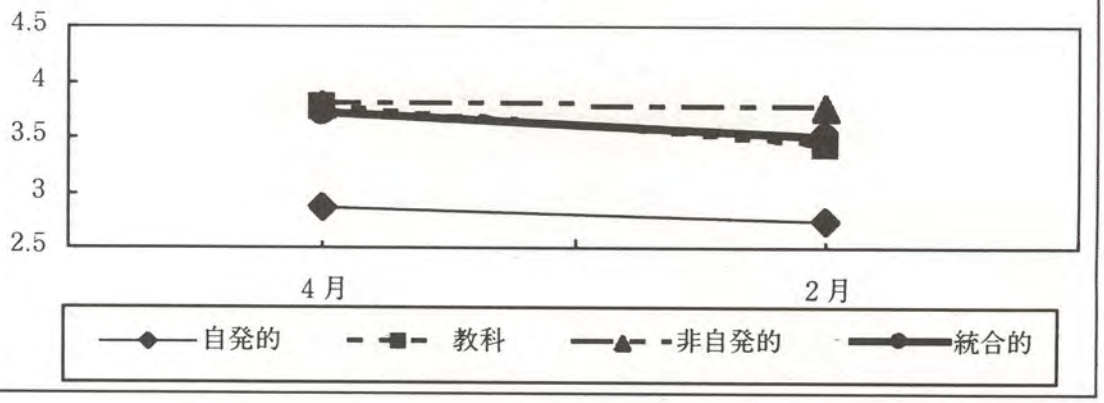
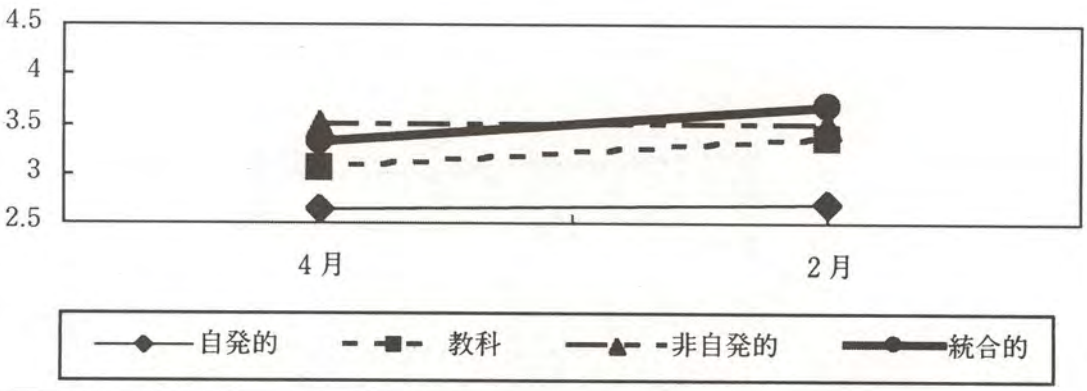


図6　下位群伸びなかった学生



また、各動機づけの強さを群ごとに比較するため、それぞれの項目ごとに図（7～10）にまとめた。自発的言語使用に関しては、1 年を通して上位群の伸びた学習者の強さが突出してはいるが、必ずしもすべての項目でこれらの学生の平均点が一番高い訳ではない。自発性のない言語使用動機は、入学の時点では中位群の伸びなかった学生が一番高く（3.80）、1 年後では、中位群の伸びた学生の平均点（3.91）が最も高くなっている。また、統合的動機は、入学時における下位群の伸びた学生が一番高く（3.73）、1 年後には、中位群の伸びた学習者がその位置（3.82）に代わっている。教科動機に関しては、上位群の伸びた学生の得点が入学時も 1 年後もトップの位置を占めてはいるが、その強さは下がっている点が指摘できる。

図7　自発的言語使用動機6群比較

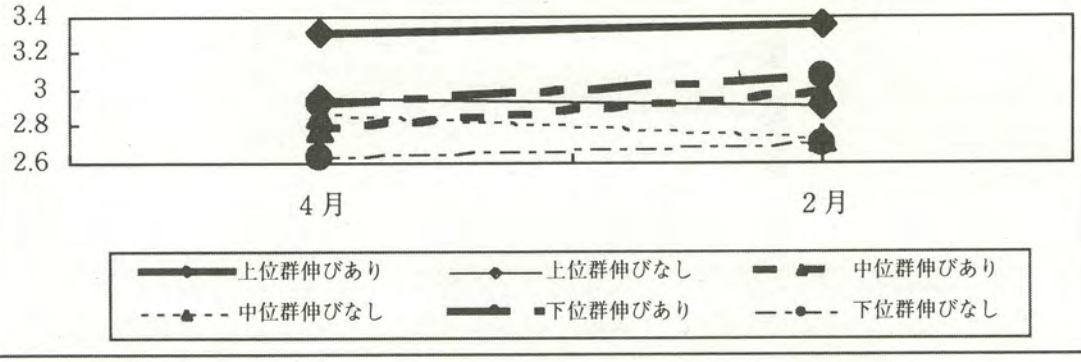


図8　教科動機6群比較

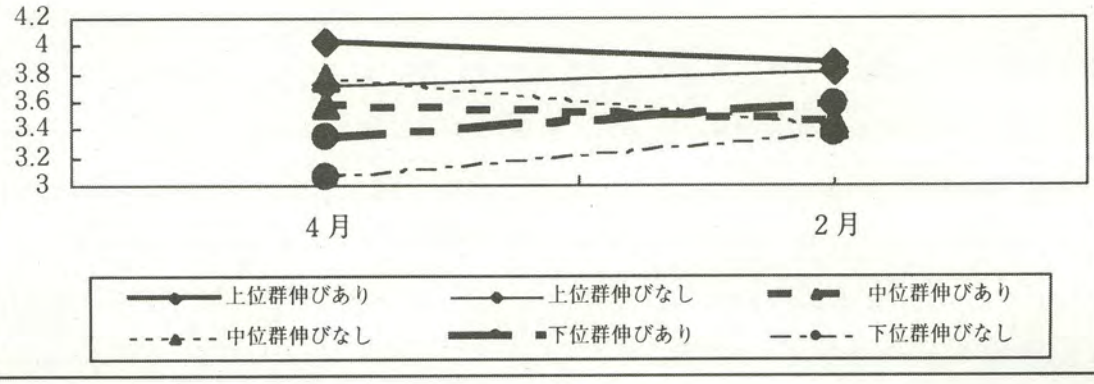


図9　自発性のない言語使用動機6群比較

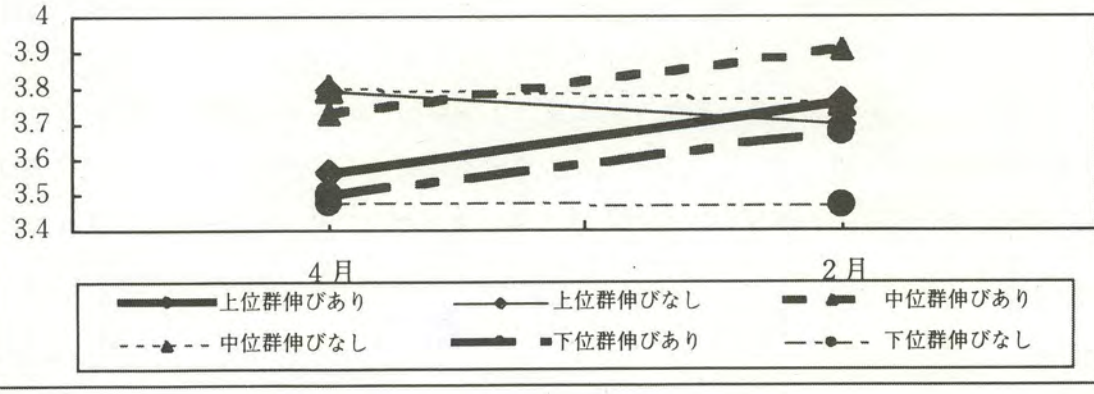
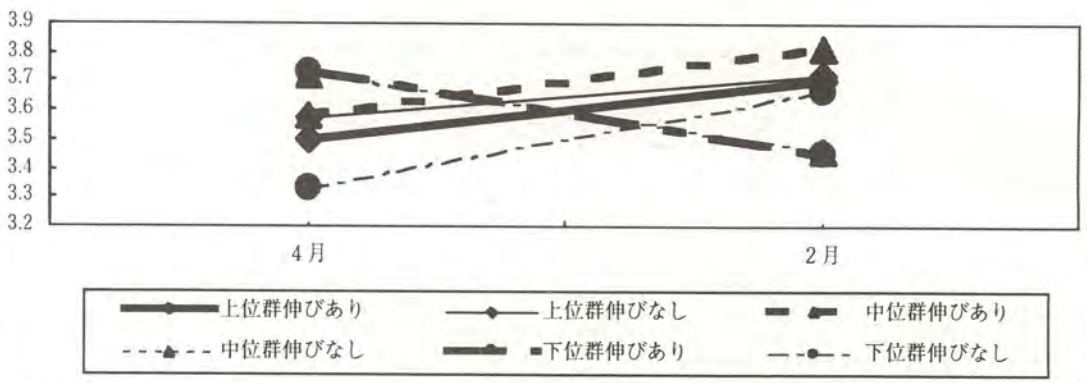


図１０　統合的動機６群比較

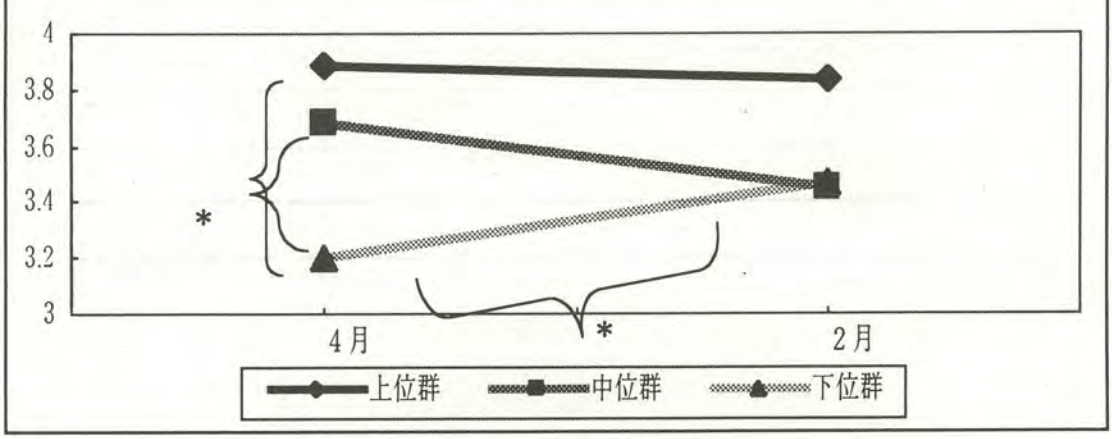


３．２　３群の分析結果

それぞれの動機づけ項目ごとに３群６グループの分散分析を行った結果、教科動機において群とアンケート時期（４月と２月）の交互作用が有意であった（$F_{(2,64)}=3.52$, $p<0.05$）。そこで、まず群と時期の単純主効果を検定した結果、４月の時期と群の間に有意差（$F_{(2,64)}=4.57$, $p<0.05$）があり、この４月に関して３群を多重比較した結果、上位群と中位群の間には有意差は見いだされなかったが、上位群と下位群、中位群と下位群の間にそれぞれ $p<0.05$ の有意差が認められた。これは、４月の入学時点で伸びた、伸びなかったを問わず上・中位群が下位群と比較すると「教科動機」が有意に高い平均点であったということを表している（図 11）。また、下位群に関わる時期の間にも有意な差（$F_{(1,64)}=4.02$, $p<0.05$）が認められた。すなわち、教科動機は下位群の伸びた、伸びなかった学生の両群共、４月より１年後の２月が有意に上昇したことを表している（図 11）。

さらに、統合的動機に関しても二次の交互作用が有意だった（$F_{(2,64)}=5.41$, $p<0.01$）ので、上・中・下位群別に交互作用の分析を進めた。まず、上位群では有意な差は認められなかった。中位群において、単純交互作用は有意だったが（$F_{(1,64)}=4.55$, $p<0.05$）、単純主効果はいずれも有意でなかったので、相反する上昇・下降傾向はあるが、明確に認められるには至らなかった。また下位群においても単純交互作用は有意だったが（$F_{(1,64)}=5.72$, $p<0.05$）、単純主効果は伸びなかった学生の４月と２月の間に有意傾向（$F_{(1,64)}=3.34$）が見られたのみであった。

図11 教科動機



＊ p＜0.05

3．3 考察

上記の分析結果から、入学時及び 1 年後で能力別に有意な差があった動機づけ項目は、英語を物理や数学のように一つの教科として、その科目自体を伸ばしたいという教科動機のみであった。4 月に上・中位群は、この項目が下位群と比較すると有意（p＜0.05）に高く、この時点ではまだ受験勉強の影響を大きく受けているものと考えられる。入試が終わり、その 1、2 ヶ月後の大学入学までにはまだ具体的に「英語」を道具として何かしたいという夢や希望が抱けないのは当然であろう。

一方、下位の学生は、入学時前後に「英語」を伸ばしたいという意欲が低いため、文法力、読解力と極めて相関の高い聴解力（宮原ら、1997）も低い結果に終わったと推測できる。それが、伸びた学生とそうでない学生にかかわらず 1 年間で有意（p＜0.05）に上昇しているのは、いったん大学に入学して、教室内で受験という抑圧や不安が消え、英語に対する見方も変化したのであろう。そして、もう一度「英語」自体をやり直したいと考えを新たにしたということが考えられる。上述の結果から、リスニング力向上には、この教科動機もある程度の強さが必要だということなのかもしれない。言い換えれば、教科動機の動機づけは、リスニング力のレベルによって変化するものと仮定できる。ある程度のレベルに達すると教科動機は弱くなり、英語を手段として考えられるようになるが、能力の低い学生は教科動機がまず上昇し、ある一定のレベルに到達して、その後ようやく英語を道具として何かしようという意欲が湧いてくるのかもしれない。

4. おわりに

英語学習の動機づけが、リスニング力向上に伴い大学入学時と 1 年後ではどのように変化するのかを調査分析した。 統計的に有意差の生じた項目は「教科動機」のみで、入学時における上・中位群は下位群と比較して高い平均点にあること、下位群は伸びた伸びないに関係なくこの動機づけの強度が 1 年間で上昇したことであった。日本の教育制度を研究している McVeigh（2001）は、日本の高等教育を「大学入試のために若さを犠牲にして受験勉強をし、いったん大学に入学すれば、突然学問的興味を失う」（p.29）と批判している。少なくともある程度リスニング力のある学生は、この分析結果が示しているように「英語」という受験科目に対する興味は無くすが、それに代わる自己実現の道具としての「生きた」学習に意欲的になると推測できる。それとは対称的に、英語の得意でない下位レベルの学生は、受験という抑圧や不安から解放されて、もう一度「英語」を勉強しようという意欲を持つようになるものと考えられる。

また、上述したアンケート結果が示しているように、能力に関係なく伸びた学生の自発的言語使用動機と自発性のない言語使用動機がそれぞれ入学時より上昇しているのに対し、上・中位群の伸びなかった学生は、この 2 つの動機づけが下降している。このことから統計的に有意な差は出なかったが、この 2 つの動機づけは何らかの形でリスニング力向上に関わっているように推測される。今後被験者を増やして再度調査分析を行い、これらの学生と大学 2 年目の学生の 1 年間を比較してどのような違いがあるのか、さらに研究を進めていきたい。

最後に小栗（2001）は、横断的に動機づけを分析した研究で、自発性のない言語使用動機を消極的に捉えているが、1 年を通じて見る限りリスニング能力にかかわらず、伸びている学生のこの動機づけがすべて上昇していることから判断すると、この動機づけもリスニング力向上に貢献していることは否定できないであろう。

本稿は、平成 13 年 8 月開催された第 27 回全国英語教育学会広島研究大会で筆者が発表した「英語学習の動機づけ—大学入学時と 1 年後を比較して」に加筆修正したものである。

参考文献

Benson, M. (1991). Attitudes and motivation towards English: A survey of Japanese Freshman. *RELC Journal, 22, 1,* 34－48.

Berwick, R. & Ross, S. (1989). Motivation after matriculation: Are Japanese learners of English still alive after exam hell? *JALT Journal, 11, 2,* 193－210.

Ely, C. (1986). Language learning motivation: A descriptive and causal analysis.

Modern Language Journal, 70, 28－35.

McVeigh, B. (2001). Higher education, apathy and post-meritocracy. *The Language Teacher, 25, 10,* 29－32.

宮原文夫, 名本幹雄, 山中秀三, 村上隆太, 木下正義, 山本廣基. (1997).『このままでよいのか大学英語教育』東京：松柏社

小栗裕子. (2001).「理系学生のリスニング能力にみる動機づけの違い」『英語教育研究』24号, 91－104. 関西英語教育学会紀要

Abstract

This study examined the relationship between motivation and proficiency for studying English at the beginning and end of the freshman year at a public university in Japan. Listening proficiency was assessed concurrently with a motivation survey in the pre-test and post-test formats. Seventy students, divided into three groups according to their listening abilities, participated this study. An analysis of variance (ANOVA) was used to compare the motivational differences with listening abilities.

Only one motivational factor, English, which is seen as a school subject rather than a tool for communication, thus treated the same way as the other subjects like math or physics, was significantly high ($p<0.05$) at the beginning of the high and intermediate students' study. This would mean that shortly after the entrance examination, even the high and intermediate level students could not regard English as a communication tool. However, the motivation in question weakened by the end of the year. On the contrary, it strengthened significantly ($p<0.05$) by the end of the year for the low level students. This implies that after entering university, these students were relieved from their long, stressful and highly anxious learning and wanted to try to learn English again. To conclude, this motivation may be needed over a certain level to see English as a communication tool.

テーオドール・シュトルムの『水に沈む』について
― 父性の敗北と母性の勝利 ―

On Theodor Storm's Novella "Aquis Submersus"
― The Defeat of Paternity and The Triumph of Maternity

深見　茂
Shigeru FUKAMI

以下の小論は、テーオドール・シュトルム Theodor Storm（1817-1888）の最高傑作であると自他ともに認める、短篇小説『アークヴィス・ズプメルズス（＝『水に沈む』［以下、この日本語表題を用いる］）』 *Aquis submersus*（1876）の分析と解釈とを通じ、この作品の現代的意味を読み解こうとする試みである。すなわちその意味とは、社会、または人類における父性原理の危機と崩壊と、母性原理への復帰による再生の模索である。

1

まず、本論文の趣旨に沿ったバイアスを既に若干かけつつ梗概を述べてみよう。この小説は、当時全ヨーロッパ的に流行していた、いわゆる Chroniknovelle「年代記小説」[1]の形式をとっており、まず、語り手である「私」が登場して、自分のギムナジウム（人文高等学校）時代の想出を話し始める。すなわち、「私」の故郷の町（シュトルムの郷里フーズムと想定されている）の北方郊外に見える教会は我が最も懐かしき青春の場である。というのも、その教会の牧師の息子が親友であった関係で、ほとんど毎回のように週末、そこへ遊びに行っていた。そこでの楽しみはいろいろあったが、一番の目的は、やはり村の教会自身であった。特にその中廊に沿って壁に懸けられた二枚の絵の前に「私」はいつも呪縛されたかのように、いつまでも佇むのであった。ところでその内の一枚は、「一人の死んだ子供の普通の肖像画、蒼褪めた手に一輪の睡蓮の花を持たされ、レースの縁取りのついた褥の上に横たわる、五歳ばかりの美しい少年の絵姿」（*SW.*, S. 181）であり、他は、「牧師のカラーを付けたビロードの僧服姿の陰欝な黒い髭男」（*SW.*, S. 181）の肖像画であった。伝承によれば、これは親子で、子供は牧師館横の野原の貯水池で溺死したという。額縁には 1666 年という年号が、また絵の隅には赤色で C.P.A.S.との四文字が記されていた。この四文字の謎解きが本作品の全構成の出発点であるの

に、シュトルム自身も研究者たちも、このモティーフに重点を置きすぎることを戒め、どちらかと言えば軽視しようとしている。[2]しかし、作品の表題となっているところからも明らかなように、事実上、これがこの物語に一種の推理小説もどきの緊張感と魅力とを与え、読者の好奇心をいやが上にも刺激して読み進めさせる原動力となる、きわめてインパクトの大きなモティーフであり、かつ、あえて結論部を先取りして申せば、この謎解きがとりも直さず、この小説のすべてであり、テーマでもあるので、少し詳しく触れておきたい。 すなわち、この四文字の意味が友人の父親である牧師と、「私」を含む少年二人の間で話題になった時、牧師が、そのうちの後半 A.S.の二文字は、以前から **Aquis Submersus**（水に沈みぬ）というラテン語の頭文字と言い伝えられてきていること、しかし前半 C.P.については定説がなく、ある者は **Casu Periculoso**、すなわち（危険な偶発事故により）であると主張するが、余り根拠がない旨の説明をする。「私」：「いや、C.は **Casu** じゃなくて、**Culpa**（罪により）じゃないですか。」牧師：「（罪により）だと。いったい誰の？」「私」はここで、あの隣にかかっていた老牧師の陰欝な肖像画が、頭にひらめいて、たいした考えもなく、「**Culpa Patris**（父の罪によりて）だって、おかしくないでしょう」と叫んでしまい、一同を驚かせる。蛇足ながら、このあたり、いかにも才気煥発なラテン語学校男子生徒の会話らしく、悪くいえば当時の読者層が共有する郷愁と自尊心におもねり（文学社会学はこれを通俗文学の特徴として位置付ける）、よくいえば彼ら知識階級の趣味の高さを示すモティーフであり、たとえばわが国における夏目漱石の初期諸作品のありようを連想させよう。さて、この話題はしかし、その場限りとなり、この二枚の絵が古いオランダの巨匠の優秀な弟子の手になるものとの専門家の鑑定が紹介されて一旦途切れる。

その後、年月がたち、「私」は大学卒業後、再びこの郷里の町に住み着くこととなる。ある日、ラテン語学校に通うこととなった親戚の少年のための下宿探しを頼まれた「私」は、町を歩いていて、一軒の馴染みのパン屋の軒下に、今まで見落としていた「煙と塵の消えゆくがごと、人の子も又かくありなん」（*SW.*, S.384）との碑銘があるのに惹かれて入り、格好の下宿部屋を見付け、契約も成立する。ところがその部屋に懸けられた一枚の絵に、あの教会の絵と同じ死せる少年が、今度は、一人の優雅な老紳士の腕に抱かれた構図で描かれているの発見して愕然とする。聞けば、この絵はパン屋の主人の母の女姉妹、すなわち伯母の所有物で、なんでも、その伯母の三代先の伯父に当たる、百年以上も昔ここに住んでいた一人の画家が描いたものである、という。更に、その画家が残した手記なるものが存在しているとて出された古文書を、その場で「私」が読み耽る、という当時の年代記小説に典型的な外枠物語はここで枠内物語導入の役割を果たして一旦消える。なお、表題の「水に沈む」といい、「煙と塵の消えゆくがごと、人の子も又かくありなん」といい、諸行無常、というバロック趣味の世界観が全作品の基調に据えられていることに私たちは注意しておかねばならない。そのことはつまり、この作品のテーマは実はその逆のところにあることがしばしばであることを、バロック文学に馴染んだ読者に意識させている、ということである。たとえば、バロック期のソネットがその典型であろう。十四行詩のうち最初の十一行までは、当時の教会の教えに忠実な世界像が誇張して述べ

られ、この世の果なさと、永遠の彼岸の麗しさとが歌われながら、おちに当たる最後の三行が綴る詩人の本音は、生々しくも激しいこの世の生と欲情の賛美と吐露である場合が多々あることを私たちは忘れてはならぬ、ということである。事実、これから始まる手記の内容は、愛欲と身分をめぐる血なまぐさいドラマと、その結末の地獄絵とである。このあたりにも、シュトルムの周到な年代記小説の作法に沿った仕掛けが潜んでいるのである。

さて、画家の手記は二部に分かれていた。

まず第一の手記。私、画家ヨハネス Johannes は、早くに父を亡くして孤児となった。(母への言及がない点、この作品と主人公の特徴であるので一言、注意を喚起しておく。) しかし、みずからは貴族でありながら、イェーナ大学で親友であった市民階級出身の同級生の遺児であるとて、私の面倒をわが子以上に見てくれた恩人、ゲルハルドゥス Gerhardus のおかげで、私はオランダの巨匠ファン・デル・ヘルスト van der Helst (周知の実在の巨匠、1613-1670) のもとでの五年に及ぶ修業を終えて、一人前の画家となり、今、すなわち 1661 年の復活節後の第四日曜日の祝日に、晴れて第二の実家ともいうべきゲルハルドゥスの居城へと帰朝報告のため赴くところである。実はこの城には少年時代から招かれて滞在を繰り返すうち、相思相愛の仲となった、主人の令嬢カタリーナ Katharina が自分を待っていてくれるはずなのである。だが、心配もある。それは、カタリーナの兄ヴルフ Wulf が狩猟に明け暮れる、冷酷な乱暴者であり、市民階級出身でありながら父の偏愛を受ける私を憎悪し、且つ軽蔑していたから、歓迎してはくれまいと思われたからである。さらに又、かねて少年時代からカタリーナを追いかけ回していた、ヴルフの悪友で、これまた下品な、隣の領主の息子、クルト・フォン・デア・リッシュ Kurt von der Risch の存在もあるからである。

さて帰ってみると、頼みの綱の恩人ゲルハルドゥスは、ちょうど死去したばかり。跡目を継いだヴルフは早速、妹カタリーナを悪友の貴族リッシュの嫁に定め、私ヨハネスに対し、実家に遺す彼女の肖像画の制作を命ずる。そこで私はゲルハルドゥスの老忠僕ディーテリヒ Dieterich の住居の一室に寝泊りしつつ、令嬢監督のため昔からおり、単に「ウルゼル伯母」 Bas' Ursel とだけ呼ばれている一人の老嬢に牽制されつつも、一族の祖先たちの肖像画がずらりと並ぶ回廊部屋の端にイーゼルを立て、カタリーナの肖像画制作にとりかかる。この間に二人の愛は確かめられ、ここに一つの駈け落ち計画が練りあげられる。すなわち、さしあたり、彼女はプレーツの尼僧院にいる、ゲルハルドゥスの唯一人の妹に当たる尼僧のもとに潜伏し、その間に、私は再びオランダに渡り、生計をたてるための仕事と家庭の準備をしたのち、カタリーナを呼び寄せる、というわけである。

(なお、この間に触れておかねばならぬエピソードが一つある。それは二人の恋愛の意味と、これに敵対する勢力の必然性とを、それぞれ、ロマン派的モティーフと、自然主義的モティーフとで補強する、物語作家シュトルムによる、年代記小説に必須の布石である。すなわち、肖像画回廊座敷に掛けられた数々の絵の中の一枚で、百年以上昔に生きていた一人の四十歳ばかりの女性の肖像画をめぐ

って、カタリーナが以下のような説明を行なう。この女は娘を自分の従兄弟と結婚させようとしたが、娘は身分違いの別の男を愛していたため、これを拒否した。ために娘は母に呪われ、庭の池で溺死（ないし入水自殺）してしまった。以来、この家に禍が起ころうとする時には必ず姿を見せ、窓ぎわをすーっと通って、庭の沼の中へと姿を消す、というのである。グリルパルツァーの『祖先の女』を代表とする、ドイツ・ロマン派得意の「白衣の女」のモティーフであり、ヨハネスとカタリーナの恋愛の悲劇性に運命劇的重厚さを添えるとともに、この小説のテーマである、母性、ないし女性の潜在力を暗示する。さらに、ヨハネスはこの女の小さな灰色の冷たい目付きに、ヴルフに流れる、冷酷と狂気の血の源流を見、百年を経ての先祖帰りであることを悟って愕然とするとともに納得もする。ゾラやイプセンたちに代表される自然主義文学好みの宿命論のモティーフであり、ヴルフの非人間性が遺伝法則によって説明されることによって、カタリーナの兄とは思えぬ人格の出自に、ある種の説得力が加えられている。この全く相反する文芸流派の手法による様式化をあえて併存させる技法に接し、我々は、シュトルムが非常に複雑な文芸思潮の時代に生きていたことを想起するのである。）

6月24日（洗礼者ヨハネの祝日）前の月曜日、私はハンブルクに到着、次の日、肖像画のための額縁を注文し、プレーツの尼僧にカタリーナの書簡を見せ、了承の返信を受け取って夕方、帰路につく。城近くの居酒屋に、枠の受け取り方を依頼するため立ち寄ったところ、ここでヴルフとリッシュに遭遇、彼らの情報網により、私がプレーツの尼僧を訪ねたことが露見する。私は尼僧の返信を奪おうとするヴルフの手をのがれて戸外へ脱出、ヴルフのけしかける獰猛な猟犬（「タタール人」と「トルコ人」という名前が付けられている）に追われつつ、あわやというところで塔に絡んだ木蔦の蔓をよじ登るが、その枝も尽きようというとき、ちょうど窓を開いて姿を見せたカタリーナの手引きで彼女の部屋に逃げ込む。今後の打ち合せをして去ろうとする私を引き止め、「この部屋に入れたからには、妻にして頂戴」（*SW.*, S. 418）と迫る女の欲情に負け、私はその夜は、明け方までカタリーナを抱く。再び窓から脱出して去るとき、私はカタリーナの振る別離の白い手の斜め下の窓に、もう一つの脅かすように指を立てた白い手を発見して愕然とする。［前記エピソードと関わる、年代記小説あるいはバラッド特有の祖先の女の呪いを示すトポスである。］その日、あえて私はヴルフを訪ねて、妹御を嫁にくれるように懇願するが、それへの答は、私の胸めがけて発射されたピストルの弾丸であった。ヴルフの手配で山番小屋でこの重傷の治療を受けた私は、そのままオランダへ向け、女を迎える準備のため旅立つ。仕事や病気などで遅れ、ようやく一年余り経ってからドイツへ戻るが、カタリーナは行方不明。ヴルフを待ち伏せして決闘をしかけ、彼の剣を跳ねとばし傷つけるが、成果はなく、訪ねたリッシュは既にある金持ちの女性を妻としていて、カタリーナの消息は知らない。村では、カタリーナは、僧服の男と、私の三人連れで、いずれかに姿を消したとの噂になっていた。つまり、人々は、私が密かにカタリーナと結婚して姿を消したのだ、と信じ込んでいたのである。

ここで第一の手記は終り、書き手は最後に、自分の妹の息子ヨジーアスの娘、すなわち妹の孫娘に当たる赤子の洗礼式に立ち合うべく、これから旅立つ、と結んでいる。

「私」は部屋に掛けられた画中の老紳士がゲルハルドゥスであることは、もはや疑いを容れないが、その腕に抱かれた、死せる少年はそも何者か、との好奇心に駆り立てられ、第二の手記を手に取る。

あれから五年の年月が流れた 1666 年。私は肖像画制作で生計を立てる一介の画家として、北海にのぞむ小都市［これが、語り手「私」の故郷であり、今住んでいる町、すなわちフーズムと措定される］で役人をしている独身の兄の家［これが語り手「私」が今、手記を読んでいるあのパン屋の家にほかならない］に身を寄せて暮らしている。なお、兄が死んでのち、私がこの家を相続し、且つある家が取り壊された折、その玄関に掲げられていた碑文（「煙と塵の消えゆくがごと、人の子も又かくありなん」）を譲り受けてきて、自分の家の表に掲げた。ヨジーアスよ、我が妹の息子よ。この家とともに、この手記をも私の遺産として受け取っておくれ[3]。

さて、ある時、市の郊外の教会［これが枠物語において「私」が青春時代しばしば訪れたあの教会である］の牧師の肖像画を描くようにとの依頼が来て、私はそれから毎日、その牧師の肖像画を完成させるため、教会の役僧宅にある寺子屋の教室へ通う。教室は夏休みに入って、子供たちが来ないからである。［フーズム近郊の教会に 1666 年当時、寺小屋があったのか、また、当時の寺小屋にも夏期休暇制度があったのか等は未詳。］ところでその牧師であるが、かつてはブランデンブルクの軍隊の従軍僧として、この地方に流れてきた男で、噂によれば軍人も顔負けの乱暴者であった由で、見るからに陰欝な表情の黒い髭をたくわえた人物であった。唯ふしぎなのは、彼がいつも四歳ばかりの、私と同じヨハネスという名前を持った蒼白い顔色の美しい幼児を可愛がって抱いていることであった。ただし、牧師の妻、つまりその少年の母親は姿を見せたことがなかった。しかし或る晩、私は兄と話をしていて、忽然として、あの少年の眼が、カタリーナの眼と同じであることに気付いて愕然とする。次の日、町では、獄死してしまった魔女の死骸の焚刑が執行されるとて、お祭のごとき大騒ぎとなっているのを不快に思ってもいた私は、この残虐な場面から逃れるためもあって、早朝から、あの村へと見物人の流れに逆行して出掛けて行く。しかるにモデルとなるべき牧師も、村人たちを引率して魔女の焚刑の見物にでかけて留守であった。かくて遂に私は、庭遊びをしている少年を見守るカタリーナに再会する。彼女の口から、あの洗礼者ヨハネの聖日の晩、私との一夜の交わりによって私生児を身篭もってしまったため、貴族社会から放逐され、ヴルフの力添えでこの町の教会に職を斡旋してもらう代わりに、彼女を妻として引き取るとの条件を呑んだ牧師に従い、この地に移って来たものであることを私は知らされる。彼女によれば、夫が、自分の実子でもないヨハネスを大層可愛がってくれているのが、唯一の慰めである由。だが、私と彼女とは、再会によって燃え上がった情欲の炎を押さえきれず、互いに抱擁し合い、熱い接吻を交わす。その時、魔女の死体の焚刑見物から帰ってきた牧師の、妻を呼ぶ声が響きわたり、カタリーナは「影のごとくひそやかに」（*SW.*, S. 448）立ち去る。ところがその間に、庭の池の端で遊んでいた少年が、水にはまって溺死していた。

一切を、カタリーナの告白から知った牧師は、私に対し、少年の死顔を肖像画として遺すことを命

じる。それを承知して帰宅した私を待っていた兄は、かのヴルフが狂犬に噛まれて死に、家屋敷は人手に渡るであろう、との記事の載った週刊新聞を見せてくれる。[1666 年当時、フーズム近辺で既に週刊新聞なるものが発刊されていたかどうかは未詳。] やがて完成した死せるわが子の絵の手のなかに、父親からの贈物として、一輪の白い睡蓮の花を描き添え、隅に C.P.A.S.、すなわち、Culpa Patris Aquis Submersus（クルパ・パートリス・アークヴィス・ズプメルズス、「父の罪によりて水に沈む」）の頭字を記したのである。二度とカタリーナに会うことは禁じられて去る私の耳に、海の遠鳴りが、「水に沈む、水に沈む」と響いていた。

以上で第二の手記も終り、「私」が再び登場して、ヨハネスの画家としての野心は虚しく終り、芸術家辞典にもその名を留め得ず、代表作も残らず、その存在は忘れ去られてしまった、と解説し、「水に沈む」と締め括る。

2

さて、この短篇小説において作者シュトルムは、何を描こうとしたのであろうか。彼の意識していた目的、つまり狭い意味での作品の意図されたテーマは何であったのか。本論文は研究史現状報告ではないので、経緯や論証は省略するが、発表当時の諸批評をめぐるシュトルム本人の発言等 [4]から、最も説得力ある解釈の方向をファーベル化して略記すれば次のごとくになろうか。

すなわち、これは、一人のドイツ市民階級出身の画家が、オランダに留学し、この国の自由で進歩的な空気のなかで才能を開花させるが、堕落した無能な貴族階級が支配する後進国ドイツに戻るや、たちまちその封建性の重圧のため、活躍の場も、恋人すらも失い、無名の肖像画家に落ちぶれて生涯を終える物語である、と。これにシュトルム自身の、反貴族的民権運動家としての生涯をオーバーラップさせると、ここにイデオロギー色濃厚な、一篇の立派な「社会小説」が成立することとなる。研究者の言葉を直接聞こう。

> [……] 手記という表現形式や用語法に至るまで出来るだけ歴史に忠実に、17 世紀の世界を再現しようとする作家の一応の姿勢にもかかわらず、そこに働いている作者の意識は、個人の自由と平等の精神が確立し、社会的な存在としての自覚が十分浸透していた 19 世紀のそれであり、そこで扱われている主題も、次にみるように、こうした近代的な自我の達成によって生じた社会的な問題であったと云わなければならない。[5]

つまり、封建貴族に勇ましく反抗する闘士としての民主的市民階級画家、戦う芸術家の雄姿がテーマであるかのごとくになるのである。

1）『嵐が丘』モード（同時代文学の視点）

しかるに今、シュトルムの発言を一旦度外視し、物語から貴族対市民というイデオロギー色をも払拭し、いわば純然たる年代記小説としての様式的観点からのみ分析すると、全く別個の相貌が読み取られてくる。すなわち、一人の孤児が主家の娘と懇ろになり、主家の長男と敵対しつつ私生児をもうける。主家の長男は惨死し、母親か、少なくとも子供の身分に、相続に関してチャンスが望み見られるか、と思われた時、既に子供は溺死しており、あらゆる幸の芽は摘み取られてしまっていた。なお、この女主人公の名前はカタリーナである。

論者ならずとも、ここで誰もが期せずして、かのエミリ・ブロンテ Emily Brontë (1818-1848)の名作『嵐が丘』 *Wuthering Heights* (1847)[6]の梗概を想起するであろう。誤解を恐れず、今あえて周知の物語を要約すれば、一人の捨て子（孤児）が、拾ってくれた主家の娘キャスリン Catherine と懇ろになり、主人の死後、自分を虐待する主家の息子と敵対し、娘の結婚話をきっかけに家を出、やがて裕福な紳士となって帰り来るや、既に他家に嫁いだ恋人である主家の娘に再び接近しつつ、他方、仇敵である主家の息子を堕落、破滅させ、さらには恋人の嫁ぎ先の一族をも破滅させつつ、両家の財産を乗っ取ることに成功する。しかるに最後の詰めの段階に来て、突如、既に子供を遺し昔に死んでいる恋人の幻想に溺れて復讐を忘れ頓死し、両家の財産は再び両家の正統な相続人同士の婚姻によって統合され、彼らのもとに復帰する、とでもなろうか。

私生児誕生のモティーフを別にすれば、女主人公の名前が同一であることを中心に、この二つの物語の類似性は明らかであろう。（更に若干細部に触れるならば、ヒースに囲まれた村と教会堂と牧師館の設定、猛犬とその襲撃のモティーフの使用法、等々がある。）実は、論者は久しく『嵐が丘』のシュトルムへの影響の直接証拠を空しく求めてきた。エミリはシュトルムよりも一歳妹ながら、『嵐が丘』発表（1847）（独訳出版は 1851 年）は『水に沈む』（1876）に先行すること 29 年、影響関係の推定は妥当であると思われるが確証はない。しかし、ここに今一つ、別の、きわめて不安定ながら、その代わり、きわめて文学的な推定方法がある。それは、「年代記小説」としての共通項である。つまり、当時流行の年代記小説のジャンルには、共通のトポスが、つまり共通の約束事があったと推定し得ることである。そして、もしこの仮説が承認されるならば、『水に沈む』の年代記小説としての本質を、『嵐が丘』解釈から敷衍推測できるであろう。

さて、この共通のトポスであるが、今ここにシュトルムがこの『水に沈む』に引き続き、やがて連作し始める年代記小説の一つ、*Eekenhof* 『かしわ屋敷』（1879）を創作するにあたって典拠とした、アーデルベルト・フォン・シャミッソ Adelbert von Chamisso （1781-1838）の『母の霊』*Der Geist der Mutter*[7]なるバラッドから読み取ってみよう。その梗概は次のごとくである。ある一人の伯爵のもとへ、行方不明と思われていた息子が帰って来る。その目的は、自分の遺産を父親から請求するためであっ

た。というのも、父親である伯爵が現在享受している資産すべては、実は彼の亡妻の嫁資に他ならなかった。それゆえ、この夫婦の間に男児が生まれた場合、その子が成人した暁には、その財産はすべてこの男児の所有に帰し、父親は再び無一文となる定めであったからである。その夜、父親である伯爵は、息子が残して行ったピストルを手に、息子を殺害しようと彼の部屋に忍び寄るが、息子を守るべく立ちはだかった亡妻、つまり息子の母親の亡霊に妨害され、逃れ去る。父の自分への殺意と、母の亡霊によるそれの阻止の事実を察知した息子は、その城を捨てて永遠に去って行ったという。

もし、このパターンがある種の年代記小説共通のものであるとすれば、『嵐が丘』の最終場面におけるヒースクリフの復讐の断念、常に何者かを幻視しているかのごとき態度、子供部屋のかつてのキャシーの寝室での笑うがごとき恍惚死、等々は、キャスリン一世による、キャスリン二世とヘアトン防衛のパターン、年代記小説ないしバラッドの決まり切ったパターン、すなわちトポスとして読み解くことができるであろう。そして、このようにして、年代記小説の解釈の相互乗り入れも容認されるとすれば、『嵐が丘』解釈の『水に沈む』への転用も同時に許されるのではなかろうか。

そこで、『嵐が丘』のテーマ解釈であるが、最近の、キャスリンを主人公とみなすフェミニズム派[8]の解釈によれば、たとえば、

> 復讐の完遂を目前に控えて彼［ヒースクリフ］がこの企図を放棄し死ぬので、キャサリンは自分の死後、娘キャサリンを兄の息子ヘアトンに結びつけ両家を統合するように、ヒースクリフに仕向けた格好になっている。まるでキャサリンが望んだことをヒースクリフが代行したかのように、［……］[9]

すなわち、最後に勝利したものは、父性原理によって征服を志すヒースクリフではなく、キャスリン一世とキャスリン二世の協同作業に基づく女性原理であった、となろう。

これを『水に沈む』に転用すれば、カタリーナは、ヨハネス二世を生むことによってゲルハルドゥス一族の継続に成功し、かつ、兄ヴルフの惨死によって、この子をまさに一族の唯一の相続人に仕立て上げ得ることとなる寸前まできていた時、この母性原理は父性によって破滅せしめられてしまう、とでもなろうか。

この場面をつぶさに読み直してみよう。

> 私［画家ヨハネス］はもはや自制することができなくなった。私はいきなり彼女［カタリーナ］をがばと胸に掻き寄せ、まるで鉄のたがねで締め付けるように強く抱き締めたのである。遂に、遂に彼女を再び我がものとすることができたのだ！彼女の眼は私の眼に見入り、彼女の赤い唇は私の唇を受け入れてくれた。私たちは熱く熱く抱き合った。もし、このまま一緒に死ねるものならば、いっそ彼女を殺したいほどであった。やがて、私の眼差しが至福の思いで彼女の顔に見入

っていると、彼女は私の接吻のためほどんど窒息せんばかりになりながら、言った。「永い間、苦しい思いで過ごしてまいりました。おお、イエス様、どうかこのひとときをお許しください！」

——それへの答があった。しかし、それはあの牧師のとがった声であった。私は今はじめてあの男の口が彼女の名前を呼ぶの聞いたのである。その呼び声は、向こうの牧師館の庭のほうから聞こえた。もう一度、さっきよりももっと尖った声が叫んだ。「カタリーナ！」

至福の時は過ぎ去った。絶望の眼差しで彼女は私を見つめ、まるで影のようにひそやかに彼女の姿は消えたのである。(*SW.*, S. 448)

つまり、少年ヨハネスの本当の父親と、名義上の父親とが双方ともに相働いて、カタリーナを少年から引き離し、その監督を疎かにさせて、溺死させるにいたったのである。「クルパ・パートリス（父の罪によりて)」の具体的根拠は明白であり、その罪とは、母性原理による生命維持活動を圧殺したことであると断ずることができるであろう。

2）ラプンツェル・モード（文学的原型態よりの視点）

このような『嵐が丘』モードの観点に導かれて、更に注意深く作品を覗き込む時、今一つ、明瞭に父性原理が母性原理によって導かれて行くモティーフに我々は行き当たるのである。

すなわち、それはこの小説の劈頭、外枠の語り手によって一度、深みに潜む「貯水池」とその危険度において比肩されるべき存在として比較され暗示され（*SW.*, S. 379） たのち、目眩くばかりに蛍の飛びかうあの洗礼者ヨハネの祝日の夜、決定的な意味を背負わされて現われる、木登りのモティーフである。その場面を読み直そう。(なお、小説劈頭において、村唯一の高き樹木として少年たちの登攀欲をこの上なく刺激するポプラの木の描写においても、既に「パラダイスのリンゴの木と同様、我々には禁断の木であった」(*SW.*,S. 379) として、そもそも樹木登攀のモティーフが、「罪」、「危険」、そして「魅惑、誘惑」を打って一丸としたトポスであることが 明白に暗示されていること、また、シュトルムの作品においてこのモティーフが重要な意味をもたされて頻出すること、をこの機会に指摘しておきたい。尚これと「トリスタン」モティーフとの関連については別途考察を要する問題である。)

[……] 実際、今や自分はこの城内では駆り立てられている森の獲物となっているわけだ。若殿ヴルフの犬どもが憤怒もあらわに庭園の壁の外側を疾走するのが既に聞こえてきた。ところが、この壁たるや、昨日見ておいたことだが、猛犬共が飛び越えられないほど高いところばかりでは無かったのである。それに庭園内部に樹木はなく、濃い繁みの生け垣と、突き当たりの家屋に面して亡き御主人の花壇があるのみであった。犬どもの咆哮が勝ち誇った雄叫びのごとく、もう壁の内側に響いた間一髪の瞬間、手近かに、古い一本の木蔦が目についた。それは太い幹を塔にか

らませていたのである。こうして、犬どもが生け垣の中から月明かりの広場に踊り出てきた時には、いかに彼らが飛び上がっても、もはや届かないところまで私はよじ登っていた。ただ肩から滑り落ちたマントだけは彼らの牙で引きずり落とされてしまったのである。

ところで、このようにしがみつきながら、上に行くほど細くなる枝では長くは持つまいと心配して、もっとしっかりした支えは無いものかと、あたりを見回した。だが、まわりに見えるのは木蔦の黒い葉ばかりであった。——その時である、この困窮の極みにあった私は、上のほうで窓をあける音を聞いたのである。そして一つの声が呼び掛けてきた——神よ、この世より私を間もなくお召になるとき、今ひとたび聞かせ給え——「ヨハネス！」とその声は呼び掛けた。低く、しかし、はっきりと私は自分の名前を聞いた。そこで私はいよいよ細くなる枝を伝って上へとよじ登って行った。周りでは眠りについていた鳥たちが驚いて飛び立ち、下からは犬どもが吠えたてている中を。——「カタリーナ！本当にお前かい、カタリーナ。」

だが、既に小さな震える手が差し伸べられ、私を開いた窓へと引き上げてくれたのである。私は恐ろしげに下を見つめる彼女の眼に見入った。

「さあ、いらっしゃい」、と彼女は言った。「犬に引き裂かれてしまうわ。」そこで私はひらりと彼女の室内に飛び込んだ。——しかし私が室内に入ると、小さな手は私を放し、カタリーナは窓辺に置かれた椅子に深々と身を投げ、眼をしっかりと閉じていた。彼女の豊かなお下げ髪は白いネグリジェの膝まで垂れ下っていた。外では庭園の生け垣を越えて登り始めた月光が部屋一杯に差し込み、すべてを隈無く照らし出してくれていた。(*SW.*, S. 416f.)

つまり、画家ヨハネスは、塔の上に住まう美女に手引きされて、蔦をよじ登って室内に入り、美女を我がものとするのである。このモティーフは、民族童話『ラプンツェル』*Rapunzel*[10]にその原型態を持つ、妻問いの一型式である。ところで『ラプンツェル』とはどのような物語であろうか。

ラプンツェル、すなわちサラダ菜と引き替えに女の赤子を手に入れた魔法使いの女ゴーテル Gothel は、その子にラプンツェルという名を与え、塔の上に監禁して育てる。魔法使いの女が塔へ出入りする折はラプンツェルの長い金髪を窓から降ろさせ、それを縄梯子替わりとしてよじ登るのであった。塔の中で歌うラプンツェルの歌声に憧れて、一人の王子が魔法使いの女の真似をしてラプンツェルを騙し、髪を降ろさせて塔に入り、彼女をものにする。しかし、事が露見して魔法使いの女はラプンツェルの金髪を切断して荒野に追放する。それとも知らず、登って来た王子は、美女の替わりに待ち構えていた魔法使いの女を発見して絶望、塔から落ちて両眼とも失明する。数年、荒野をさ迷うた王子は、ある日、聞き覚えのある声を頼りにラプンツェルに再会、彼女の涙によって両眼は再び開け、二人はその間に生まれていた男児と女児の双子とともに幸せに暮らした、という。

まさにヨハネスはラプンツェル＝カタリーナのもとによじ登り、子供を仕込む。彼女を監視する魔法使いの女も欠けてはいない。それは、「ウルゼル伯母」である。すでに彼女は、カタリーナの肖像

画制作中から、彼女とヨハネスとの間に疑念を抱く。

——その時、階段に物音が聞こえてきた。それは、まるで三本脚のなにものかが苦労して階段をよじ登るような音であった。そこで、カタリーナと私とが素早く席に戻り、私が絵筆とパレットをおもむろに手にとった時、ドアが開いて、杖にすがり咳込みながら入ってきたのは、まさかと思っていた、ウルゼル伯母であった。「聞くところでは」と彼女は言った、「額縁の注文にハンブルクへお前さんは行くそうじゃな。それで、なんとしてもお前さんの仕事を一目拝まずばなるまいと思ってな。」

老嬢というものは、色恋沙汰に敏感で、よく若い人たちの脅威とも心労ともなりかねないということは確かに周知の事実である。今まで見たことのなかったカタリーナの肖像画を一瞥するや、ウルゼル伯母はたちまちビクリと震えて、その皺だらけの顔を威厳たっぷりにさっと持ち上げ、私に早速尋ねた、「この絵に描かれているような目付きで、お嬢様はずっとお前さんを見つめていらしたのかい。」(*SW.*, S. 408f.)

こうしてヨハネスの手からカタリーナを奪い去るのである。そして、あの洗礼者ヨハネの祝日の夜が明け、駈け落ちのための待ち合わせ場所にカタリーナが姿を現わさず、ために村へ引き返して見たヨハネスに、老僕ディーテリヒは語るのである。

[……] 一時間ばかり前のことじゃったろう。わしが庭で生け垣の剪定をしている若い者を呼びに行こうと、向こうの、上の階にお嬢様のお部屋のある塔のそばを通った時、そこにウルゼル伯母殿が、若殿と寄り添うように立っておられるのを見た。若殿は腕組みしたまま一言もおしゃべりにはならず、その分、伯母殿が一層盛んにまくしたてながら、あの猫なで声でしきりに嘆いておった。そして、下を向いては地面を指したり、上を見上げては塔に絡んでいる木蔦を指したりしておるのじゃ。——ヨハネス殿、わしは一切なんのことか判らなんだが、しかしじゃ、いいかな、ようく聞きなされよ、伯母殿はその骨と皮ばかりの手で、まるで脅すように若殿の目の前になにものかをつまみ上げて見せていた。わしが近寄って見ると、それは、まさしく今お前様の着てらっしゃるマントに付いているシベリヤ栗鼠の毛皮のきれっぱしでござった。」(*SW.*, S. 423f.)

民族童話の語る、そそり立つ塔からの王子の追放は、失明という事実ともども、去勢ないし不能、すなわち生殖力の剥奪を暗示し、ラプンツェルとの、声を頼りの再会と開眼は、この能力の回復を象徴する。ヨハネスも塔から追われての不能と下積みの四年後、牧師館裏の庭で聞いたカタリーナの声をきっかけに、再び至福の欲情に目覚めるではないか。

何気なく、唯押さえがたい焦燥に心駆られて、寺男のすでに刈り取られた豆畑のそばを通りかかった時、外の原のほうから、なんとも優しい響きの声が、愛情こめて子供に語りかけているのが聞こえてきた。

思わず私はその響きのするほうに近付いて行った。昔ギリシャの異教の神［ヘルメス神のこと］が、その杖で死者たちを下界へ導いたのも、かくやと思われた。［……］すると又、あの優しい声が私の耳に聞えた。「さあ、もうそろそろ［集めた苔を］持ち上げてお運びなさい。ずいぶん沢山集めたじゃないの。はいはい、その間に私がもっと探しておいてあげますから。あそこのライラックの樹のそばに一杯生えてるじゃないの。」

そして、声の主自身が柳の木陰から現われてきた。［……］

「カタリーナ」と私は低い声で呼び掛けた。（*SW*., S. 445f.）

もはや疑いはあるまい。『水に沈む』の中心場面は、ラプンツェル・モードによって彩られており、その意味は、母性原理の声に導かれて父性原理がその力を回復することの象徴である。従って両父性の「罪」は、ここでもそれぞれ、おのれの側からの「カタリーナ」との呼び声によって、母性原理の指導、母性原理への服従を拒否し、破壊したところにあろう。

3）魔女・聖女モード（ポスト構造主義的文学理論の視点から）

最後に今一つ、今日の研究者の視点からは疑うべくもなく、母性原理と父性原理との葛藤を表象する象徴でありながら、発表当時においては、作家自身も友人たちも、いささか戸惑いを覚えた、重要なモティーフを指摘しておかねばならない。すなわち、それは魔女処刑のエピソードである。既に1）の梗概の章のところで詳述したように、物語の最終場面直前、画家ヨハネスが早朝から牧師館へ出向いたこと、しかも肝心のモデルである牧師自身は不在であったこと、の動機付けに、獄死した魔女の死体の焚刑の執行という事件が挿入されている問題である。このモティーフが物語の筋を推し進める単なる機能的な役割しか果たしていない訳はあるまいとの予感は、誰も持ったであろう。それ故、現代の研究においても、これを一般人の魔女信仰というバロック時代の社会的蒙昧と、これを批判するヨハネスとその兄の、「十八、十九世紀」的「近代的ヒューマニズムの精神」[11]との対比を浮き彫りにすることにより、社会小説としての性格をより明確にするものとの解釈も行なわれている。

しかしながら、こうしたイデオロギー的階級闘争的解釈に食傷し、ポスト構造主義をも経てきた二十一世紀の我々は、むしろこれを、あの牧師による聖母マリア像廃棄のモティーフと連携させて解釈することを試みるべきであろう。すなわち、黒髭牧師の教会には、昔から芸術的にすぐれた聖母マリアの木像があったのだが、

この牧師は陰惨な雰囲気なのだが、にもかかわらず、その顔に私は芸術的魅力を感じたので、最大の努力を払いましょうと約束したのち、私の兄が称賛していた聖母マリアの木彫像のことを尋ねてみた。

ほとんど侮蔑的なまでの微笑が、牧師の顔の上を走った。「一寸おいでになるのが遅すぎましたな」、と彼は言った、「教会から放り出させた時に粉々になってしまった。」

私は愕然として彼を見つめた。「救世主の御母を礼拝堂に置くことは認めがたいとおっしゃるのですか。」

「救世主の御母がどのようなお顔であったかは」と彼は答えた、「伝えられてはおらぬでな。」[……]

[……] それから彼は激越な調子で言った。「[……] マリアの像などというものは皆、欲情とローマ・カトリック派との乳母に他ならない。芸術はいつの世でも、現世に媚を売ってきた。」(*SW.*, S. 437f.)

つまり、この牧師は魔女をも聖女をも退け、廃棄している点に我々は注意しなければならぬ。なぜならば、たとえばジュリア・クリステヴァ Julia Kristeva のポスト構造主義理論によれば、

秩序と汚れ

以上が個体発生的にみたアブジェクシオン [アブジェ(おぞましきもの)を棄却すること]の仕組みだが、これを系統発生的にみるとどうなるか。アブジェクシオン以前の状態(カオス、セミオティック)は人類の動物的段階に相当し、アブジェクシオン以後の状態(象徴秩序、サンボリック)は人間のつくりあげる文化に相当する。前者は母親的、後者は父親的なものであるから、人間は母親的なものを抑圧し、捨て去って、文化という父親的なものをつくりあげたということになる。「〈母親〉から離れること、〈母親〉を恐怖としてコード化する度合いは文明の尺度になっている」のである。山口昌男氏の用語でいえば、男性は「中心」、女性は「周縁」ということになる。

人間の文明すなわち秩序は男性的・父性的であって、母性的・女性的なものを抑圧して成立しているということになる。だが、女性的なものはこの父権制の中に噴出してこようとし、秩序を脅かす。それにたいして秩序は、その女性的なものを「汚れ」「不浄」として排除しようとし、またあるときはうまく取り込もうとする。たとえばキリスト教は、女は男に従うべきだという倫理によって女性的なものを抑えこむと同時に、聖母マリアを通じて、女性・母性を聖なるものとして讃え、その反面で、魔女裁判によって女性的なものを撲滅しようとしてきたのである。

このような「秩序」対「汚れ」という二項対立は、人類学者メアリー・ダグラスの『汚穢と禁忌』の大きな影響を受けている。[12] [圏点は論者]

もはや論者が付け加える言葉など必要ない、簡潔にして要を得た解説である。

つまり、「魔女の処刑」によって母性的なものを撲滅しようとするのみならず、聖母マリアをも「廃棄」しようとする精神は、人類の文明が依って立つ基礎そのものを否定してしまうこととなる。父性原理による母性原理の全面否定は、父性原理そのものの破滅を招来する。これこそが、『水に沈む』において牧師が登場し、魔女・聖女を共に廃棄していることの意味であり、「父の罪により」の持つ、最も包括的且つ根源的意味であろう。

3

以上において我々は、この作品が、同時代文学の観点からも（『嵐が丘』モード）、文学的原型態的観点からも（ラプンツェル・モード）、現代文学理論的観点からも（魔女・聖女モード）、父性原理による母性原理の抹殺と、まさにそれを通じての、父性原理の自己存在基盤の喪失と自己崩壊との提示をテーマとする年代記小説であることを見てきた。何度か引用した平田論文は、この作品を「社会小説」であり、ここで扱われる主題は社会的な問題であるとしていた。広い意味でこれは当たっているのだが、しかしその正体は、平田論文が主張しているがごとき、イデオロギーや、階級の対立に還元されるような表層的社会問題ではなく、広く且つ深くヨーロッパを覆っていた文明的危機という意味での社会問題なのである。

十九世紀ヨーロッパという父性社会は、母性原理の全面的抹殺という「父の罪により」「水に沈」もうとしていたのである。しかも「水」は「根源」の象徴でもあるから、「母性世界」の究極的勝利と、「父性世界」のそれへの帰還をも暗示していることを忘れてはなるまい。ところで、やがて本当に「水に沈」んでしまった二十世紀ヨーロッパ文明をつぶさに体験し来たって今、二十一世紀の戸口に立つ我々は、未だ十九世紀半ばにありながら、早くもその詩的直観力によって来たるべき時代を予見し、その問題点を年代記小説という芸術形態として提示してくれた、という意味において、間違いなくこの作品が、シュトルムの自他ともに認める最高傑作であることに納得するのである。

テクスト：Theodor Storm, *Sämtliche Werke in vier Bänden*. Hrsg. von Karl Ernst Laage und Dieter Lohmeier. Deutscher Klassiker Verlag, Frankfurt am Main; Band 2: *Novellen 1867-1880*. Hrsg. von karl Ernst Laage, 1987; S.378-455 (zitiert als *SW*.)

註

1）　シュトルムは、この作品の後に、数篇の典型的年代記小説を発表している。研究者たちは、このジャンルに属する作品として、特に、*Eekenhof*（1879）『かしわ屋敷』、*Zur Chronik von Grieshuus*（1884）『グリースフース城年代記考』、*Renate*（1878）『レナーテ』、*Ein Fest auf Haderslevhuus*（1885）『ハーゼルスレウフース城の婚礼』等を挙げる。

2）　Vgl. *SW.*, S. 928f. また研究論文については、たとえばとりわけ、平田達治、*シュトルムの短篇小説『水に沈む』――そのモティーフと構成を中心に――*　言語文化研究　II　大阪大学言語文化部　1976　31-56 ページ。特に、38-41 ページ　参照。尚、本論はこの平田論文に対するアンティテーゼを主目的として構想されたものであり、その意味で平田論文から受けたさまざまの学恩に深謝したい。

3）　ここで年代記小説特有の読者泣かせの系譜迷路がはじまる。すなわち、今のパン屋と、手記の中で触れられるヨジーアスとその孫娘らとの関係である。種々考えられて複雑だが、おそらくは、パン屋の母の姉妹が嫁いだ先が、このヨハネスの弟の一統ではなかろうか。つまり、伯母の主人が第一手記の最後に触れられている、生まれたての孫娘の息子に当たるのではなかろうか。さもなければ、パン屋の母もヨジーアスの直系となり、それ故、パン屋は、「伯母の三代前の伯父」などと回りくどく言わず、「自分の四代前の伯父」とでも表現するであろうからである。ただしこの推測は誤っているかも知れない。

4）　これは、すでに註 2）に関連する本文で示唆したようにシュトルム自身の諸々の発言の趣旨は、「『罪』の問題がこの作品の中心テーマではない」、との一事であり、その経緯を特に詳細に論じた研究が同じく註２）で触れた平田論文である。

5）　平田達治　*前掲書*（＝註 2）　34 ページ。

6）　テクストは　Nestor, Pauline (ed.). *Wuthering Heights*. Harmondsworth: Penguin 1955 により、邦訳書としては、阿部知二（訳）　*『嵐が丘』*（上・下）　岩波文庫　1960-1　初版　を利用した。

7）　Vgl. *SW.*, S. 1031ff.

8）　廣野由美子　*「嵐が丘」の謎を解く*　創元社　大阪　2001 年 4 月　15 ページ　参照。

9）　林　完枝　*嵐が丘からマザリング・ハイツへ*　リーディング　第 5 号　東京大学大学院英文学研究会　1985 年 2 月　36 ページ。

１０）　テクストは、*Grimms Märchen*. Deutscher Klassiker Verlag, Frankfurt am Main o.J. (Copyright 1985), S. 75ff. による。

１１）　平田達治　*前掲書*（＝註 2）47 ページ。

１２）　鈴木　晶　*フロイト以後*　講談社　東京　1999 年 4 月　185 ページ以下。

Abstract

We discover a theme of "The Defeat of Paternity and The Triumph of Maternity" in the historical novella "Aquis Submersus," or "Sunk in the Water"(full title of epitaph: "Culpa Patris Aquis Submersus," or "Sunk in the Water through the Fault of the Father") by Theodor Storm (1817-1888), which Storm regarded as his most successful and valuable work. We illustrate this theme through an analysis of three motifs: the "Wuthering Heights" motif, i.e., the extolment of legitimate motherhood, crossed by the love affair between the legitimate daughter and the illegitimate foundling; the "Rapunzel" motif, i.e., the preservation of the sanctity of motherhood, crossed by the love affair between the ward held in the tower and the intruder who attempts to scale the tower; and the "Witch & Holy Maria" motif, i.e., the assertion of the maternal as a Janus-face, seen by the paternal society as a force both foe and saint. Maternity paradoxically triumphs over the might of paternity even as this negates and destroys all these three maternal faculties; a process that anticipates the destiny of the "founding"civilized world in the 20th century.

Jeanne d'Arc et le *Journal d'un curé de campagne* de Georges Bernanos

Ritsuko NAGASHIMA

Quand Bernanos mentionne des personnages historiques dans ses œuvres littéraires, ce qui n'est pas fréquent, il semble faire assumer à l'image de ce personnage un sens symbolique qui est étroitement lié au thème de l'œuvre. Dans le *Journal d'un curé de campagne*, figurent deux noms de personnages historiques : ceux de Martin Luther et de Jeanne d'Arc. Le premier est mentionné par le curé de Torcy. Sa réflexion sur le Réformateur est celle de Bernanos lui-même, et elle prend une importance considérable dans ce roman où il est particulièrement question de l'institution de l'Eglise. Le second apparaît deux fois dans ce roman : la première fois, c'est encore le curé de Torcy qui en parle, et la deuxième fois, Bernanos le fait prononcer à un personnage Olivier de Sommerange, au cours du dialogue entre celui-ci et le curé d'Ambricourt. Cet entretien entre le curé et le soldat tourne autour d'une question fondamentale pour la chrétienté, la question dont Jeanne d'Arc est le symbole.

Dans cette étude, nous envisagerons l'idée de Jeanne d'Arc que conçoit Bernanos dans ses œuvres de combat, et ensuite nous essayerons d'élucider le rôle de l'image qu'évoque ce nom dans le roman.

Image de Jeanne d'Arc pour Bernanos

Il faut noter qu'après la guerre de 1870, Jeanne d'Arc était devenue un thème favori pour les hommes de lettres. « Monarchistes et républicains, catholiques et laïcs favorisaient à qui mieux mieux le culte de Jeanne »[1], note Le Goff, des alentours de 1900. Jeanne est proclamée bienheureuse en 1909, et puis sainte et patronne de la France en 1920.

Pour les nationalistes républicains, Jeanne est la « bonne Lorraine », « paysanne » ou « bergère ». Ernest Lavisse écrit dans un manuel scolaire d'Histoire de France :

---

[1] *Encyclopédie Universalis*

> Jeanne d'Arc est née à Domrémy, en Lorraine. Ses parents, ses frères et leurs amis aimaient de tout leur coeur la pauvre France. Tout enfant, Jeanne pensait continuellement à nos malheurs, et elle crut entendre des voix, dans le ciel, qui lui commandaient d'aller trouver le roi et de combattre pour lui.
>
> [...]
>
> Elle monta sur le bûcher le 30 mai 1431. Elle mourut héroïquement et fut dès lors considérée par tout le peuple français comme une martyre de la patrie française. Le roi de France n'avait rien fait pour délivrer celle qui lui avait rendu son royaume.
>
> [...]
>
> C'est la foi de Jeanne d'Arc en la France qui a sauver la France. L'histoire de cette paysanne héroïque doit se terminer par un cri: Vive la France![2]

Nous entrevoyons ici la frénésie de patriotisme et de populisme de l'époque que partage l'historien, et la manière dont l'histoire de Jeanne d'Arc est exploitée.

D'autre part dans les manuels des écoles religieuses, si la description de son exploit aux combats et des « Anglais chassés de France » est la même, l'accent est mis sur la religiosité de Jeanne. Nous lisons dans le récit du supplice de Jeanne :

> La condamnée continue, pendant plus d'une demi-heure, d'épancher l'amour divin qui la consume en d'admirables prières. Elle demande une croix. Un anglais, pris de compassion, en fait une avec un bâton, et la lui donne. Elle la reçoit dévotement, la baise et adresse de touchants appels à la miséricorde du Sauveur, mort sur la crix pour notre rédemption; [...].
>
> Cependant la fumée s'élève, le bois pétille, la flamme terrestre environne le chaste corps de la Pucelle, et au même moment le feu divin de l'extase embrase son coeu: elle vit les anges, elle voit les Saintes, elle comprend la délivrance. « Saint Michel! Saint Michel! Non, mes voix ne m'ont pas trompée, ma mission était de Dieu. Jésus! Jésus! » La douleur lui arrache un dernier cri dangoisse: « De l'eau! de l'eau bénite! » Mais bientôt elle redit avec une énergienouvelle: « Jésus! Jésus! » Et elle meurt en criant: « Jésus! »[3]

---

[2] LAVISSE, Ernest: *La Nouvelle deuxième année d'Histoire de France*, Armand Colin et Cie, 1895

[3] GIRARD, M: *Nouveau cours d'Histoire de France depuis les origines jusqu'à nos jours*,

Pour les auteurs de ces manuels religieux, l'évéque Cauchon qui a présidé le tribunal était tout simplement « vendu aux Anglais ». Il n'est donc pas question pour eux de discuter la responsabilité de l'Eglise elle-même dans cette affaire.

La façon dont Bernanos concoit l'histoire de Jeanne est particulière: elle est très écarté du passion nationaliste des républicains, mais différente du point de vue officiel des catholiques du XIXe siècle.

Bernanos rédige en 1929 *Jeanne, relapse et sainte*, et depuis, le nom de cette sainte revient sans cesse dans sa méditation.

Son premier article sur Jeanne contient déjà tous les éléments de ses pensées sur elle, pensées qu'il reprendra plus tard dans ses écrits. Dans certains écrits, il cite même mot pour mot un passage de *Jeanne, relapse et sainte*[4].

Pour Bernanos, Jeanne est, comme Saint Louis, tout d'abord un personnage qui représente la Chevalerie, ce qui consiste la différence entre Péguy et lui, puisque pour Péguy, Jeanne était « peuple et chrétienne et sainte », et non pas « chevaleresque » — et surtout de la chevalerie française qui reste vivante dans la monarchie chrétienne, comme il le dit dans Nous autres Français :

> Le monde antique a divinisé ses maîtres. La Chrétienté chevaleresque a inventé le seigneur légitime, le souverain, le roi consacré de Sainte Jeanne d'Arc.[5]

C'est pourquoi selon lui « une Jeanne d'Arc espagnole ne saurait se concevoir »[6], puisqu'en Espagne, la chevalerie a cédé la place à la monarchie absolue qui a donné libre cours au réalisme le plus implacable, comme on le reconnaît dans l'Inquisition.

Jeanne semble incarner pour Bernanos plus que Roland ou Bouillon, et parfois même plus que Saint Louis, cette chevalerie que garde la tradition française, dans sa forme la plus pure. Dans les toutes dernières pages impressionnantes des *Grands Cimetières sous la lune*, Bernanos rapproche les sorts de ces deux saints:

Librairie Delhomme et Griguet, 1898, pp.107-108

[4] Voir *LA*, II, p.27

[5] *NAF*, I, p.764

[6] *GCSL*, I, p.447

> Car un Saint Louis même, ce roi chevalier, ce roi franciscain, la médiocrité peut-elle encore essayer de l'aborder de biais, le biais de l'intérêt professionnel, du devoir d'état, que sais-je? Ils [les grands Universitaires du XVe siècle] reniflent, ils flairent, distinguent, argumentent, et finalement le justifient. Certes, le saint est depuis longtemps hors de leurs mains, au coeur triomphant de l'Eglise, mais ce grand beau jeune homme français aux cheveux blonds, aux yeux clairs, au courage enfantin, c'est aussi un prince, un prince qui bat monnaie, rend justice, un administrateur du temporel, enfin! A ce titre, du moins, il leur appartient peut-être. Au lieu que la sage Lorraine la Lorraine irréfutable est tombée un jour au milieu d'eux, sans nom, sans héritage et sans titre, tout héroïsme, toute pureté, la chevalerie elle-même tombée du ciel, ainsi qu'une petite épée brillante.[7]

N'ayant aucun titre dans ce monde, fille du peuple, elle échappe à toutes les contraintes qu'exigerait la politique temporelle si elle était insérée dans un système terrestre. C'est dans sa pleine liberté, et avec toute son innocence qu'elle a pu vivre la chevalerie, car « elle n'a jamais obéi qu'à une loi simple, si simple qu'on ne lui trouverait sans doute un nom que dans le langage des Anges : se jeter avant »[8]. Elle mérite donc qu'il l'appelle la « fine fleur de la chevalerie »[9].

Le deuxième élément de ses pensées sur Jeanne se manifeste surtout dans la description de son procès. *Jeanne, relapse et sainte*, était presque entièrement consacré à la méditation du procès de Jeanne, dans laquelle il cite abondamment *Le Procès de condamnation de Jeanne d'Arc* de E. Champion. Bernanos voyait dans le procès de Jeanne, plutôt que la trahison de ses frères, une opposition — l'opposition entre elle et ses juges, celle entre « l'enfance » et « la vieillesse » avec toutes les connotations bernanosiennes des termes. Comme le note Jacques Chabot, dans *Jeanne, relapse et sainte*, Bernanos reprend « un thème capital de sa création romanesque antérieure, [...], celui de l'enfance martyrisée par la vieillesse »[10]. Jeanne représente l'enfance avec toutes ses caractéristiques : l'innocence, la

---

[7] *GCSL*, I, p.574

[8] *Ibid.*, I, p.578

[9] *JRS*, I, p.30; *LA*, II, p.27

[10] *Note*, I, p.1352

pureté, la volonté de courir le risque ; et ses juges, la vieillesse, avec les siennes : la ruse, l'avarice et la politique. Voici comment il rattache à Jeanne les qualités enfantines dans Nous Autres Français :

> Et puis l'Ange de la France, la sage petite bergère du pays de Greux, si « bonne à voir et à entendre », avec sa huque de drap d'or sur son armure blanche, et son regard sans peur, est entrée là-dedans la première. Elle ne se souciait pas plus de ces « hurrah! » que d'une mirabelle. La France sera toujours sauvée par les enfants.[11]

Plus tard dans la *Lettre aux Anglais*, il note :

> Lorsque, le 23 février 1429, la petite Jeanne fit avec Jean de Metz et Bertrand de Poulengy sa première étape vers Chinon, les élites françaises s'étaient aussi ralliées à l'ennemi, au Nouvel Ordre, à la Nouvelle Europe, au *Lebensraum* de l'Angleterre des Plantagenets. Pour le moindre bachelier en théologie ce n'eût été qu'un jeu de lui démontrer, en syllogismes irréprochables, que l'intérêt de Dieu, de l'Eglise, des honnêtes gens, des bons principes, était qu'on se soumît au vainqueur. Mais, grâce au Ciel, ni Jeanne ni notre peuple n'en savent assez long pour discuter avec les casuistes. C'est pourquoi finissent toujours par leur parler un jour à l'oreille dans le silence du coeur, les Saints et les Saintes de la Patrie.[12]

Le vrai lieu de confrontation de ces deux partis étant évidemment le tribunal de Jeanne, Bernanos évoque la scène de procès dans ces termes dans *Les Grands Cimetières sous la lune* :

> Fille indocile, qui déserta la maison paternelle, coureuse en habit d'homme des grands chemins ouverts sous l'averse, des routes fuyantes pleines de querelles et d'aventures, capitaine ombrageux, rétif — et quoi encore? un page, un vrai page, et qui aimait tant les chevaux, les armes, les bannières, un page

---

[11] *NAF*, I, p.622

[12] *LA*, II, pp.32-33

aumônier, prodigue, magnifique (quand ma caissette est vide, le roi la remplit, disait-elle), un vrai page, avec ses gentils chapeaux ronds et sa tunique de drap d'or, et puis enfin quelques semaines, parmi ces vieux renards, ces professeurs de morale, ces casuistes, dans l'air épais de la salle d'audience, le petit théologien paradoxal qui en appelle à Dieu, à ses saints, à l'Église Invisible tandis que chaque question sournoise vient l'atteindre en pleine poitrine, la jette à terre toute ruisselante d'un sang sacré, notre sang, nos larmes, ô tutélaire, ô bien-aimée![13]

La confrontation de l'enfance et de la vieillesse a pourtant un autre aspect. Nous sommes tentée de dire que Bernanos la considère aussi comme la confrontation du Moyen Age et de la Renaissance. Jeanne représente le Moyen Age, mais ses ennemis n'ont rien à envier aux réalistes de la Renaissance. Il dit en effet de ses juges dans *Le Chemin de la Croix-des-Ames* :

> Au début du XVe siècle, les réalistes avaient beau jeu de prouver que l'intérêt immédiat de la France eût été de se fondre avec l'Angleterre en un vaste empire qui eût asservi l'Europe. C'était alors la thèse des grands bourgeois et des intellectuels, c'est-à-dire de la plupart des gens d'église, des esprits pratiques, pondérés, qui déploraient l'exaltation de Jeanne d'Arc, l'aveugle fidélité des petites gens pour un dauphin sans soldats et sans argent. C'eût été assurément la thèse de Machiavel, s'il avait vécu cent ans plus tôt.[14]

En outre, dans *Nous autres Français*, Bernanos imagine une scène entre Jeanne et Saint Ignace de Loyola. Le nom du fondateur de la Compagnie de Jésus évoque pour Bernanos, toutes les qualités des « gens de l'Eglise » réalistes de la Renaissance.

> On a beau se dire que tous les chemins sont bons qui mènent à Dieu, il est difficile de ne pas sourire en pensant qu'une telle phrase, incessamment répétée, a pu faire de l'officier de Pampelune, un saint. Qui de nous, farceurs, songe à conquérir l'univers. Quelle drôle de conception de la gloire ! Il n'est que trop

---

[13] *GCSL*, I, pp.574-575

[14] *CCA*, II, p.219-220

> facile, sauf la grâce de Dieu, d'imaginer l'espèce de réception que le gentilhomme castillan, sec comme un sarment, jaune comme la bile, hanté par la mort et l'enfer, eût faite à Jeanne d'Arc, si la pauvre bergerette fût née assez tard pour lui confier ses projets ambitieux. Délivrer Orléans, mener le dauphin jusqu'à Reims, jeter les Godons à la mer, vanité des vanités ! Tenir tête aux docteurs, faire des réponses insolentes à l'Inquisiteur de la Foi, s'en « remettre à Dieu plutôt qu'aux gens d'Eglise », tenir la parole donnée, s'instituer juge de la légitimité des princes, quand le Saint-Siège lui-même se garde de prendre parti, quelle présomption sacrilège ! Cette présomption est la nôtre.[15]

Autant d'exemples qui montrent que dans l'idée de Bernanos, les époques ne se distinguent pas l'une de l'autre seulement selon l'ordre chronologique. Les esprits de l'époque qui sont typiquement remarqués dans une certaine tranche de temps, ne naissent, ni ne disparaissent tout à coup, mais vivent toujours dans un courant latent.

Jeanne d'Arc et le *Journal d'un curé de campagne*

La première mention de Jeanne d'Arc, nous l'avons dit au début, se trouve dans le discours du curé de Torcy où il raconte l'entrée de Jésus à Jérusalem. Celle-ci est, selon Torcy, bien une entrée triomphale, mais pour les enfants.

> « [...] c'est un triomphe pour enfants, tu ne trouves pas? Une image d'Epinal, avec le petit de l'ânesse, les rameaux verts, et les gens de la campagne qui battent des mains, une gentille parodie, un peu ironique, des magnificences impériales. »[16]

Torcy-Bernanos la compare aux entrées majestueuses des généraux de l'Empire romain, qui sont toujours dans l'imagerie de Bernanos aux antipodes de l'univers des enfants. La première mention de Jeanne d'Arc est dans la partie qui suit le passage cité au-dessus. Le curé de Torcy continue :

---

[15] *NAF*, I, pp.626-627

[16] *JCC*, ŒR, p.1193

> « Notre Seigneur a l'air de sourire. [...] il nous dit : « Ne prenez pas ces sortes de choses trop au sérieux, mais enfin il y a des triomphes légitimes, ça n'est pas défendu de triompher, quand Jeanne d'Arc rentrera dans Orléans, sous les fleurs et les oriflammes, avec sa belle huque de drap d'or, je ne veux pas qu'elle puisse croire mal faire. »»[17]

Jeanne d'Arc apparaît donc pour la première fois, dans le contexte de « l'enfance bénie et glorifiée ».

La mention de Jeanne d'Arc apparaît pour la deuxième et dernière fois dans le dialogue entre le curé d'Ambricourt et Olivier de Sommerange. Ce dialogue est précédé de la très belle scène de la promenade à moto de ces deux personnages, et l'ensemble de ces deux passages forme l'épisode de la « rencontre » avec Olivier.

Cette scène est placée juste avant le départ du curé pour Lille, où il mourra après avoir consulté le médecin qui diagnostiquera un cancer. C'est donc son dernier moment de joie et de gloire avant son calvaire. Avec cet indice, le lecteur attentif devrait remarquer, comme le note Hans Aaraas[18], le parallélisme entre cette scène et l'entrée à Jérusalem de Jésus, ou plus exactement, cet événement interprété par le curé de Torcy dans le dialogue entre celui-ci et le curé d'Ambricourt dont nous avons cité une partie plus haut. C'est bien l'aspect de l'entrée à Jérusalem comme triomphe pour enfants que la promenade à moto retrace. Le curé raconte cet événement qui a un sens particulier pour sa vie — et probablement pour sa mort — dans les termes ci-dessous.

> Je viens de faire une rencontre. Oh, une rencontre bien peu surprenante, en somme ! [...] Bref, j'ai rencontré, je crois, un ami, j'ai eu la révélation de l'amitié. [...] Je comprends maintenant que l'amitié peut éclater entre deux êtres avec ce caractère de brusquerie, de violence, que les gens du monde ne reconnaissent volontiers qu'à la révélation de l'amour.[19]

Le nom d'Olivier n'évoque-t-il pas, en même temps que le jardin des Oliviers, l'ami fidèle de Roland, celui qui l'a accompagné jusqu'à la mort, d'autant plus que la *Chanson de*

---

[17] *Ibid.*

[18] Voir AARAAS, Hans : *Littérature et sacerdoce — essaui sur* Journal dun curé de campagne *de Bernanos*, Minard, 1984, p.115.

[19] *JCC*, ŒR, pp.1209-1210

Roland[20] est mentionnée dans le dialogue de ces deux personnages, et que le lecteur saura qu'Olivier séjourne par une « étrange coïncidence[21] » à Lille au moment où le curé meurt dans cette ville?

Le jaillissement soudain de l'amitié entre ces deux personnages s'explique par le fait qu'ils sont les seuls « jeunes » parmi les « vieux » qui les entourent. Ils sont complices de cette petite aventure qu'est la course sur la moto, une bêtise aux yeux des autres.

> « Ecoutez, lui dis-je, d'ici à Mésargues, je crois que nous ne rencontrerons personne. Je ne voudrais pas qu'on se moquât de vous. — C'est moi qui suis un imbécile. »[22]

Dès le début jusqu'à la fin, la scène de rencontre du curé et d'Olivier est marquée par la « jeunesse ». Le curé se dit :

> A côté de cette machine flamboyante, ma soutane faisait une tache noire et triste. Par quel miracle me suis-je senti à ce moment-là jeune, si jeune — ah oui, si jeune — aussi jeune que ce triomphal matin?
>
> [...]
>
> J'ai compris que la jeunesse est bénie — qu'elle est un risque à courir — mais ce risque même est béni.
>
> [...]
>
> Enfin, je me sentais jeune, réellement jeune, devant ce compagnon aussi jeune que moi. Nous étions jeunes tous les deux.[23]

Et à la fin du dialogue est évoquée de nouveau l'image d'enfants.

> Et il m'a embrassé, à la manière des enfants, sur les deux joues.[24]

Selon l'expression de Hans Aaraas, Olivier et le curé sont tous les deux « hors-la-loi » — Olivier, qui était un « garçon difficile » est actuellement dans la Légion étrangère, et le curé est en friction avec son supérieur conformiste, soucieux de défendre l'institution de

---

[20] *Ibid.*, p.1219
[21] *Ibid.*, p.1223
[22] *Ibid.*, p.1212
[23] *Ibid.*, p.1211
[24] *Ibid.*, pp.1221-1222

l'Eglise[25] et aussi avec les paroissiens conservateurs et fermés. Enfin, ils sont tous les deux en difficulté avec l'autorité, incapables de se conformer à la morale et à la convenace de ce monde. Olivier dit qu'il ne voudrait que le curé d'Ambricourt à son lit de mort.[26]

Sur la base de cette amitié et de cette confiance, c'est en soldat qu'Olivier parle au curé :

> « Le dernier vrai soldat est mort le 30 mai 1431, et c'est vous qui l'avez tué, vous autres ! Pis que tué, condamné, retranché, puis brûlé. — Nous en avons fait aussi une Sainte... — Dites plutôt que Dieu l'a voulu. »[27]

> « L'honneur du soldat, vous comprenez, ça ne se prend pas au trébuchet des casuistes. Il n'y a qu'à lire le procès de Jeanne d'Arc. « sur la foi jurée à vos Saintes, sur la fidélité au suzerain, sur la légitimité du roi de France, rapportez-vous-en à nous, disaient-ils. Nous vous relevons de tout. — je ne veux être relevée de rien, s'écriait-elle. — Alors nous allons vous damner? »»[28]

Ici, avec la description du procès de Jeanne d'Arc est encore évoquée la confrontation de la jeunesse et la vieillesse, comme c'est le cas dans ses écrits de combat. C'est la pureté de l'enfance en forme de chevalerie qu'elle incarne, et cette qualité est martyrisée par les théologiens, casuistes, ou l'autorité de l'Eglise, enfin les défenseurs de l'institution, ceux que Bernanos appelle volontiers « les gens de l'Eglise », ceux qui appartiennent non pas à « l'Ame », mais au « Corps de l'Eglise ». Bernanos cite plusieurs fois dans ses écrits de combat ces paroles d'un moine : « Cela n'est rien de souffrir pour l'Eglise, il faut avoir souffert par Elle »[29]. Et c'est bien le cas de Jeanne. Pourtant cette enfance-chevalerie est sauvée. Car Jeanne est réhabilitée, canonisée, et là encore, selon Olivier, ce n'est pas l'autorité de l'Eglise qui l'a fait, mais Dieu Lui-même. Jeanne d'Arc évoque pour Bernanos le lien original de la chrétienté et de la chevalerie, l'esprit d'enfance opprimé par l'institution de l'Eglise même et enfin son salut.

Le nom de Jeanne d'Arc et l'argument autour de son procès insérés juste avant le départ du curé pour Lille, son lieu de mort (le paragraphe qui suit la fin de l'entretien annonce

---

[25] *Ibid.*, pp.1080-86
[26] *Ibid.*, p.1221
[27] *Ibid.*, p.1218
[28] *Ibid.*, p.1219
[29] *Martin Luther*, II, p.911

sa décision de partir pour Lille), ont donc une valeur hautement symbolique pour ce roman tout entier. Ils suggèrent le destin du héros qui, après avoir « souffert par l'Eglise », meurt chez un ami de séminaire qui a apostasié, sans le sacrement de dernière onction, et préparent les derniers mots du curé : « Qu'est-ce que cela fait? Tout est grâce. »[30]

Abréviations

I	BERNANOS, Georges : Essais et écrits de combat I, Gallimard, N.R.F.(La Pléiade), 1971
II	BERNANOS, Georges : Essais et écrits de combat II, Gallimard, N.R.F.(La Pléiade), 1995
ŒR	BERNANOS, Georges : Œuvres Romanesques, Gallimard, N.R.F.(La Pléiade), 1984

CCA	*Le Chemin de la Croix-des-Ames*
GCSL	*Les Grands Cimetières sous la lune*
JCC	*Journal d'un curé de campagne*
JRS	*Jeanne relapse et sainte*
LA	*Lettre aux Anglais*
NAF	*Nous autres Français*

Abstract

This study is to examine the significance of the mention of Jeanne d'Arc that appears two times in Bernanos' novel *Journal d'un curé de campagne*. We elucidate at first Bernanos' image of Jeanne d'Arc through a number of comments upon Jeanne found in his polemical writings and then what it means in this novel.

For Bernanos, Jeanne's name is, first of all, connected with medieval chivalry. Free from any kind of conventions or institutions, she embodies the purest form of Christian chivalry. Jeanne symbolizes also the spirit of infancy, and its martyrdom.

The hero of *Journal*, the young priest, spiritual but non-conventional, is in friction with his superior who is anxious to defend the order of the Church. The priest dies without extreme unction, leaving the words "All is Grace." Jeanne's name inserted just before the suffering and death of the hero is very suggestive of his destiny.

[30] *JCC*, ŒR, p.1259

動詞の周期とその周辺

The Cycle Aspects of Verbs and Some Related Linguistic Phenomena

呉　凌非
WU Lingfei

Abstract

So far in the field of linguistics, verbs have been classified in many ways. But we can see few of the classifications are from the point of view of cycle aspects of verbs. In this paper, the author introduces the concept of cycle, and classifies verbs into three categories: zero-cycle verb, single-cycle verb and multi-cycle verb. By classifying verbs in this way, we can find that some of the linguistic phenomena in the modern Chinese language are easily to be explained compared with that of the former studies.

1　はじめに

現代中国語における「了」の文法機能の問題、動詞の重畳の問題、数量詞と動詞との共起の問題などに関しては、これまでは別々な問題として議論されてきた。しかし、これらの問題はいずれも動詞をどう捉えるかに大きく依存しているのではなかと思えてならない。すなわち、動詞の捉えようによっては、いろいろな問題解決につながるのではないかということである。そういう考えを背景に、本研究は動詞について、事象の進行様相の変化を周期の視点から考察することによって動詞を分類し、そのうえ、関連する文法上の諸問題を取り組むことを目的とするものである。

2　動詞に関するいくつかの捉え方

周期の視点から動詞について述べる前に、まずこれまでの動詞に関するいくつかの主な捉え方を振り返ってみることにする。

2.1　Lakoff (1966), Fillmore (1968, 1971), Chafe (1970), Cook (1973)

Lakoff (1966)は英語の動詞を状態動詞と非状態動詞に二分している。「真命令文」(true imperative)、進行相、受益句、carefully、reluctantly のような副詞および do so 代入などと共起しないといった条件を満たせば、状態動詞で、さもなければ、動態動詞だと見なされる。例えば、

(1) * Know the answer.

(2) * Max is knowing the answer.

(3) * Max reluctantly knew the answer.

(4) * Max knew the answer and Bill did so too.

はいずれも非文である。したがって、動詞 know は状態動詞と見なされる。

それに対し、Fillmore (1968)は Lakoff の動詞に関する「真命令文」、進行相、受益句、carefully、reluctantly の様な副詞および do so 代入のような素性が必ずしも必要最小限の条件ではないと指摘する。Fillmore によれば、Lakoff が動詞についてまとめた素性は、すべて動詞に対応する格フレームによって説明することができる。例えば、次の例では、see, die, know はいわゆる状態動詞で、これらの状態動詞が対応している格フレームには、行為者格 A が含まれていない。それに対して、show, kill, look, learn はいわゆる非状態動詞で、これらの動詞に対応する格フレームには、行為者格 A が含まれている。このように、Fillmore は格フレームに行為者格 A が含まれるかどうかによって Lakoff の状態動詞と非状態動詞とを区別することができるとしている。

(5) see : + [__D + O] show : + [__A + D + O]

(6) die : + [__D] kill : + [__A + D + (I)]

(7) see : + [__D + O] look : + [__A + O]

(8) know : + [__D + O] learn : + [__A + O]

(注：D = Dative, O = Objective, A = Agent, I = Instrument)

これとは対照的に、Chafe (1970)は意味構造において動詞が常に中心的な位置にあり、名詞が付随的(peripheral)でなければならないと主張する。これを裏付けるために、Chafe (1970:96-97)は次の理由をあげている。

> 「(1) 一般的には、あらゆる文において動詞は意味的な役割を果たす。(2) 一組の名詞ではなく、動詞の性質こそ文の残り（動詞と名詞以外）の部分の形を決定する。(3) 例えば、past などの多くの意味特徴は動詞に付与すると同時に文全体もその意味特徴を持つことになる。(4) 比喩の場合、名詞の意味特徴が変わるのに対し動詞の意味特徴はほとんど変わらない。」（筆者訳）

さらに、Chafe によれば、動詞は動詞に内在している要素によって記述され、その内在的要素が文において名詞の役割を決める。動詞あるいは動詞に内在する要素が独立的で、格を表す名詞が加わろうが加わるまいが動詞あるいは動詞に内在する要素は何の影響も受けない。

具体的に動詞を分析するに際して、Chafe は Lakoff (1966)の状態動詞と非状態動詞に基づき、さらに過程(process)という素性を導入し、動詞を状態動詞 (state verb)、過程動詞(process verb)、動作動詞(action verb)、動作過程動詞(action-process verb)のように分類した。この四種類の動詞を説明するために、Chafe (1970:98)は次のような例を挙げている。

(9) a. The wood is dry.

b. The rope is tight.

c. The dish is broken.

d. The elephant is dead.

(10) a. The wood dried.

b. The rope tightened.

c. The dish broke.

d. The elephant died.

(11) a. Michael ran.

b. The man laughed.

c. Harriet sang.

d. The tiger paunced.

(12) a. Michael dried the wood.

b. The man tightened the rope.

c. Harriet broke the dish.

d. The tiger killed the elephant.

Chafe によれば、(9)の文では、名詞の指す実体がそれぞれ dry、tight、broken、dead の状態にあることを示し、故に、動詞が状態(state)と見なされる。(10)の文では、過程(process)が示されており、すなわち、名詞の指す実体の状態が変化している。このような文では、動詞は過程動詞と見なされる。(11)の文では、名詞が動作を行う Agent であるため、動詞は動作動詞と見なされる。(12)の文では、動詞は過程動詞であると同時に動作動詞でもある。つまり、過程動詞として、名詞の指す実体の状態の変化を記述し、動作動詞として動作者のすることを表現する。このような動詞は過程動作動詞と見なされる。

Chafe 動詞中心説をさらに推し進めたのが Cook (1972, 1973)である。Cook (1972)は動詞と格フレームとの関係について分析するときに、Chafe の動詞の４分類を縦軸に、Basic（基本形）そして、Benefactive, Experiencer, Locative の三つの深層格を横軸に、動詞を 16 種類に分けることができた。しかし動詞を 16

state verb:	[-imperative	-progressive]
process verb:	[-imperative	+progressive]
action verb:	[+imperative	+progressive]

図１　Cook (1973)における動詞の基本分類

Verb type	Basic	Experiencer	Benefactive	Locative
State	Os (be) tall	E,Os know	B,Os have	Os,L (be) in
Process	O sleep	E,O frighten	B,O acquir	O,L move
Action	A,O kill	A,E,O say	A,B,O give	A,O,L bring

図２　Cook (1973)における動詞の分類

種類に分けることが現実性を欠けるため、Cook (1973)では Chafe の分類を図１のようにまとめ、動詞を図２のように 12 種類に減らした。

1.2.2 Comrie (1976)

上記のように、Lakoff(1966)は統語関係において動詞を状態動詞と非状態動詞に分類したが、同様なことについて別な角度から捉えたのが Comrie (1976)である。Comrie は状態動詞の指す現象を状態すなわち静的場面としており、非状態動詞の指す現象を動的場面としている。その静的場面と動的場面について、Comrie (1976:78)は次のように説明している。

「...持続している場面からある任意の時点における場面をきりとってきて、この場面をさししめすために、'局面(phase)' という用語を用いることにする。例として、まず状態をさししめす動詞 know と動的場面をさししめす動詞 run について考えてみよう。これらの二つの動詞がさししめす場面のあいだのちがいは、ひとつは、それぞれの場面を構成する、さまざまな局面のあいだの関係のし方にある。know のばあい、 John knows where I live という場面を構成する局面はすべておなじである。ジョンが知っているという場面は、どの時点で切断しても、まったくおなじ場面がみいだされることになる。しかし、run のばあいにはそうではない。John is running というとき、その場面を構成する、それぞれの局面は、ひどくことなっているだろう。ある瞬間にジョンは片足を地面につけているだろうし、べつな瞬間にはどちらの足も地面についていないだろう。このように、know は変化をふくみこんでいないが、run はかならず変化をふくみこんでいる。このことから、状態と動的な場面との対立の、最初の、おおまかな性格づけをうけることができる。」(山田訳)

Comrie によれば、「局面」という概念を使って、出来事が静的場面を記述しているかあるいは動的場面を記述しているかを区別することができ、そしてその出来事を述べる文の述語が静態を表しているかあるいは動態を表しているかを判断することもできる。

1.2.3 金田一 (1976)

金田一 (1976)は日本語動詞を第一種、第二種、第三種、第四種の四つの種類に分けている。その 4 つの種類の動詞について次のようにまとめることができる。

金田一によれば、第一種の動詞は「動作・作用を表すというよりもむしろ状態を表すと言うべき動詞で、通常、時間を超越した概念を表す動詞である。(p7)」とされている。例えば、「ある」、「できる」、「わかる」などの動詞は第一種動詞と見なされている。この種の動詞について、金田一は、「『ている』を付けずにそのままで現在の状態を表す」、そして、「この種の動詞は日本語では少ない」という二つの特徴をあげている。なお、金田一では第一種の動詞は状態動詞とも呼ばれている。

第二種の動詞は「明瞭に動作・作用を表す動詞であるが、但しその動作・作用は、ある時間内続いて行われる種類のものであるような動詞である。(p8)」とされている。また、金田一によれば、この種の動詞に「ている」を付けることができる。なお、金田一では第二種動詞は「継続動詞」とも呼ばれている。

第三種の動詞は「その動作・作用は瞬間的に終わってしまう動作・作用である動詞である。(p8)」とされている。例えば、「死ぬ」、「点く」などはこの類に入る動詞とされている。第三種の動詞の特徴について金田一は、「この種の動詞は『ーている最中だ』と言うことはできない。この種の動詞に『ーている』をつけるとその動作・作用が終わってその結果が残存していることを表す。(p8)」と述べている。なお、金田一ではこの種の動詞は瞬間動詞とも呼ばれている。

第四種の動詞は「ある状態を帯びることを表す動詞(p8)」とされており、特徴として「いつも『ーている』の形で状態を表すのに用いられる」点が強調されている。例えば、この種の動詞として、「そびえる」、「すぐれる」などが考えられる、ということである。

以上は金田一の日本語動詞に対する分類であるが、この分類の特徴は、動詞が指し示す動作・作用の種類を時間軸の上で捉えている点にあろう。ただし、前述の Comrie (1976)における「局面」の概念で考える限りにおいては、金田一の第一種動詞と第四種動詞はいずれも静的な状態を記述する動詞であり、両者の間に本質的な違いは必ずしもないと言えよう。第四種動詞も状態を記述する動詞とすれば、動詞は静態を記述する動詞、瞬間を記述する動詞、動態を記述する動詞、という三つの種類に分けることができる。

1.2.5 Schank (1973, 1985)

上記のような研究における動詞の捉え方と違って、Schank (1973)において、動詞に関する独特な捉え方が見られる。

Schank によって考案された概念依存理論(conceptual dependency theory) は特定の自然言語に依存しない概念レベルの表現を使う、文の意味理解のモデルである。この概念レベルの表現は概念依存構造(conceptual dependency structure) と呼ばれる。概念依存構造の背後にある基本的な原則は、自然言語が曖昧であっても、意味表現はそうであってはならないこと（無曖昧性）、及び、統語的な表現が異なっていても意味が同じ文は、同じ意味表現で表されなければならないこと（表現の一意性あるいは表現の集約性）である。概念依存理論の目的は人間が文を理解するときの心の動きの解明を目指して、現実世界に関する人間の主観的な理解の結果を構造を持った記号表現で表すことである。したがって、Schank の概念依存理論は自然言語の構造を記述するのではなく、自然言語の背後にある自然界のものとものの間の関係そして人間の常識に基づいた命題や推論規則を記述するものである。

概念依存理論の中心となるのは基本動作の分類であるが、Schank では、基本動作は図３のように設定されている。

Schank の動詞の捉え方においては次のような特徴が見られる。

[1] 分類の対象を動作動詞に限定している。状態動詞は記号化された関係によって表現されている。したがって、Schank の研究では、動詞を明確に状態動詞と非状態動詞と分けてはいないが、暗黙のうちに動詞を状態動詞と非状態動詞の二種類に区別している。

[2] 動詞を意味的に記述するときに、動詞の指す出来事の全過程を動的に考察する。

ACT: 動作を表す。次の 11 の基本構成成分の中から選ばれる。
PTRANS （物理的なものの移動）
ATRANS （抽象的なものの移動）
PROPEL （…に力を加える）
MOVE （体の一部を動かす）
INGEST （体内に取り込む）
EXPEL （体内から取り出して外に押し出す）
GRASP （対象を物理的につかむ）
SPEAK （音を生成する）
ATTEND （特定の刺激に対して感覚器の注意を集中する）
MTRANS （情報の伝達を行う）
MBUILD （思考を生成したり結び付けたりする）

図３ Schank (1973)における 11 の primitive ACT

[3] 常識及び推論に基づいて動詞を概念化する。

Schank (1973)によれば、全ての動作(ACT)は 11 種類の基本動作(Primitive Act)の組合せによって表現することができる。具体的に動詞を分析する際、その動詞がどのような Primitive Act で表現するかは客観的事実のほかに常識あるいは推論も働いているとされている。

以上では、本研究に関連するいくつかの動詞の捉え方について見てきた。Lakoff (1966)、Fillmore (1968, 1971)、Chafe (1970)、Cook (1973)、Comrie (1976)、金田一 (1976)などの研究を踏まえて、呉(2000)は日本語動詞について考える際に、動詞を次のように整理している。

静態 ([±teiru],[-phase-change])
（動詞に「ている」が付くなどうかにかかわらず、「局面」的変化がなければ、静態動詞と見なす）
動態 ([±teiru],[+phase-change])
（動詞に「ている」が付くなどうかにかかわらず、「局面」的変化があれば、動態動詞と見なす。）
瞬間態 {([-teiru],[+phase-change])、([+teiru],[-phase-change])}
（動詞に「ている」が付いておらず、「局面」的変化あるいは変化する傾向が見られる、「ている」が付いており、「局面」的変化が見られないという場合、瞬間態動詞と見なす。）

以下では、呉(2000)の動詞についての考え方を、Schank の動詞は各部分部分から構成されるという考え方を踏まえて、周期という視点から迫ってみることにする。

3 周期による動詞の分類とその応用

3．1 周期と動詞

前節で触れたように、Schank は動詞が記述する事象が複数の基本動作から構成されるというように捉えている。ここでは、動詞が記述する事象には具体的にどのような基本動作が含まれているかを問題にせず、一連の基本動作の存在を認め、そしてその一連の基本動作が事象の各局面を構成すると理解する。この考えを踏まえて、次に周期と動詞との関係について見てみることにする。

まず周期については、同一の事象が一定時間ごとに繰り返して現れる特性のことだと考える。動詞の中

にはある種の動詞は対象の恒常的特性を記述し、事象的には、いくら時間が経っても、図４で示しているように局面的変化、すなわち一定時間ごとの同一局面の繰り返しは見られない。つまり、この種の動詞の記述する事象には周期性が見られず、ここではこのような動詞をゼロ周期動詞と名づける。この種の動詞としては、日本語の場合、「ある、似る、尖がる、薫る、、、」など、中国語の場合、「有、是、属于、、、」など、英語では、「be、have、know、、、」などが挙げられる。図４で示しているように、ゼロ周期動詞の場合、時間が経過しても、事象の局面的変化が見られず、したがって、このような動詞は時間副詞と共起するときにその時間帯の状態の継続を表すことになる。

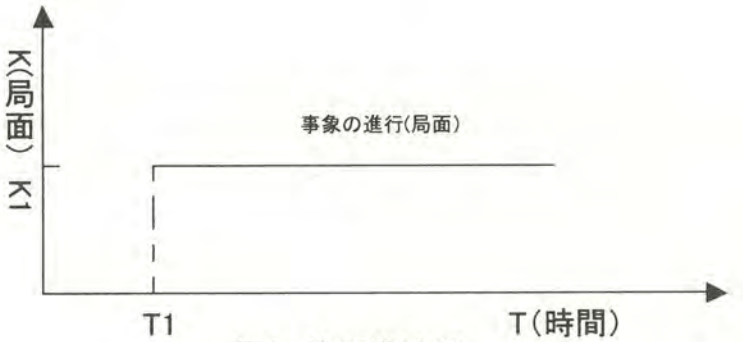


図4 ゼロ周期動詞

一方、図５に示しているように、ある種の動詞が記述する事象の全過程には二つの局面しか含まれず、しかも決まって事象の開始前の局面と終了後の二つの局面に限られる。このような動詞に対して、次の方法で捉えてみることにする。事象全体の進行をある一定時間の長さの周期で順番に刻んでいき、各周期内に局面の変化があるかどうかを見る。刻んだ結果、たった一つの周期（T1, T2）の中に局面の変化が見られ、即ち開始前の局面と終了後の二つの異なる局面がその周期に含まれているケースである。ここでは、このような事象全体の中に一つの周期しか含まない現象を記述する動詞を単周期動詞と呼ぶ。単周期動詞が記述する事象には一つの周期しか含まれていないため、「一撃」、「一押し」などのような複数回数から区別するように用いる「一」という頻度を表す数量詞との共起はほとんど見られない。このような動詞としては、日本語では「壊れる、割れる、付く、、、」など、中国語では、「破、亮、成、、、」など、英語では、「reach, achieve, finish…」などが挙げられる。

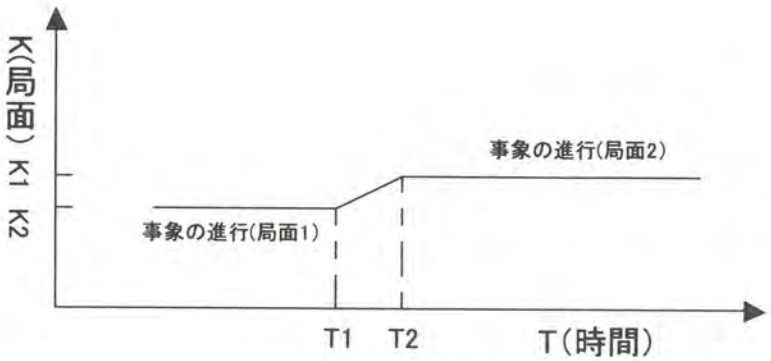


図5 単周期動詞

ゼロ周期動詞と単周期動詞以外の場合、動詞が記述する事象には、時間の推移とともに、さまざまな異なる局面が連続的に現れてくる現象が見られる。それらの局面はSchankの基本動作で構成されているとすれば、動詞を成立させる最小限の一組の基本動作が必ず存在しているはずである。この最小限の一組の基本動作によって構成される周期をここでは最小周期と呼ぶ。図で言えば、図6のT1とTmの間の周期となる。動作が時点Tmを過ぎても続いている場合、局面は最小周期の繰り返しだと考える。即ち、[Tm ,Tq]は[T1, Tm]の繰り返しとなる。具体的に言えば、例えば、「一画を書く」を「書く」の最小周期だとする場合、「字を書く」は複数の「一画を書く」という最小周期の繰り返しになる。また、「一字を書く」を「書く」の最小周期と定義すれば、「手紙を書く」は「一字を書く」という最小周期の繰り返しとなる。逆に時間的にTmに達していない場合、即ち最小周期が完成されていない場合、動作も完成しておらず、動詞が表す本来の意味が成立しなくなる。すなわち事象を構成する最小限に必要な一組の基本動作のどれかが欠けていることになる。例えば、「叩く」という動詞に一連の動作が含まれていると考えられる。しかし、対象に動作が及ぼす前に中止したら、「叩いた」にはならない。また「トンネルを掘る」に対し、途中で放棄したとすれば、結果は「穴を掘る」になってしまう。このように、時間の推移とともに局面が最小周期の繰り返しとなる事象を記述する動詞を、ここでは多周期動詞と呼ぶ。

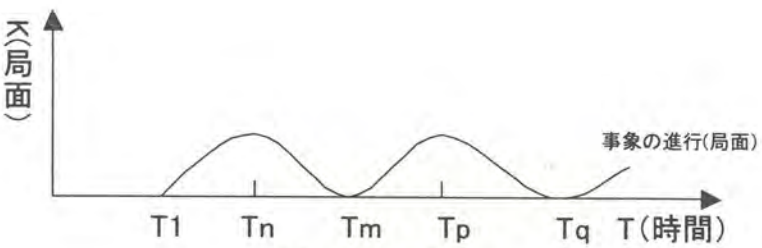


図6 多周期動詞

以上では、動詞をゼロ周期動詞、単周期動詞、多周期動詞の三種類に分けてみた。次に、動詞のこの分類に関連するいくつかの応用を検討してみたい。

3．2 関連するいくつかの言語現象

3．2．1 動詞の周期と「了」

現代中国語では、助詞「了」は構文的には動詞の後に付いて動詞に直接に結ぶことができる。しかしその際の意味機能については多くの解釈が見られ、一般的には、「了」が「完成」を表していると考えられている。例えば、中国語文法研究の権威である高名凱先生はそれを「完成態」と名づけている。同じく中国語文法研究の権威である王力先生はそれを「完成貌」と名づけている。呂叔湘（1980）では「「了」は主に動作の完成を表す」としている。それに対して、胡裕樹（1995）は「「了」は「完成」を表すものの、「終了」を意味するわけではない」と主張している。また、劉勲寧（1988）では「「了」は「実現」を表す」と説明しており、木村（1997）は「「了」は「完了」を表している」と主張する。

しかし、動詞を上記のように分類し、「了」の意味機能を動詞分類ごとに考えれば、より明瞭になってくる。

まず、ここでは、「了」の意味機能を次のように定義する。

「「了」の文法機能は出来事において、一つ以上の最小周期の実現を表すことである。」

以下では、上記の定義を検証してみることにする。

前述のように、ゼロ周期動詞の場合は周期性が見られないため、当然のことながら最小周期も存在しないはずである。したがって、一つ以上の最小周期の実現を表す「了」がゼロ周期動詞と結びつくことは考えられない。実際、次のような文はいずれも成立しない。

(13) ＊他有了一本书。
＊她是了一个医生。
＊财产属于了妹妹。

単周期動詞の場合、事象全体には一つの周期しか含まれていないため、最大周期と最小周期が同一のものを指しており、「一つ以上の最小周期の実現」の意味することは「事象の実現」であると同時に「事象の完了」でもあるということが言える。即ち、「了」が単周期動詞と結ぶときに、「実現」の見解と「完了」の見解は必ずしも矛盾しない。

多周期動詞の場合、事象全体に複数の周期が含まれているため、助詞「了」が動詞のあとに結び付いたときに、動作の終了を表す。ただし、動作終了の時点において、一つ以上の周期が含まれているはずである。このように「了」について考えれば、胡裕樹(1995)の「「了」は「完成」を表すものの、「終了」を意味するわけではない」の意味も容易にわかる。即ち、動作が一つ目の周期を過ぎた時点で、動作が成立し、「完成」として捉えることができ、一連の周期が動作全体を構成しているため、一つ目の周期の「完成」は決して動作全体が終了したという意味にはならない。

3．2．2 動詞の重畳

動詞の重畳とは、現代中国語において動詞Ｖが次例のように「ＶＶ」あるいは「Ｖ－Ｖ」の形を取ることを言う。

(14) 我看看报。(ＶＶ)

（私は新聞を読んでみる）

(15) 我看一看报。（V－V）

（私は新聞を読んでみる）

動詞の重畳については、これまではさまざまな研究が行われてきた（陸 鏡光 2000、叶歩青 2000）。しかし、つぎの３つの点に関しては、ほとんど触れていなかった。

Ⅰ 動詞分類的にどのような類の動詞が重畳の形を取ることができるのか。

Ⅱ 日本学校文法では、中国語の「V」と「V－V」は互いに置き換えることができるとされているが（山添秀子（2000）、それは何を意味しているのか。

Ⅲ 動詞の重畳の文法的意味機能について、叶歩青（2000）は主に（１）「少量」（２）「賞試（試し）」（３）「委婉（婉曲）」とまとめているが、その理由とは何か。

ここでは、上記の３つの点について動詞の周期の角度から検討してみることにする。

基本的には、動詞の重畳が動作の繰り返しを表す点においては、異論はないようである。本研究の動詞の分類から考えれば、ゼロ周期動詞と単周期動詞はいずれも繰り返しの特徴が見られないため、理論的にはそれらの動詞は重畳の形を取ることができないはずである。実際、ゼロ周期動詞の重畳「是是、有有、属于属于、、、」、単周期動詞の重畳「破破、亮亮、到到、、、」などはいずれも成立しない。したがって、動詞の重畳は多周期動詞のみに見られる現象であると言える。

「VV」と「V－V」は、語構成的には、「打倒（打ち倒す）、喝干（飲み干す）」と同様、複合動詞の部類に入る。文法機能的には、後の動詞が前の動詞の意味を補うあるいは限定するという働きを持っている。「VV」と「V－V」に関して言えば、後の「V」あるいは「－V」は前の「V」の意味を限定していることになる。したがって、「V－V」については「V」の行為が一回発生すると理解することができる。つまり、「－V」は「一撃」と同様、動詞が記述する事象のなかの一つの最小周期を表しているとも理解できる。「－V」と「V」の同等性については、現代中国語では、次例のように数量詞が「一」である場合、省略されることが多い。

(16) 给我一张地图.

（一枚の地図をください）

(17) 给我张地图.

（一枚の地図をください）

同様に、「V－V」の「一」が省略されれば、「VV」の形にかわる。すなわち、「VV」は「V－V」の変形であると理解することができる。文法機能的にも、「VV」と「V－V」と同様、動作が一回発生するということを意味している。というわけで、ほとんどの場合、「V－V」と「VV」は互いに置き換えることができる。語用的には、山添秀子（2000）の指摘したような意味上の差異は見られるが、「V」のあとの「V」あるいは「－V」がいずれも動作が一回発生するという意味を表している点においては、違いはないと言える。

これまでの議論をまとめて、動詞の重畳という言語現象は多周期動詞にのみ現れ、行為が一つの周期が過ぎた時点で一つの区切りとするという働きをもっている、と考えることができる。この考えを踏まえて、動詞の重畳は文法機能的になぜ（１）「少量」（２）「賞試（試し）」（３）「委婉（婉曲）」などの意味を表す

ことができるのかについてもう少し具体的に見てみることにする。次の例のように、「看看」は少量の動作を表すことができる。

(18) 让我看看，就看一眼.
（ちょっと見せて、ひとめでいいから。）

そもそも動詞の重畳は動詞「V」が一周期を表す「一V」によって限定されているため、語用的に「少量」を表すことができることは当然であるように思う。また、次の例のように、動詞の重畳は「試し」を表すことができるとされている。

(19) 你吃吃，味道怎么样?
（食べてみて、味はどう？）

上で述べたように、動詞の重畳は「少量」を表すことができるが、強いて言えば、この「少量」はつまり「少し～する」あるいは「ちょっと～する」という文型にも通じる。このように、語用のレベルでは、動詞の重畳が「試し」を表すことができてもおかしいことはない。

また、

(20) 我想说说我的看法.
（私は自分の考えを述べてみたい。）

(21) 你去看看她.
（彼女の様子をちょっと見てきて。）

の例のように、懇願や催促を表すときに、動詞の重畳を用いることがある。そのような使い方は一般的に「婉曲」の効果があるとされている。これについても次のように解釈することができる。懇願や催促の表現を用いる際、自分にさせてもらう行為あるいは相手にしてもらう行為を最小限に（一周期）限定することにより、押し付けの印象を避けることができる。ちなみに、上記の「少量」、「試し」、「婉曲」などの表現は日本語に直すときに、いずれも「ちょっと」と訳すことができる。つまり行為を最小限に限定するという点において共通しているということが言える。

3．2．3 動詞と数量詞との共起

「了」の用法に関連して、「動詞＋了＋数量＋了」という文型がある。箫国政（2001）によれば、文型中の「数量」は次のように３つの「量」を表すことができるという。

Ⅰ 物量（行為者あるいは行為対象の量） 写了三个了.（３つ書いた。）

Ⅱ 時量（動作の継続時間の量） 写了三天了.（三日書いた。）

Ⅲ 動量（行為の頻度の量） 写了三次了.（三度書いた。）

上記の「物量」、「時量」、「動量」について分析するときに、箫国政（2001）は文脈を重視する手法を取っている。しかし、前述の動詞の周期のモデルで分析すれば、文型「動詞＋了＋数量＋了」の表す意味関係ははっきりしてくる。以下では上記の文型を動詞類別ごとに検討してみることにする。説明を分かりやすくするために、まず多周期動詞の場合について見てみよう。

「物量」を表す「写了三个了」（３つ書いた）の例に対して、「写了一个」（１つ書いた）を最小周期だと

すれば、この例の「物量」は「三」になる。このように、「物量」とは最小周期の数のことであることがわかる。「物量」が最小周期の数を表しているのと違い、「時量」は動作の継続時間を表すもので、したがって、その「時量」が示す時間内に一つの最小周期すら完成していない可能性もあれば、複数の最小周期が完成している可能性もある。当然のことながら、周期の途中である可能性もある。例えば、次のような文はごく普通に言える。

(22) 医院盖了三年了，还没有盖成.

（病院を建てて３年になるが、いまだにできていない。）

逆に「動量」を表す「写了三次了」（３度書いた）の「写了一次」（1 度書いた）を行為が完成することを表す最大周期だとすれば、「写了三次了」の動量は３つの最大周期を表していることになる。というように、文型「動詞＋了＋数量＋了」を周期の概念で解釈すれば、多周期の場合は、「物量」は最小周期の数、「時量」は最小周期の継続、「動量」は最大周期の数、をそれぞれ表していることがわかる。

しかし単周期動詞の場合はどうであろうか。単周期動詞も文型「動詞＋了＋数量＋了」に代入することができ、次のような文が言える。

(23) 到了三个了.

（到着した人は３人になった。）

前述のように多周期動詞の「動量」は最小周期の数を表すと説明したが、その場合の最小周期の数は同一の行為者によって行われている点に注目されたい。それに対して、(23)の「到」は単周期動詞であるため、最小周期の数が一を超えることはありえない。では、数量を表す「三」は何を表しているのだろうか。(23)の「動量」「三」が同一の行為者によるものであれば、単周期動詞の定義が間違ったことになる。しかし、(23)に対して、単数の行為者「他」を主語として代入すれば、文は成立しない。

(24) ＊他到了三个了.

つまり、単周期動詞の場合、「動量」は最小周期の数ではなく、異なる行為者によって引き起こした別々の最小周期の数である。

単周期動詞の「時量」については、次のような例が見られる。

(25) 到了三天了.

（着いてから三日が過ぎた。）

多周期動詞の「時量」が最小周期の継続時間を表しているのと違い、単周期動詞の場合は終了局面、(25)で言えば、「到了」（着いた）という局面の継続時間となる。

単周期動詞の「動量」については、次のような例が見られる。

(26) 断了三次了.

（３度も折れた。）

前述のように、多周期動詞の「動量」が最大周期の数を表すと説明したが、単周期動詞の場合、最大周期と最小周期とは同一のもので、「動量」が最大周期の数であるということは単周期動詞についても言える。ただし、語用のレベルでは、一部の単周期動詞、例えば、「死ぬ」、「生まれる」などが「動量」を表す「一」より大きい数字の数量副詞との共起はほとんど見られない。

ゼロ周期動詞の場合は、既に述べたように、「了」は「一つ以上の最小周期の実現」を表す機能を持って

いるため、ゼロ周期動詞との共起ができない。つまり、ゼロ周期動詞は上記の文型に代入できない。

このように、文型「動詞＋了＋数量＋了」について考える際、周期の視点からの動詞の分類が密接に関連していることがわかる。

4 おわりに

本稿では周期という概念を導入し動詞の分類を試みた。その結果、動詞をゼロ周期動詞、単周期動詞、多周期動詞のように分けることができた。従来の動詞の分類と比べて、周期の視点からの分類は基準が明瞭で、応用しやすいと考えられる。実際の考察としては、中国語に関する３つの問題点を取り上げた。考察の結果、周期の動詞分類は十分に問題解決に役に立つと思う。ただし、周期の視点からの動詞分類はあくまでも動詞の記述する事象の進行様相から動詞を分類したもので、動詞の内容から動詞を分類したわけではない。そのため、動詞の意味内容を判別するなどに関連する応用には向いていないかもしれない。が、テンス・アスペクトに関連する応用には、周期による動詞の分類は重要な考えの一つであると信じる。

5 参考文献

Chafe, W. L. 1970. *Meaning and the Structure of Language*. The University of Chicago Press.

Comrie, B. 1976. *Aspect*. Cambridge University press.

Cook, W. A. 1972. *A set of postulates for case grammar analysis*. Languages and linguistics: Working Papers No. 4. Washington, D. C. Georgetown University.

Cook,W.A 1973. *Covert case roles*. Languages and linguistics: Working Papers No.7. Washington, D. C. Georgetown University.

Fillmore, C. J. 1968. *The Case for Case*. Universals in Linguistic Theory. New York. Holt, Rinehart and Winston, Inc.
田中春美訳. 1975. 『格文法の原理』 三省堂

Fillmore, C.J 1971. *Some Problems for Case Grammar*. Monograph Series on Languages and Linguistics. Georgetown University.

Lakoff, G. 1966. *Stative adjectives and verbs in English*. Mathematical Linguistics and Automatic Translation. Report No. NSF-17.

Schank, R. C. 1973. *Identification of Conceptualization Underlying Natural Language*. Computer Models of Thought and Language. 187-247. San francisco: W.H.Freeman and Company.

Schank, R.C 1985. 『考えるコンピュータ』 石崎俊訳 ダイヤモンド社

金田一春彦 1976. 『日本語動詞のアスペクト』 むぎ書房

木村英樹 1997 「動詞接尾辞“了”の意味と表現機能」 『中国語学論文集』 pp157-179

呉凌非 2000 「名詞の意味素性と動詞の意味記述」 『現代日本語の語彙・文法』 くろしお出版 pp113-131

胡裕树・范晓 1995 <<中国语文>> 河南大学出版社
萧国政・郭婷婷 2001 「”動詞＋了＋数量＋了”的動態結構及”了”的意義与功能」
『現代中国語研究』 pp50-58
刘勋宁 1988 「现代汉语词尾“了”的语法意义」 <<中国语文>> 第 206 期 pp321-330
陆镜光 2000 「重叠・指大・指小」 <<汉语学报>> 第 1 期 pp21-27
吕叔湘 1980 <<现代汉语八百词>> 商务印书馆
山添秀子 2000 「单音节动词重叠的语用分析」 <<汉语学报>> 第 1 期 pp70-79
叶步青 2000 「汉语动词重叠的语义研究」 <<汉语学报>> 第 1 期 pp48-52

電子商取引と中小企業の経営

Electronic Commerce and Management of Small and Medium-sized Enterprises

亀 田 彰 喜 ・ 吉 田 勝 廣*
Akiyoshi KAMEDA・Katsuhiro YOSHIDA

Abstract

Under the current depression going on throughout the country, the Japanese government and business companies have been struggling hard to get out of this economic downfall without success. Small businesses have also been severely damaged by the depression. It has become very important for these small businesses to construct an information network among themselves in order to cope with this economic recession. By utilizing the information network they can gain access to a lot of useful information about the global economy and politics, which will place them in a better position to do their business. It is especially urgent for them to utilize electronic commerce which is nowadays attracting more and more attention. Electronic commerce consists of, first, business to business transactions, and, second, business to consumer transactions, based upon EDI (Electronic Data Interchange). Small businesses can make use of these two types of transactions: they can utilize the former type of transaction to do business with large enterprises and the latter one to recruit new customers. In this way, electronic commerce can be one of the most useful new strategies for small businesses to do their business efficiently and to survive the recession by improving their management of doing business.

1 はじめに

最近の日本経済は不況が益々深刻化し、いまなお回復の兆しが見えない状況である。現在の不況は、

* 秋田経済法科大学短期大学部

「複合不況」ともいわれ、今までの不況とは根本的に異なっている。このような状況のなかで、国家も企業も混迷の中から抜け出すために、さまざまな努力を行っているものの、それほど成果があがっていない。このような不況から抜け出すために政府は情報産業の成長に期待し、その育成を重点政策としている。そして、今日の不況から抜け出すための手段として情報産業の中でも特に電子商取引の普及が期待されている。

周知のように、わが国のほとんどが中小企業であり、その中の半数以上が下請企業である。下請企業は、大企業の成長発展に伴って伸びて行くものである。しかし、大企業の業績が悪化してくると、下請企業の面倒を見ることができなくなるのは当然のことであるといえよう。

そこで、中小企業が厳しい不況を生き抜くためには、経営資源の有効的な活用とともに経営戦略としての電子商取引の活用も考えられる。

そこで、本稿ではまず、電子商取引の特性を理解したうえで、中小企業の視点から経営の実態を把握し、中小企業の経営戦略としての電子商取引の活用を模索してみる。

2　電子商取引の特性

電子商取引は、従来のような取引とは異なり情報ネットワークを介して取引を行うものである。従来の取引においては、大企業は資金や取引の立場上から優位な取引ができた。しかし、電子商取引はインターネットのようなネットワークを介在させることにより、従来の取引とは異なって、広範囲の相手と取引することを可能にする。このことは従来の大企業の系列下や下請けとしての不利な取引を余儀なくされていた中小企業にとっては、新たな取引の機会を得ることが可能である。このようなことから電子商取引は取引業務や流通および金融システムの合理化にもつながる。

米国においては、早くからこのような電子商取引の特性に注目し、国際的に電子商取引が普及することを予想し、それに先立って、1997 年 7 月にクリントン大統領が「国際電子商取引の枠組み」(A Framework for Global Electronic Commerce) を発表し、米国のインターネットによる基本政策を提示した。この「国際電子商取引の枠組み」では、５つの基本方針を示している。

一つは、インターネットによる電子商取引は民間主導で行い、競争原理によりネットサービスの拡大を図るとともに接続料金の安価により利用者の増大と市場の拡大を図ること。

二つめは、政府による過度な規制をできる限り排除し、電子商取引の進展のために政府の不要な介入を控える。

三つめは、法的な環境の整備である。競争原理に基づき利用者の拡大を図るものの、利用者のプライバシーの保護や知的所有権および不正防止などの法的整備の問題である。

四つめは、インターネットによる電子商取引の特色を認識した上で、現代に適合しなくなった既存の法律および諸規制などの見直しである。

五つめは、電子商取引のグローバル化のために国際的な電子商取引の標準化や、税制度の優遇およ

びセキュリティの問題である。

このように、米国においては電子商取引の国際的な普及を前提に電子商取引に関する基本政策が打ち出され、経済政策の方策の一つとして期待されている。

我が国においても、米国のこのような電子商取引の基本政策を参考にし、1996 年に電子商取引実証推進協議会が設置された。そして、通産省においては 1997 年 5 月に「デジタル経済の時代に向けて―世界的な電子商取引の発展のために―」として報告書が公表された。さらに、1997 年 9 月に橋本政権下で電子商取引等検討部会が設立され、電子商取引を推進するにあたっての基本原則として、第一に民間主導で電子商取引の技術の開発が進められること、第二に政府は電子商取引の推進に障害となる規制の緩和と技術開発の環境整備を整えること、第三に国際的な調和のもとに電子商取引が推進されること、等を基本原則としてまとめている。このように、米国においても我が国においても政策として、電子商取引の推進を打ち出している[1]。

このような政府の電子商取引の環境整備政策下で、中小企業がこの不況から抜け出す方策として、電子商取引を活用することは、千載一遇のチャンスと言えよう。この電子商取引には EDI(Electronic Data Interchange)を基礎とした企業間取引と企業と消費者間との取引とがあるが、中小企業にとってはこの二つの取引手法を活用することが可能である。企業間取引は大企業との取引において、また企業と消費者間との取引は新しい顧客の開拓に活用できる。この電子商取引は中小企業の新しい有効な経営戦略の手段となる。そして、中小企業はこの不況下を抜け出し、経営の改善を図ることができる。

しかし、中小企業が電子商取引の導入を推進するためには、まず、中小企業の経営の実態も把握しておく必要がある。

3　中小企業の実状

中小企業といっても、大企業を親会社とする中小企業や親企業・子会社ともに中小企業、あるいは独立したオーナーが経営する中小企業などさまざまな中小企業が存在する。一般的に、中小企業は、事業分野が狭く、大企業に比べて経営資源（資本力・人材力・信用力・担保力など）の蓄積が乏しく、経済環境の急速な変化に対してもろい体質があり、また経営者の個人的支配の色彩が濃い性質のものである。

そこで、この中小企業を保護・育成する目的で、1963 年に中小企業基本法が制定・施行された。その後、1973 年に中小企業の定義が改訂され、さらに 1999 年に中小企業基本法が改正された。新しい中小企業基本法では、中小企業を「我が国経済の活力の源泉」と位置づけ、新たな中小企業政策の理念として「多様で活力ある中小企業の成長発展」を挙げている。

以上、わが国の「中小企業基本法」においても明らかなように、わが国における中小企業とは、企業の実態を「量的」な側面（資本金および従業員数）から中小企業を定義しているのである。これを中小企業の「量的規定」と呼んでおり、これに対し、中小企業がどのような経営形態をとっているか

などの「質的」な側面から中小企業を捉えることを「質的規定」と呼んでいる。

中小企業は、これまでの経済環境の変化のなかで柔軟に対応し、わが国の経済社会を支える土台として、重要な機能や役割を果たしてきたことは周知のとおりである。21 世紀においても、中小企業は、厳しい環境変化のなかで、わが国の経済成長を大きく支え、中小企業が持っている活力が経済発展の１つの大きな原動力として、ますます重要な役割を果たしていくことが期待される。

そこで、2000 年度版の『中小企業白書』によると、新しい中小企業基本法では、21 世紀における中小企業を、機動性、柔軟性、創造性を発揮し、「我が国経済のダイナミズムの源泉」として、下記のような積極的な役割が期待される多様な存在として位置づけている[2)]。

（1）市場競争の苗床

多様な中小企業が、市場の圧倒的多数を占めるプレイヤーとして活発に事業活動を行うとともに、新たな市場を創造していくことにより、市場競争が活性化し、経済の新陳代謝が促進される。

（2）イノベーションの担い手

中小企業は、リスクに挑戦して自ら事業をおこしたり、新事業を展開していこうとする企業家精神発揮の場である。また、新たなイノベーションは、専門性やものづくり技術等を基に小さな工夫や改善に取り組む中小企業が数多くすそ野広く存在することによって可能となり、この中から革新的な技術の製品化や新たな業態等を提供する「ブレークスルー型」の企業が創出される。

このような、中小企業のイノベーションが、多様な財・サービスの提供を可能とし、柔軟で機動的な分業関係を形成する。

①多様な財・サービスの提供

消費者の嗜好が多様化し、ニーズも高度化する中で、自己の得意な分野に特化した中小企業が、多様な消費者ニーズや市場に対応して、迅速かつ機動的に多様な財・サービスを提供し、新たな業態を生み出していく。

②新たな分業関係の形式

我が国経済において、急速な需要動向の変化に迅速に対応し得る柔軟で機動性のある新たな分業関係の形成が必要とされている中で、核となる経営資源を有する中小企業が、大企業の良きパートナーとして、ネットワーク型の分業システムを構築していく。

（3）魅力ある就業機会創出の担い手

中小企業は、創造性のある事業活動において、自己の能力や判断をよりよくいかし、企業家精神を発揮し、自己実現を図り得る魅力ある就業・雇用機会を提供する。また、新たな雇用機会の多くは中小企業の創業や成長によってもたらされる。

（4）地域経済社会発展の担い手

中小企業は、創造性のある事業活動において、自己の能力や判断をよりよくいかし、企業家精神を発揮し、自費実現を図り得る魅力ある就業・雇用機会を提供する。また新たな雇用機会の多くは中小

企業の創業や成長によってもたらされる。

ここまで見てきたように、日本の中小企業のほとんどが個人企業で、わが国の経済成長において重要な役割を果たしてきたことも事実である。先にも述べたように、わが国の中小企業は、近年の急激な経営環境の変化に適応し、競争市場で勝ち残っていくためには、与えられた経営資源を十分に活用して、機動性、柔軟性、創造性を発揮させることにより、日本経済の活力と構造変化を担っていくことが期待されているのである。

4　中小企業の経営者

経営資源の４要素（人・物・金・情報）のなかでも「人」が最も重要な経営資源であることは一般によく知られているとおりである。その意味から、「企業を構成する人材の質をいかに確保し育成するか」、「人材をいかに管理するか」などといった人材の保有と育成していくかが、企業経営において重要な戦略の１つである。

大企業、中小企業のいかんを問わず、この長期不況の時代を乗り切り、さらなる存続と成長を続けるためには、従来の安定的な社会環境を前提とした「量の拡大」を考える経営から「質の観点」に立った企業活動への転換を図っていかなければならない。このように、量から質への転換、すなわち安定な社会環境から不安定な社会環境、量の時代から質の時代、量的な成長から質的な成長などとしてとらえることができる。

したがって、環境が厳しく変化する経済社会のなかで、中小企業が生き残るためには、量から質への転換にあたって、経営者あるいは経営管理者自らの意識改革を行い、将来に発生する環境変化を予測し、変化に適応できるように企業経営そのものを変化させていくことが必要である。

たとえば、企業の質的成長について、内野明は、「変化する環境に対し、能動的に働きかける価値創造」をいう。そのためには、「企業があらゆる情報から現在の①環境を正確に認知し、将来のあるべき社会を想定し、その中で企業がいかに存在価値を見出し得るか、あるいはどう②存在価値を主張するかを構想し、環境に柔軟かつ素早く適応できる、あるいは③環境に能動的に働きかけを行うための知識と、自発的に④自らを変革していける構造を持ち、企業活動を通して社会に新たな価値を⑤継続的に創出していくこと」が必要であると述べている[3)]。

換言すると「企業それ自身の状況と企業を取りまく環境とに対応し、自らの事業、組織、経営管理の方法を、新たな状況に能動的に対処できるように変えていくこと」が必要であり、「時の経過とともに⑥組織進化する企業となること」が必要であると言うことである。

さて、中小企業経営は、周知のようにその殆んどが、経営者の個人的支配の色彩が強くにじみでているといわれている。また、いつの時代でも経営者あるいは経営管理者に要求される資質は、企業規模の大小を問わず、まず先見性と鋭い洞察力であるということは周知のとおりである。特に、中小企

業においては、経営者の先見性が最も重要な要素の１つであり、企業経営の命運を左右する要素である。

たとえば、E.T. ペンローズ（E.T.Penrose）が述べているように、経営者の創造力と洞察力を「企業者のアイデアが本来非実用的であるかぎり、会社にとってはほとんど役に立たない。しかし、それらのアイデアが月並みで近視眼的であっても、同様に無益である。そして、会社の企業者が“鈍感”であれば、それだけで会社の成長は制限される。会社の視野、とくに中小会社の視野が極めて狭いことはありがちである。企業心の乏しい経営者は、自分自身の分野でよい業績をあげていることに満足し、頭を上げさえすれば手の届くところに広大な可能性が存在するのに、それを考えることさえしないであろう」と述べ、さらに、「企業経営者には、想像力に富む努力、タイミングの感覚、なにが当たるか、どうして当てるかを、本能的に見分ける力が圧倒的に重要になるとしている」と述べている[4)]。

また、R.M.ストッジル（R.M.Stogdill）は、企業経営のリーダーに必要な特性について「（イ）創造性、（ロ）人気、（ハ）社交性、（ニ）判断力、（ホ）積極性、（ヘ）優越欲、（ト）ユーモア、（チ）強調性、（リ）活発性、（ヌ）運動能力、をあげている」と述べている[5)]。

さらに、P.F.ドラッカー（P.F.Drucker）も効果的な経営者の資質について、「私がお目にかかったことのある効果的な経営者というのは、その資質や才能はもとより、また、なす事柄、方法において、また彼らの性格、知識、興味において———つまり一個の人間を区別するほとんどであらゆる側面においてまことに千差万万別である」と述べている[6)]。

そして、我が国では、中谷道達は経営者の共通的な特質について、

① 体験にもとづく独自の経営理念を持ち、常に自己革新を行っている。

② 経営方針などビジョンも明確で経営に迷いがない。

③ 深い洞察力と判断力をもち、より長期的観点にたった経営活動がとられている。

④ 旺盛な企業家精神の発揮と強い事業家意欲。

⑤ 強いリーダーシップと卓越した組織運営力。

⑥ 積極的な研究開発姿勢と人材投資。

を挙げている[7)]。

以上のように、中小企業の経営者に要求される資質は、先見性・鋭い洞察力・冷静な決断力・情報・数多い経験と知識・研ぎ済まされた勘・タフでエネルギッシュな体力などであるといえる。というのは、いずれの中小企業の経営に関する権限については、ほとんどが経営者の手に委ねられているからである。特に、経営者の持つ能力がそのまま企業の業績を左右するものであるから、経営者の質を高めることが、重要な経営課題の１つになっている。というのは、経営者の質が高ければ、経営管理者や組織構成員１人ひとりの質を高めるための人材の育成と開発や動機づけもレベルの高いものになるはずである。しかも、日本の中小企業経営者は、特に経営者自身の強い独立心と自己実現を目指すために、自ら事業を企画・立案し、自ら実行するというように、さまざまな経営努力を行っているのが

現状である。

現在および21世紀に向けての中小企業経営は、企業を取り巻く経営環境の変化を把握し、将来に起こると予想される諸条件をできるだけ予測し、その情報にもとづいて積極的に対応していくことが、21世紀に生き残る中小企業経営者であるといえる。

ところで、中小企業経営者は、多様なタイプに分けることができるが、企業の所有という視点から分類すれば、「オーナー経営者」と「専門経営者」の２つのタイプに分けることができる。

①オーナー経営者

わが国で最も多く見受けられる経営者のタイプがオーナー経営者であり、所有と経営が分離されていない企業の経営者である。すなわち、出資者が経営者を兼ねており、中小企業のほとんどがオーナー経営者である。オーナー経営者には任期がない。

②専門経営者

高度で専門的な知識と経験を持っている経営管理の専門家である。一般的にいえることは、専門経営者は、大企業の経営者に多くみられるもので、オーナー経営者としてではなく、経営を仕事として給料をもらって仕事をする経営者である、いわゆるサラリーマン経営者のことである。

また、中小企業経営者には、経営者となる前に勤めていた経験を基にして独立という経営者も多く見受けられるのである。たとえば、日本の中小企業経営者の出身経歴別に見ると、「技術出身」「営業出身」、「総務・経理などの出身」、「趣味・特技などの出身」などの４つに分けることができる。

要するに、わが国の中小企業の場合、企業規模が相対的に小さいため、組織的な経営を行うことができないので、オーナー経営者の力量で経営が行われているのが大半である。

現在、最も多くの中小企業が抱えている後継者の選抜と育成問題は、今や中小企業にとって最も重大な問題であると言わなければならない。たしかに、後継者の選抜を間違えてしまうと企業経営が危機に陥ることがあるので、中小企業にとって深刻な問題である、といえる。

中小企業経営のトップは家庭の主人あるいは家長であり、後継者（跡継ぎ）には必ず長男であったが、長男がいなければ長女の婿が後継者となることは周知のとおりである。しかし、その人が後継者としてふさわしい資質がない場合は、せっかく築いてきた信用と地盤を失ったという事例をみても、うなずけるものがある。いうまでもないことであるが、能力のない人が後継者のポストに座っていることは、本人にとっても企業にとっても不幸であるといっても過言ではない。

したがって、中小企業の後継者は、必ずしも長男が最適任者であるとは限らない。もちろん、実子（次男・三男など）の中に後継者の候補者がいれば後継者とするのは当然のことといえよう。さらに言えば、血縁にこだわらない「実力主義」で後継者を選ぶ企業もあるが、きわめて少ないと考えられる。

要するに中小企業における後継者の育成は、後継者自身が自己啓発に目覚め、いかに積極的に取り組むかにかかっている。

5　中小企業の経営戦略

中小企業をめぐる経済社会環境は非常に厳しい状況にある。このような状況のなかで、大企業に比べて経営資源の乏しい中小企業は、環境変化に対して機敏で柔軟に対応していくだけでは、これからの厳しい経営環境に対応することができない。そこで、これからの中小企業の経営は、変容する環境の現状を的確にとらえ、明確な経営理念を確立し、それに基づいた経営戦略を行っていくことが必要であることはいうまでもない。

中小企業の経営戦略を展開していくためには、まず最初に経済環境の変化を的確にとらえることが重要である。さらにより重要なことは、単に経済環境の変化にしたがうのではなく、経済環境の方向性を見極め、積極的に働きかけるという経営戦略が必要なのである。

伊丹敬之によると、経営環境とは、「環境という要因のなかが、さらに顧客、競争、技術という3つの要因にわかれているのは、環境という複雑なものに対する戦略の適合の内容を考える時には、せめてこれくらいの大別された環境要因ごとにわけて考えないと話が十分に具体的にならないからである。顧客とは顧客ニーズの動向のこと、競争とは競争相手の動向のこと、技術とは世の中の技術動向のことである」と述べている[8)]。

さらに2000年度版の『中小企業白書』には、わが国を取り巻く経済的社会環境について、

①マクロ経済環境の変化

②価値観、ライフスタイルの変化

③グローバリゼーションの進展と産業構造の変化

④企業間関係の変化

⑤産業集積の変容及び流通構造の変化

の5つの大きな変化を挙げている[9)]。

以上のように、大企業であれ中小企業であれ、経営戦略の展開を考えるうえで、企業を取り巻く環境変化の方向性をいち早く的確に見極めることが重要であるのと併せて、競争相手の企業が存在しない市場を開発することである。

したがって、経営戦略を立てる場合、常に企業を取り巻く経営環境の変化や経営内容の進捗状況などを的確に把握し、それに対して柔軟に対処し、さらに時代の流れを読み間違えることなく、時代を先取りしてタイミングを見極めることが企業経営の発展にとって重要なカギである。そのために、常に時代の流れを予測し、的確な判断力や洞察力が必要である。

企業が伸びるか伸びないかの条件については、何よりもまず、徹底的に時代の流れを先読みすることが非常に重要なことである。さらにいえば、時代の読み取りが早すぎても遅すぎても失敗するのである。すなわち、時代の変化を的確に把握し決断し行動することである。

これまで述べてきたように、資本力・担保力に乏しい中小企業が生き残る1つの方法は、なんらか

の独自の技術またはノウハウを基に、生産・情報ネットワーク化などの先端技術の開発に取り組まなければならない。とりわけ、中小企業の新しい活路としては、異業種間の連携により新規事業を積極的に開拓していく必要があるといわれている。いうまでもなく、中小企業が経営戦略を考える上で大切なことは、経営者あるいは経営管理者は、企業内にどれだけの質と量の経営資源が蓄積されているかを調査しなければならない。具体的には、立地、設備、技術、市場、人的資源などの経営資源を改めて見直しする必要がある、ということである。

したがって、経営戦略の策定は、経営環境の分析と企業が所有している経営資源を知ることが不可欠であるといえる。今日のような経営環境の厳しい時代に生き残るためには、企業が経営環境にうまく適合できるかどうかが企業の命運を大きく左右するものである。当然のことながら、企業が経営環境の変化に適合できなければ、企業は競争市場で淘汰されることになるだろう。中小企業経営者にとっては、つねに他社と比較し、企業が所有している経営資源の強みや弱みを十分知っていることが、企業間競走に勝つために必要不可欠である。

変化する時勢と社会環境などが経営戦略の策定を調和させることができるかどうかが、中小企業経営者の成功不成功を決定するカギである、といわれている。経営戦略を別の視点で見てみてみると、経営戦略とは人間（経営者、経営管理者など）が考え出し、人間界（社会環境）に向けて展開していくものである。そして、変化する時勢と社会環境が味方した経営戦略でなければならない。

伊丹敬之は、よい戦略のもっている共通の特色について、つぎの７つを挙げている。
すなわち、差別化、集中、タイミング、波及効果、組織の勢い、アンバランス、組み合わせの７つである。

３番目のタイミングについては、「競争相手に一歩先んじて新製品を出す、顧客のニーズの変化を的確にとらえ、その時のニーズのボトルネックを攻める、製品のライフサイクルに合った戦略を打ち出す、等々すべて戦略を打ち出すタイミングの重要さを物語っている。競争相手に遅れをとって新製品を市場に出しても、すでに需要の多くは相手に流れた後かも知れない。顧客のニーズがまだ要求していないサービス」を提供すれば、数年早すぎただけのために、熟考された戦略も失敗するだろう。

しかし、タイミングは単なる『出会いがしら』ではない。自分でつくりだすものである。好機の到来を待って、着々と戦略の準備をする必要がある。タイミングを見て準備の整った戦略でも遅らせることも必要である。あるいは完全な準備のないまま、しかしタイミングを考えるために、早めの戦略行動が必要となることもあるだろう。」と述べている[10]。

いつの時代においても経営者あるいは経営管理者は、経済や社会環境の変化に対して、何らかの方策で適応行動を取ることによって、企業の存続と成長発展を図ってきたはずである。そこで、どのような経営戦略が成功を得るかといえば、特に重要なのはタイミングである、すなわち、時代の流れと社会事情の交点になった時期が経営戦略を実行するタイミングなのである。

中小企業における経営戦略は、大企業と違って、資金力が乏しく、従業員数も少ないなどいろいろ

な点で異なっているので、次のように経営戦略の特質を挙げることができる。中小企業におけるの経営戦略の特性として、まず、戦略策定の主体は社長のトップダウンの形態をとり、経営戦略の策定の所要期間は一般に３～６カ月間程度であり、経営戦略の対象期間としては３～５年の中期の経営戦略を実施する。そして政治や経済環境に対し柔軟に戦略の変更を行う。経営戦略の策定における基礎情報は一般に少ない情報しかもち得ない。経営戦略を誤った場合、幹部社員のみの間で対応することが多い。また経営戦略の成果についても、その評価の確認をしないまま、次の段階に移る事が多い。

これに対し、大企業における経営戦略は、その経営戦略策定の主体はボトムアップとトップダウンの混ざった形態をとり、そして、経営戦略を策定するにあたっては、年間スケジュールの中に組み込んである。さらに、大企業における経営戦略の対象期間は一般に、10 年程度の長期に渡る経営戦略に及ぶこともある。そのため中小企業が比較的柔軟に戦略の変更を行うのに対し、組織間の利害関係も絡み経営戦略の時代の流れに対し硬直化していることが多い。しかし、戦略策定するにあたっての基礎情報は豊富に保有している。経営戦略が策定された場合、全社員に対して、提示され周知される。また、経営戦略の成果の確認についてはその成果を確認する体制が確立されているとともに、次の経営戦略の策定に活用される。

以上、中小企業の経営戦略について述べてきたが、次に電子商取引を経営戦略として活用した場合、どうであるかについて取りあげてみる。

6　電子商取引の形態と経営戦略としての活用

6．１電子商取引の形態

電子商取引には大別して２つの取引形態がある。一つは企業対企業の電子商取引であり、もう一つは企業対消費者の電子商取引である。そこで、まず最初に企業間の電子商取引について取りあげてみる。

インターネットの普及にともなって、企業間においても従来の電話や FAX などの通信手段による商取引に対し、インターネットを活用した電子商取引も新しく登場し、利用され始めている。企業間の電子商取引の形態としては、主として製造業者と流通業者との間での取引が挙げられよう。他に、同じ製造業者間でもみられる。これは大企業と同系列もしくは下請けの中小企業との間での電子商取引が挙げられる。この場合、取り扱われる商品は原材料や資材、または部品や半製品などである。

最近の新しい電子商取引の形態としては、複数の同業者の中小企業がネット上に共同でサイトを開設し、新たな取引先の開拓をするといったケースも見られる。さらに、多数の中小企業が参加して、電子市場のサイトを開設し、中小企業間での取引も活発に行う動きも見られる。このように多数の中小企業が電子市場に参加することにより、新たな取引先の開拓にもつながるとともに、より有利な条件での取引も可能となる[11]。

二つめは、企業対消費者の電子商取引である。この企業対消費者の電子商取引は現在ではインター

ネットと言う電子媒体を介して、消費者が関心を示すような商品情報や各種サービスを提供し購入を促している。

企業対消費者の電子商取引においては、インターネット上に仮想店舗や仮想商店街などのサイトの開設することが多い。我が国では、1995 年頃からインターネット通販などの諸取引の形態が試みられ、それが、今では 1997 年に開設された楽天市場のような大規模な仮想商店街に成長してきた。そして、現在、企業対消費者の電子商取引を行っている企業は大企業から中小企業、そして個人企業に至るまでインターネット通販を実施している。このように、インターネット通販が急速に進展したのは、次のような利点があったからである。企業にとって、インターネット通販への参入が比較的容易であるとともに、サイトの開設や維持管理が安価であること。さらに、一般の店舗などでは売り場面積に制約があり、取り扱える商品にも限界があるが、インターネット通販の仮想店舗では店舗面積の制約などないため、取扱商品をいくらでも増やすことができる。また、電子カタログに掲載している商品も変更が比較的容易である。さらに、一般の店舗では商圏が特定の地域に根付いていることが多いが、インターネット通販の商圏は世界的規模である。

インターネット通販にはこのような利点があることから、中小企業にとって電子商取引すなわちインターネット通販が有効的な経営戦略になることは間違いない[12]。

6．2　電子商取引による中小企業の経営戦略

中小企業が電子商取引を導入することによって、経営戦略として次のようないくつかの利点があげられる。

まず、第一に市場の拡大である。電子商取引は世界中に張り巡らされたネットワーク網を利用することによって国内はもちろん世界市場に取引先の拡大を図ることができる。

第二に電子媒体による商取引であるため、従来のような帳票による商取引の簡略化を図ることができる。

第三に商品の在庫管理も電子商取引によれば現物の商品の展示や在庫がなくとも、電子媒体による注文に対し、即、商品調達を手配することにより、商品の展示や在庫を減らすことが可能となる。

第四に商取引における時間制約の排除である。電子商取引の導入により、少ない商取引の担当者により早い対応が可能となり、場合によっては 1 日 24 時間の商取引が可能となる。

さらに、消費者にとってもそれなりの利点がある。消費者にとっても多くの販売店のサイトから商品の選択が可能なことから商品購入の選択の幅が拡大できる。また、多くの商品情報も入手できる。時間の制約を受けずに 24 時間商品の購入が可能である[13]。

電子商取引の最大の特性は商取引のスピード化である。現代は政治および経済環境がめまぐるしく変化する。このようなめまぐるしく変化する政治や経済環境に対応するには経済活動もスピードが求められる。電子商取引は現代のようなスピードが求められる経済環境にまさに適した商取引の形態だ

と言える。特に最近は企業間競争が激烈の一途を辿り、もしこの企業間競争に敗れると経営状況の悪化により、経営統合や倒産の道を辿らねばらない。

このスピード化は生産、流通、販売およびサービスの分野はもちろん、研究開発の分野においても求められる。特に、これからの中小企業の経営者には、リアルタイムのしかも正確な情報に基づく意思決定も要求される。これらのことが今後の中小企業の経営戦略には必須のことである。電子商取引は時間と距離の制約を排除した利点を持っており、中小企業の経営者としての経営戦略としては非常に有効な手段である[14]。

このように電子商取引は従来の取引とは異なり、世界市場への展開を可能にし、商取引の簡略化、合理化を推進することにより中小企業の新しい経営戦略の手段となる。

7　おわりに

中小企業が現在のような不況下で、しかも、産業構造の変化に対応して21世紀を生き残るためには、限られた経営資源を最大限に引き出すとともに、それに基づいた経営戦略への展開が必要である。すなわち、新しい技術の導入や、新製品の開発などを推し進めるとともに新しい経営戦略を展開し、守りの経営から新分野の進出、創造的な事業の創出、あるいは販売戦略・生産戦略などの積極的な経営に取り組んでいかなければならない。さらに、中小企業における後継者の育成、あるいは組織構成員１人ひとりの育成をも考える必要もある。

これからの中小企業は経済環境の変化に対応し、企業経営における業績を維持・向上させていくには、その企業独自の経営理念と技術を持ち、各企業独自の経営戦略を展開することが重要である。すなわち、中小企業においても他の企業や機関等と情報ネットワークに参入し、時代に適応した新しい経営戦略を展開して行かねばならない。

中小企業間における情報ネットワークの構築は、大企業との情報格差を小さくする手段であり、また中小企業が競争優位の状態を確保することができる。中小企業はもとより、大企業においても企業間の情報ネットワーク化を積極的に取り組む必要がある。

したがって、中小企業が厳しい競争に勝ち残るためには、企業を取り巻く環境変化をチャンスとしてとらえ、有効な経営戦略を実施していくことが、今後ますます重要になってくるのである。そして、中小企業においては、この電子商取引の活用こそが、最良の経営戦略であると言えよう。

註

1）磯部朝彦監修;日本版デジタル革命,東洋経済新報社,1998,pp128-132.

2）中小企業庁編;中小企業白書（2000年版）;大蔵省印刷局,2000年,pp.419-420.

3) 内野明;情報技術と質的成長,企業診断 Vol.42No.4,1995,p.52.

4) 梶原豊;人材開発の経営学ー人事戦略の視点と展開シナリオー,同友館,1989,pp.33-34.

5) 狩俣正雄;組織のリーダーシップ,中央経済社,1989 年,pp.20-21.

6) P.F.Drucker ; The Effective Executive, Harper & Row, 1966.

野田一夫 川村欣也訳;経営者の条件,ダイヤモンド社,1966,p.46.

7) 中谷道達;新訂２版 日本の中小企業,同友館,1995,pp.142-143.

8) 伊丹敬之;新・経営戦略の論理,日本経済新聞社,1990 年,p.6.

9)中小企業庁編;中小企業白書（2000 年版）;大蔵省印刷局,2000 年,pp.413-415.

10)伊丹敬之;新・経営戦略の論理,日本経済新聞社,1990,pp.317-324.

11)高橋秀雄;電子商取引の動向と展望,税務経理協会,2001,pp87-91.

12)高橋秀雄;前掲書,pp117-138.

13)高橋秀雄;前掲書,pp7-14.

14)片方善治監修;e-コマースシステム技術体系,フジ・テクノシステム,2001,pp118-121.

運動処方としてのウォーキングの実際

Actual Situation of Brisk Walking as an Exercise Prescription

寄本　明

Akira YORIMOTO

Abstract

The purpose of this investigation was to determine the effect of brisk walking on aerobic capacity and to estimate the daily energy expenditure of middle-aged women. The subjects were 20 healthy women aged between 41 and 75 years. The heart rate was recorded by portable bio-information memory equipment, during walking exercise or not. The energy expenditure for 24 hours was estimated by $\dot{V}o_2$ / HR method based upon a relationship between oxygen intake ($\dot{V}o_2$) and heart rate (HR). As for the maximum oxygen intake, the means were 27.28±2.30ml/kg/min. The energy expenditure during walking exercise (42.6±11.3min) was 145.85±46.42kcal/hr and 3.87±0.94kcal/kg/hr, and the daily one, 2,245±331kcal/day and 41.18±5.19kcal/kg/day for an exercise day. The results given as to these middle-aged female walker showed that aerobic work capacity and a daily expenditure of energy were significantly affected by physical activities.

緒　　言

現代の日本では高齢化がすすむ一方で，生活習慣病の有病者やその危険性のある者が急増している。生活習慣病には高血圧症，血液中のコレステロールおよび中性脂肪が多くなる高脂血症，心筋梗塞および狭心症などの心疾患，糖尿病などがあり，その原因には身体活動量の減少とエネルギー過剰摂取が一因であるといわれている。これらの生活習慣病予防対策として運動への取り組みがすすめられており，その効果が証明されてきている。生活習慣病に対する運動の効果は，その強度，時間，頻度といった運動条件によって異なることが知られており，特に運動強度は安全性と効果性との両面からみて生活習慣病予防を目的とした運動において重要なファクターになる[14]ことが指摘されている。

中高年者にとっては，安全で効果的な運動としてウォーキング運動があげられる。このウォーキングは日常生活における基本的な身体動作で，誰にでも安全に行える有酸素運動であり，とくに中高年者の運動としてその有効性が期待されている。ウォーキングの運動効果について著者らは中高年女性を対象に血清脂質や体力値に及ぼす影響を報告してきた[17~20]。今回，ウォーキングを実施している人たちの有酸素能力や運動処方と

してのウォーキングの実態について考察した。ウォーキングの実態はウォーキングの運動強度や運動量さらに1日のエネルギー消費量について運動処方の観点から検討した。

方　　法

1．被験者

被験者は健康な41～75歳（平均53.6±8.2歳）の女性20名で，その身体的特徴を表1に示した。身長および体重の平均値±標準偏差は152.9±6.0cmおよび54.3±4.7kgであった。なお，今回の被験者は全員が主婦で特に仕事に就いていない。

Table 1. Characteristics of the subjects

Subjects	Age (yrs)	Height (cm)	Weight (kg)	%fat (%)
Y.I.	41	154.9	50.8	21.8
E.Y.	42	157.8	51.5	25.9
M.S.	45	161.5	57.0	21.6
H.N.	46	154.9	63.3	21.1
K.I.	47	150.0	52.4	22.3
N.S.	48	159.3	58.5	25.8
S.S.	51	158.2	52.6	26.9
M.Y.	51	154.7	57.3	21.6
Y.O.	51	151.7	50.1	20.9
T.H.	53	143.8	43.8	26.1
K.N.	53	153.7	54.6	21.0
T.I.	54	150.9	54.4	22.3
S.N.	54	162.9	55.6	25.5
K.H.	55	148.6	59.5	31.7
M.K.	58	159.0	55.2	29.4
Y.A.	59	145.7	53.6	25.1
H.K.	62	147.6	48.5	21.5
M.M.	62	154.9	61.3	26.5
S.G.	64	144.4	48.6	32.5
M.H.	75	143.2	56.9	30.7
Mean	53.6	152.9	54.3	25.0
SD	8.2	6.0	4.7	3.8

2．運動処方

被験者は生活習慣病予防を目的とし，日常的にウォーキングを実施しており，その内容は運動強度は50%$\dot{V}o_2max$，運動頻度は3～4回／週，運動時間は1回20～30分間以上を目標として行った。

3．有酸素能力の測定

有酸素能力は最大酸素摂取量をトレッドミルによる負荷漸増法により測定し，評価した。負荷漸増法は4分毎にトレッドミルの速度を増加させるプロトコールにより行った。また，同時に心拍数の測定を行い最高心拍数および最大下運動時における心拍数と酸素摂取量の関係式を求めた。

4．心拍数からエネルギー消費量の推定

エネルギー消費量は心拍数と酸素摂取量との相関関係から，その回帰式を用いて推定する$\dot{V}o_2$/HR方式[5,10,16]によって算出した。心拍数とエネルギー消費量（酸素摂取量）の関係は，基礎時から安静時にかけての直線と身体活動時の直線の2本から成り立っており，この回帰直線を用いることにより，心拍数からエネルギー消費量を推定できる（図1）。基礎時におけるエネルギー消費量は体表面積から求めた推定値であり，心拍数は実測値である。安静時のエネルギー消費量および心拍数は，30分間の椅座位安静の後に測定した。身体活動時のエネルギー消費量および心拍数は，トレッドミルによる負荷漸増法により最大酸素摂取量を測定する経過中に測定した。

生活活動中の心拍数は胸部誘導により携帯用

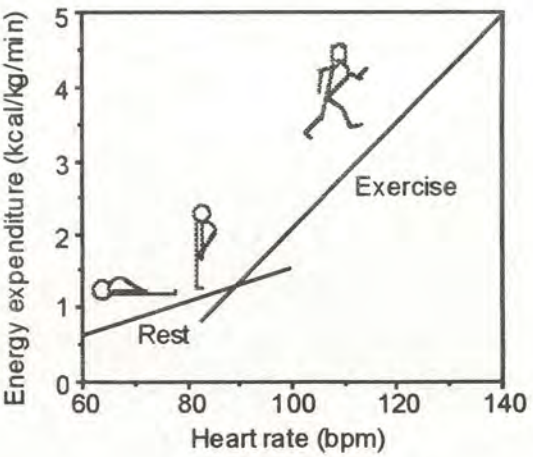


Fig. 1. Regression line based on a correlation between heart rate and energy expenditure.

心拍記憶装置（VINE, VHM1-016）に毎分の測定値を記憶し，後にデータを解析した。ウォーキング時および1日のエネルギー消費量はこの心拍数記録に各被験者ごとに求めた心拍数とエネルギー消費量との回帰式を用いて算出した。

結　　果

1．有酸素能力の評価

年齢と体重あたりの最大酸素摂取量との関係を図2に示した。本研究の被験者は黒丸印で，これまでに我々が測定した日本におけるリズム体操クラブ実施女性[15]は白丸印で示した。なお図中のラインは日本人一般女性の平均的な加齢変化[11]を示したものある。今回の被験者は，体重あたりの最大酸素摂取量（ml/kg/min）の平均値±標準偏差は27.28±2.30mlであった。なお，最も大きな値は被験者T.H.(53歳)の30.50mlで，最も小さい値は被験者T.I.(54歳)の22.70mlであり，最高齢者75歳のM.H.は27.40mlであった。ウォーキング実施者はリズム体操実施者と同様に一般健常者より大きな有酸素能力を示していた。

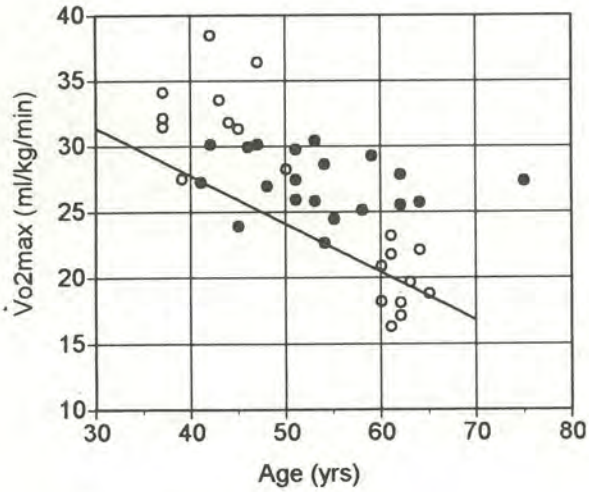


Fig. 2. Changes of $\dot{V}o_2max$ with age.
●Walker, ○Aerobic dancer, －Japanese normal

2．1日エネルギー消費量

基礎時から安静時および最大下作業時について心拍数とエネルギー消費量の関係を示したものが先の図1である。この直線は被験者により異なり，それぞれ被験者についてこの回帰式を求め心拍数からエネルギー消費量を算出した。このエネルギー消費量の1日の総計(kcal/day)は1,832～2,580kcalの範囲にあり，平均値では2,245±331kcalであった。体重当たりの値（kcal/kg/day）は34.47～50.37kcalの範囲にあり，平均値では41.18±5.19kcalであった。厚生省が日本人の栄養所要量の中で示している女性の年齢別，生活強度別のエネルギー消費量[12]と本研究の値を図3にプロットした。生活活動の強度区分はIが軽い，IIが中等度，IIIがやや重い，IVが重いとされている。ウォーキング実施者はIIの中等度からIVの重いに分布していた。

3．ウォーキング運動の強度，時間およびエネルギー消費量

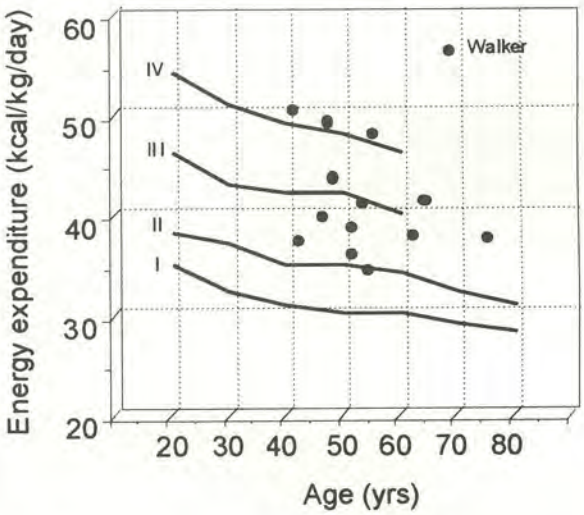


Fig. 3. Changes of energy expenditure with age.
I : Daily physical activity levels (DPAL) in Japanese women is light. II : DPAL is moderate. III : DPAL is moderately heavy. IV : DPAL is heavy.

Table 2. Energy expenditure during walking

Subjects	Age (yrs)	Time (min.)	E.E. during walking (kcal)	E.E. during walking (kcal/kg/hr)	net-E.E. during walking (kcal)	net-E.E. during walking (kcal/kg/hr)
Y.I.	41	44	159.35	4.28	114.91	3.08
E.Y.	42	37	116.53	3.67	74.35	2.34
M.S.	45	34	81.34	2.52	43.60	1.35
H.N.	46	38	145.91	3.64	103.73	2.59
K.I.	47	52	226.09	4.98	168.37	3.71
N.S.	48	36	175.27	4.99	130.99	3.73
S.S.	51	45	109.63	2.78	71.38	1.81
M.Y.	51	44	103.90	2.47	61.22	1.46
Y.O.	51	25	115.57	5.54	102.07	4.89
T.H.	53	47	159.57	4.65	112.57	3.28
K.N.	53	51	167.58	3.61	100.77	2.17
T.I.	54	61	176.78	3.20	130.42	2.36
S.N.	54	37	119.20	3.48	79.61	2.32
K.H.	55	51	242.77	4.80	196.36	3.88
M.K.	58	48	171.30	3.88	136.26	3.09
Y.A.	59	55	210.35	4.28	169.65	3.45
H.K.	62	61	149.04	3.02	103.29	2.09
M.M.	62	25	85.37	3.34	62.12	2.43
S.G.	64	21	91.54	5.38	73.90	4.34
M.H.	75	39	109.86	2.97	65.40	1.77
Means	53.6	42.6	145.85	3.87	105.05	2.81
SD	8.2	11.3	46.42	0.94	40.91	0.98

E.E.: Energy expenditure

表２にはウォーキング時のエネルギー消費量を示した。ウォーキングのエネルギー消費量は81.34～242.77kcal の範囲にあり，平均値では145.85±46.42kcal であった。体重当たりの値（kcal/kg/hr）は 2.47～5.54kcal の範囲にあり，平均値では 3.87±0.94kcal であった。安静の値を除した真の運動によるエネルギー消費量は 43.60～196.36kcal の範囲にあり，平均値では 105.05±40.91kcal であった。体重当たりの値（kcal/kg/hr）は 1.35～4.89kcal の範囲にあり，平均値では 2.81±0.98kcal であった。さらに，図４にはウォーキング時の運動強度（%$\dot{V}o_2max$），運動継続時間，エネルギー消費量を被験者別に示した。運動強度は心拍数より推定した酸素摂取量から求めた活動中の平均強度である。運動強度は最大酸素摂取量の 27.7～67.1％に相当しており，平均で 46.0

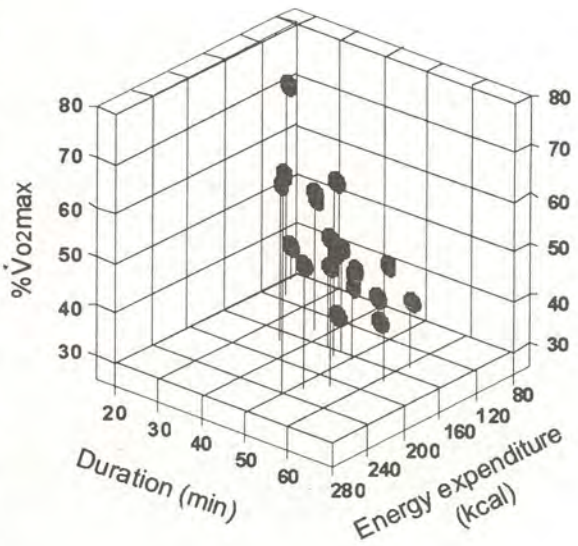


Fig.4. Exercise intensity, duration and energy expenditure during brisk walking

±11.1%Vo_2max であった。運動継続時間は 21～61 分間で，平均 42.6±11.3 分間であった。その際のエネルギー消費量は表 2 でも示したように 145.85±46.42kcal であった。

考　　察

著者[17~20]はこれまでに中高年女性を対象にウォーキング運動を行い，体脂肪率の有意な低下，体脂肪量の減少，総コレステロールおよび中性脂肪の血清脂質の低下，動脈硬化指数の改善を認め，ウォーキングの習慣化により動脈硬化を予防し，心血管系に対する効果が期待でき，虚血性心疾患や動脈硬化等の心血管系の疾患の予防に寄与することを示唆してきた。さらに，各種の体力測定からウォーキング実施により特に筋力，平衡機能，敏捷性，持久性の機能向上を認め，転倒予防や循環機能の改善に寄与することも報告している。これらのことより，ウォーキングのように運動強度が中等度の運動であっても習慣化することにより，中高年者にとっては生活習慣病予防としての効果は十分期待できると考えられる。

健康な生活の基盤となる重要な体力構成要素としては有酸素能力が考えられ，その指標として古くから最大酸素摂取量が測定されている。そこでウォーキング実施者の最大酸素摂取量を検討したところ，体重あたりの最大酸素摂取量（ml/kg/min）が平均値 27.28±2.30ml であり，一般健常者より大きな有酸素能力を示していた。加齢による有酸素能力の変化は図 2 の最大酸素摂取量の低下にみられるように減退して行く。しかし，運動を実施している中高年女性の有酸素能力は明らかに一般の健常者の水準より高い。これはウォーキングやリズム体操などの有酸素運動が加齢による退行速度を遅らせていると考えられる。

最大酸素摂取量はこの様に加齢により低下するが，その原因は 1 回拍出量や動静脈酸素較差の低下[15]，心臓血管系の反応性への神経ホルモン刺激の減少[21]，筋量の減少[4]によると指摘されている。有酸素能力は健康な生活の基盤となる重要な体力の構成因子であり，この能力は加齢にともなって減少していくが，身体活動，特にウォーキングなどの有酸素運動によってその退行速度を遅らせ，高い水準を維持することが認められた。

本実験の被験者におけるウォーキング実施日のエネルギー消費量は 2,245±331kcal/day，41.18±5.19kcal/kg/day であった。日本人の栄養所要量[12]の中で示されている女性の年齢別，生活強度別のエネルギー消費量からみた生活活動の強度区分は I が軽い，II が中等度，III がやや重い，IV が重いとされており，ウォーキング実施者は II の中等度から IV の重いにまで位置していた。被験者は全員主婦であり，日本での生活活動強度区分では I（軽い）に分類される。今回の被験者はこの値よりは大きく，高いエネルギー消費量を示した。

ウォーキングの運動強度は 46.0±11.1%$\dot{V}o_2max$ であった。被験者らはこの強度で 42.6±11.3 分間実施しており，ほぼ生活習慣病疾患の予防効果のある運動強度が確保されているといえる。一般に有酸素能力の向上に効果のある運動強度は 70%$\dot{V}o_2max$ 以上で，その持続時間は 5 分以上と考えられている[8]。中年女性の有酸素能力の向上においても，70%$\dot{V}o_2max$ 以上の負荷が必要であるとする報告が多い[1,2,7]。70%$\dot{V}o_2max$ 以上の運動強度では運動時間が 5～10 分程度で充分であるが，30 分間以上にわたって実施している運動には必ずしもこの運動強度を対応させることはできない。寄本[17~20]は 50%$\dot{V}o_2max$ 強度で 20 分間のウォーキング運動を，Kilbom[9]は 50～60%$\dot{V}o_2max$ 強度で 30 分間の運動を，進藤ら[13]は 50%$\dot{V}o_2max$ 強度で 1 時間の運動をそれぞれ行い，その効果を報告している。運動強度が 50%Vo_2max 程度の場合は 20～30 分間以上が効果的

な運動強度と考えられ，このような運動の実施者は有酸素能力の維持，向上すなわち生活習慣病予防が期待できる強度と時間であるといえる。

一方，今回の被験者において，ウォーキング時の運動強度が40％$\dot{V}o_2max$未満の者が6名おり，目標の運動強度50％強度を下回っていた。これはウォーキング実態として充分な運動強度が得られていない者がいることを示唆している。理由としては複数人でのウォーキング実施によるウォーキングペースの低下，夜間のウォーキングによるペースの誤認識，不適切なウォーキングコースなどが推察される。しかし，Hardmanら[6]は，活発な歩行（Brisk walking）という指示でウォーキングを行うと，その際の運動強度は血中乳酸濃度約2 mmol/lの有酸素閾値であり，有効にエネルギーを消費し，長時間続けられると報告しており，必ずしも厳密な運動強度の管理は必要ないと考えられる。むしろ，Cookら[3]は中年男性にとっては低い運動強度と思われるウォーキングの長期間の実施で，運動の効果を認めている。これらのことより，ウォーキングのような比較的軽い運動であっても習慣化することにより，中高年者にとっては生活習慣病予防としての効果は十分期待できると考える。たとえ運動量が少なくとも運動習慣の維持が重要である[19]ことが示唆されている。

ウォーキング時のエネルギー消費量は145.85±46.42kcalであった。厚生省[12]では健康の維持・増進をはかるためには，生活活動強度Ⅰの女性は日常生活で100～200kcal／日，生活活動強度Ⅱの女性は100kcal／日程度の付加運動量が必要であるとしている。ウォーキングの場合，この必要なエネルギー消費量を満たしており，日常生活での付加運動に適していると考えられる。

このように活動中および活動日の1日エネルギー消費量，さらに実施者の有酸素能力を測定した結果から，ウォーキング運動実施者は生活習慣病予防や健康維持にとって必要な運動強度および運動量が確保されていた。

要　　約

ウォーキング運動を日常実施している中年女性の有酸素能力，ウォーキング時の運動強度およびエネルギー消費量を求め考察した。

ウォーキング運動を実施している中年女性の最大酸素摂取量は27.28±2.30ml/kg/minで，日本人の同年齢の標準値より大きかった。ウォーキング中の運動強度は46.0±11.1％$\dot{V}o_2max$であり，ほぼ生活習慣病疾患の予防効果のある運動強度が確保されていた。一方，ウォーキング（42.6±11.3分間）時のエネルギー消費量は145.85±46.42（81.34～242.77）kcalであり，体重当たりの値では3.87±0.94（2.47～5.54）kcal/kg/hrであった。これは日常生活の付加運動として必要なエネルギー量を満たしていた。また，1日エネルギー消費量は2,245±331（1,832～2,580）kcal/day，41.18±5.19（34.47～50.3）kcal/kg/dayであった。このように，ウォーキング運動実施者は生活習慣病予防や健康維持にとって必要な運動強度および運動量が確保されていた。

文　　献

1) 浅見俊雄，北川薫，山本恵三，生田香明，佐野裕司．トレッドミルおよび自転車エルゴメーターによる中年女性の持久性トレーニング効果とその特異性について，体育科学，3,49-57, 1975.

2) 跡見順子，伊藤克子，宮下充正．中高年女子にみられる有酸素的作業能のトレーニング効果，体育学研究，18, 253-260, 1974.

3) Cook, T.C., R.E.Laporte, R.A.Washburn, N.D.Traven, C.W.Slemenda, and K.F.Metz: Chronic low level physical activity as a determinant of high density lipoprotein

cholesterol and subfractions. Med.Sci.Sports Exerc., 18(6), 653-657, 1986.

4) Fleg,J.L. and E.G.Lakatta, Role of muscle loss in the age-associated reduction in Vo_2max., J.Appl.Physiol., 63, 1147-1151, 1988.

5) 橋本　薫，青木純一郎，進藤宗洋，小林寛道，佐藤祐．日本人の身体的活動量の低下状況とその改善手段に関する研究，国立栄養研究所報告，32，53－60，1983.

6) Hardman,A.E., P.R.M.Jones, N.G.Norgan and A.Hudson: Brisk walking improves endurance fitness without changing body fatness in previously sedentary women. Eur.J.Appl.Physiol., 65, 354-359, 1992.

7) 伊藤稔，伊藤一生，八木保，川初清典，森淑子，前田喜代子．歩行トレーニングによる中高年女子の最大酸素摂取量の増加について，体育科学，3, 41-48, 1975.

8) 加賀谷熙彦，加賀谷淳子．運動処方ーその生理学的基礎ー，230-239，杏林書院，　東京，1984.

9) Kilbom,A., Physical training with submaximal intensities in women, Reaction to exercise and orthostasis, Scand.J.clin.Lab.Invest., 28, 141-161, 1971.

10) 北川　薫，梅村義久，高見京太，石河利寛，山本高司．HR-$\dot{V}o_2$ 関係式から推定した中学生の１日のエネルギー消費量とその問題点，体育科学，19，57－63，1991.

11) 小林寛道，北村潔和，豊島進太郎，水野義雄，長沢弘，松井秀治．健康成人女子における女子スポーツ選手の Aerobic Power，体育学研究，24，237-246，1979.

12) 健康・栄養情報研究会．第六次改定日本人の栄養所要量，第一出版，東京，1999.

13) 進藤宗洋，田中宏暁，小原繁．自転車運動による 50％$\dot{V}o_2$max，60 分間トレーニングが成人女子におよぼす影響，体育科学，3，58-67，1975.

14) 吉武裕，太田壽城：成人病に対する有酸素運動の効果．栄養学雑誌，50(2), 59-68,1992.

15) 寄本　明，佐藤尚武，小川朋子，南　和江．高年婦人におけるリズム体操クラブでの運動強度と有酸素能力，滋賀県体協スポーツ科学，9,118-123, 1989.

16) 寄本　明，佐藤尚武，武部吉秀，岡本　進，森本武利．高齢者の生活活動強度と１日エネルギー消費量，臨床スポーツ医学，9，1020-1026，1992.

17) 寄本　明，森　公子，澤田賢三，森本武利．中高年女性におけるウォーイング・エクササイズが血清脂質および体力値に及ぼす影響，臨床スポーツ医学，10, 1120-1024, 1993.

18) Yorimoto,A., Effect of walking on risk factors of chronic non-communicable diseases and daily expenditure in middle-aged women. (Edited by H.nose, E.R.Nadel, T.Morimoto): The 1997 Nagano Symposium on Sports Sciences, Cooper Publishing Group, USA, 1998.7, 430-435

19) 寄本　明．ウォーキング運動が中高年者の生活習慣病危険因子に及ぼす影響，滋賀県立大学国際教育センター研究紀要，2，153-161，1997.

20) 寄本　明，岡本秀己，山本和代，吉岡正子．長期間の習慣的な運動が中高年者の成人病危険因子および体温調節能に及ぼす影響，デサントスポーツ科学，18，185-194，1997.

21) Yousef,M.K., Heat tolerance and exercise capacity in old age, in Hales,J.R.S. and D.A.B.Richards (eds) "heat stress: Physical exertion and environment", 367-382, Elsevier Science, New York, 1987.

国際教育センターの活動紹介

英語教師の懐旧談

Apologia Pro Vita Sua

栗山　稔
Minoru KURIYAMA

「多(他)生の縁」というものなのか、本学の創設に開設準備委員として参加することになり、平成7年の開学からは特例の定年で最後の学年度となる今日まで英語教員として勤務してきた。以前に務めていた大阪市立大学を含めて振り返ると、随分長いあいだ英語・英文学を教えたことになる。この間、大学を含む学校の英語教育は絶えず批判され続けたが、それでも今日ほど激しい批判に曝された時期はなかったように思われる。今、このような批判の真っ只中で去っていく英語教員として、一言、弁明なしにはすまされないところだろう。しかし私は「英語教育」を専門に研究した者ではないから、正面から学校の「英語教育」を論じて弁明する資格はない。そこで自分がどのようにして英語教師となり、どのような英語教師であったかを語って、その英語教師の懐旧談の中に自ずと Apologia Pro Vita Sua「我が生涯の弁明」を潜ませたいと願っている。懐旧談であるから、思い出すままに記憶の中の真実を語り、特に文献を取り出して記憶を確認するような作業は省略した。もし事実と異なることがあれば、記憶違いの責任はすべて筆者にあるが、間違いを含めてこれが私の記憶の真実である。

私は「今は昔」としか言いようがない昭和 25(1950)年に大学に入った。イギリスの有名な女性作家スパーク(Muriel Spark)に「今は昔、1945 年のイギリスでは善良な人びとはみんな貧しかった」'Long ago in 1945 all the nice people in England were poor'という書き出しで始まる作品があるが、戦勝国イギリスがそんな有様だったから、敗戦国日本では昭和 25 年になっても文字どおり「善良な人びとはみんな貧しかった」と言えたと思う。私も貧しく ── したがって善人であったが ──、食べるものも着るものも容易には手に入らない敗戦国の戦後を生きていた。スパークの作品には貧しくとも、魅力に溢れた、溌剌とした娘たちが登場するが、私は空き腹を抱え、ぼろをまとった、頭も貧弱な大学生となった。大学の仲間も同じように「善良な人びと」で、したがって貧しい連中であったが、中には豊かな精神の持ち主もいて、そんな一人が、英文志望なら『英語青年』という雑誌を購読するようにと教えてくれた。

当時の『英語青年』は新聞を折り畳んでホッチキスで綴じたような、今の雑誌のように裁断されていない、粗末な体裁の雑誌だったが、ペーパーナイフでカットしながら、一ページ一ページ、ページを繰っていくのは何かしらささやかな学問的な喜びであった。筑波大学の遠い前身に当たる東京文理科

大学教授福原麟太郎が当時はエディターで、毎号、巻末の片々録というコラムで「英学時評」を担当しておられた。またもっと前のエディターで神奈川県の鵠沼に隠居していた喜安璡太郎が、これまた毎号「鵠沼通信」という英語・英文学的エッセイを寄稿しておられた。私の英語・英文学の勉強はこの「英学時評」と「鵠沼通信」を愛読することで始まり、そこから作家、学者、批評家そして書物について実にたくさんのことを教えられた。

『英語青年』を講読し始めて間もない頃、喜安璡太郎が「鵠沼通信」の何か記述の誤りを読者に指摘されて、不勉強を恥じ、誤りを書いた手を鞭打つような真摯な反省の弁を書いておられたが、これなども実に厳しい学問的な教訓となった。同じ頃、私たちのクラスの英語を担当しておられた名物教授で、アイルランド演劇の研究家、と言うよりも歌舞伎や新劇の劇評家として著名だった山修こと山本修二は、「君ら、もし教師になったら、しまった、間違ったと思ってもあわてて訂正なんぞしてはいけないよ。学生諸君は、せっかく訂正したって、正しいことを覚えてくれないで、あの教師は間違ったという事実だけをいつまでも覚えているものだからね」と笑っておられた。これはまさに至言で、私も喜安璡太郎も間違ったということだけを覚えていて、何を間違えられ、そして何が正しかったのかはすっかり忘れてしまった。しかしこの場合は、喜安も間違ったというよりも、間違ったあとの喜安の真摯な学究的態度についての記憶となっているのだから、喜安よ、もって瞑すべしということにしておきたいと思う。

『英語青年』を持ち出したのは、この雑誌が私にとって最初の英語・英文学の情報源であったというだけでなく、私が英語の勉強を始めた頃の記憶をたどる出発点にもなるからである。私が英語の教師になって何年かたった頃のこと、「英語・英文学研究者となった動機」というようなアンケートの回答が『英語青年』に掲載されたことがあった。著名な先生方が回答を寄せておられたが、その中によく似た回答があって、興味を引かれた。年齢で言うと私よりも十五、六かもう少し先輩にあたるお二人の方の回答である。お二人は中学時代 ── 昭和 20 年 8 月の敗戦から数年がたつまで学校教育は戦前のままの制度であった。小学校が六年、中学校が五年、高等学校が三年、大学が三年で、これを古い教育制度という意味で旧制と呼んでいた ── お二人はこの旧制中学の時代に英語の先生が'virgin'を

that has never been used by man before

と説明して、はにかんだように微笑されたという思い出を書いておられた。そしてお一人はこういう語義の分析を研究して暮らす人生もよいと思って、結局、英語学者になった、もうお一人はその時の先生のほほえみに文学を感じて英文学をやることにしたと書いておられた。

私の中学時代にも似たような記憶がある。私が中学 ── これも旧制中学 ── へ入学したのは第二次大戦末期で、一年生の秋からは勤労動員で ── 第二次大戦中、二十歳くらいから上の働き盛りの男性は、招集されたり志願したりして、兵隊として戦場へ送られたので、農家や工場の働き手が不足した。それで中学校や女学校（旧制は男女共学ではなかったから、中学校というと男子の中学校、女学校というと女子の中学校）の生徒たちが工場や田圃、畑に動員されて働いた。これを勤労動員と言っていた ── その勤労動員でまともな授業などなかった。だから私が同じ説明を聞いたのは、敗戦後、学校が再開されて以後のことと思われる。ただ私の場合は同じ説明を聞いて、語義の分析がおもしろいと思

ったり、先生のほほえみに文学を感じたりして、この記憶が残ったわけではない。たしかにこの説明は'virgin'なる'something'を説明するには実にうまく使える。例えば

virgin soil(forest)

が

soil(forest) that has never been used by man before

という説明は十分説得的である。私の場合、『英語青年』のアンケートをきっかけに'virgin'の説明を聞いた教室風景を思い出したのは、この英語による言い換え、パラフレーズを気持ちよく納得させた英語の先生に理由もなく好感を持ったことが運命のいたずらとなって、あのアンケートのお二人の先輩と同じように英語教師となって、今、これほど批判を浴びながら、身を縮めて去っていくことになる、これが遠因となっているからである。

'virgin=that has never been used by man before'というパラフレーズについてお二人の先輩のアンケート回答と、私の記憶を持ち出したのは、再開された戦後の中学で私の受けた英語の授業が、教授法からみると、お二人の先輩が戦前の中学で受けられた英語の授業の延長線上にあったということの証拠となるように思えるからである。最初に言ったとおり、英語の教授法の歴史についての研究史的な知識はないが、東京大学教授市河三喜を中心に、語学教育研究所が日本の英語教育の改善と能率の増進を期して、大正の終わりから昭和の一桁、二桁の時代を通じてさまざまな教授法を提唱したが（――こういう提案は何もこの時に始まるものではない。夏目漱石の「中学改良策」も英語教育についての提案が中心であった――）、英語を日本語に翻訳する訳読をできるだけ避け、英語を、直接、英語を通して理解させる方法が、いろいろな方法の中で多くの支持を得た教授法であったと思う。そしてこの教授法を支える拠り所として、市河三喜監修、研究社辞書部編の *Kenkyusha's Simplified English Dictionary* (English through English)、『簡易英英辞典』(昭和 13 年)が研究社から、さらに語学教育研究所のホーンビー(A.S.Hornby)ほか二氏編の *Idiomatic and Syntactic English Dictionary*(昭和 17 年)が開拓社から出版された。私の受けた英語教育はこのような教授法の時代の中にあったのである。この教授法で、例えば、

fly=go through the air by [means of] wings

と教えられ、

A bird is flying.

は

A bird is going through the air by [means of] wings.

と言い換えて、理解したのである。

この方法はそのうち語彙が増えてくると、

A bird is gliding(floating/hovering/drifting) through the air with wings spread.

A bird is moving swiftly through the air with wings beating.

A bird is soaring into the sky

などと、文脈によって鳥の飛翔の状況をもっと細かく言い換えて、いっそう正確に理解できるように

なってくる。また状況をいっそう正確に捉えて、言い換えようという意欲が湧いてくる。また'fly'の少し異なった使い方、例えば

I flew back to London from New York.

I rushed into the house and flew upstairs, calling to mother.

なども

I went(travelled) back [through the air] to London from New York by [means of a] plane.

I ran into the house and went upstairs in a great hurry as if I was a bird that moved swiftly through the air, calling (crying in a loud voice) to mother.

などとつぶやいて、理解するようになる。

また'virgin'についても

virgin soil(forest)=soil(forest) that has never been used by man before

から進歩して

soil(forest) that has not yet been explored by man

とか

soil(forest) that has not yet been cultivated(spoiled) by human beings

とか

soil(forest) that is still in its natural state

などと言い換えて、理解するようになる。また'something that is virgin'、'virgin'なる物から進んで、中学生にとって関心の的である女学生、'virgin'なる娘、すなわち名詞の'a virgin'についても、

something that has never been used by man before

は要するに

something pure and clean as if it has never been used by man before

なのだから、

a girl who is pure and clean

とパラフレーズして理解するのがよいのではないかと考えるようになる。そのうちに「人間によってまだ利用されたことがない」という概念の中には「敵である人間によってまだ利用された（占領された）ことがない」、すなわち

that has never been taken(conquered) by the enemy before

という概念が含まれていることも分ってくるし、また女性に言い寄ることを城を攻めることに喩えることも分かってきて、

a girl who has never been conquered by [any] man

と言い換えて、理解することができるのではないかと考えるようになる。そしてさらに語彙が増えると、

a girl who has not yet been soiled(stained/ravished/sullied/defiled/conquered) by [any] man

のように、いろいろに言い換えられるようになってくる。そしてやがてはキーツ(John Keats)という詩

人が「ギリシアの瓶に寄せる」('Ode on a Grecian Urn')という詩で、ギリシアの瓶に'ravished'を使って呼びかけていることを知る。

Thou still unravish'd bride of quietness

汝、なお犯されざる（清らかな）静寂の花嫁よ

また王子ハムレットは第一独白で'sullied'を使って

this too too sullied flesh

あまりに、あまりにも穢れたこの肉体

と言って ── ここは'sullied'か'solid'かが問題になるせりふであるが ── 父王の死後二ヶ月も経たないうちに叔父と再婚した母親の汚れを嫌悪することを知る。また英語の深層に組み込まれてるため、是非とも読む必要のある聖書の英語をみるようになると、旧約聖書創世記でロトという人物が *The New English Bible* という英訳聖書で

I have two daughters, both virgins.

と言うところに出会う。同じ場面で三、四年前に翻訳が出て話題になったウォンゲリン(Walter Wangerin, Jr.)の『神の書　小説としての聖書』(*The Book of God, the Bible as a Novel*)ではロトは

I have two daughters who are still virgins.

と言う。同じ箇所で欽定英訳聖書(*Authorized Version*) ではロトに

I have two daughters, which have not known man.

と言わせている。そこで

a girl who has not yet known [any] man

という言い換えも立派な英語であることが分かってくる。しかし私の英語学習時代は現在のようにテレビやラジオから話し言葉の英語(spoken English)が何時でも聞こえてくる時代ではなかったから、

a girl who has never had sex

などと直裁に言えると分かるまでにはかなり時間がかかったように思う。現在では、ある女性との関係を隠しきれなくなって、

I had a relation with Miss Monica Lwinsky, which was not appropriate...

などと苦しげに「不適切な関係」を告白しているどこかの大統領の顔がテレビで大写しになったりするから、これを利用して

a girl who has never had a sexual(an inappropriate) relation with [any] man

などと言えることも分かる。英語の学習者として私は、結局、

fly=go(move/glide/float/hover/drift/soar) through the air by means of wings (with wings spread/beating)

などと、また

virgin=not used, untouched, unexplored, uncultivated, unspoiled, natural, unchanged by human activity, fresh/pure/clean as if it has never been used before, naive, innocent, inexperienced, not have sex, unmarried, chaste, that has never been taken, unconquered

などとパラフレーズして理解するような態度で勉強してきたから、また訳読をしていても日本語訳が

どのパラフレーズに基づいているのか絶えず気にしてきたから、私は、結局のところ英語の学習者としては、あの敗戦後再開された中学校の授業の中にずっといたのだと思う。英語学習上この方法の優れた点は、類似した概念を表現する言葉を纏めて記憶の同じ引き出しに入れておいて、その中から場面に応じてもっとも適切な言葉を取り出して使うことができる点にあると思う。また英語の学習者にとって英語で考えること(thinking in English)が必要であるとはよく言われることであるが、考えるに価する内容というものはなかなか思い浮かぶものではない。しかし目の前にある英語の内容を言い換えるのであれば、英語で考えるに価する内容に困ることはない。内容のある英語が目の前にあれば、いくらでも内容のあることが英語で考えられるというものである。今のように英語の氾濫している時代でも絶えず英語で考え、英語を使う環境にいる学習者は少数で、大部分の学習者は英語を使う状況やその状況で言うべき内容を想像して英語で考えるということにならざるを得ない。そういう実状の中では教材の内容を利用して、別の英語で言い換える練習をすることは英語を使う状況を作り出すという点でも優れていると思う。同僚の大谷泰照教授のお話によると、海軍兵学校 ── 敗戦前、日本帝国海軍の将校を教育していた学校 ── では、敗戦直前にも生徒全員にすでにふれた『簡易英英辞典』を持たせて、英語の授業をしていたそうである。この辞書を使わせたパラフレーズ方式の英語の授業を考えると、旧海軍の士官が、全体として、旧陸軍の士官よりも英語ができて、その結果、国際感覚を持っていたということが当然のことだったと思える。私は英語教師として、時期に応じ、クラスに応じていろいろな教授法をとってきたが、もっとも愛用したのはこのパラフレーズ法であり、英語の学習方法として学生の身に付けさせようと努力してきたのもこの方法である。したがって、学習者としてばかりでなく教師としても私はあの中学校の教室の延長線上にいることになるようである。何か結論めいたことをすでに言ってしまったが、この方法に確信を深めていく経過をもう少したどらせてもらうことにする。

私は中学時代、どちらかと言えば理数科系の科目が得意な生徒だった。旧制中学五年の途中で新制高校二年となったのだが、文部省の学習指導要領の改正か何かで、新制高校二、三年生の理数科系の科目はほとんど旧制中学四年生までに習った内容の繰り返しになってしまった。それで理数科系の科目を軽視するようになり、最後には嫌いになってしまった。理数科系にくらべると文化系科目は手応えがあったように思う。英語に限って言うと、三年生の教科書にはベーコン(Francis Bacon)の『随想』(*Essays*)から「学問について」('Of Studies')が採録されていたし、またラム(Charles Lamb)の『エリア随筆集』(*Essays of Elia*)の、「夢の中の子供　夢想」('Dream Children: A Reverie')だったのか「焼き豚論」('A Dissertation upon Roast Pig')だったのか思い出せないが、とにかくラムの一章があった(── 失礼ながら今の大学生諸君にはこんな教材は、現在の英語教材としての適否は別にして、内容、英語ともに難し過ぎるだろう ──)。そして担当の先生 ── 'virgin'のパラフレーズの先生とは別人 ── が古びた赤い表紙のいわゆる原書、今、思えばマクミラン英文学古典叢書(Macmillan's English Classics)だったのだが、ともかく洋書を持って来て、「齋藤勇先生(昔の東大英文科の教授)はここをこうお訳しになった」などと言い出す場面もあって、当時、日本は戦争に負けて軍国主義国家から文化国家になろうとして

いたのだが、なんだか文化的な気分になれた。こういうわけで文化系の科目を好む生徒になっていった。全体としては旧制中学四年半の惰勢で、あまり勉強もせずに新制高校二年次の半分と三年次を過ごしたようなもので、高校最後の夏休みの終わりに、そろそろ少し本を読む癖を付けなければと、漱石全集に取り付いて、『草枕』で「前を見ては、しりえを見ては、物欲しと憧るるかな、我」とかいう漱石訳と引用されているシェリー(Percy Bysshe Shelley)の詩の原文を見比べて、なぜこんな翻訳になるのかと途方に暮れたことを思い出す。

こうして英文志望の大学生になって、最初に話した『英語青年』を講読することになるわけである。一回生の英語教科書の一つはあの『宝島』(*Treasure Island*)のスティーヴンソン(Robert Louis Stevenson)の『旅はロバとともに』(*Travels with a Donkey*)だった。Stevenson はこの当時、受験参考書に例題を提供することの多かった作家で、この『旅はロバとともに』も主人公が満天の星空の下で野宿する箇所など何度か出会った文章だった。それでたかをくくってろくな予習もせずに教室に出たのだが、第一ページで当てられたクラスの仲間が詰まってしまい、先生が次々に指名を繰り返されるという嫌な事態となった。問題になっている言葉は'the freedom of language'だった。先生は「言論の自由」などと、当時はやりの決まり文句を持ち出すばかりで、まともな答えのできる学生がいないことを確かめておいてから、これをやたらと難しく「罵詈讒謗」と訳され、'freedom'のパラフレーズを黒板に書いて、そのあとに *COD* とつけ加えられた。これが初めて *The Concise Oxford Dictionary of Current English* の存在を知った瞬間となった。この'freedom'は 「自分がしたいこと（言いたいこと）を誰はばかるところなくする（言う）自由」

the state of being free to do(say) what you want to do(say) without being restrained

というパラフレーズの範囲で理解すればよいのだろう。したがって

frankness, outspokenness, undue familiarity (*COD*)

という意味になるわけである。そしてこの意味なら私の持っていた研究社の『簡易英英辞典』にも、開拓社の *Idiomatic and Syntactic English Dictionary* にも出ているから、何もあわてることはなかったわけだが、このあと *COD* がすぐにも欲しくなった。今はパラフレーズの拠り所としてもっといろいろな種類の非母語話者の学習者向けの英英辞典、例えば *Collins Cobuild English Language Dictionary*、*Language Activator; the World's First Production Dictionary*、*Longman Dictionary of Contemporary English* 等々が使えるが、当時は原書の英英辞典と言えば *COD* と *COD* の弟分の *POD*(=*The Pocket Oxford Dictionary of Current English*) しかない時代だった。

当時、日本は貧乏な敗戦国で、外国から洋書、原書を輸入する外貨（ドル）の蓄えなど全くない時代で、外貨があれば敗戦国の復興に必要な物資、何よりも国民が飢えを凌ぐ食料を輸入しなければならない時代だった。必要な食料、物資さえ外貨を出して買うことができずに、アメリカの援助に頼っていた時代である。それに庶民は最初にも言ったように、'all the nice people were poor'という次第で、外貨のドルどころか内貨の円も無い貧乏暮らしだった。その頃、『英語青年』のエディター福原麟太郎は「辞書の話」という文章の中で、「實のところ、この *POD* ―福原麟太郎は *COD* 派ではなく、その弟分の *POD* 派、《皆が *COD* を有り難がるので意地になって *POD* を引いた》というほど筋金入りの *POD*

派であった ── がなかなか手に入らない。英国は萬難を排して、この辞書を輸出してくれるべきだと思う」と書いておられたが、戦勝国のイギリスでも'all the nice people were poor'という次第で、辞書など輸出するほどに印刷する余裕がなかったのだろう、とにかく第四版の *COD* が私の手にはいるまでに一年以上かかったと思う。のちに専門課程に進んで主任の中西信太郎教授が *COD* 派であることを知った。ある時、*POD* が話題になって、先生は「あれは何と言っても小さいから」とその限界を表現された。とにかく、大学の英語の第一時間目の'the freedom of language'以後、学部、大学院を通じて学生時代は *COD*、*COD* の時代で、『簡易英英辞典』やホーンビーを捨てて、パラフレーズして意味を精密に理解し、表現する拠り所として *COD* を使いこなす訓練の時代となった。

初めの方でお名前を出した山修こと山本修二にはド・クインシー(Thomas De Quincey)の『阿片常用者の告白』(*Coffessions of an English Opium-Eater*)を習った。これも、昔はよく英語の教科書になっていたようで、寺田寅彦も第五高等学校で漱石からこれを習ったそうである。漱石は松山中学ではずいぶん分析的、解剖的な教え方をして、単語についても語義を詳しく分析して教えたと聞く。のちに漱石は大学教師を辞めて、朝日新聞に入社して小説家として立つ時、これでもう下調べのために「『センチュリー』(*The Century Dictionary, an Encyclopedic Lexicon of the English Language*; 漱石の時代、最大、最高の英語辞書)の厄介になる事もなくなり心中大に愉快に候」というようなことを言ったと記憶するが、おそらく最終的にはこの『センチュリー』を拠り所にパラフレーズして語義を教えていたと想像してもよいのではないか。しかし五高ではがらりと教授法を変えて、すらすらと音読して、「どうだ分かったか」というようなことを言って、簡単な解説や短評を加えながら、どんどん進んでいったそうである。音読という学習過程の重要な要素がすたれてしまった今日から振り返ると、すらすらと音読したという点に漱石の英語教師としての優秀さを認めることができるし、また解説にはおそらく松山中学以来の『センチュリー』に基づく精密なパラフレーズ的語義分析が含まれていたと想像できる。漱石のことはともかくとして、この本の始めの方でド・クインシーがマンチェスター・グラマー・スクール時代 ── Grammar School、文法学校は文字どおりギリシア語、ラテン語の文法を教え、さらにギリシア、ローマの文化を教える学校であったが、徐々にもっと広く中等教育を担当する進学校、中学、高校となっていった ── 「あの少年はわれわれが英語でイギリスの暴徒に演説するよりもうまく、ギリシア語でアテネの暴徒に熱弁を振るうことができる」とほめられたと自慢するあたりで、ギリシア語の時間の前に、先生が辞書や文法書と首っ引きで、テキストのソポクレースの「合唱隊の難解な箇所を、喩えて言えば、爆破し、吹き飛ばす」(blowing up and blasting, as it were, any difficulties he found in the choruses) ── これも城攻めのイメージである ── ことに苦心惨憺しているのを小気味よく見下しながら、教室の外で教科書を開くことなど潔しとせず、ギリシア語の詩を書いて過ごしたというところを面白く読んだ。その時は私もこのギリシャ語の先生をド・クインシーと一緒になって馬鹿にしていたのだが、自分が教師になってみると、分かり切った単語でも、例えば先に例として使った'virgin'や'fly'でも、その場その場の文脈の中での最善のパラフレーズに苦心して、時間を費やすことを考えると、時間をかけて下調べをしたこのギリシア語の先生を弁護したい気持ちになる。しかしド・クインシーがギリシア語の勉強法として、新聞を読みながら即座に思いつく最善のギリシア語に翻訳することを

習慣とした、新聞の英語をギリシア語でパラフレーズしながら読んだという意味のことを言っている箇所には、この時も驚嘆したし、のちに思い出すたび何度も驚嘆した。日本語の新聞を英語でパラフレーズしながら読むということを学習法として実践してみれば、私の驚嘆が理解できると思う。

この頃、桑原武夫という、当時、岩波新書の『文学入門』というベストセラーを書いて話題となったフランス文学の先生の文学概論を聴講していた。先生は話題のきっかけとしてエンプソン(William Empson)の『曖昧の七つの型』(*The Seven Types of Ambiguity*)を使って話を進められたが、先生はこの英語の本をフランス語に置き換えて朗読された。ド・クインシーと同じようなことをする人を見て驚いたが、英語とフランス語ではこういうことも日本語と英語でやることに比べれば比較的容易にできるのだと徐々に理解できた。それはともかくとしてこの'ambiguity'というのは一つの言葉に複数の意味が込められている、すなわち言葉が'to be able to understand in more than one way'という意味である。そしてこれを不正確さ、曖昧さと捉えて嫌う立場では、否定的な言葉となって、表現が'unclear'であるとか'inexact'であるという意味になる。しかしこれを多義的で含蓄があるというように肯定的な価値として捉えることもできる。この立場からは表現が'significant'であるとか'of deep implication'であるという意味になる。この多義性、含蓄についてはパラフレーズが分析すべき重要な対象として、この講義で意識させられることになった。

山修と並んで英語の名物教授に深瀬基寛という方がおられたが、この二十世紀前半最大のイギリス詩人 ── アメリカではアメリカ詩人というだろう ── エリオット(T.S.Eliot)の研究家として、また翻訳家として知られた先生からもパラフレーズについて面白い話を聞かせてもらった。深瀬基寛は第三高等学校の学生時代、『近代文学十講』や『近代の恋愛観』の著者で、柳村上田敏に続いて京大英文の第二代教授となられた白村厨川辰夫に英語を習われた。白村の三高での英語教授法はパラフレーズ方式、それもテキストのすべての単語を別の英語で言い換えさせる徹底ぶりだったそうである。ある時間に'name'という動詞のパラフレーズを命じられた深瀬基寛が、前夜、寝ぼけ眼で字引から写し取ってきたとおり、よくは分からないまま'denominate'と、冷や汗をかきながら答えると、白村は答えられないと予想しておられたとみえて、悔しそうに「よっし」と言って、次に移ったということである。今、'name'を'denominate'とパラフレーズすることが英語教育として適切であるかどうかは別にして、私にとっては、著書から文人肌で、ジャーナリスティックな印象を受けていた白村がパラフレーズ方式の恐ろしい'a drill master=a teacher who trains students by severe means of repeated practice as if a relentless sergeant forces soldiers to go through hard military training exercises'だったという話は、大変、興味があったし、パラフレーズ方式の勉強法に自信を与えてくれた。

私のパラフレーズ方式の拠り所は、他に何種類も辞書のある時代ではなかったから、*COD* だったのだが、*COD* に限らず辞書だけを拠り所とするパラフレーズの限界についても比較的早く教えられることになった。二回生で英文科の最初の演習としてシェイクスピア(William Shakespeare)の『ヴェニスの商人』(*The Merchant of Venice*)を習ったが、担当の先生は *COD* ではできない多くのパラフレーズを示して、説明された。例えば、劇を閉じる最後の二行である。

Well, while I live, I'll fear no other thing

So sore, as keeping safe Nerissa's ring.

(William Shakespeare, *The Merchant of Venice*, V, i, 306-07)

これから一生、他にそうひどい心配事もなさそうだが、

ネリッサの指輪を無事に守り通すという、この問題一つでせうな。（中野良夫訳）

シェイクスピア劇は詩で書かれているので、散文とは違った特徴がある。紙面にまだ余白が残っているのに、行が変えられているとか、行の初めがすべて大文字で書かれているとかいうようなことである。シェイクスピアの劇詩は、詩と言っても無韻詩(blank verse)なのだが、場や幕や劇全体の締めくくりの部分ではこの二行のように脚韻を踏むことがある。さて'sore=grievously, severely'は *COD* で簡単にパラフレーズできる。しかしここで「グラシアーノが一度は人にとられたけれど、もう二度ととられないように無事に守り通したいと言っているものはただ結婚指輪だけではない」というわけで、'ring'が'circle, O, nothing=ゼロ'などと共通する形態の連想から含むこととなる意味をパラフレーズしてもらった。こんな意味はいくら *COD* を覗いても見つからない。

この頃、出席していた中国文学の講義で吉川幸次郎教授は口癖のように、「辞書は単語の意味の平均値を言うに過ぎない。さらに言えば単語は実在の言語現象としては存在せず、実在するのは常に文である。したがって辞書の割り出す語の平均値は虚像であり、実在の文の中にあるその語の価値の実像とはなり得ない。読書とは実在としての語の《義蘊(ギウン)を抽繹(チュウエキ)して、無窮(ムキウ)に至る》(段玉裁『説文解字注』)、つまり実在としての言語の無限の内容を、徹底的に分析し抽出することであり、単に語の平均値的な意味を知ってたれりとすることではない」と言っておられた。卑近に言えば、'ring'が結婚指輪であるばかりでなく、ネリッサの'the private parts'でもあることを理解することが「実在の言語現象」、「語の価値の実像」に近づいているということである。こうして「義蘊を抽繹して、無窮に至る」、すなわち文の中の語に発話者が託した無限の内容を、発話者が意識したものから、意識していないものまで、果てしなくくみ尽くすという吉川孝次郎流の、また段玉裁流のパラフレーズのプロセスでは、単に辞書の平均値的な意味に頼ったパラフレーズでは不十分だと知らされることになった。

私のパラフレーズ方式もこのような高度なパラフレーズへ進む必要があると理解するあたりで、大学院の学生となった。院生時代は高等学校で十何時間かを教える非常勤の教師でもあった。最初に教えに行った高校では、一人の教師が一つのクラスのリーディングもコンポジションもグラマーも、すべてを担当するシステムをとっていたから、非常勤とは言え十何時間かを受け持つと、少なくとも二クラスの英語の全責任を負うことになる。リーディングやコンポジションは中学以来のパラフレーズ方式で何とかやるとして、文法や音声学はおよその体系を改めて頭に入れなおす必要に迫られた。そこでいわゆる学校文法の古典として定評のあったアニアンズ(C.T.Onions)の『高等英語統語法』(*An Advanced English Syntax*)や、これまた評価の高い『英語発音辞典』(*The English Pronouncing Dictionary*)の編者ジョーンズ(Daniel Jones)の『英語の発音』(*English Pronunciation*)を勉強しなおした。今の学生諸君は文法など百害あって一利なしの風潮の犠牲となって学校文法の基礎的な知識にも欠けるようであるが、この知識がなければ決して根底のある英語の学力は身に付かない。また学校文法というのは

ラテン語文法を規範として作られているから、ラテン語から派生したヨーロッパの諸言語を習得しようとする時、英語の学校文法の知識が絶大な助けになることを知るべきである。私の非常勤教員時代にはどんどん英語学的に気が散ってしまい、学校文法だけでは満足できず、科学文法 ── 当時は学問的な英語学をこう呼んでいた ── も勉強しなければいけないというわけで、エスペルセン(Otto Jespersen)の『文法理論』(*The Philosophy of Grammar*)と『英文法精髄』(*Essentials of English Grammar*)始めカーム(G.O.Curme)の『統語法』(*Syntax*)、スウィート(Henry Sweet)の『新英文法』(*A New English Grammar*)、日本人のものでは細江逸記の『英文法汎論』、『動詞叙法の研究』、『動詞時制の研究』、大塚高信、市河三喜の著作等々、当時としては最先端の英語学書を読んだ。これらの科学文法書は、今の文法書と違って、例文の多くを文学書からとっていたので、文法書と言っても、英文学のアンソロヂーを読むような楽しみがあった。英文学の名句を多くこれらの文法書、特に『英文法精髄』から覚えた。またスウィートは音韻や統語法の歴史的な変遷、発達を記述しているので、大学院で習い始めた古(期)英語や中(期)英語の音韻を勉強するのに、またのちにイギリスで ── 最初の留学ではイングランド北部のリーズ大学 (The University of Leeds) の Post-Graduate Diploma in English Studies という課程に在籍した ── 耳にすることになる方言を、英語の母音の変遷、発達のしかるべき段階に位置づけて理解することに役立つことになった。ジョーンズの『英語の発音』はその時、外国人学生必修の音声学の教科書としてもう一度読まされることになった。この外人必修の音声学を担当したのはエリス ── 綴りは忘れてしまった ── という先生だったが、ジョーンズは試験の指定参考書といった扱いで、教室では彼が採取して来た、例えばノーサンバランドの漁師の方言とかいうテープを聞かされて、発音記号で表記(transcribe)させられた。これは外人と言っても英語を母語とする外人向きの講義で、とても英語の非母語話者の外人に適した講義とは思えなかった。しかしこのエリスは英語のスピーキング、リスニングにおける子音、特に破裂音や摩擦音の重要性を繰り返し力説して、母音などはほとんどどうでもよい、方言ごとに異なるし、また喋る人ごとに違う、しかし子音は普遍的であるとか言って、母音をすべて曖昧母音、発音記号の[ə]に属する音で置き換えて朗読したり、喋ったりという実演をよくやってくれた。エリスがやると子音やイントネーションがしっかりしているためか、それでたしかによく分かる英語になるのだった。日本語には英語のこの母音がないとか言って、母音中心の発音指導を受けてきた私にとっては、これは記憶に残る面白い実演であり、私も教室で繰り返しこのことを強調することになった。私は母音はどうでもよいなどとは言ったことはないが、母音にも、そして特に子音に注意を払って音読する、そして自分が音読する声を自分で聞くということが言葉の勉強には重要であるから、パラフレーズの話から少しそれたが、このエリスの思い出を付け加えて、繰り返し音読することの重要性を強調しておきたいと思う。今は英語学習の初期の段階で発音記号を習得することはないようであるが、発音記号と、記号の表す音声を調音する方法を意識的に習得しておくことはやはり必須であるように思う。今は見慣れない単語に出会って、「これは何と読むのですか」と無邪気に聞く学生が多すぎる。学校文法の基礎知識の場合と同じように、彼等に罪はないと思うけれど、自分で調べて、自信を持って発音できないのは大学生としては気の毒な気がする。エリスは私が帰って来て間もない頃、『イギリス言語地図』とかいう本を出したと記憶している。

さて、先ほど吉川幸次郎が段玉裁の「義蘊を抽繹して、無窮に至る」という言葉を引用して、読書は文の中の語に発話者が託した無限の内容を、発話者が意識したものから、意識していないものまで、果てしなく汲み尽くすことであると説明されたことにふれ、パラフレーズ方式も吉川幸次郎・段玉裁流を目指さす必要があると言った。これに関連して、'ambiguity'という言葉をもう一度、思い出してみると、この言葉は一つの言葉に一つの意味が正確に対応していて意味が明解であるということではなくて、一つの言葉にいくつもの意味が対応しているために言葉の使い方が不正確であるという印象を与え、意味が曖昧となることを表現する言葉だった。そして不正確な言葉遣いや意味の曖昧さを嫌う立場では否定的な言葉であった。しかし多くの発話では発話者が意図したのか、あるいは意図しなかったのかは別として、一つの言葉から複数の意味が受け取れ、このため言葉が多義的となり、発話に含蓄が生まれることがしばしばある。'ambiguity'はこのようなケースを表現する言葉でもあって、この場合、肯定的な価値を表現する言葉となるわけである。このように発話については一つの言葉に複数の意味が対応していることを不正確と考えて悪い発話とみる見方と、言葉の含蓄の深さと考えて優れた発話とみる見方との対立があると言える。すなわち優れた発話は受け取り方、解釈の仕方がただ一つだけという考え方と、いや多くの違った受け取り方、違った解釈の仕方があるという考え方の対立がみられるのである。一方は、発話者は意図した一つの意味に受け手を導く全責任を負っているという考え方であり、他方は、複数の意味が現れて発話が完結する責任の一部を、発話者は受け手に委ねているという考え方である。これは今日の読者論やテキストの受容論の常識をくどくどと述べたに過ぎない。そして学者、特に自然科学者は前者の主張にそった発話をすべきだと言われるが、特に吉川幸次郎や段玉裁が問題としている文学の場合には、前者の主張と後者の主張はそれぞれ真理の半面を含んでいると言うべきであるように思われる。すなわち作家、科学者ではなく詩人、小説家、劇作家には自分の意図した一つの意味だけを伝えるように書かなければならない場合があると同時に、複数の意味を伝えるように書く必要のある場合があるのである。そして優れた文学は、多くの場合、後者のように書かれていて、複数の意味を含んでいる。吉川幸次郎の読書についての説明はこのようないい意味での言葉の多義性、含蓄を前提としているわけである。吉川幸次郎はこのような前提を「詩に達詁なし」という言葉で表現しておられた。「達詁」は「定詁」とも言うそうで、一定の決まった意味ということだそうである。すなわち「詩」、広く小説や演劇をも含めて文学には一定の決まった意味、これが正しいというような意味、こう読まなければならないといったような意味はないということである。次にこのような複数の意味を、辞書だけに頼ったパラフレーズを離れて読みとる、いっそう高度なパラフレーズの例を取り上げることにする。

これは懐旧談だから、大学時代に習ったシェイクスピアの『マクベス』(*Macbeth*)から例を挙げることにする。言うまでもなく、この芝居の背景は中世のスコットランドで、マクベスという領主がスコットランド王のダンカンを暗殺して王位を奪い、その後、多くの敵対する領主たちを倒して、奪い取った王位を死守するが、ついにイングランドの援助を受けたダンカン王の子マルコムに打ち負かされ、王位を取り返されてしまうという筋書きである。引用する箇所はイングランドへ逃れて、マクベス打倒を計画しているダンカン王の子マルコムと、マルコムに従うスコットランドの領主マクダフのもと

に、ロスという人が来て、マクダフの城がマクベスに攻め落とされて、城に残っていた者たちが皆殺しにされたという知らせをもたらす場面である。

Macduff: My children too?

Ross: Wife, children, servants, all

That could be found.

Macduff: And I must be from thence!

My wife kill'd too?

Ross: I have said.

Malcolm: Be comforted:

Let's make us med'cines of our great revenge,

To cure this deadly grief.

Macduff: He has no children. All my pretty ones?

Did you say all? O hell-kite! All?

What, all my pretty chickens and their dam

At one fell swoop?

(William Shakespeare, *Macbeth*, IV, iii, 211-19)

マクダフ： 子供たちまで。

ロス： 奥方もお子たちも従者も、

見つかった者は皆。

マクダフ： そんな時、城を空けていなければならなかったとは。

妻も殺されたのか。

ロス： 今、お話ししたとおりです。

マルコム： あまり嘆くのはよそう。

大いなる復讐を薬に、

この死にも等しい悲しみを癒そう。

マクダフ： あの男には子供がない。かわいい子供たちを皆。

皆と言ったのですね。おお、地獄の猛鳥め。皆か。

何だと、かわいい雛鳥も母鳥も皆、

一度の急降下でと言うのか。

最初、習った時には知らなかったが、のちにこの場面はシェイクスピア注釈史上もっとも有名な箇所の一つであると知った。この場面が伝達する深い悲しみは'He has no children.'という言葉に潜んでいる。この言葉は英語を始めたばかりの中学生でも理解できる単純、明快、正確な表現のようにみえるけれども、実は謎のような'ambiguity'、曖昧さ、多義性を隠しているのである。

'He'は三人称単数の代名詞で、すでに言及されている男性名詞か、あるいはすでに話題になっていて、

簡単に特定できる男性を指示することを中学生も知っている。ここではすでに言及されている男性名詞はないから、すでに話題になっていて、簡単に特定できる男性ということになる。そういう男性については

My children too?

や

My wife kill'd too?

からヒントが得られる。これらの文に、省略されている言葉を補うと

Did Macbeth kill my children too?

とか

Was my wife kill'd by Macbeth too?

という文ができる。したがってすでに話題になっていて、簡単に特定できる男性はマクベスということになる。そこでまず'He'を' Macbeth'としてパラフレーズしてみる。

Macbeth has no children.

こうすると、マクダフは「正義の大いなる復讐」を促すマルコムに対して、次のように答えていることになる。

マクベスは私の子供を皆殺しにした。しかし、マクベスは子供を持たない。だから私（マクダフ）はたとえマクベスとその妻を殺したとしても、彼の子供まで皆殺しにするという完全な復讐はできない。したがって、完全な復讐をして死にも等しいこの悲しみを癒すことなど私にはできないではないか。

さらに次のような意味をも含んでいるかも知れない。

マクベスはあなたの父ダンカン王を殺してあなたを父なし子にした。しかし、マクベスは子供を持たない。だから、あなた（マルコム）はたとえマクベスとその妻を殺したとしても、彼の子供を父なし子とするという完全な復讐はできない。したがって、完全な復讐をして死にも等しい悲しみを癒すことはあなたにもできないのだ。

簡単に言えば、マクダフは次のようにぶっきらぼうに答えていることになる。

Macbeth has no children, and so I(Macduff) cannot hope for a complete revenge, and you(Malcolm) too for that matter.

すなわち完全な復讐などわれわれには望み得ないという絶望的な悲しみが表現されていることになる。また同時に復讐が悲しみを癒すと思うマルコムの若さ、未熟さが浮かび上がる。

また'Macbeth has no children.'という同じパラフレーズから異なった意味が読みとれるように思われる。すなわちマクダフはマルコムに答えているのではなく、マクダフは深い悲しみの中で、

マクベスはどうして子供まで皆殺しにするような、こんな残酷なことができるのか

と自問し、

そうだ、マクベスは子供を持たないから、このような残酷なことができるのだ

という結論に到達したと考えることができるのである。簡単に言えばマクダフは次のように言ってい

るのである。

Macbeth has no children. That is why he has done such a devilish thing.

このパラフレーズは子供を皆殺しにされたマクダフの悲しみばかりでなく、子供のないマクベスの悲しみ、奪い取った王位を自分の子供に譲ることのできないマクベスの悲しみと絶望、そして絶望のゆえにマクベスがあれほど冷酷無惨になり得るというこの悲劇の中心的なテーマをも照らし出すように思われる。

さらに簡単に特定できる男性をマルコムと考えて、次のようにパラフレーズすることもできる。マクダフは、今、自分に話しかけたマルコムのことを念頭においていると考えるのである。

Malcolm has no children.

すなわちマクダッフは次のように言っていると考えるのである。

> 正義の大いなる復讐を、子供を皆殺しにされた死にも等しいこの悲しみを癒す薬とせよと言うのか。復讐が悲しみを癒す薬になるなどという慰めは、子供を持たないマルコムにしてはじめて口にすることができるのだ。子供を皆殺しにされた悲しみは復讐、それが復讐相手の子供まで皆殺しにするような完全な復讐であっても、復讐によって癒えるものではない。

簡単に言えば、マクダフは次のように言っているのである。

Malcolm has no children, and so he cannot fully feel my sorrow.

ここでも復讐が悲しみを癒すと考えるマルコムの若さ、未熟さがあらわになってくる。

このように'He has no children.'という、一見、簡単にみえる文章も、このように文脈の中におかれた時、「義蘊を抽繹して、無窮に至る」という吉川幸次郎、段玉裁流の読書の手続き、繰り返すと、実在としての言語の内容となっている限りのものを、意味も、感情も、意欲も、意識も、無意識も、徹底的に分析し、抽出するというパラフレーズの作業を適用すると、意外に複雑な意味が現れてくるのである。私の学習法としてのパラフレーズ方式はこうような境地を目指してきたのである。

以上、私が若かった頃に先輩の先生方から学んだ英語をパラフレーズして学習する方法と、パラフレーズすることによってさまざまな意味を汲み出して英語を正確に理解する方法について書いてみた。私は英語・英文学を勉強する者として、この方法を身につけようと努力し、この方法を実践する者として教壇に立ってきた。私は私の基本的なパラフレーズ的学習法を先輩の先生方から学んだと言ったが、「学ぶ」と言うのは、よく言われるように、「まねぶ、すなわちまねをして身につける」ということである。また思い出話になるが、学生時代、東洋史学の教授に宮崎市定という大先生がおられた。先生は「学ぶ」ということ、「學」という字について次のようなことを教えてくださった。「學」はもともと宗教的な意味を持つ言葉で、神の意思を伺う、あることを「実行する」、「実行しない」のどちらが神の意思に叶っているかを問うというのがもともとの意味である。神の意思を伺う時、古代の中国では箱の中に食事に使う箸のような棒をたくさん入れておく。そしてその中から無作為に棒をつかみだして、箱の中に残った棒の数を数えた。棒を数える時、間違えないように「×××」というように並べていった。そして箱の中に偶数の棒が残ると、神の意思に反すると考え、奇数の棒が残ると神

の意思に沿うと考えた。すなわち偶数が凶、奇数が吉である。「吉凶」の「凶」という字は箱の中に「×」棒が偶数残った形である。「吉」の字はのちに変化して元の意味が分かりにくくなっているが、上の「士」の方が重要で、「×」と「／」を合わせた形であり、下は箱を示していて、箱に奇数の三本の棒が残ったことを表している。「学ぶ」という字をみると、今の略字では分からないが、本字の「學」をみると、占いの棒を二本ずつ一組にして並べた形を字の上部の中心に置いている。その左右にあるのは左右の手で、上部は全体として左右の手で占いの棒を扱っている形である。その下の「ワカンムリ」は台を表す。台の下には子供がいる。大人達が台の上で行う占いを、子供達が台の下から見て覚えようとする。これが「学ぶ」ことの原義であると教えてもらった。「学ぶ」ということは、大人たちの占いを見て、まねて、覚える子供たちのように、「まねぶ、まねをして身につける」ということを出発点とする。すべて学習の出発点がそうなのだと思う。そして外国語を学習する場合には特にこの態度が必要となる。学習するにはまず先輩の先生方に憧れるような気持ちを持って、先輩の先生のまねをして、先生から盗んで、まねて、そして盗んだものに工夫を加えて磨き上げていくことが必要なのである。そう信じるが故に、私は私がまね、身につけようと努力した方法を教室で学生にもまねをしてもらい、身に付けてもらうよう努力したことになる。まねをすると言っても、私の学生時代に習ったような教科書までまねをすることは、当然、できない。第一、学生の歯が立たない。滋賀県立大学での七年間に限って言えば、この大学の英語教育の目標 ── 大学入学までに習得した英語の知識を活性化して、活動的な生きた知識として、これをさらに発展、展開、充実させて、広くコミュニケーションの場で役立つ知識とする ── に従って、BBC のテレビ・ラジオの教育的な番組で放映、放送された自然科学や人間文明に関わる内容のものや、同じような分野の啓蒙的な書物で、英語世界で広く読まれているものを、担当する学部に合わせて教材として選ぶことが多かった。こういう教材を厨川白村流に徹底的にパラフレーズしていくと学術的、議論的、論争的な場面で使う英語を大いに鍛えることができる。しかし論理的な思考を要する英語が多く出現して、日常的な気楽な場面で使う英語が少なくなることになって、そういう場面の英語だけを求める学生の興味が僅か九十分といえども続かないということがしばしば起こる。（── 日常的な場面の英語という点では小説を教材に使うのがもっともいいようである。小説はある意味では、無駄なおしゃべり、friendly noises まで含んだ日常的な場面の集積であるから。しかし文学なんぞ教えているから英語ができなくなるという声に押されて、気の弱い英語教師には小説を教材に選ぶ勇気が涌かなかった。理系学部で開発競争、産業スパイ小説、文系学部でビジネスマン小説などいい教材になるのだけれど、残念。学生の興味を保たせるという点では、看護短期大学部のクラスなどは学生の関心が均質で、看護婦さんの日常の活動を描くような文章を教材にすると、病院内の状況、医療器具の名称、病気の名称、薬品名、患者との対応、医者とのやりとりなどが出てきてうまくいく ──。）そこで科学者や技術者やその他の分野の優れた人びとが自分の生い立ちや、研究、開発、その他のライフワークに従事した生活を振り返りながら、それぞれの分野における独創的な思索や着想、発見や成功の契機などを説明するような文章、すなわち、自叙伝や伝記の類を教材にすることが多くなった。こういう種類の文章では日常生活の英語の場面や学問的、論理的な英語を必要とする場面などいろいろな状況があって、パラフレーズした英語もかなり多様なもの

にすることができるように思う。しかし何を選ぶにせよ、内容、表現ともに繰り返し読むに耐えるようなものであることがもっとも重要であるように思う。音読については、近頃は漱石のように教師がすらすらと音読してというところを母語話者の朗読したテープを聞かせて模倣させる指導で換えることができる。しかし時には発音記号を教え、調音の仕方を指導する必要も起こる。またパラフレーズは黒板に書いて綴り字を確認すると同時に、何度も言い聞かせる必要がある。また統語法の理解不足が原因の学生の誤読を正すには学校文法の基本的な知識を、嫌がられてもくり返す必要が起こる。

大学の英語教育の中で週に一回、九十分間、顔を合わせるに過ぎない学生に対して教師ができることはこれくらいなものである。中学以来随分長い年月のあいだ英語を学習したと思うけれども、学校で英語を習った実時間は、すぐに計算できるが、驚くほど僅かである。それに予習、復習の時間をめいっぱい加えてみても、その合計もまた驚くほど僅かな時間になるに過ぎない。この学習時間では学生が教師をまねて、盗んで、十二分に努力してくれたと仮定しても基本的な知識が身に付くのが精一杯のところである。しかしこの知識は、将来、研究や仕事の上で本当に英語が必要になった時に、その必要に対応していくらでも延ばしていけるはずでのものである。ただし本当に英語が必要となれば、自分に必要なタイプの英語を、必要な期間を通じて、毎日少なくとも二時間、身に付けた方法で継続的に活用し続ける覚悟が必要である。非母語を本当に使いこなすためにはこれくらいの覚悟がいるのである。私たちの世代にヨーロッパに対する憧れを与えてくれた書物の一つである『フランス通信』の著者瀧澤敬一は喜寿に達した頃、突然、日本語しか話さなくなって、フランス人の妻を悲しませたそうであるが、必要な期間、これほど苦労して磨き続けた英語も、非母語である限り、年を取ればすっかり白紙に戻るかも知れないと覚悟しなければならないのである。

近年、私はすべての担当クラスのシラバスに次のような文章を書き入れてきた。この英語教師の懐旧談は以下のシラバスの方法を支えている私の経験を振り返ったものである。

よく言われるように、「学ぶ」は「まねぶ」（＝まねをする・模倣することによって身に付ける）ことである。外国語の学習では、この「まねぶ」態度がもっとも大切である。したがって授業はおおむね次のように進める。

① カセットテープの朗読をまねて、英語らしく朗読する練習をする。
② テープの朗読を聞いて、聞き取りの練習をする。
③ 朗読を繰り返して、教科書の一部を暗唱し、教科書をまねて、使えるようにする。
④ 教科書の内容を日本語に置き換えて、理解を確認し、正確にする。
⑤ 教科書の単語や語句や構文を、自分の使える別の単語や語句や構文を使って言い換えたり、書き換えたりすることによって、既修の知識を活性化させ、内容の理解（読解力）を深めると同時に、音声や文字による表現力の充実を目指す。
⑥ ①～⑤を教室外でも、各自、繰り返し、自分自身を訓練することが求められる。

最後に、これは英語教師の懐旧談であるから、私の英文学の研究については何も思い出さないことに

した。しかし私は英語の学習者、教師としてとまったく同じ「義蘊を抽繹して、無窮に至る」というパラフレーズ的理解を通して文献を読むことによって英文学の研究を続けてきた。宮崎市定は学問というのは何か新しいことを言うことだが、ただ単に新しいことを言うというのは比較的簡単なことだ。何か突拍子もないことを言えばいいわけだから。しかし学問でいう新しいことというのは誰かが、当然、言うべきことであったのに、これまで誰も言わなかったことという意味だ。こういう意味での新しいことというのはなかなかないものだと言っておられた。私は英語の教室と同じパラフレーズ的研究法で、僅かではあるがこういう意味で新しいことを英文学の研究で言うことができたと思っている。

国際教育センター主催のセミナー

２０００年度 第２回セミナー

題　　目: 次世代情報通信ネットワークの動向

講　　師: 堀切 正則 氏 （株式会社きんでん 構内情報通信部 大阪構内情報通信チーム）

日　　時: ２００１年1月１８日（木） １３：００～１４：３０

場　　所: 滋賀県立大学 Ａ３－３０１講義室

講師紹介:

1986 年 大阪大学基礎工学部制御工学科卒業、1988～1990 年 磁気 ID カードを用いた統合管理システムの計画および設計、1990～1991 年 パソコン LAN による LAN および設備統合システムの計画および設計、1991～1992 年 電話およびデータ通信の配線仕様を統一した統合配線システムの開発、1992～1993 年 工場における生産管理システム向け LAN の計画および設計、1993～1996 年 キャンパスネットワーク（LAN）の計画および設計、1996～1997 年 庁舎内ネットワーク（LAN）の計画および設計、1997～1997 年 統合配線システム向け配線管理システム（ソフトウェア）の開発、1997～1998 年 病院情報システム構築における LAN の計画および設計、1998～1999 年 県庁情報整備計画における LAN・サーバ・クライアント管理システムの実施設計。

概　　要:

日本の国家戦略ともなった IT（情報技術）。しかし、IT を国家戦略足らしめるには、日本における情報インフラ、すなわち情報ネットワークの基盤整備が急務である。情報インフラとしては、現在、電話回線、光ファイバー、通信ケーブル、携帯電話などさまざまなもので構築が可能であるが、その実態や特性は分かりにくい。そこで、本セミナーでは、「次世代情報通信ネットワークの動向」と題して、情報通信インフラの構築の重要性、LAN のあり方、配線方式（光、無線、PLC、CATV、x DSL）、WAN の動向に関して、専門知識がなくても理解出来るようにお話しして頂きました。

２０００年度 第３回セミナー

題　　目: The Chrysanthemum and the Rose: Comparative Perspectives on Japanese and British Higher Education

講　　師: Dr. Patricia Walker, (Director of the English Language Center, Staffordshire University, UK)

日　　時: ２００１年1月２３日（火） １３：００～１４：３０

場　　所: 滋賀県立大学 Ａ１－３０１講義室

講師紹介:

Ph.D. (*Comparative Education*) Oxford Brookes University. Founder and Co-Head of the International Center for English Language Studies (ICELS) at Oxford Brookes University from 1994-98. Director, Japanese Year Abroad, ICELS Research Co-ordinator. Designed and led curriculum initiatives to increase international student participation including the International Foundation Diploma and feeder Certificate courses. Newly appointed to Staffordshire University

概　　要:

A comparative approach drawing on theoretical and experiential detailed knowledge of both British and Japanese systems yields important insights into a number of salient features. Dr. Walker has identified a number of important differences in the way universities in Britain and Japan are viewed, and has classified these features into three domains: organisation and administration, curriculum and environment, education and the economy.

For the concluding part of the seminar Dr. Walker will invite her husband, Lawrie Walker, Director of Quality Enhancement at Thames Valley University, London, to speak from his viewpoint as one of the British government's chief assessors of quality in higher education to offer a national overview of issues in British higher education of particular interest to Japanese academics

２００１年度 第１回セミナー

題　　目:　『中国における芥川龍之介—同時代の視点から』

講　　師:　**単 援 朝** 氏　(崇城大学 総合教育科 助教授)

日　　時:　２００１年１０月５日（金）　１３：１０～１４：４０

場　　所:　滋賀県立大学 Ａ１－３０２講義室

講師紹介:

四川大学・筑波大学大学院修了。筑波大学文学博士。東京大学外国人客員研究員、北京語言文化大学助教授を経て現職。日本近代文学専攻。

論文「『蜃気楼』の構造－風景の構図から－」（『日本語と日本文学』第八集）、「上海の芥川龍之介－共産党の代表者李人傑との接触」（『日本の文学』第八集）、「『支那遊記』の世界－夢想と現実との間－」（『国語と国文学』第１０７号）、「芥川龍之介『奇遇』の成立について」（『国文学　言語と文芸』第１１６号）。その他論文多数。

概　　要:

中国の古典に取材した作品、現代中国を舞台とした作品を多数執筆し、自ら中国を旅行して帰国後旅行記を発表した芥川龍之介は大正作家のなかで中国と最も深い関わりを持つ作家の一人です。その中国との関わりは明らかにされつつありますが、彼の文学が中国、特に同時代

の中国でいかに受け止められていたかは興味深い問題です。単氏は大学院時代から芥川龍之介研究に取り込み、芥川文学を中国との関わりで考える立場での研究を続けています。今回は魯迅や夏・尊など同時代の中国の文学者の目で見た芥川の人と文学を掘り出し、同じ作品をめぐる中日両国の読者の微妙な読みの違いを検討し、中国における芥川龍之介像を同時代の視点から明らかにする試みを話されました。

２００１年度 第２回セミナー

題　　目:　独立成分分析 －混合したスピーチ・画像を分離する－

講　　師:　小倉　久直 氏（近畿大学 生物理工学部 教授）

日　　時:　２００１年１１月９日（金）　１３：１０～１４：４０

場　　所:　滋賀県立大学 産学共同研究センター 産学研究交流室

講師紹介:

昭和31年京都大学工学部卒業。現在、近畿大学生物理工学部教授、京都 大学名誉教授、京都工芸繊維大學名誉教授。専門は統計的信号処理、確率過程、電磁波工学とくに、ランダム媒質・ランダム表面の波動理論の研究。

概　　要:

複数の独立な信号、例えば異なる話者のスピーチ、音楽または複数の画像など、をマトリクスで混合したものが受信または観測された場合、信号の統計的独立性を利用してそれらを分離することができ、それらの技術の研究・開発が最近盛んに行われています。このことは不要な雑音や妨害信号を取り除く、信号処理・計測技術など多くの分野への応用が考えられます。このセミナーでは 4，5 ヶ国語の混合スピーチの分離や重なり写真画像の分離の例を示し、その他の応用・技術などにもふれます。

21 世紀における情報通信社会の動向

堀切 正則
（株式会社きんでん 構内情報通信部 構内情報通信チーム）

1 はじめに

21 世紀を迎えて高度情報通信社会の構築が急速に進んでいる。一昔前までは軍事機関、教育・研究機関や先進的な企業でのみ使用されていたコンピュータ・ネットワークが、今や小学校の教育にまで活用されている。その大きな原動力になったのは、the Internet（以下、インターネット）の商用利用にあることは間違い無いであろう。また、規制緩和に伴って新社会資本としての情報通信基盤の整備が官／民で行われ、ブロードバンド・ネットワークが一般家庭で安価に利用できる日も真直に迫ってきている。そして、その利用形態はモバイル環境と合わせて無限の広がりを見せている。

本稿では、今一度情報通信の本質（原点）について考察し、情報通信技術の動向をふまえて情報通信インフラの完成形を展望する。また、その情報通信インフラのエンド･ネットワークである In-Home ネットワークを実現するに当たり、最適ソリューションである電力線搬送通信設備（PLC: Power Line Communication）の動向について概要を述べる。

2 情報通信社会とは

2．1 情報通信ネットワークの定義

情報通信社会とは、情報通信ネットワーク技術を最大限に活用した快適、便利かつ安全な社会であるといえる。では、「情報通信ネットワークの定義は？」となると恐らく学術的に明確に定義されたものはないが、下記のように言えると考える。

「情報」＝対象となる事物の性質、作用、意味などに関する知らせ

「通信」＝事実上電気通信であり、有線、無線、その他電磁的方式（光、導波管等）により符号、音響または映像を送り、伝え、受けること。

「ネットワーク」＝ある意図を持って情報を送受信する対象が複数存在するシステム

つまり、**「複数の送り手、受けてが存在し、相互に知らせたいあるいは知りたい事象を伝達するシステム」**の総称である言える。

2．2 情報通信ネットワークの本質

情報通信ネットワークの本質は、「無駄無く」かつ「確実に」通信することにある。このことは、情報通信のコンパティビリティと呼ばれ、この相反する特質を高度に実現するために情報通信技術が発展してきたといっても過言ではない。このコンパティビリティ性は、「確実に」＝高度な誤り検出、訂正を行うと共に、堅牢なセキュリティを実現することと、「無駄無く」＝極力少ないデータ量で、安価にに通信することを示している。

また、このような情報通信ネットワークを活用する上で最も重要なことは、ネットワークを介して得られた情報を如何に人間が有効活用するかである。インターネットに代表されるように、現在はあらゆる情報に関して時空を超えて取得し、発信できる環境が整ってきている。その情報洪水とも言える状況の中で必要かつ有効な情報を見極め、人間としての倫理を保ちながら活用していく人的な情報処理能力も高めていくことを忘れてはならないと考える。

2．3 情報通信ネットワークの発展経緯

現在、情報通信ネットワークに対して多くの人が思い描くイメージは、コンピュータを使って音声や映像の双方向通信を瞬時に行えるものではないだろうか。しかしながら、その背景には長年培われてきた数多くの技術がある。下記に、その代表的な技術例を挙げる。

- ✓ 電子計算機技術（コンピュータテクノロジ全般）
- ✓ 電子工学技術（CPU等半導体技術等）
- ✓ 電気通信技術（符号化、圧縮、暗号化等）
- ✓ 素材技術（光ファイバ、メタルケーブル、コネクタ等）
- ✓ 信頼性工学（MTBF、MTTRの向上等）
- ✓ ソフトウェア技術（OS、アプリケーション言語等）
- ✓ 画像処理技術（CG、CAD、VR等）
- ✓ 数学、経営工学、人間工学 etc.

今後も、様々な技術革新に誘起されて相乗効果的に情報通信ネットワークは進化していくことは間違い無い。まさしく、人間の欲求が際限なく、形を変えて伸びつづけるのと同じようにである。

その中で、ユーザ（要求）、サービス（ビジネス）、技術（開発）を包含したキーワードは以下の３点であろう。

- ■ **広帯域（高速）**
- ■ **広域**
- ■ **セキュリティ**

また、先端技術としてエンドユーザに評価されやすいコンテンツ（ソフトウェア）ビジネスが注目されがちであるが、真のコンテンツビジネスは、社会資本としての情報通信インフラが整備されずに発展することはありえないと考える。

つまり、ユーザの端末～端末あるいは家庭内～家庭内の通信が高速に、どの地域でもかつ安全に行える環境が整って初めて真の情報通信社会が到来するのである。

3 情報通信社会の動向

3．1 社会資本としての情報通信インフラ

情報通信インフラ整備の必要性は、ビジネスユースは言うまでもなく個人ユースまで広く浸透してきている。その流れを受けて、情報通信産業は概ね好況であり設備投資も積極的に行われている。また、国策としても「IT 基本戦略」が打ち出され、各家庭に対して光ファイバを引込む（FTTH: Fiber To The Home）等の高速アクセスラインの整備が進んでいる。また、「e-Japan 構想」として電子政府システムが順次地方自治体に導入され、情報通信社会を国民レベルで体感できるようになってきている。

3．2 情報通信社会の事例

前項に述べた情報通信インフラが整備された後により強く情報通信社会を体感する事例（近未来で実現）の概要と現時点での懸案事項について述べる。

1）**ブロードバンド**：

【概要】広帯域という意味であるが、サービスとして通信と放送の融合が行われる。具体的には、インターネットに接続した端末で高品質な動画をオンタイムで鑑賞できる。あるいは、いわゆる TV を見ながら必要な情報（文字、音声、映像）を送受信できることになる。

【懸案事項】監督官庁の整備を含めた法改正が必須となる。

2）**Per to Per**：

【概要】インターネットを介して世界中で接続されている情報端末同士が、自律的に情報を受発信するシステムである。個人ユースでは音楽配信で注目を浴びている。このシステムは、ビジネスユースにも適用され管理コストの低減、情報伝達の迅速性がメリットである。

【懸案事項】情報が無秩序に氾濫する危険性を含んでいるため、セキュリティと知的所有権問題を明確にする必要がある。

3）**電話設備**：

【概要】「ｉモード」の普及により一気に加速したモバイル電話が、次世代携帯電話（IMT-2000）の導入により高機能で身近な情報端末として姿を変える。高速通信が行えるため、EC（電子商取引）や映像の受発信がいつでも、どこでも行え、コンテンツが飛躍的に充実されてくる。

【懸案事項】ユーザ数の増加に伴い電波の周波数帯域不足が問題となってくる。

4）**Bluetooth**：

【概要】10m 程度の近距離通信を行う無線通信標準規格で、携帯電話や家電製品に組み込まれて様々な情報の受発信を行うシステムである。

【懸案事項】家庭内での高速通信需要の掘り起こしと組み込み普及率の促進が今後の課題といえる。

5） **ITS (Information Transfer System)**：

【概要】高度情報交通システムの総称で、道路情報のリアルタイム提供、通行料自動収受システム、車間距離自動検知制御ならびに自動走行システムが研究、開発、実用化実験が進められている。

【懸案事項】自動制御に伴うシステムエラーや突発的なヒューマンエラーに対する安全性の確保が絶対条件であることは言うまでもない。

3．3 情報通信社会の完成形とは？

前項に示したような情報通信社会の必要性、有用性については様々なとらまえ方があると思われるが、いずれにしても近い将来ごく普通の生活の取り込まれるであろう。ただ、どちらかというとこれらの技術はユビキダス（＝いつでも、どこでもネットワークに繋がる）思想が根底にあり、モバイルを前提にしている感が強い。

では、モバイルではない固定環境、つまり家庭内（In-Home）での情報通信システムの将来像はどのようなものであろうか？

この問いに対しては、白物家電（冷蔵庫、電子レンジ）、設備機器（照明、空調、セキュリティ）、情報端末（PC 等）や AV 機器がネットワークに接続され、協調・連動するシステムが容易にイメージされる。

つまり、情報通信社会のベースである情報通信インフラ整備の仕上げは、In-Home ネットワークの構築にあるといえる。逆に言えば、In-Home ネットワークがあまねく整備されて初めて現在急ピッチで構築しているブロードバンド・ネットワークの真価が発揮されるといっても過言ではない。

そこで次章以降に、In-Home ネットワークの動向について述べる。

4 In-Home ネットワークの動向

4．1 理想的な In-Home ネットワークの形態

In-Home ネットワークの目的は、当然のことながら家庭内に分散設置されている情報通信対象機器間を相互接続することにある。その相互接続するメディアとして、無線（電波、赤外線）、有線（電話線、同軸、LAN ケーブル、電力線）が考えられる。この中で、In-Home ネットワークを実現するに当たって最適なメディアは、図 1 に示す通り電力線である。

電力線搬送通信設備は、文字通り電力線を用いて通信する設備である。この電力線を用いた通信設備が In-Home ネットワークで最適な理由は、大きく次の 2 点にある。

① 電池駆動する機器（目覚まし時計等）以外家庭内にあるほとんどの機器が通信対象になる。

② 通信のために新たに配線設備を設ける必要が無いため、既設の住宅ならびにどの部屋でも利用できる。

この 2 点に勝る通信設備は、現在のところ見当たらない。

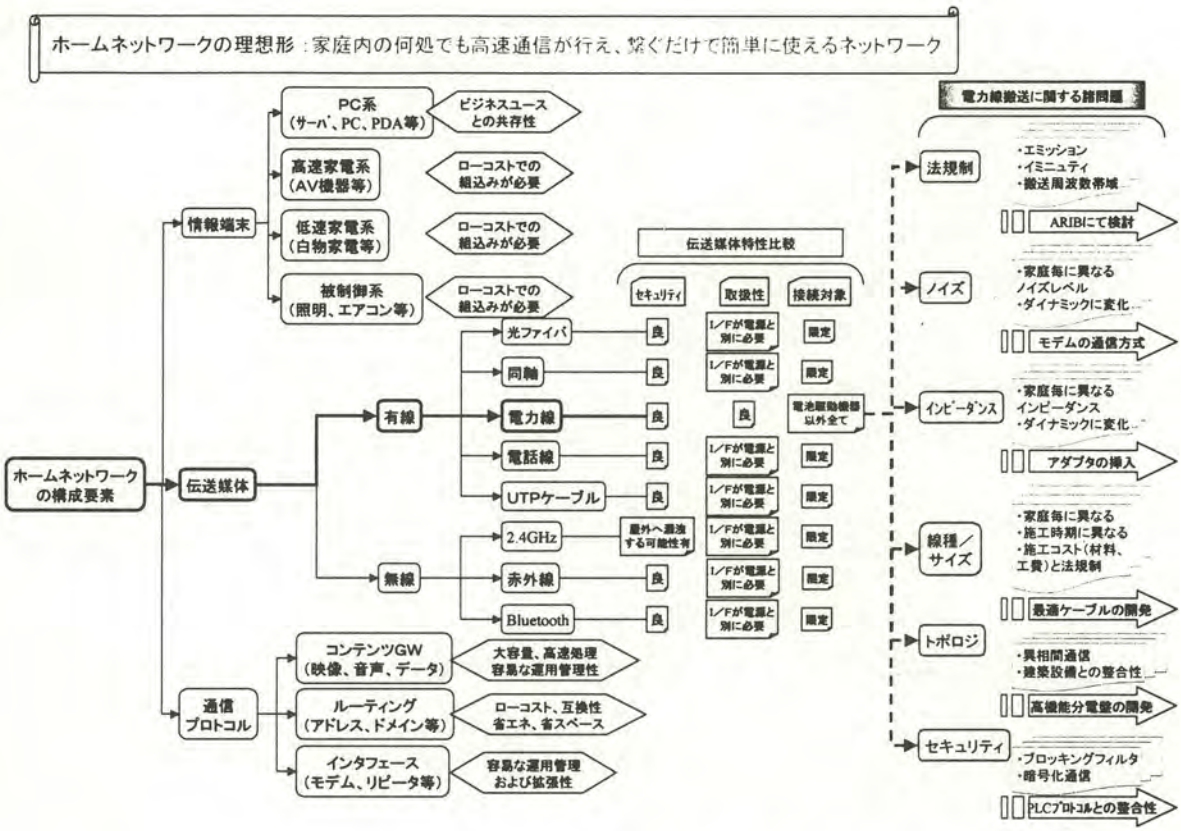


図 1　In-Home ネットワークにおけるメディアの適性比較

4．2　電力線搬送通信設備の問題点

1）法規制に関する問題点

電力線搬送通信技術は、古くから研究されて電力保安通信設備や監視制御設備で実用化されてきた。しかしながら、これらの伝送速度は数百～数kbpsと非常に低速であるため本論文で述べている情報通信インフラのエンド・ネットワークにはなり得ない。

そこで、近年無線通信（無線LAN、デジタル放送）技術を応用し高速（数百kbps～数十Mbps）通信を可能とする電力線搬送通信システムが欧米で開発されてきた。しかしながら、日本国内では電波法等の規制により現状では使用できない状況である。

具体的には、通信を目的として電力線に重畳できる搬送周波数帯は、現行法では10～450kHzである。一方、欧米で開発されている電力線搬送通信システムは、2～30MHz帯域を使用している。この帯域は中短波放送、アマチュア無線や海上無線で使用しており、これら既存の無線システムに対する干渉妨害の可能性があるため現在国内では使用できない。

しかしながら、理想的なIn-Homeネットワークを実現するためには先の高周波帯を使用した電力線搬送通信システムが有効であるため、ARIB（社団法人 電波産業会）や総務省にて法改正に向けて積極的に検討しているところである。

2）伝送技術に関する問題点

家庭内の電力線には多種多様な電気機器が接続されており、その運用方法も千差万別である。このように不安定（インピーダンス、ノイズがダイナミックに変化する）な特性を持つ伝送路で高品質な通信を確保することは非常に困難である。

この問題点についての解決策として、SS方式、OFDM方式やマルチキャリア方式をベースとした様々な変調方式が考案され実証実験が行われている。

3）伝送技術に関する問題点

まだ、開発および普及の緒についた電力線搬送システムであるため一概に他の通信システムとのコスト比較は出来ないが、元々価格にばらつきがある民生用電化製品にあまねく組み込む（このことがIn-Homeネットワークの原点）には機能に応じたローコストがが絶対条件であるといえる。

4．3 電力線搬送通信を用いた In-Home ネットワークの発展

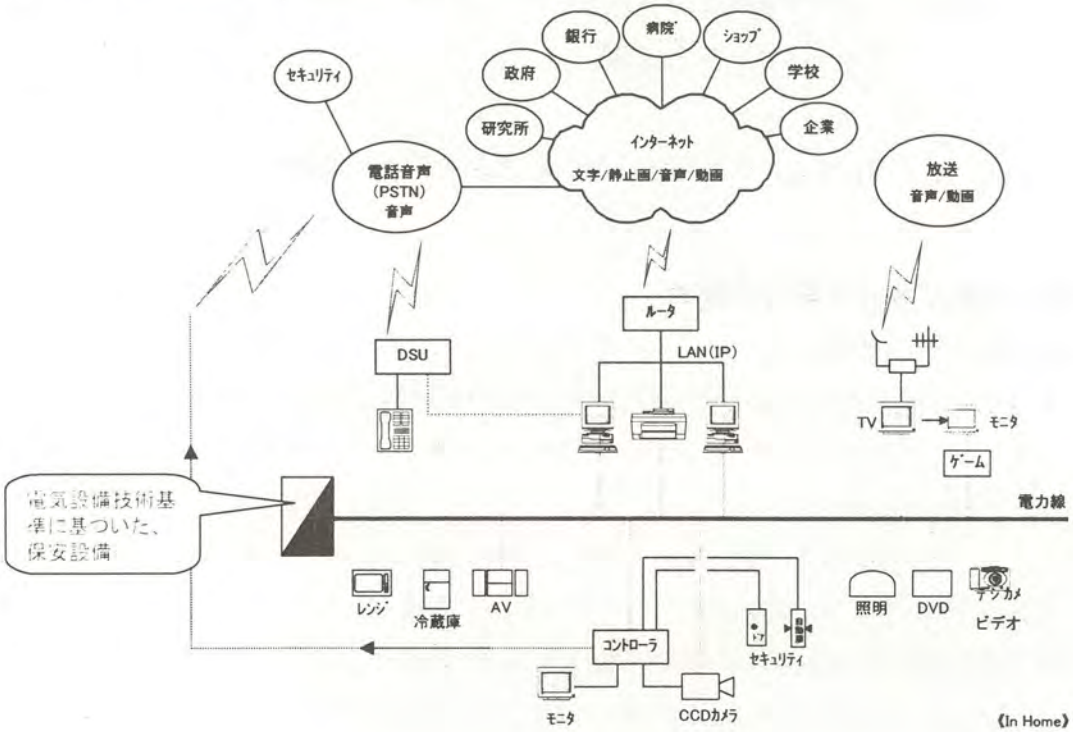


図２ 家庭における通信環境の現状

最終的には家庭内の全ての電気機器がネットワークに接続されるわけであるが、必要性（コンテンツ）やコストならびに普及の促進度合いを考えると以下のステップで進むと思われる。

電力設備としては、電気設備技術基準に基づいた電気設備工事が施されて各電気機器と接続されている。一方、外部とは電話網、インターネット網ならびに放送網が独立に引込まれてそれぞれの送受信機と専用の線を介して通信が行われている。(図２参照)

家庭内において、電話および放送信号がIP統合（メディアはLANケーブル）されてインターネットにシームレスに接続されるようになる。これは、ブロードバンド・ネットワークの実現によりIn-Homeに限らない形態でもある。(図３参照)

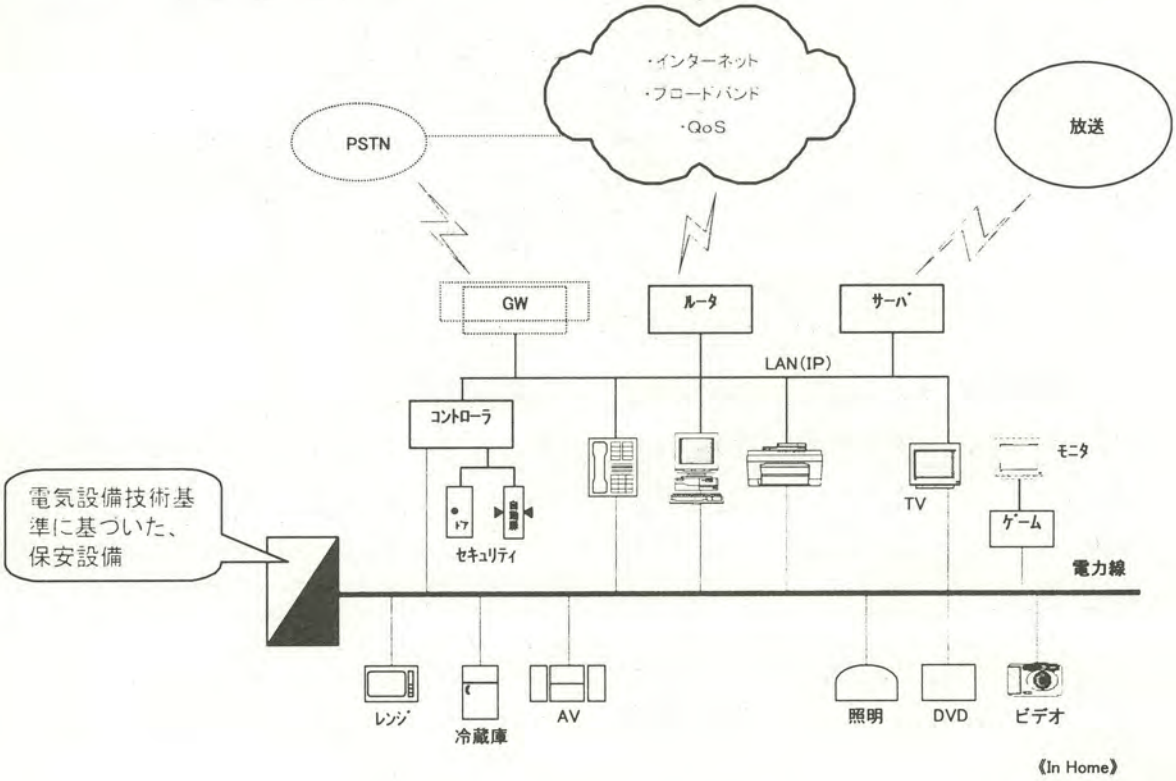


図３ In-Homeネットワーク化のSTEP 1

STEP 1にて統合された家庭内通信線を電力線搬送に置き換える。この場合に留意すべき点、必要な端末間のみ高品質な通信が行えるようにする機能を満たすことである。LANでは十分成熟した技術であるので応用しやすいが、伝送路特性が不均一であるところが大きく異なるところである。(図４参照)

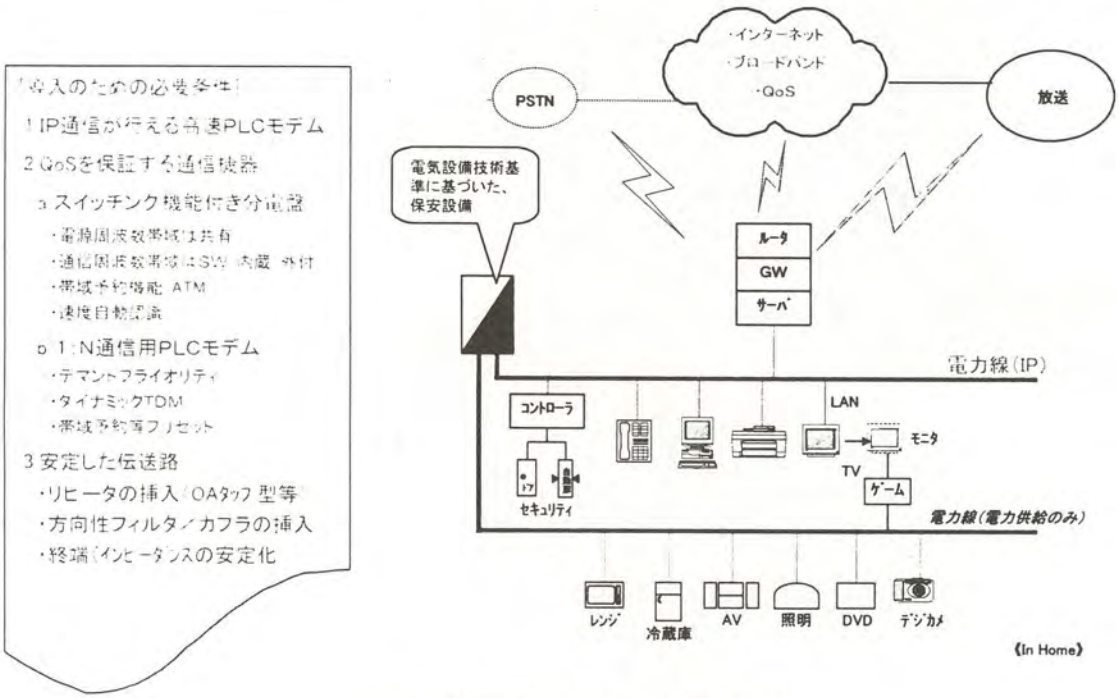


図4 In-Homeネットワーク化のSTEP 2

全ての電気機器間で通信が行える形態である。この場合、コストを考え通信速度や情報の種類（文字、音声、映像、ON/OFF、センサー等）に応じた通信方式に対応する必要がある。また、特別な知識を必要としないセットアップ方式（Plug & Play）のメカニズムを新たに研究・開発する必要がある。（図5参照）

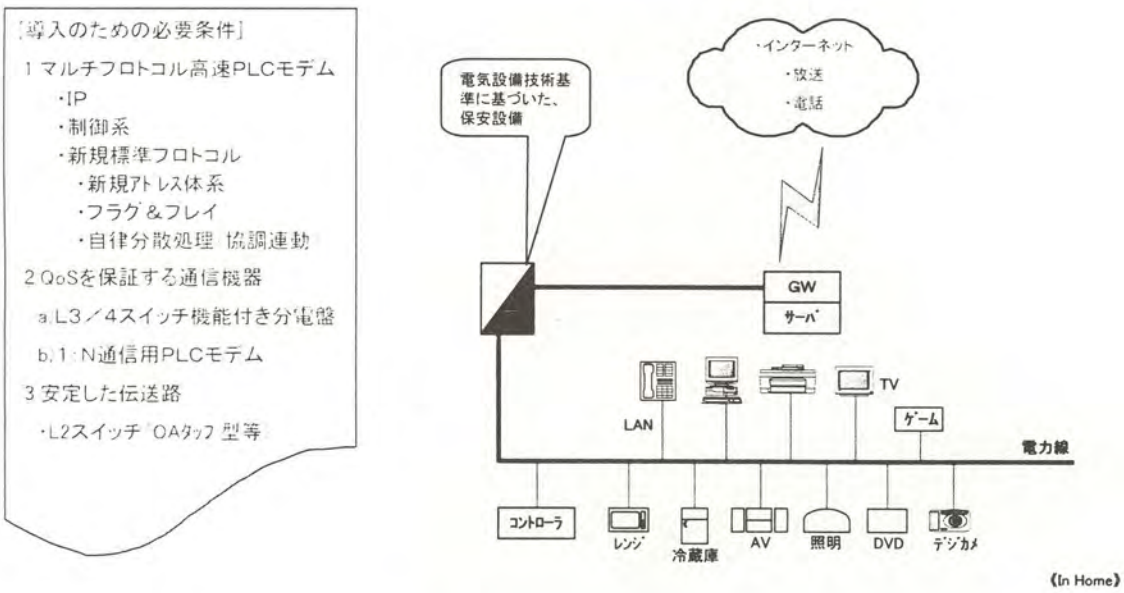


図5 In-Home ネットワーク化の STEP 3

5 おわりに

情報通信インフラは、これまでのライフラインであった電気・ガス・水道と同じ位置付けになろうとしている。このことは、基幹整備だけではなくユーザの生活の場を基点とした end to end で高品質な情報通信を確立することを意味している。

そのためには、情報通信インフラの 1 部である In-Home ネットワークの最適化に向けて研究、開発を行い、実用化していくことが最重要であると考える。

The Chrysanthemum & the Rose:
Thoughts on Japanese Higher Education in Comparative Perspective

Patricia WALKER

From April 2000 to March 2001 Dr Patricia Walker took leave of absence from Oxford Brookes University, UK, to conduct a year's post-doctoral fieldwork. She was appointed to the Center for Inter-Cultural Education at the University of Shiga Prefecture, Hikone, where she taught part-time whilst conducting a participant observer investigation in a junior college and research with a group of local elementary and high school teachers of English.

Comparative education does not seek to provide solutions to others' problems, yet there *are* lessons to be learned from a consideration of other systems of education. The great British poet, Matthew Arnold, was also famous for his work as an HMI (Her Majesty's Inspector) for schools. He travelled throughout France and Germany in 1851 looking for educational ideas to solve Britain's social and economic problems, ideas which he later published in his famous essay of 1869, "Culture and Anarchy." In Japan, Prince Iwakura Tomomi set out in 1871 on a round the world trip, which included Britain, to acquire models on which to base a system for the education of the Japanese workforce (Hunter 1984).

Material of great intrinsic interest is to be encountered through fieldwork, combining conceptual analysis with a wealth of practical experience. Costs and consequences can be weighed which raise issues of universal concern through the study of which, it is just possible, we can make better decisions about our own futures. This was my intention when I came to work in Japan in April 2001. After many years of working with Japanese students there (in UK) it was time to experience working with them here (in Japan) and in their own environment. Despite an academic relationship with Japanese higher education going back many years, one year "on the inside" caused me to see things rather differently.

My research interests in the Japanese education system date from 1986 when I was appointed by Sunderland Local Education Authority in the north of England to establish English Language instruction for the employees and their families of the Nissan company. In

Oxford I had specialised in educating students from Japan, to the extent that I had designed for them customised curricula.

My understanding of the Japanese system, such as it was, had helped significantly in working with Japanese students in Britain. My work in Japan, I hoped, would draw on theoretical and experiential detailed knowledge of both the British and the Japanese university systems to yields important insights into a number of aspects of both countries' structures and organisation. From this highly advantageous position I have identified a number of important differences in the way universities in Britain and Japan are viewed and have classified these features into three domains: Organisation and Administration, Curriculum and Environment, and Education and the Economy.

(1) Organisation and Administration

Mass Higher Education

It is widely acknowledged that Japanese Higher Education has enjoyed continuous growth since the first major reforms introduced by the American Education Mission to Japan in 1946 (Hunter 1984). Although international comparisons are very difficult to arrive at because of the differences in currency values, the OECD has established purchasing power parities (PPPs) (UNESCO 1999). It allows that unit costs for higher education in Japan have remained low, making it a sellers market with some of the highest participation rates in the world. A staggering 93% of all Japanese who successfully completed compulsory schooling in 1980 continued in education (Kitamura 1991). With over 1,200 universities and junior colleges and 3 million students enrolled, Japan's higher education system is the largest in the developed world after the United States (Yamamoto 2000). About half of Japan's youth passes through this system.

In contrast, as Scott (1984), among others, has observed, for hundreds of years British higher education has been elitist, selective with minority appeal. It has also been associated with the following characteristics: specialist, theoretical, exit oriented, inflexible in terms of pre-requisite educational preparation and organisation of curriculum provision, unsympathetic to anything other than full-time modes of attendance and standard age of entry.

However, with demographic changes inflicting higher education in both Japan and in Britain, there has been a change, in both countries, from a sellers' to a buyers' market. Universities in Britain are now actively recruiting student clients from abroad. They are proving to be demanding and discriminating consumers for whom education in their own country has always been understood to be a marketable asset (Walker 1997). To meet the demand from these new clients, the producers in British higher education have had to market new products, in the form of English language courses and access or bridging programmes. Some of these curriculum developments have had a knock on effect on the home market in that the university is now able to accommodate non-standard students, i.e., ethnic minority students and mature students returning to learn without "A" Levels (British Council 1996). This means that in addition to growing numbers of international students, the universities are now experiencing higher participation rates from previously under-represented groups in society (CVCP).

It was previously accepted that British higher education was immutable, and that demand from outside the country could not be met without threatening the fundamental nature of the University. It can now be said that British higher education is *on the brink of* massification and the impetus for change has come initially, not from within the country, but from outside. The increasing numbers of international students in Britain have had a powerful influence on the ways Britain has come to the view the nature of the University, and not least among these is the Japanese student. The Japanese market is highly significant in British education, as the data tabulated below illustrates.

Figure 1. *JAPANESE STUDENTS IN BRITISH INSTITUTIONS (by sector)*

	Schools and EFL	FE	HE	HE u/g	HE p/g	TOTAL
1994/5	4,747	1,257	3,226	(1,515)	(1,711)	9,230
1995/6	5,968	1,979	4,235	(2,104)	(2,131)	12,000
1996/7	6,826	2,409	4,665	(2,470)	(2,195)	13,900
1997/8	8,335	2,639	5,326	(2,841)	(2,485)	16,300
1998/9			5,558	(2,880)	(2,678)	

Source: Adapted from British Council (1999)

Note: A fuller treatment of the Japanese participation in British Higher Education can be found in Walker (1999).

In a number of ways however, the Japanese student in Britain is atypical of the rest of the international student community. Other international students tend to be the top students in their nation, government funded and highly focussed, engaged in gaining the skills they need to return and contribute to the development needs of their country (Walker 1997). Historically, Japan's high flyers eschewed degrees from foreign countries because to be appointed to posts in Japan's elite companies it was necessary to graduate from Japan's elite universities. So it was that the Japanese student abroad tended not to be the high achiever of the Japanese high school. The Japanese in Britain tend to be the "boy or girl next door." Notwithstanding, even those of average intellectual ability prove themselves very capable and usually are quite popular with tutors and students alike. They tend to be diligent and well prepared and, although initially quieter than the European and South American students, can do exceptionally well in the more open academic environment, and respond well to the individual attention of their tutors.

The Composition of the Student Body

The Japanese university campus is very much a young person's environment, palpable on entering the institution and profoundly influencing the way things are done. The social behaviour of many of the students seems much less sophisticated than that of British students of a comparable age, and whilst such disingenuousness can be charming, there is more of a school feel to a Japanese campus than a British one. It is well known that in Japan 90% of college enrolments are in the 18-22 age-bracket (Monbusho 1998); not at all a conducive atmosphere for mature students, who are conspicuous by their absence. In Britain it is not unusual for more than 50% of the university population to be categorised as mature students (HEFCE 1998). Moreover, in an urban institution, this demographic diversity is often combined with racial and ethnic diversity.

Entry Procedures

British professors view the entrance examination system in Japan as an enigma. They are not alone in this perception. The *Economist* (1990) described the Japanese university entrance exam as "a game of *Trivial Pursuit* writ large." Among professional commentators on Japan, it is not only the most severely criticised institution in Japanese education, it is thought to be the cause, and not the effect, of what they describe as the malaise in the system

(Cummings 1980). The pressure on universities in Japan to reform the entrance exam has resulted in the adoption of "flexible" entry arrangements. These include "principal's recommendations" so that students' futures are not decided solely by one exam but they are allowed to offer additional evidence of suitability in the form of attitudes and aptitudes sustained throughout their academic careers.

In practice, this means some high schools can make bilateral arrangements with a university to take their students, thus solving recruitment problems for both sides. However, there is emerging evidence that the policy may be driving down standards, in that universities with low enrolment offer places to students who failed the entrance exam but have a "principal's recommendation" from a partner high school. It is clear to me that some of the weaker students I was teaching had been recruited by university personnel who had failed to scrutinise their academic transcripts carefully, if at all. Yet some prefectural universities select up to 60% of their students by this means from the local area.

In contrast, students in Britain are subjected to rigorous selection procedures. GCE "A" Levels are advanced single-subject examinations taken by those who choose to continue an academic education beyond GCSE (the end of compulsory education). Each course involves 2 years of concentrated study and students hoping to enter University would be expected to have studied three, four or five A levels and, depending on the status of the University, to have passed each of these with the highest grades. The exam papers are marked by a group of independent assessors who have no knowledge of the students and are monitored and moderated by a Chief Examiner, usually a University professor specialising in that subject and with many years of experience. Examination performance is marked on a 7-point scale, from A (highest) to E (minimum pass), with N (narrow failure) and U (unclassified, and not certified). A small number of students take Special (S level) papers at the same time as their A levels. These are graded as 'Distinction,' 'Merit,' or 'Ungraded.' They are designed to test the most able candidates and therefore students are not normally expected to take S papers in more than one subject (NARIC 2001).

Traditionally, only by satisfying this nationally recognised, robustly calibrated, syllabus-led essay format examination, did British students enter University. Even today, with more flexible arrangements being advocated, this demanding rite of passage is still expected by the more traditional universities.

Internationalisation of Higher Education

There is a strong tradition in Britain of educating students from overseas. The present position is as follows. Please note the high ranking of Japan.

Figure 2. *INTERNATIONAL STUDENTS IN BRITISH INSTITUTIONS* Source: HESA

Malaysia	*Germany*	*Greece*	*France*	*Hong Kong*	*United States*	*Ireland*	*Singapore*	*Spain*	***Japan***
10,450	8,837	8,264	7,702	6,940	5,588	5,542	3,795	3,719	**2,726**
Rank: 1	2	3	4	5	6	7	8	9	**10**

In contrast, Japanese universities are, and have always been, meant only for the Japanese (Kida 1981). In 1981 there were only about 6,000 non-Japanese students throughout the sector (out of a total student number of about 1.5 million) and only about 940 foreign professors, or less than 1 per institution. Kida asserted, as other writers have recognised since, that universities in Japan are simply reflecting the hereditary system of society that emphasises the common background of students and teachers.

In the decade since Kida voiced his concerns about the low numbers of non-Japanese enrolled in universities, there have been dramatic changes due to the Monbusho's "Foreign Student Plan," which aimed to have 100,000 international students on Japanese university campuses by the year 2000. Now the new millennium is upon us, and we can see that the plan had only moderate success (***Figure 3)***.

The Monbusho (1998) reported that 91.5 per cent of the foreign students currently in Japan were from Asian countries, predominantly China, South Korea and Taiwan. These students, many of whom are on scholarships from their country or financed by the Monbusho itself, from Japan's geographically, historically and linguistically closest Asian neighbours, do not constitute the international population the Japanese government and Japanese academics had hoped for. The internationalisation of the Japanese university student body by encouraging the participation of westerners has not happened yet.

Figure 3. *STUDENTS FROM OVERSEAS IN JAPANESE UNIVERSITIES*

	1988	1990	1992	1994	1995	1996	1997	1998
China	7708	18063	20432	23256	24026	23341	22323	22810
Taiwan	5693	6484	6138	5648	5180	4745	4323	4033
Korea	5260	8050	11596	12965	12644	12265	11785	11467
Malaysia	1201	1544	1934	2276	2230	2189	2128	2040
USA	964	1180	1245	1146	1087	1088	999	949
Thailand	753	856	894	1014	1010	1018	992	1059
Indonesia	671	948	1154	1178	1085	1052	1070	1140
Hong Kong	428	422	496	479	392	-	-	-
Philippines	339	479	503	487	433	448	447	434
Brazil	268	-	-	-	-	390	-	-
Bangladesh	-	394	479	637	710	791	732	750
others	2358	2927	3685	4701	5050	5594	6248	6616
TOTAL	25643	41347	48561	53787	53847	52921	51047	51298

Source: http://jin.jcic.or.jp/stat/stats/16EDU61.html

Japanese Nationalism

This is the obverse and reverse of the interest in internationalism. Many academics and opinion formers in Japan have been warning since the end of the eighties that Japan's higher education must internationalise for her own self-interest, in order to maintain her global markets. Among these, Best (1987) talked of the closed nature of Japanese universities, as a result of which confined environment he saw the ever present danger in Japan of a decline into narrow nationalism, to which a more open internationalism within higher education acts as a bulwark. It is worth noting that as we went into the 21st century, Japanese participating in study abroad were being exhorted by their government to use foreign travel as a means of more fully appreciating the value of what they believe to be a unique culture. Japanese students often cite as a motivating factor in going abroad, "teaching foreigners about Japan" (Walker 1997).

(2) Curriculum and Environment

The Curriculum of the Universities

In Europe, the university curriculum expanded from "the organic knowledge of the early liberal university to the fissiparous knowledge of the modern university" (Scott 1984: 67). The professorial tradition with emphasis on research and teaching based on lectures, had

triumphed over the collegiate tradition (exemplified by Oxford and Cambridge) of small, indeed individual, tutorials, leading to greater and greater specialisation, more and more disciplines, and further division into sub-disciplines.

Japanese universities are not the comprehensive institutions they are in Europe. The curriculum in many institutions is limited to the humanities and social sciences and, not embracing the European research tradition, is predominantly undergraduate. A new development, premised on the need to attract students, is the abolition of the old subject boundaries in favour of funky course titles like "Culture and Exchange," "Environment and People," "Awareness of Nature," "Human Development," "Human Education;" indeed, anything with "human" in the title is a good seller. These changes, whether educational or marketing in motive, have caused problems for British, indeed, any foreign educators to interpret exactly what curriculum the Japanese Study Abroad students have been following.

The Language Curriculum

Traditionally in Britain, foreign language degrees were one year longer than courses in other disciplines because a year abroad was mandatory. This is not the case in Japan where some foreign language teachers I met have never ever sojourned in the country of their specialism even for a holiday. According to the Monbusho, foreign language education is being enhanced in Japanese universities but there is little evidence of this.

In practice the use of multi-media and language labs is being encouraged, and it is the case that facilities are infinitely superior to those seen in many British universities (especially some of the post 1992 group). In my experience, however, many of the Japanese professors make extremely limited use of them; one tutor I interviewed confessing to an understanding of only 5% of the language lab capacity, using it only for playing commercially produced audio and visual cassettes. Allegedly language classes are smaller than they were (no more than 20 students) though experience shows that this applies only to classes for language majors: 50, 60 even 80 for Gen Ed English is not uncommon according to reports I was given. One of the unintentional advantages of the LLs are that they 'only' hold 55 and some tutors ensure their classes are located there in order to impose a natural ceiling on numbers.

A threat to languages, however, is the abolishing of the old subject boundaries and in some institutions English departments, especially those with a focus on literature, are being

closed down. In some they are re-emerging as service centres but opportunities to major in English are becoming fewer. It is too early to say what effect this will have on Study Abroad in Britain, but there are two possibilities. The first is that students not majoring in English may be less likely to aspire to master English through a sojourn in an English language environment and secondly, even those who wish to could fail to meet even the most modest English Language requirements of a Study Abroad programme.

The Work Ethic in Japanese Universities

It is well known that the four years of university in Japan are said to be a "cocoon" offering a welcome respite between the high school "hell" and company "treadmill." It is a well-earned vacation from the rote learning, tedium and long hours of the secondary sector. Indeed, it is a reward for endurance. A Japanese student agreed that, "In Japan, college is tough on parents, easy on kids" (Walker 2000). To a foreign professor, a Japanese university seems not such a serious place to be, progression largely through class attendance, assessment at the discretion (whim?) of the individual tutor, and no evaluation, no second marking, no standardisation, definitely no criterion referencing (possibly norm referencing, but nothing as explicit or transparent such as the British QAA lays down). It seems to the foreign professor that, compared to Britain, students in Japan are kept very busy but don't work very hard, and don't have to produce much on their own.

Let us consider the student workload. Most attempt 124 credits a year organised into around 15 courses per semester (AIEJ 1997). For each they have at least 90 minutes class contact per course, that is 22.5 hours of class per week. 26 teaching weeks over the year plus make-up weeks plus exam weeks plus orientation weeks, during all of which most Japanese students have part-time jobs, which they work at between 15 and 40 hours a week, means they are kept pretty busy. Little wonder that Japanese students are criticised for not doing much work on their own!

The situation in Britain is vastly different, where students do more work on their own than they do in class. In most British universities students tend to take 120 credits a year, that is 6 twenty credit courses. Each twenty credits involves a total of 80 study hours over one semester, 26 of these are in class and the other 54 consists of independent student learning. So one course will involve only 120 minutes of teaching a week for 13 weeks and they will

probably do three courses a semester, that is only six hours of direct teaching a week (example taken from Staffordshire University 2001).

Not surprising, arriving in a British university is a massive shock to the system for most Japanese with experience of higher education in Japan. Initially they find the regime very acceptable in terms of term lengths and class contact hours. It seems like "easy street" until they realise the weight of the assessment load and the standard of presentation required.

It is worth noting however that many of the Japanese students in British institutions are "voting with their feet" in that they are rejecting the Japanese university experience and are committed to earning their degree/diploma no matter how much hard work it takes. They say they do not want to be on a Japanese campus where "education is absent." There is empirical evidence to show that the push factors propelling Japanese students abroad are stronger than the pull factors (Walker 1998).

English Language Education in Japan

Japanese junior year students have studied English for eight years, six years through Junior and Senior high school and two years at university. It is highly unlikely, however, that s/he will be able to hold even the simplest conversation on a general topic in English and s/he is likely to be extremely tongue-tied in the presence of a native speaker. *"The Japanese posses a low opinion of themselves as speakers of English yet public opinion maintains that the average university graduate can read English competently and has some knowledge of Western Culture, though supporting evidence is scarce"* (Hansen 1986:145).

As mentioned earlier, Japanese students in Britain, despite the profound differences in educational philosophy and pedagogic organisation of the two countries, compete and cope alongside native speakers in courses which do not compensate them for language difficulties. These achievements are not only the result of living in the target language (though of course this helps enormously) but in response to the dynamic direct teaching methods. Some Japanese in Oxford made good friends with British students and shared rented houses with them. Some acquired distinctively British accents often with regional overtones!

There are a number of reasons why some Japanese students fail to acquire even a modest knowledge of English. Some are to do with their own attitudes and behaviours, for instance, they may have 22 hours of class a week but absenteeism is endemic and paid work

is invariably prioritised over school work. Others attend the class in body but give their minds a holiday, taking every opportunity to catch up on some much-needed sleep. It worries me to think that the second most powerful economy in the world is relying on young people who can't stay awake for 90 minutes. Other reasons are to do with the nature of education in Japanese universities and not least the role of the Japanese teacher.

Japanese Teachers of English in Universities

The term "English language," as it relates to Japanese higher education, is something of a misnomer, since in most institutions it prioritises literature and linguistics, the focus of most of the academic staff. Many Japanese English professors are scholars first and teachers second, because Japanese universities reward scholarship (especially publications), not teaching effectiveness. If tutors are overly zealous in their attention to students it is often remarked upon by other professors. It could even be construed to be ostentation on the part of the "nurturing" tutor or, worse, a dereliction of scholarly duties. More than that, it implies a criticism of those colleagues who are rather parsimonious with their time for students. As Kitamura Kazuhiro (1991) asserts

> Even though the first two years of university life are thought of as a period of relative ease and relaxation on the part of students, it does not mean that the faculty are lax or that the students learn little. Japanese universities, especially in the fields of social sciences and humanities, <u>try to leave students as much free time as possible</u> and avoid imposing restraints upon them <u>so that they will learn to cultivate individual initiative</u> and <u>motivation</u>. *(my emphasis)*

Another problem is to do with the promotion system in universities *(nen ko joretsu).* Rising in the organisation because of age or seniority *implicitly* recognises the professor's skills and experience but there is no *explicit* external evaluation or appraisal.

The dichotomy at the heart of Japanese English departments is that the public and the Government expects students to be able to use English after 8 years but university professors don't want to be practical English 'instructors' or skills trainers, teaching basic practical language skills. They think that is the job of the high school teachers. The thinking is that anyone can speak a language but not just anyone can understand Shakespeare, Donne, or Shaw, and share these insights with undergraduate students (in Japanese of course.)

Foreign Professors in Japanese Universities

In Britain I am a University lecturer with a PhD in Comparative Education but in Japan I am a "native speaker teacher" which is, I have come to realise, a different animal. From discussions with a range of Japanese educationists in a number of roles and in different institutions I reluctantly came to the conclusion that what the "native speaker teachers" do is not respected. Mentioning that teaching 11 *koma* a week kept me very busy I was told *"But you are only teaching your native language so it's easy for you."* This professor must never have heard of language acquisition theories, of pedagogical and epistemological concerns, of methodology, of notional syllabuses and functional syllabuses, of materials production, of ..., of .... .

At times during my year I resented being asked, as soon as people saw my face, *"Are you an English teacher?"* I'm English so I must be an English teacher and I began to wonder if I was indeed a token, a means of paying lip service to internationalism in higher education. *"Foreigners on the staff bring prestige [and] those who look racially dissimilar are preferred"* as Wiig comments (1985:63). Many native-speaker teachers, for instance JET participants, often complain they are treated like human tape-recorders. It is the case that the foreign teacher *"serves as a living breathing representative of the ... non-Japanese people in the world and it is surprising the amount of ignorance about his or her culture on behalf of students, academics and administration"* (Wiig 1985).

Because Japanese students in Japanese universities are not accustomed to following English classes in English, I had to break the classic rule of my training and taught myself classroom language in Japanese, *"read silently, work in pairs, true or false, practise with your partner,"* etc., otherwise I couldn't be sure students understood my instructions or even recognised them.

(3) Education and the Economy

In Japan education is, and always has been, a business, so institutions are practised in selling themselves. As we have said, because of demographic changes, the shrinking pool of potential clients is making higher education a buyers' market. Increasingly the packaging of education, as implied above, is more important than the education itself. Japanese students are used to being wooed by universities and are fairly discriminating consumers.

The Costs of Education in Japan

People in Japan, in common with most East Asian peoples, are very definitely education enthusiasts. Although considered an essential good, or perhaps because it is, education in Japan is expensive compared to the rest of the world. It seems paradoxical to outsiders that the most prestigious universities in Japan are the cheapest. The National universities which are the most difficult to get into charge tuition fees of ¥744,200 (about £4500, i.e., more than 4 times the British home fee); the Local Public or Prefectural university charges ¥844,943 (about £5280); and the Private Universities for the cheapest humanities courses more than a million yen a year. That is close on £7000, the international fee in Britain. Home students pay £1000, the same fee for every University. Japanese higher education also carries with it considerable extras which do not occur in Britain – and other university systems. These include entrance exam fees (prohibitively expensive especially if the unlucky aspirant needs to take it a number of times), registration fees, orientation, equipment and tuition.

Indeed, the rising cost of Japanese education at home impacted on the demand for education consumed abroad. For a time it was actually cheaper for Japanese parents to send their sons and daughters to London, for instance, where a far more prestigious, perhaps better quality product, could be purchased for less than a higher education (especially when living costs are added) in Tokyo (British Council 1994). I have demonstrated elsewhere (Walker 1997) that it was no coincidence that the explosion in numbers of Japanese going abroad, corresponded with the economic boom of the mid-eighties and that the numbers of students entering British universities reflected the rise in the purchasing power of the yen against sterling.

The Effects of the Economic Crisis

In the early nineties, the effects of the rising yen caused a number of problems for Japanese Higher Education. Ushiogi (1987) pointed out that inside Japan the strong yen had caused student financial hardship. So much so that young people felt that a college education was looking like a luxury many of them could not justify and intensified their criticism of the high costs. As the 1990s wore on more shocks hit the higher education system. Externally was economic globalisation, internally the economic bubble burst. Due to the economic crisis fewer students were able to exercise the option of eschewing the Japanese higher education system in favour of an international education. Worse, there were occasions of

Japanese students cutting short their programmes of study abroad and a number re-called mid-term by anxious parents feeling severe economic pressure at home. The data offered earlier however confirms that with the economy strengthening, overall numbers remain buoyant.

The Importance of the Private Sector

In Britain there is one private University, unique in a number of ways, in stark contrast to the 415 of Japan's 565 universities and 500 of the 596 junior colleges which are privately owned and run. They seem to outsiders almost as a kind of family firm, the leadership of the institution passing from father to son. The boards of trustees, who often have raised the money for the foundation and wield tremendous power over all matters academic and commercial, have no equivalent in Britain. Japan's private institutions enroll even more students than those of the United States, or 1,864,114 of the total of 2,546,649 students in universities, and an even higher proportion in junior colleges, 460,647 of 498,516 (Monbusho 1998). Private institutions, whilst supported financially by the Monbusho, have tremendous autonomy, as do the academic staff who teach in them. Japanese academics would never realise the extent to which academic work in Britain is directed and monitored by central government. Academic staff in Japan enjoy a level of autonomy which has been lost to British academics and which many British university teachers would envy.

Conclusion

Japanese universities have endured harsh criticism for at least two decades, largely from non-Japanese who find communication with Japanese awkward and difficult but also from within Japan, from academics who have studied abroad and have swallowed wholesale the sales pitch of western universities. Cultural transplantation in education, however, is not only difficult, it can be dangerous and to understand the Japanese student and professor we need to understand the Japanese university and its function.

The powerful agents in Japanese society are the architects of the economy, the *kaisha*. Traditionally, they were confident that the universities would teach skills for employment in the sense that their throughput was competent, malleable salarymen and disposable women for government service and industry. It was more important to the

Japanese economy that their recruits were competitively selected by the University, by whose entrance exams they have done the company's recruitment for them. What did it matter what they learned there in terms of academic content when the company would teach them all they needed to know to do the job. The fact that they endured and survived countless hours of dreary and meaningless English teaching, for instance, proved indisputably that they could take on any job the company threw at them without question, and give it their best shot.

That, historically, has been the position, but there are signs that things are changing. The Monbusho is expressing concerns about standards. The *Yomiuri Shimbun* on May 4th 2001 reported:

> Given the marked decline in the levels of academic achievement of university students, the ministry wants to motivate them to study and to revitalise campuses - which some say have degenerated into "playgrounds" for adult students.

Its solution, typically, was a financial one. *"Top students may have loans forgiven."* The plan was that students who do well in finals would have their loan repayment waived. How long, one wonders, before banners are hung from the university gates: *Two for the price of one, second child goes free!* Or how about, *First class honours and we give you cash-back!*

Worse than low standards <u>before</u> graduation is the issue of low motivation <u>after</u>. It seems that after the cocoon like existence of the university, the sons of Japan are not enthusiastic about removing the burden of Japan's miraculous economic continuance from their parents. A recent white paper emphasised that many young people *"are not attracted by the prospect of working for a big company or gaining social status."* The *Daily Yomiuri* (June 28 2000) reported that

> The ratio of graduates not seeking full-time work is increasing every year, with one in every three high school graduates and one in four university graduates without full-time jobs last year. Many part-time workers cited their reluctance to work full-time and the severity of working conditions as their motives for not trying to land full-time jobs. Young people want to be part-time workers, or so-called freetimers, because they do not have specific goals for the future.

Worse still is the thought that not only are they reluctant to make a contribution, they are prepared to squander resources carefully built up by the parents of the post-war generation who endured personal hardship to work for a peaceful and prosperous future for Japan. The young seem happy for daddy to work until 11 o'clock at night earning the millions to pay for an education which, in their own words, is *"Hard on parents, easy on*

kids." *Sankei Shimbun* the previous September headlined *"An academic crisis. Since the late 1970s, Japanese educational policy has focused on easing the burden of students. But it has gone too far. We must rectify the situation."*

My year in Japan was professionally stimulating and personally fulfilling and for that I am deeply indebted to the wonderful colleagues at the University of Shiga Prefecture, both Japanese and non-Japanese, whose integrity and dedication infused their entire lives into which I was warmly welcomed. The beautiful environment in which to teach and study and the experiences I enjoyed, were more than I could have hoped for.

Above all, in my sabbatical year, I learnt to appreciate the achievements of the Japanese people, too numerous to mention. With all my heart I hope that the young of Japan will pick up the torch and carry on the efforts of their parents and grandparents. My own students in "Kendai," the University of Shiga Prefecture, were a joy to teach and I am sure they cannot be counted with the disaffected above. As for the others, they need to be reminded that the sun also sets.

References and notes

AIEJ (Association of International Education, Japan). (1997). Japanese Colleges and Universities, AIEJ Tokyo.

British Council. (1999). ECS Annual Report, Japan. ECS/The British Council, Manchester.

British Council. (1996). Access to UK higher education 1996/98 - a guide for international students. H.M.S.O. London.

Best, P. (1987). "Japanese Higher Education and Japan's 'Internationalization' *(Kokusaika).*" (MS). Southern Connecticut State University, Requirement for Certificate of Advanced Study.

Cummings, W. (1980). Education and Equality in Japan. Princeton University Press, New Jersey

CVCP. The Committee of Vice-Chancellors and Principals, i.e., the heads of British institutions of higher education. This has been re-named Universities UK (UUK).

Daily Yomiuri. (June 28 2000).

Economist. (1990). "Why can't little Taro think?" April 21, pp 23-26.

Hansen, H. (1985). "English Education in Japanese Universities and its Social Context." In Wordell, C., (1985), A Guide to Teaching English in Japan, The Japan Times, pp 145-163.

HEFCE. (1998). Profiles of Higher Education Institutions, HEFCE, Bristol.

HESA. (Higher Education Statistical Agency). Students in higher education institutions.

Hunter, Janet. (1984). A Concise Dictionary Of Modern Japanese History. Kodansha International Ltd., Tokyo.

Kida, H. (1981). Japanese Universities and Their World - Their Features and Tasks. National Institute for Educational Research, Tokyo.

Kitamura, K. (1991). "The Future of Japanese Higher Education." In Beauchamp (ed), Windows on Japanese

Education. Greenwood Press, New York.

Monbusho. (1998). http://www.monbu.go.jp/stat-en/em.html. Downloaded 00/05/02.

NARIC. (2001). http://www.namss.org.uk/naric

QAA. The Quality Assurance Agency monitors and audits quality assurance in British higher education

Sankei Shimbun. (September 14 2000).

Scott, Peter. (1984). The Crisis of the University. Croom Helm.

UNESCO. (1999). World Education Report. Unesco, Paris.

Ushiogi, M. (1987). "Japanese Higher Education and its Problems." Current Issues in University Education in Korea and Japan, International Seminar, Seoul, July 7-8.

Walker, P. (1997). The Commodification of British Higher Education – international student curriculum initiatives. Unpublished PhD thesis: Oxford Brookes University School of Education, UK.

Walker, P. (1998). "Why it's Sayonara, Japan." *The Times Higher Education Supplement,* November.

Walker, P. (1999). "Japanese students and international education - Quest or Flight." *The Japanese Learner* 17. Oxford University, UK.

Walker, P. (2000). A Junior College student's personal testament to the author. October.

Wiig, L. (1985). In Wordell, C. (1985), A Guide to Teaching English in Japan, The Japan Times.

Yamamoto, S. (2000). "Making the Grade, Japanese Universities aim to "Outshine the Competition." *Look Japan,* May, p.6.

Yomiuri Shimbun. (June 4, 2000).

同時代の中国における芥川龍之介『支那游記』

単　援朝
（崇城大学）

（一）

芥川龍之介は、一九二一（大正一〇）年大阪毎日新聞社の海外視察員として中国を旅行し、三月下旬日から七月中旬までの約四ヶ月間、上海、南京、九江、漢口、長沙、洛陽、北京、大同、天津等を遍歴した。」（『支那游記』自序）東京帝国大学で英文学を専攻した彼の唯一の海外旅行であった。

出発を控えた三月一一日、芥川は当時の大阪毎日新聞学芸部長だった薄田淳介（泣菫）宛書簡の中で、「紀行は毎日書く訳にもいきますまいが上海を中心にした南の印象記と北京を中心にした北の印象記と二つに分けて御送りする心算ですどうせ碌なものは出来ぬものと御思ひください」と書いてある。旅行中、新聞に紀行を書く予定であった。大阪毎日新聞社は三月三一日付の紙上に、次のような社告を載せている。

> 旧る支那が老樹の如く横はつてゐる側に、新しき支那は嫩草の如く伸びんとしてゐ。政治、風俗、思想、あらゆる方面に支那固有の文化が新世界のそれと相交錯する所に支那の興味はある。新人ラッセル氏や、デュウイ教授の現に支那にあるのも、やがて、この点に心を牽かるに外ならぬ。吾が社はここに見る所あり、近日の紙上より芥川龍之介の『支那印象記』を掲載する。芥川氏はは現代文壇の第一人者、新興文芸の代表的作家であると共に、支那趣味の愛好者としても亦世間に知られてゐる。氏は今筆を載せて上海に在り、江南一帯の花を狩り盡した後は、やがて春をもとめて北京に上るべく、往き行々想いを自然の風物に寄せると共に、交りを彼の土の新人に結びて、努めて若き支那の面目を観察しようとしてゐる。

前掲薄田淳介宛に「一昨日静養軒の送別会席上にて里見弴講演して曰く『支那人は昔偉かつたその偉い支那人が今急に偉くなくなるといふことはどうしても考えられぬ支那へいつたら昔の支那の偉大ばかり見ずに今の支那の偉大もさがして来給へ』と私もその心算でゐるのです」とあり、「努めて若き支那の面目を観察しようと」する意識が確認されるが、しかし、病気のため、旅行中大毎に原稿を送る予定は実現しなかった。帰国後、メモをもとに各地の紀行を書き、新聞や雑誌に発表したが、大阪毎日新聞に掲載されたのは「上海游記」（一九二一年八～九月）と「江南游記」（一九二二年一～二月）だけで、それらに、それぞれ『女性』に発表された「長江日記」と『改造』に発表された「北京日記抄」に、「雑信一束」（初出不詳）が加えられ、一九二五（大正一四）年一一月、『支那游記』と題して改造社から刊行されたのである。芥川は『支那游記』の自序で、「『支那游記』一巻は天の僕に恵んだ（或は僕に災ひした）Jouralist 的才能の産物である。（中略）僕のジヤアナリスト的才能はこれ等の通信にも電光のやうに、――少くとも芝居の

電光のやうに閃いてゐることは確である」と記している。しかし、自負ともいえるこの自信は、吉田精一氏は「要するに小説家の見た中国であって、新聞が、もしくは新聞の読者が期待したかも知れぬような、中国の現在と将来を深く洞察し得たものではない」(『芥川龍之介』三省堂　一九四二、一二)と述べているように、従来、ほとんど認められていなかったのである。中国文学研究から出発した、中国との関わりが深い作家武田泰淳でさえ、「『将軍』を描いてあれほど冷徹な批評家であり得た芥川龍之介が、『支那游記』に於て、いたずらにとぎすまされた感覚を走らせたばかりで、ついに大陸国民の苦悩を自己の問題としてとりあげ得なかった」①とする。

総じていえば、芥川の中国旅行は長い間、否定的にとらえられる傾向にある。「柳田(前略)生きた中国はみていない。――猪野　そういうアワだっている、中国人の生活に密着した状態では見ていない。やはり上海なんかの植民地的雰囲気、一種のエキゾチシズムをみているのですね。――柳田　過去の艶史文学みたいなものだけを見てくる。」(上原専禄・柳田泉・勝本清一郎・猪野謙二「〈座談会・近代日本文学史13〉明治から大正へ」『文学』　一九六一、九)とか、「皮膚感覚にとどまる」(内村剛介「未熟と成熟―上目づかいの『支那游記』―」『国文学』　一九七七、五)といった酷評はその代表的なものである。紅野敏郎氏の「動きつつある中国、苦悩する中国、つまり現実の中国への熱い関心、もしくは猛烈な好奇心につき動かされての執筆というより、中国の風物、雰囲気、名所旧蹟への興味が強く働いての執筆となっている」(「芥川龍之介△支那游記と湖南の扇▽」(『近代日本文学における中国像』有斐閣　一九七五、一〇)という見方を含め、「芥川は、『中華民国十年』という当時の激動する政治的状況を故意に無視し、中国の著名政治家、運動家との会見にも深い政治的興味は抱かず、現代になお残存する『支那風俗』や『支那美人』の面影に自己の中国像を重ねて、強い関心を見せていた」(神田由美子「中国旅行」菊地弘・久保田芳太郎、関口安義編『芥川研究事典』明治書院、一九八五、一二)、「芥川という作家の目を通して描かれた中国で、客観性に欠けているところがある」(矢島道弘「江南游記」菊地弘・久保田芳太郎、関口安義編『芥川研究事典』明治書院　一九八五、一二といった否定的な見解はその延長線上にあるものである。同書で「支那游記」を執筆する高橋春雄氏の「社からは政治、風俗、思想の全般にわたる印象記を期待したようであり、芥川自身もそれにこたえてはいるが、おのずから視点は中国古来の風俗や文化に注がれ、随所に独得の才気をほどばしらせて興味ある紀行を成し得たのである」という見方も基本的にその流れをはみ出していない。

要するに、芥川が中国でなにを、どう観たかは問題の焦点となっている。見てきたように、従来、激変する中国の政治状況への関心が薄い文人・作家の目で観た中国で、その観察の目は興味本位に走る傾向が強くて客観性に欠けている、という見方は主流となっているが、やがて、『支那游記』を見直す動きは少しづつ出てきたのである。

単援朝は『支那游記』の記事に出ている李人傑という人物の正体を明らかにしたうえ、共産党の代表者たる李との会見記事の成立を検証することによって、「芥川の『ジヤナリスト的才能』を認めなければならない」(「上海の芥川龍野介――共産党の代表者李人傑との接触――」『日本の文学　第8集』有精堂　一九九二、八)という結論に辿り着く。芥川の訪中をめぐるそれまでの言説を丁寧に整理したうえで、「『支那趣味』に耽溺してきって」いた谷崎潤一郎と比べ、芥川の中国体験は「中途半端に理知的」だったとする川本三郎の見解を「傾聴に値する」ものとしつつ、木下杢太郎、谷崎潤一郎、佐藤春夫らの「いわゆる

耽美派の作家たち―、本章では（中略）谷崎－－観た中国との比較から、『芥川の観た中国』の独自性を浮き彫りにする論法をとる」考察を展開する吉岡由紀彦は、「ロマンティシズムに浸らず、僅かではあるが当時の中国民衆の貧困への洞察をのぞかせ、谷崎との違いを示している。」とか、「今日でも政治と無縁の『芸術家』を代表する作家のひとりとみなされている芥川が訪中さなかに『政治』を論じだしたというのは、特筆に値する」と指摘し、「現在、身体的ダメージや作風の変化のきっかけなどと併せて、思想的変化のレウェルも加えて総合的芥川の訪中を見直す時期に来ているといえるだろう」（「芥川龍之介の眼に映じた中国――『支那游記』・零れ落ちた体験」芦谷信和・上田博・木村信一編『作家のアジア体験―近代日本文学の陰画』世界思想社　一九九二、七」とする。

さらに、関口安義は『特派員　芥川龍之介――中国でなにを視たのか――』（毎日新聞社　一九九七、二）の中で、「『支那游記』はジャーナリストとしての鋭い眼がとらえた、激動の中国の現状報告書であったのだ。ここに収録された『上海游記』をはじめとする紀行文、それに『将軍』『桃太郎』『湖南の扇』など、中国旅行がきっかけとなって生まれたと思われる小説は、確かに龍之介に与えられた天の恵み、ジャーナリスト的才能の賜物であった」と芥川の自負を全面的に認め、『支那游記』の世界を細かく検証することによって、芥川の中国旅行と現代中国に対する観察を積極的に評価している。従来の説と一線を画する、新しい『支那游記』論となる。

一方、『支那游記』一巻に記された作者の中国体験、彼の眼に映じた「支那」を、観察の対象だった中国の人々がどう受け止めているのか、というのも興味深い問題である。

関口安義は前掲著書の中で、作家巴金の「幾段不恭敬的話」（『太白』　一九三五、一）を取りあげ、現代中国のすべては「堕落」しているとする芥川の見解について、「巴金はまず、日本に帰国した龍之介は、果たして右の文章の『支那』を『日本』に置き換えてみたことがあるだろうかと言い、日本に誇りとする芸術作品があるのか、と問う。音楽はどうか。ある東京帝国大学の学生は、『日本の音楽ことを問わないでください。日本人には耳がないのです』と語った。絵画はどうか。自分は帝展を一円を払って見たが、千篇一律の筆致、景色、描写は、自分のような門外漢から観ても、町の広告画と同じであった。文学は日本では著しい発展を遂げているそうだが、現今の通俗小説の流行は、日本文学の衰弱を示しているのではないか。」と巴金の反論と批判を紹介している。芥川の観察と見解は巴金には「とうてい受け入れないものとして映った」のであるが、芥川没八年後の発言であることにも留意すべきである。

一方、当代の中国人の受け止め方を示すものとして最近、「卒論で芥川龍之介の中国体験・中国理解を取りあげた学生は、『支那游記』を読み進めていくうちに。次第に嫌悪や憂鬱を覚えるようになった。テクスト全体に蔓延する『中国蔑視』」に我慢ができなくなったからだという」②と、ある中国の大学生の読書体験が紹介されている。

以上、『支那游記』に対する従来の評価を日中両国から概観してきたが、巴金の批判を除いていずれも異なる世代の時代の視点からのものである。たとえ巴金の発言にしても厳密には同時代評とはいえない。すると、『支那游記』は同時代の中国でいかに受け止められていたのかということは問題になってくる。内容的に別稿③と重なっている部分があるが、本稿では『支那游記』に対する同時代の中国人の受け止め方を探り、これによって『支那游記』に新しい光を当てようとする。

(二)

前にふれたように、『支那游記』の刊行日一応は一九二五年十一月三日である。それから半年も経たないうちに、一九二六（大十五）年四月一日発行の雑誌『小説月報』（総十七巻第四号）に、「芥川龍之介氏の中国観」という題でその一部が翻訳、掲載された。これはのち、「中国游記」と改題され、『芥川龍之介集』（開明書店一九二七、十二）に収録されているが、初出には二五年十二月付の「訳者記」が付されているので、作品の訳了は原文刊行後僅か一カ月余りのことだったと判る。紀行文としてこんなに素早く翻訳、紹介されたのは多少異例のことといわざるを得ない。ちなみに、同時代の作家の中で、谷崎潤一郎や佐藤春夫らは芥川に先だって中国旅行をし、帰国後、それぞれ「蘇州紀行」（『中央公論』大八、二）「秦淮の一夜」（『中外』大八、二）、「南方紀行」（『中央公論』大一〇、九～一〇）を発表したものの、中国ではひとつも翻訳、紹介されなかったのである。何故『支那游記』のみが注目されていたのか、この問題をめぐって、まず訳者の解説を見てみよう。『小説月報』に掲載された訳文の前に「訳者記」が付されており、その中で、彼は芥川の中国旅行と『支那游記』の成立を簡単に紹介した後、『支那游記』との出会いについて次のように書いている。

> 上海へ行く度に必ずあるゆきつけの日本の本屋に行って、何か買う価値のある新書があるかどうかを覗いてみる。今度は、何冊の新書を買い、店を出ようとするところ、本屋の主人は突然この本を指さして、「先生、貴方はこの本に興味を感じないかもしないが、最近日本ではよく売れている。その中に貴国への皮肉が結構多い」と声をかけてくれた。そこで、その本を買い添え、上海から寧波への船の中で一通り目を通した。
>
> 確かに本の中に皮肉が随所に見える。しかし、公平な気持ちで論ずれば、そもそも国内の現状はその通りで、作者が故意な誇張を妄りに加えたわけではない。たとえ作者が私の眼前にいるとしても、自分の国を弁護することができず、ただ、国民の一人一人に皆この本を読んで、彼の観察を鏡として自分の容貌がどんなものなのかを見て欲しくてたまらない。こう考えると、本の中の特に紹介してみたい一部分を訳出し、本屋の主人の言葉を借りて、「貴方はこの本に興味を感じないかもしないが、日本では最近よく売れている。その中に貴国への皮肉が結構多い」と、謹んで国民に告げたいと思う。
>
> 芥川氏は日本では指折りの作家である（その作品、例えば鼻、羅生門など既に周作人氏によって訳出されている）。その観察と描写は、言うまでもなく全て文芸作家の目からのもので、他の実業か政治の観点をもつ何かの考察観光団の場合と異なる。

訳者の夏丏尊は浙江省上虞県の出身で本名が鋳。日本留学の経験をもつ散文家、翻訳家としてだけでなく、中華文文芸家協会主席に当選するほど文化教育界の有名人である。日本文学の翻訳は『近代日本小説集』、『国木田独歩集』、『蒲団』などがあり、芥川文学の翻訳は当面の『支那游記』の他、「秋」、「湖南の扇」、「南京の基督」がある。また『芥川龍之介集』の編集も手掛けた。

後述するように、「鼻」も「羅生門」も魯迅が訳したもので、周作人訳とするのは夏丏尊の誤解である。これをさておいて、右の解説に、翻訳の動機を含む『支那游記』の訳出に関する一連の事実がうかがわれ

る。まず、「あるゆきつけの日本の本屋」とは、恐らく上海内山書店のことを指すだろう。夏丏尊と店主内山完造との付き合いは実に長いものである。「三十年の知己」として、その交友はまさに「生死の交」といえる。例えば一九四三年十二月、夏丏尊が上海の日本憲兵隊本部に拉致されたとき、内山完造は憲兵隊へ釈放交渉にいったりして彼を救出するために奔走した。一方、一九四五年一月内山夫人が上海で亡くなったが、その墓碑銘を撰したのは夏丏尊である。これらの事実が悉く「三十年」にわたる二人の友情を語っているが、内山書店における『支那游記』をめぐる二人の対話もその中の一幕になるはずである。「訳者記」の解説に示されているように、内山からの一言で夏丏尊は『支那游記』と出会ったのである。一方、『支那游記』の紹介に当たって、夏丏尊はその一言を借りて「国民に告げたい」と述べている。この意味で、確かに内山も『支那游記』の訳出に関わった、少なくともそのきっかけを作ったといえる。次に、「上海からの寧波への船」とあるから、夏丏尊はその当時白馬湖中学の教員で寧波に在住していたことが判る。なお、船の中で眼を通しただけで作品に惹かれ、寧波到着後すぐ翻訳に着手したこと、作業が迅速に進んでいたことも推察される。多忙な教員生活のかたわら、『支那游記』の翻訳に励んでいた訳者の姿を彷彿させる。

問題は『支那游記』に対する訳者の評価である。作品を読んで「確かに皮肉が随所に見える」との感想をもつ夏丏尊は、その「皮肉」を広く国民に周知しようとして翻訳に着手したのである。従って、「皮肉」は、一つのポイントとして翻訳の動機だけでなく、作品の評価にもつながっていくはずである。「訳者記」の見解を整理すると次のようになる。まず、作者は「故意な誇張を妄りに加えていない」。「文芸作家の目から」見たものであるが、その「観察」を国民の自己省察の「鏡」とすることできる。それぞれ客観性、独自性と批判性において作者の「観察」を是認し、「皮肉」の多い『支那游記』を肯定的に受けとめているが、その中で、特に注目しておきたいのは『支那游記』を「鏡」とすることである。要するに、夏丏尊は作中の「皮肉」を事実通りのものと認めたうえ、作品に中国社会の現状を照射する外光を求めよとするのである。これこそ彼の『支那游記』に寄せる思いで、翻訳の動機に直結するものではないか。こうした意識は当時の知識人の良識を代表しているといえるが、と同時に『支那游記』自体が「鏡」としての要素を備えていることも見逃せない。なお、「実業や政治の観点」をもつ視察団との違いを強調するところからもうかがえるように、「指折りの作家」という肩書きは外光の権威性・客観性を保証することになる。

ところで、前にふれたように、翻訳されたのは『支那游記』の中の一部である。翻訳にあたって、当然のことながら、取捨選択が行われたはずである。一体、訳者の「紹介してみたい」記事はどのようなものなのか、初出の構成を調べてみた。訳出されたのは『上海游記』の「第一瞥」「城内」（上、中、下）「舞台」「章炳麟」「鄭孝胥」「南国美人」、『江南游記』の「車中」「西湖」（一～六）「蘇州城内」（一～三）「南京」（上）、『長江游記』の「蕪湖」、『北京日記抄』の「雍和宮」「辜鴻銘」「十刹海」などである。その中に、一部の内容が省略された記事もあり、分量的には全体の半分弱を占めている。このような構成を見てみると、幾つか留意すべきことがある。まず、『支那游記』に全部で四人の会見記事が載っているが、訳出されたのは章炳麟、鄭孝胥、辜鴻銘という三人の会見記事で、社会革命を主張する李人傑の記事のみが訳出されていない。李人傑は当時上海における共産党の代表者で、その会見記事に社会革命を中心に彼の主張が多数記されている。これを訳出しなかったことはもちろん訳者の関心や好尚と無関係ではないが、敏感な話題であるだけに、と同時に時代状況を考慮した上での選択だともいえよう。

次に、注目しておきたいのは「蕪湖」という記事である。『支那游記』一巻の中で「不快」の体験が一番

多いのは『長江游記』であり、また『長江游記』の中で最たるのは「蕪湖」である。この記事の前半では、蕪湖在住の中学時代の同級生西村貞吉との付き合いが描かれている。「洪水後の向島あたりと違ひはない」環境に身を置きながら、「日本語は甚未熟」な西村を相手にすることは、芥川の神経をかなり尖らせたようである。こうした状態が続く中、「支那に対する私の嫌悪」が徐々にエスカレートし、遂に「莫迦莫迦しい程熱心に現代の支那の悪口をいう」後半に至ったのである。「現代の支那に何があるか？政治、学問、経済、芸術、悉堕落してゐるではないか？」云々とする感想は、『支那游記』の中で最も辛辣な「悪口」になる。しかし、夏丏尊は意識的に前半の西村との齷齪を描く部分をカットし、ただ蕪湖の印象と後半の「悪口」のみを訳出したのである。こうした取捨選択の結果に「特に紹介してみたい」ものの中身とともに、訳者の中の「鏡」を求める意識が見て取られる。要するに、「悪口」であるほど「鏡」になるという認識が訳者の中にあり、これは「蕪湖」の訳出に直結していったのだろうと考えられる。

一方、作家孫席珍氏の伝えるところによると、「かつて魯迅は友人にそれ（訳者注　『支那游記』）は実にいい文章だと褒め、そして、我々中国人は昔夜郎自大だったが、後に自分で自分を欺くようになり、まるで阿Q（訳者注　小説「阿Q正伝」の主人公）が頭の癩（白癬頭）を忌み言葉とする如く、他人の本心からともないお世辞を聞くことが好きで、他人が我々の病弊を指摘することが最も嫌いだ。だから、芥川のような誠実な友達が来て我々を刺激してくることは全くありがたいことだ。そうすると、頭がはっきりするようになるかも知れないと語った」④という。この発言の原文が未見であるが、孫氏は新聞の校正者・編集者として魯迅とつきあいのあった人物で、その話は体験談として信用するに足りると思う。一方、『魯迅日記』の一九二六年四月十七日付の記事に『支那游記』購入の記録があり、魯迅がこれを読んだことはまず間違いあるまい。『支那游記』を「いい文章」とし、その「刺激」が国民の覚醒を促すものとして必要だとする見解は、『支那游記』に「鏡」を求める夏丏尊の意識と期せずして一致するのである。要するに、二人とも『支那游記』を肯定的に受け止め、積極的に評価している。日本人の眼で観た中国の現状であるだけに、評価の軸は自ずから作者が何を観たかというよりどう観たかのほう、すなわち作者の姿勢に傾けていくが、こうした肯定的な受け止め方は中国における同時代評の主流となっていることは確かである。

（三）

「誠実な友達」という言葉は、魯迅が芥川の中国を観る姿勢を全面的に認めていることを意味する。魯迅は「『象牙の塔を出て』後記」（一九二四、六）の中で、「私は義和団事変のとき外国人の大半が中国の悪口を言っていたのを覚えている。いまでは彼らが中国の伝統文明を賛美しているのをしきりに耳にする。中国が彼らの恣意な享楽の楽土となるときが、そこまで来ているかのようである。私はこうした賛美の声を憎まずにはいられない」と「賛美の声」に警鐘を鳴らしつつ、「しかし最も幸せなことは、まことに旅人となるのが一番である。私は以前、日本に住んでいたとき、春に上野の桜を見、冬に松島に松と雪を見にいったことがあるが、ついぞ作者（注　厨川白村）が並べたてているような厭わしさを感じたことはない。（中略）だが、残念なことに、帰国して以来、そうした超然たる心境は完全に失ってしまった」と書いて、日本滞在中「幸せ」な旅人で通したため、白村の日本文明批判を理解できなかったが、帰国後の立場の改変によって悟ったことと、自国の現状をもはや「超然たる心境」で見ていられないことを明らかにしている。同じ異郷に身を置かれた旅人として芥川の場合はどうか。中国旅行で「場違ひの西洋」を含む「現代

の支那」の「堕落」とともに、「国民は老若を問わず、太平楽ばかり唱へてゐる」という「国民的腐敗を目撃した」（「蕪湖」）彼にとって、列強の「麻痺」術への認識が必至のものであろう。だが、この「麻痺」術の告発はともかく、「国民的腐敗」の蔓延する「支那を愛したいにしても愛し得ない」と言明しつつ、「いや、支那人自身にしても、心さへ昏んでいないとすれば、我々一介の旅客よりも、もっと嫌悪に堪へない筈である」と痛切に訴えるところに、中国の現状を「超然たる心境」で見ていられない芥川の姿が見えてくる。「超然たる心境」の喪失といった点では魯迅と芥川は共通するが、「旅人」としての二人の姿は全く対照的である。恐らく魯迅は、自ら「幸せ」な旅人となる特権を放棄して中国の「国民的腐敗」を呪詛する「一介の旅客」に「誠実な友達」を見出したのであろう。

ところで、魯迅と芥川との関わりは『支那游記』に始まったものではない。中国旅行中の芥川がまだ上海辺りにいったころ、北京の魯迅は前後にして「鼻」と「羅生門」を訳出し、『晨報』（北京で発行される新聞）第七面に発表した。魯迅訳「鼻」「羅生門」は後、周作人編となる『現代日本小説集』（上海商務印書館　一九二三、六）に収められたが、そもそも両作とも『現代日本小説集』のために選定された作品であることは、魯迅と周作人、周作人と胡適との往復書簡で明らかになる。但し、両作の訳出と発表の時間は芥川の訪中と重なっていた。これは恐らく偶然ではあるまい。特に「羅生門」の連載時間からみれば、訳作の発表に芥川歓迎の意味が込められていたと推測される。とはいうものの、芥川は北京で魯迅に会わなかった。天津で出版される日本語雑誌『日華公論』第八巻第八号（１９２１、７）に「芸術家の眼に映じた支那の印象　芥川龍之介談」と題した談話記事が掲載されている。そのなかで、芥川は北京での人物会見に言及して「周作人は病気の為め西山へ静養にいつて居るので遂に合ひませんでした」⑤という。周作人には会おうとして会えなかったが、兄の魯迅には会えるのに会わなかった。その原因は明らかではないが、現存の資料によれば、芥川が北京で会った人物はほとんど大学関係者であった。周作人を含め、胡適、辜鴻銘や高一涵等は当時みな北京大学の教授で、胡適、高一涵との面会は一回に止まらなかった。このことから、当時教育部検事だった魯迅は北大教授の胡適や周作人ほど有名でなかったとしかいえない。

辜鴻銘といえば、ここでは、彼とも『支那游記』とも関わりのある文章に触れなければならない。北京で出版される月刊誌『読書』一九八九年七・八月合併号に「怪文人　辜鴻銘」という文章が掲載されている。作者の興鐘は長い間関心を持ち続けてきた辜鴻銘との出会いを回想して、「私は初めて辜鴻銘という怪人の存在を知ったのは通県の師範学校に学ぶ頃だった。読んだ『芥川龍之介集』に「中国游記」が収められており、中に辜鴻銘との会見を記す一節がある。作者は辜に才能実学があるのに、何故時事に関わらないかと尋ねたら、答える辜の英語は早口なので、よく聞き取れなかった。そこで、辜は唾をつけて卓上に「老」という字を連続に書いた。それ以来、この怪人に関する資料に気を配るようになった」と書いている。「唾をつけて」というのは原文にないもので、作者の記憶が誤っているに違いないが、「胡麻塩の弁髪、白の大掛児、顔は鼻の寸法短ければ、何処か大いなる蝙蝠に似たり。」「先生、南は福建に生まれ、西は蘇格蘭のエデインバラに学び、東は日本の婦人を娶り、北は北京に住するを以て東西南北の人と号す。英語は勿論、独逸語も仏蘭西語もできるよし。されどヤング・チャイニイイズと異なり、西洋の文明を買ひ冠らず、基督教、共和制体、機械万能などを罵る次手に、僕の支那服を着たるを見て、『洋服を着ないのは関心だ。只憾むらくは弁髪がない。』と言ふ。」とあるように、芥川が描いた辜鴻銘の姿が彼に深い印象を与えたことは確かである。そもそも日本の読者向けの中国紀行であったが、一人の中国青年の怪人学者への

興味を喚起し、しかもその興味と関心は半世紀以上も続いていた。この事実は辜鴻銘の風貌を活写した芥川の鋭い観察力と的確な描写力とともに、『支那游記』の生命力を如実に語っているのではないか。

もちろん、読者として『支那游記』の記事に惹かれたのは興鐘一人ではない。作家・文学史家の阿英は「喫茶文学論」(『夜航集』上海良友図書印刷公司　一九三五、三）の中で、芥川に触れて「八、九年前、芥川龍之介は上海に遊んだとき、かつて九曲橋の「茶客」をあんなに皮肉っていた。李鴻章の時代にも、中国人がお茶を飲んでいるところを見て、この国はもう救えないと予言する外国人がいた。しかし、いま現在、知識人階級にしても、苦渋なお茶に沈痛を託すものもいれば、中国のお茶に飽き、外国茶を飲むことを提唱するものもいる。これに対して、康南海風の感嘆を禁じ得ない。『嗚呼、言葉が出ない』と」と書いている。別の意味で惹かれた例であるが、「九曲橋の『茶客』」とは『支那游記』中の次の記事からくるのである。

> その露路を向うへつき当ると、噂に聞き及んだ湖心亭が見えた。湖心亭と云へば立派らしいが、実は今にも壊れ兼ねない、荒廃を極めた茶館である。その上亭外の池を見ても、まつ蒼な水どろが浮かんでゐるから、水の色などは殆見えない。池のまはりには石を畳んだ、これも怪しげな欄干がある。我々が丁度其処へ来た時，浅葱木綿の服を着た、弁子の長い支那人が一人、（中略）その一人の支那人は、悠々と池へ小便をしてゐた。　（『上海游記』「六　城内（上）」）

湖心亭（茶館）の印象はともかく、重要なのは「池に小便」という光景である。これは作者の目撃した生々しい光景として、中国の読者にもかなり深い印象を与えたはずである。阿英はそこから「皮肉」を読みとったのであろう。実は作者の「皮肉」は光景の描写に止まらなかった。「茶客」について、実はもっと辛辣な発言がある。右の引用に続いて、芥川は「曇天にそば立つた支那風の亭と、病的な緑色を広げた池と、その池へ斜めに注がれた、隆隆たる一条の小便--と、--これは憂鬱すべき風景画になるばかりぢやない。同時に又わが老大国の辛辣恐るべき象徴である。」と書いている。ここまで読むと、阿英のいう「皮肉」に対する実感が確実に湧いてくる。日常的風景としてこれを見慣れ、痺れた人には大袈裟になるかもしないが、これは芥川の眼に映じた一九二一年の「病的」な中国の現実、上海で会見した共産党の代表者たる李人傑らが「社会革命」を通して改造しよとする旧い中国の現実である。その「皮肉」の中に「老大国」の将来に対する失望感が隠されていないが、「作者が故意な誇張を妄りに加えたわけではない」という夏丏尊の感想を思い出せば、「皮肉」の話題を提起した阿英の問題意識がうかがわれる。『支那游記』に「中国蔑視」の蔓延を読み、「憂鬱」を感じたあの大学生は、どうやら当時の中国と今日の中国とを混同したようである。

以上のように、 芥川の視た当時の中国を生きる中国人の一人として、芥川と同時代の文学者・知識人として、夏丏尊や魯迅の目を通じて見ると、例の大学生を困惑させた「中国蔑視」が払拭されてしまうと同時に、『支那游記』の見落とされがちな一面――その現実性と透徹性も見えてくるように思われる。

一人の日本人の作家が中国へ旅行に来、中国で観たこと、感じたことを自分なりに書き記した。これは同時代の中国人の関心を喚起しただけでなく、いまでも中国でときどき議論の対象となる。同時代評として、巴金の批判に代表される否定的な受け止め方もあれば、夏丏尊や魯迅のような理性に基づく肯定的な

受け止め方もある。否定的な受け止め方として現在の段階で知られているのは巴金の批判のみである。評価が分かれたのは文学観の相違によるものというより、中国を観察した作者の姿勢と立場は大きな問題となり、これをどう評価するかは重要なポイントである。芥川の作品を原文で読み、理解する上、その翻訳・紹介を自ら担った夏丏尊や魯迅は、芥川の観察と見解を客観的な、事実通りのものと受け止め、そこに国民の覚醒を促す「刺激」や「鏡」を求めたのである。一方、夏丏尊の翻訳を通じて『支那游記』を享受した巴金は、芥川の観察と見解を受け入れないものとして退けたのである。だから、彼から「日本に何があるか」という反問が飛ばされたのである。

芥川の観察が当たっているか否かという問題をめぐって、夏丏尊や魯迅の答えと巴金の答えは全く対照的である。そうすると、芥川の観察がどうかという問題のみでなく、国内の現状をどう捉えるべきかという、中国人同士の現状認識の問題も絡んでいるわけである。

が、両者の間には十年の差があることも見逃せない。ちなみに、巴金の批判は『支那游記』のみに対して発したものではなく、彼は芥川の作品を「空虚」という言葉で批判できるとするように、批判の矛先は実は芥川の全作品に向けられていたため、その内実と背景をさらに深く考察する必要がある。周知のように、一九三二年の九・一八事件以後中国全土で大衆の抗日気分が高まりつつあり、三五年に入ると抗日気運の高まりの中で、文学界では「民族自衛文学」、「救国文学」、「国防文学」など様々な抗日のための文学スローガンが提出された。巴金の批判はこうした背景のもとに出されたもので、「真の芸術家の使命は、人類を結びつけることである」という彼の発言に、もっと奥深い意味があるのではあるまいか。

『支那游記』における「皮肉」は皮肉にも作者の「支那」への憧れに関わっている。周知のように、芥川龍之介は子供のころから漢文を習い、生涯多くの中国古典文学の作品を読破し、自らの文学創作においても「支那」を積極的に取り込んだのである。中国文学への親近と造詣は彼の胸中の中国への夢を膨らまし、彼を現実の中国を見る旅へと誘ったのだともいえるが、しかし、一旦に憧れの中国の土を踏んでみたら、目の前の光景がしばしば胸中に秘められた「中国」と違うのである。このことは相当彼にショックを与えたようである。特に中国の自然や風土について、中国の古典小説や唐詩を索引としつつ現実に接する「私」の姿が作中によく見られる。一見客観的であるようにみえる観察の眼の裏に、実は文学によって構築された中国の夢は、現実との接点としてのみでなく、ときどき「現実認識ないしは価値判断の基準として機能する」のである。中国の現実と自分との間に本の中の「中国」を介在させることは観察者としての局限性がある。現実と夢想の間を彷徨う作者は失望の余りに出された結論は現代中国の「堕落」であり、作中の「皮肉」はそうした失望感を表現する手段となり、その裏に裏切られた人間の怨念の噴出が見て取られる。このように、愛着と憎悪の念が織り交ぜた複雑な心情は『支那游記』全巻を貫き、芥川独自の中国観を構築するのである。「現代の支那なるものは、詩文にあるやうな支那ぢやない。猥褻な、残酷な、食意地の張つた、小説にあるやうな支那である」（「上海游記」「八　城内（下）」）という発見とともに、彼は「蛮市」たる上海を「場違ひの西洋」と位置づけ、「北京にある事は三日に既に北京に惚れ込み候」（室生犀星宛　大一〇、六、二一）と告白する。千年王朝の地たる北京への「郷愁」を感じるほどの愛着は彼の失望感を大いに癒したに違いないが、「西洋」の浸透への警戒と嫌悪もその「郷愁」に映し出されているのである。なお、「小説にあるやうな支那」「場違ひの西洋」といった発見は、むしろ芥川の社会意識と現実認識の鋭さを示すものと受け止められる。

現在の視点から歴史的、総合的に見ると、芥川の観察の目には、確かに先行論考で指摘されたような現代中国の政治状況への関心の薄さや客観性に欠けている浅薄さがあったかもしれない。冒頭で取り上げた否定的な見解をはじめ、現に『支那游記』は「非常にやせた、つまらない旅行記」⑥であるという見方も存在するが、同時代の中国人である夏丏尊や魯迅らにとって、『支那游記』の世界は「謹んで国民に告げたい」というほど深刻に受け止めねばならなかったものである。作品に「刺激」や「鏡」を求める意識に示されるように、今日においても、『支那游記』はその啓発的な意味を失っていないといえよう。

注

1 「中国の小説と日本の小説」(『文学』一九五〇、十 筑摩版全集十二所収)

2 田口律男「中国で『日本近代文学』を語ることの奇妙な捩れ」(『日本近代文学』第六一集 一九九九、十)

3 拙稿「中国における芥川龍之介--同時代の視点から--」(『崇城大学工学部研究報告』第二六巻第一号二〇〇一、三)

4 「魯迅と日本文学」(『魯迅研究論文集』浙江文芸出版社 一九八三・七)

5 原文が未見。中島常文「芥川龍之介『支那游記』補跋」(『滋賀大国文』第二〇号 一九八二、六)による。

6 川本三郎『大正幻影』(新潮社 一九九〇、一〇)

＊ 魯迅の引用は岩波版全集による。他の中国語資料の引用はすべて筆者訳である。

国際教育センターに対する研究費交付一覧

滋賀県立大学特別研究費交付一覧

● 平成１３年度　（5件、 合計1，８２７，５００円）

区　分	氏　　名	研　　究　　課　　題	金額（千円）
特　別	大谷泰照	日本における戦後の大学外国語教育の動態調査	447
特　別	石田法雄	『大経』法蔵菩薩の「四十八願」の英訳と、その文学的、宗教的考察	200
特　別	小栗裕子	英語学習の動機づけ	200
特　別	寄本　明	日常生活及び運動時における水分代謝に関する研究	529
特　別	高橋信行	電力線を通信路としたネットワーク家電に適したネットワークモデルの提案	451.5

滋賀県立大学在外研修費交付一覧

● 平成１３年度（2件、 合計1，１３３，７００円）

種　類	氏　　名	研　修　先	研修期間	研　修　内　容	支給額（円）
短　期	上村盛人	連合王国（ロンドン、オックスフォード）	平成13年7月11日～7月31日	ロンドンで開催されたヴィクトリア時代研究に関する学会（“Locating the Victorians”）に出席したあと、オックスフォード大学の研究者（Dr. Rooksby）と面談し、スウィンバーンをはじめとするラファエル前派の作家に関して意見の交換をはかった。 上記の学会では、英米を中心とするベテラン及び若手研究者がさまざまな分野についてのペイパーを読んだが、新しく発掘した資料などに現代的観点からアプローチする、“new historicism”、“cultural studies”と呼ばれる研究方法が今なお盛んであることを実感すると同時に、研究・教育上のヒントをいろいろと得ることができた。また、Dr .Rooksby との面談では、スウィンバーンに関する新資料の発見や、スウィンバーン研究の最新の動向について多くのことを知ることができた。	647,040

種　類	氏　名	研　修　先	研修期間	研　修　内　容	支給額（円）
短　期	石田法雄	米国 カリフォルニア州 マリン市 バークレー市 パロアルト市	平成13年9月10日 ～9月25日	カリフォルニア州マリン市にあるGulch Zen Centerで9月14日から16日まで3日間、「Language and Discourse in the Formation of Medieval Japanese Buddhism」というテーマのもと開催されたシンポジューム（Japan Foundation Symposium 2001）で、親鸞と道元に関する論文を発表した。さらに、その前後、カリフォルニア大学にて資料収集を行い、スタンフォード大学宗教学部仏教学教授 Dr. Carl Bielefeldtと面談を行った。	486,670

（財）滋賀県大学等学術文化振興財団助成金交付一覧

● 平成１２～１３年度　（１件、 合計１，０００，０００円）

事　業　名（寄付先）	氏　名	研究期間	研　究　課　題	金額（千円）
特定研究奨励助成事業 （大塚製薬(株)）	寄本　明	平成12年4月1日～ 平成14年3月31日	日常生活の様々な場面における水分および電解質の損失量を把握し、補給飲料について検討する。	1,000

平成１３年度在外研修報告

上村　盛人

研修課題：ヴィクトリア時代におけるラファエル前派主義の作家について
研修地：グレートブリテンおよび北アイルランド連合王国（ロンドン、オックスフォード）
研修期間：2001 年 7 月 11 日～7 月 31 日（21 日間）
研修内容：

1．“Locating the Victorians”（「ヴィクトリア時代の人々の所在をつきとめる」）というタイトルを冠した学会が、4 日間にわたって、ロンドンのサウス・ケンジントンのロンドン大学インペリアル・カレッジ（Imperial College、以下 IC と略記する）を主たる会場として開催された。この学会は、同地の科学博物館（Science Museum）が主催したもので、1851 年にハイド・パークで開かれた大博覧会（The Great Exhibition）から 150 年目、大博覧会の成功および科学博物館の創設・発展に寄与したヴィクトリア女王（1819-1901）の没後 100 年目の節目にあたる本年に、ヴィクトリア時代のさまざまな局面について考察するために開かれた国際学会であった。科学博物館を取り巻くようにして、自然史博物館、ヴィクトリア・アンド・アルバート博物館（以下、V&A と略記）、ロイヤル・アルバートホールなどが隣接するこの地は、ヴィクトリア時代の諸相を考察する学会の開催地として、まことにふさわしく、また、いくつかのセッションは IC 以外の上記の建物を会場として開かれた。

4 つの講演のほかにテーマごとに設定された分科会が 21 部門あり、それぞれの分科会で 6～12 のペーパーが読まれるというものであった。分科会のテーマは、例えば、“Art and Consumption”、“Civilizing and Education”、“Colony and Metropole”、“Death’s Dominions”、“Liberty and Authority”、“Men and Women”、“Power and Motion”、“Religion and Culture”、“Victoria Herself”、“Victorians and Working Class Culture”というように、多岐にわたるもので、19 世紀後半の英国を国内および国外から、社会の上部構造および下部構造から、さらに文化・教育・芸術・宗教・科学などのさまざまな視点から考察して、ヴィクトリア時代のあらゆる面について見直しを図るというのが、本学会の目的ということになろう。読み上げられたペーパーは、いずれ論文集として刊行されるであろうが、出席したいくつかのセッションでは、それまで書物で名前のみ知っていた研究者の発表を間近に聴くことができて、大いに啓発された。

Susan Casteras は、“Revis(it)ing Pre-Raphaelitism: Post-Raphaelite Assessments”で、21 世紀の現代においても、芸術（文学・絵画・音楽・映画）やファッションの世界で、ラファエル前派（以下、PRB と略記）の影響が大きく見られることを実証的に論じ、もう一つのセッション、“Painted Sermons: Religion and Victorian Visual Culture”では、ホルマン・ハントの有名な絵画、「世の光」に描かれているキリストが女性的、あるいは男女両性的に描かれていることを指摘し、女性的なキリストのイメージと時代との関わりについて興味深く論じ

た。また Robert Hewison は、V&A の階段式大講堂で行われた"Crystal Palace or Doge's Palace?: John Ruskin versus Henry Cole"と題する講演で、ラスキンと V&A 初代館長コールの対照的な生き方を鮮やかに論じた。その他、興味深く聴いたペーパーの発表者とタイトルは次の通りである。

(1) Malolm Warner, "Millais and Tennyson"

(2) Suzy Anger, "Evolution and Literary Interpretation"

(3) Suzanne Fagence Cooper, "Female Musicians and the Art of Display"

(4) Cathy Haill, "A Taste for the Spectacular in the Victorian Theatre"

(5) Frank Mort, "Modernity by Gaslight: the Victorians' Metropolis in the Post-war World"

(6) Judith Walkowitz, "Revisiting the Contagious Diseases Acts"

(7) Lynda Nead, "Underworlds on the Surface: Obscenity and the Streets of Victorian London"

２．7 月 16 日、オックスフォードの駅で Dr. Rikky Rooksby と待ち合わせ、市内の自宅まで案内していただいた。Dr. Rooksby は、PRB の詩人スウィンバーンに関する研究書や論文を数多く出版しているスウィンバーン研究者の一人である。スウィンバーンも、1856 年から 1860 年までオックスフォードのベイリオル・カレッジに在籍していて、オックスフォードにおけるスウィンバーンゆかりの場所やエピソードについていろいろと話をうかがった。また、ロンドン大学、Catherine Maxwell の"Writers & their Work"シリーズにおける新しいスウィンバーン伝の出版計画とか、College of William and Mary の Terry L. Meyers によるスウィンバーン未公開書簡集の出版計画の進捗状況など、最新情報についてもいろいろと聞くことができた。さらに、新資料に基づくスウィンバーンとメアリ・ゴードンに関する、Dr. Rooksby による発表予定論文についても詳しく知ることができた。未発表のメアリ・ゴードンの貴重な写真や極めて充実したスウィンバーン関係の文献コレクションに接する機会を得たのも貴重な体験であった。その他、スウィンバーンに関していろいろと話し合うことができて、まことに充実した面談となった。

３．ロンドンやオックスフォードにおけるスウィンバーン関係の場所を訪れたり、PRB 関係の資料や書物を収集したりして他の研修期間を過ごしたが、アッシュモリアン博物館やテート・ギャラリーなどで PRB の画家たちの作品をじっくり鑑賞できたのも有益であった。今回の研修を通して、将来の研究・教育活動に対する有益なヒントを数多く得ることができた。

国際教育センター教員による学界ならびに社会における活動

（前号以降）

【編著書】

大谷泰照：監修『カラーワイド英語百科』、大修館書店、2001年10月、240

呉　凌非（草薙裕編集）：『現代日本語の語彙・文法』くろしお出版、2000年12月29日、113-30

【発表論文】

栗山　稔：「ウィリアム・ワーズワス評伝（２）」、『国際教育センター研究紀要』、滋賀県立大学国際教育センター、第5号、2000年12月、1-20

Yasuteru Otani : Foreign Language Education in Japan—from a cross-cultural perspective—, *Academic Reports of the University Center for Intercultural Education, the University of Shiga Prefecture*, No. 5, December 2000, 21-32

Yasuteru Otani : Foreign Language Education in A New Era, *ELT Curriculum for Young Learners*, National Taiwan Normal University, January 2001, 36-45

上村盛人：「ウォルター・ペイターの審美主義」、『国際教育センター研究紀要』、滋賀県立大学国際教育センター、第5号、2000年12月、33-46

石田法雄：「今ここにおける共生を考える—点から線への認識を通して—」、『国際教育センター研究紀要』、滋賀県立大学国際教育センター、第5号、2000年12月、47-66

Walter Klinger : Effects of Pictures on Memory & Learning, *Academic Reports of the University Center for Intercultural Education, the University of Shiga Prefecture*, No. 5, December 2000, 67-86

小栗裕子：「リスニング力上達者にみられる特質—理系の場合—」、『国際教育センター研究紀要』、滋賀県立大学国際教育センター、第5号、2000年12月、87-96

小栗裕子：「理系学生のリスニング能力にみる動機づけの違い」、『英語教育研究』関西英語教育学会、24号2001年6月、91-104

深見　茂：「奇人と子ら—シュトルムの『桶屋バッシュ』における—モティーフについて」、『国際教育センター研究紀要』、滋賀県立大学国際教育センター、第5号、2000年12月、97-111

深見　茂：「いま『デメートリウス』を読む」、『仮面と遊戯—フリードリヒ・シラーの世界』、鳥影社、2001年6月、145-62

Ritsuko Nagashima : La Réforme et la Contre-Réforme selon Bernanos, *Academic Reports of the University Center for Intercultural Education, the University of Shiga Prefecture*, No. 5, December 2000, 113-30

呉　凌非：「言語の量子論的側面と自然言語処理」、『国際教育センター研究紀要』、滋賀県立大学国際教育センター、第5号、2000年12月、131-40

高橋　信行・田中　哲也・小倉　久直：「『狭帯域』不規則動画像の発生」、『国際教育センター研究紀要』、滋賀県立大学国際教育センター、第5号、2000年12月、141-56

亀田彰喜：「地域福祉と福祉情報システム」、『国際教育センター研究紀要』、滋賀県立大学国際教育センター、第5号、2000年12月、157-68

岡本　進：「心拍数からみた大学スキー実習中の運動強度の推定」、『国際教育センター研究紀要』、滋賀県立大学国際教育センター、第5号、2000年12月、169-75

佐藤尚武、宮本　孝、岡本　進：山岳競技に対する科学的サポート(5)「少年国体選手の縦走タイムに有酸素パワーが反映する」、滋賀県体育協会スポーツ科学委員会紀要、№19･20、2001年3月、123-30

寄本　明、芳田哲也、中井誠一：「種々の温熱環境下における運動時の生理的応答と主観的応答」、滋賀県立大学国際教育センター研究紀要、第5号、2000年12月、177-86

藤田きみゑ、伊丹君和、安田寿彦，古株ひろみ、横井和美、久留島美紀子、藤迫奈々重、森下妙子、北村隆子、甘佐京子、柴辻里香、田中智美、寄本　明：「看護作業における捻りの検討―捻りが腰部に与える影響―」、滋賀県立大学看護短期大学部学術雑誌、第5号、2001年3月、9-15

伊丹君和、藤田きみゑ、寄本　明、古株ひろみ、横井和美、藤迫奈々重、田中智美、久留島美紀子、北村隆子、森下妙子：「看護作業姿勢からみた腰部負担の少ないベッドの高さに関する研究（第2報）―作業時姿勢における教員・学生間のボディメカニクス活用の比較分析―」、滋賀県立大学看護短期大学部学術雑誌、第5号、2001年3月、21-7

伊丹君和、藤田きみゑ、古株ひろみ、矢口潤哉、北村隆子、横井和美、田中智美、藤迫奈々重、甘佐京子、柴辻里香、久留島美紀子、森下妙子、寄本　明、金田嘉清：「看護作業時のひねりが看護者の腰部に及ぼす影響についての検討―Noraxon 社製 MyoSystem 1200 sEMG を用いての筋電図学的分析」、滋賀県立大学看護短期大学部学術雑誌、第5号、2001年3月、33-8

【その他】

（印刷物＜翻訳、辞典、一般雑誌など＞、口頭発表、講演、社会活動、地域社会への参加など）

栗山　稔：シンポジウム「"Tintern Abbey" から "Immortality Ode" へ」、イギリス・ロマン派学会、中央大学、2000年10月

栗山　稔：講演「ワーズワス『逍遙』について」、佛教大学大学院英米文学研究会、佛教大学、2001年９月

大谷泰照：答申「教育環境の改善について―国際的な視点からの提言―」文部大臣私的懇談会「英語指導方法等改善推進会議」の諮問に対する答申書、2000年4月、1-12

国際教育センター教員による学界ならびに社会における活動

大谷泰照：講演「日本人の言語意識を問い直す—新世紀の異言語教育の展望を切り拓くために—」、英語授業研究学会関東支部大会、筑波大学付属駒場中・高等学校、2000年11月23日

大谷泰照：講演「20世紀をどのような時代とみるか—異言語教育の立場から—」第１回英語教育研究合同セミナー、平安女学院大学、2000年11月26日

大谷泰照：論説「21世紀の日本の外国語教育のあり方を考えるために」、『どうする？小学校の英語—国際理解教育と英語をむすぶ—』、草土文化社、2000年11月、116-26

大谷泰照：書評　大森不二雄著『現役文部官僚が直言「ゆとり教育」亡国論—学力向上の教育改革を！』、PHP出版、『英語教育』、大修館書店、第49巻第10号、2000年12月、92

大谷泰照：報告「ひとすじの爪跡」、『JACET通信』、大学英語教育学会、第125号、2000年12月、13-4

大谷泰照：座談会「英語教育の21世紀—英語教育のこれまで・そしてこれから—」、『英語教育』、大修館書店、第49巻第11号、2001年1月、8-13

大谷泰照：論説「日本人と英語教育—その歴史と展望—」／「東アジアの早期英語教育：韓国」、『子どもに英語を教えるための基礎知識』、アルク、2001年１月、58-67／80-4

大谷泰照：論説「世界の外国語教育：中国—中央集権国家の多様な言語教育政策—」、『英語情報』、日本英語検定協会、1・2号、2001年1月、40-3

大谷泰照：論説「もうひとつの顔—韓国の英語教育を考えるために—」、『英語教育』、開隆堂、第53巻第1号、2001年1月、22

大谷泰照：論説「日本の英語能力は、なぜ韓国に劣るのか—英語の第二公用語化を考える前に—」、『LL通信』、ソニーマーケティング、第216号、2001年2月、2-4

大谷泰照：論説「世界の外国語教育：日本—この国の異言語教育をどうみるか—」、『英語情報』、日本英語検定協会、3・4号、2001年3月、42-5

大谷泰照：講演「異文化理解教育の新しい動向」、大阪YWCA講演会、2001年3月5日

大谷泰照：論説「隣の芝生は、本当に青いのか—シンガポールの英語教育—」、『英語教育』、開隆堂、第53巻第2号、2001年3月、19

大谷泰照：解説「世界各国の外国語教育」、『朝日学習年鑑2001』、朝日新聞社、2001年4月、143

大谷泰照：解説「教育を問う—知の大競争—」、『日本経済新聞』、2001年4月23日

大谷泰照：書評「英語教育：研究と実践」、『英語教育』、大修館書店、第50巻第１号、2001年４月、86-7

大谷泰照：論説「もうひとつの悲劇—ベトナムの外国語教育—」、『英語教育』、開隆堂、第53巻第3号、2001年5月、17

大谷泰照：論説「ワールドカップの国名表記をどうみるか—韓国的発想を考えるために—」、『LL通信』、ソニーマーケティング、第217号、2001年5月、2-3

大谷泰照、論説「近隣諸国・地域から日本を見る—21世紀の外国語教育—」／「世界の異言語教育はどのように動いているか」、『大学英語教育学会関西支部紀要』、第6号、2001年5月、3-4／9-10

大谷泰照：対談「異質の言語や文化から自分が育つ糧を学び取ってほしい」、『みーな』長浜みーな協会、第68号、2001 年5月、50-1

大谷泰照：講演「20世紀とはどんな時代であったのか—異言語教育のあり方を考えるために—」、奈良県英語教育研究会総会、奈良県立高取高等学校、2001年5月29日

大谷泰照：講演「大学とは何をするところか」、滋賀県立八日市高等学校、2001年7月17日

大谷泰照：講演「日本の外国語教育の動向をどうみるか—新しい外国語教育確立のために—」、プール学院大学英語教育セミナー、2001年7月31日

大谷泰照：論説「英会話ができれば、国際理解は深まるか」、『LL通信』、ソニーマーケティング、第218号、2001年8月、2-3

大谷泰照：講演「言語・文化の比較と対照」、大阪YWCA講演会、2001年8月30日

大谷泰照：シンポジアム「「先進諸国」から見た日本の外国語教育—早期外国語教育を考える—」、大学英語教育学会全国大会、藤女子大学、2001年9月15日

大谷泰照：論説「日本流からの決別—台湾の外国語教育—」、『英語教育』、開隆堂、第53巻第４号、2001年9月、43

大谷泰照：解説「ALT（外国人指導助手）の役割再検証を」、『京都新聞』、2001年10月3日

大谷泰照：講演「大学で学べば、何が見えてくるか」、滋賀県立米原高等学校、2001年10月24日

大谷泰照：報告「「先進諸国」から見た日本の外国語教育—早期外国語教育を考える—」、『JACET通信』、大学英語教育学会、第130号、2001年10月、11

大谷泰照：論説「異言語教育にとって、20世紀とは何であったのか」、『全英連会誌』、全国英語教育研究団体連合会、第39号、2001年11月、16

大谷泰照：論説「日本国首相は、なぜ長岡藩家老を超えられないか」、『LL通信』、ソニーマーケティング、第219号、2001年11月、12-3

上村盛人：翻訳「クリスティーナ・ロセッティ、『モード』」、『HUMANITAS』、奈良県立医科大学、第26号、2001年3月、1-55

上村盛人：講演「英詩の世界」、平成13年度滋賀県立大学公開講座、2001年6月2日

Hoyu Ishida : Presentation 'A Bodhisattva Ideal in the Here and Now,' The 10th Biennial Conference of Shin Buddhist Studies, Otani University, Kyoto, August 4, 2001

Hoyu Ishida : Presentation 'Shinjin and Satori in the Here and Now—Flowers Yet Fall As People Lament—,' Japan Foundation Symposium 2001, Green Gulch Zen Center, Marin, California, September 15, 2001

Hoyu Ishida : Lecture 'Japanese Religion and Culture 1,' Seminar on Japanese Culture and Society, Japan Center for Michigan Universities, Hikone, October 29, 2001

Hoyu Ishida : Lecture 'Japanese Religion and Culture 2,' Seminar on Japanese Culture and Society, Japan Center for Michigan Universities, Hikone, November 5, 2001

石田法雄：滋賀県TOEIC推進協議会委員

石田法雄：財団法人滋賀県国際協会評議員

国際教育センター教員による学界ならびに社会における活動

石田法雄：財団法人国際仏教文化協会評議員・研究員

小栗裕子：発表「英語学習の動機づけ—大学入学時と一年後を比較して」、第27回全国英語教育学会広島研究大会、2001年8月9日

小栗裕子：研究発表「効果的なリスニング指導法：学習者の視点」、大学英語教育学会第40回全国大会、2001年9月14日

呉　凌非：発表「言語の量子論的側面と自然言語処理」、電子情報通信学会[思考と言語]、公立はこだて未来大学、2000年12月4日

深見　茂：財団法人祇園祭山鉾連合会理事長 2001年

岡本　進・宮本　孝・佐藤尚武：発表「高年者の身体活動量から見た体力特性」、第56回日本体力医学会、宮城県スポーツセンター、2001年9月21日

岡本　進：講演「運動とからだの仕組み，運動とストレッチング」、滋賀県レイカディア大学選択講座、2000年12月19日

岡本　進：講演「運動と心拍数」、滋賀県レイカディア大学選択講座、2000年12月21日

岡本　進：講演「生涯スポーツとしてのニュースポーツを考える—新しい種目の開発をめぐって—」、滋賀県レイカディア大学必修講座、2001年6月14日

岡本　進：講演「ニュースポーツのプログラム」、滋賀県レイカディア大学選択講座、2001年6月21日

岡本　進：講演「高齢社会におけるニュースポーツの役割」、滋賀県レイカディア大学選択講座、2001年7月31日

岡本　進：講演「運動の必要性と実際の動きについて」、大津市健康推進員養成講座、2001年9月18日

岡本　進：滋賀県スポーツ振興審議会16期委員、2001年

寄本　明：講演「健康づくりとしての運動—なぜ、ウォーキングなのか—」運動効果についての講演会、びわ町リュートプラザ、2000年6月3日

寄本　明：講演「夏季スポーツ活動における水分補給」平成12年度都市部スポーツ少年団育成事業大津市ジュニアスポーツセミナー、大津市役所新館大会議室，2000年6月25日

寄本　明：講演「スポーツ活動における熱中症予防について」平成12年度都市部スポーツ少年団育成事業田辺市ジュニアスポーツセミナー，田辺市民総合センター、2000年8月5日

寄本　明：講演「運動生理とその実際」、能登川町健康推進員養成講座、能登川町総合健康福祉センターなごみ、2000年8月29日

寄本　明：講演「運動医学の基礎、健康づくりと運動」、7市町合同推進員養成講座、日野町保健センター、2000年9月5日

寄本　明：講演「健康づくりと運動」、健康推進員養成講座、サントピア水口、2000年9月12日

寄本　明：講演「血圧と運動の切っても切れない関係」、高血圧予防教室、能登川町総合健康福祉センターなごみ、2000年9月14日

寄本　明：講演「運動生理学」、健康推進員養成講座、サントピア水口、2000年9月27日

寄本　明：講演「運動と健康について」、彦根市康推進員養成講座、彦根市福祉保健センター、2000年9月28日

寄本　明：講演「運動が強い骨をつくる」、骨粗鬆症予防検診事後教室、能登川町総合健康福祉センターなごみ、2000年10月16日

寄本　明：講演「運動の生理学について」、今津町健康推進員養成講座、今津町保健センター、2000年10月24日

寄本　明：講演・実習「専門測定（心肺機能測定）講習会」、滋賀県立スポーツ会館、2000年11月19日

寄本　明：講演「筋肉はブドウ糖の焼却炉」、糖尿病予防教室、能登川町総合健康福祉センターなごみ、2000年12月7日

寄本　明：講演「女性のための生活習慣病予防としてのウォーキング」、女性のつどい、あかね文化センター大ホール、2001年1月27日

寄本　明：講演「骨粗しょう症予防と運動について―運動の効果と効果的な方法―」、骨粗しょう症予防教室、今津町保健センター、2001年3月7日

寄本　明：講演「健康づくりの運動処方“ウォーキング”」、八日市市健康ウォーキング講座、玉緒公民館、2001年3月9日

寄本　明：講演「健康づくりの運動処方“ウォーキング”」、八日市市健康ウォーキング講座、平田公民館、2001年3月17日

寄本　明：「脈拍が少し速まるよな速足で歩く［血液浄化歩き］で動脈硬化度を大幅に改善する」、『開花』，2001年，3月号，72-3

寄本　明：「中高年の214人が血液浄化歩きをしたら全員の血液が浄化され硬化度も改善」、『開花』，2001年，3月号，74-5

寄本　明：「速歩あるき」、『健康』、2001年、5月号、132-3

寄本　明：「トウガラシ歩き」、『健康』、2001年、5月号、144

寄本　明：発表「中高年女性におけるウォーキング時の水分代謝」、第5回日本ウォーキング学会、早稲田大学国際会議場、2001年5月27日

寄本　明：発表「ゴルフプレー中の飲水行動が水分および体熱平衡に及ぼす影響」、第9回日本運動生理学会、日本体育大学横浜キャンパス、2001年8月1日

新矢博美、中井誠一、芳田哲也、高橋英一、寄本　明：発表「運動時体温上昇に及ぼす着衣の影響(3)フェンシング練習時における男女差の検討」、第9回日本運動生理学会、日本体育大学横浜キャンパス、2001年8月1日

寄本　明：記事「日本ウォーキング学会通信 No.5、ウォーキング時の水分代謝」、日本ウォーキング協会機関紙「あるけあるけ」、2001年8月1日、8

寄本　明：コメント「10分間ウォーキング徹底検証」、発掘あるある大辞典、関西テレビ・日本テレ

ワーク、2001年9月30日放送

『滋賀県立大学国際教育センター研究紀要』

編集委員（○印代表）

語学系　石田法雄
　　小栗裕子
情報系　高橋信行
　　○亀田彰喜
健康・体力系　○寄本　明

2001 年 12 月 25 日印刷
2001 年 12 月 25 日発行

編集、発行
滋賀県立大学国際教育センター
522-8533 彦根市八坂町 2500
Phone: (0749) 28-8251
Facsimile: (0749) 28-8480
E-mail: report@ice.usp.ac.jp
(http://www.ice.usp.ac.jp/)

印刷
有限会社東呉竹堂
蒲生郡安土町下豊浦 2700
Phone: 0749-46-2108

The University of Shiga Prefecture
The University Center for Intercultural Education
2500 Hassaka-cho
Hikone, Shiga 522-8533 JAPAN